

---

# 実はカイザーはショタコンだった！？

なすび

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

実はカイザーはシヨタコンだった！？

### 【Nコード】

N3171V

### 【作者名】

なすび

### 【あらすじ】

遊戯王オタクの雷堂優、そんな彼の夢は遊戯王GXの世界に転生すること、そんな頭が少しおかしい少年はもう中学3年の受験生、しかしそんな事はない彼は今日もTUTAYAから初代遊戯王のDVDを借りてくるのであった、そして彼は今日も呟く、「はあ、転生したいなあ」

そんななかで転生に成功した、主人公、さらに偶然にもGXの原作キャラ丸藤亮の家に住むことになるしかし丸藤亮は実はシヨタ

コンだった!?

注意) 原作キャラは半分ぐらいキャラ崩壊してます。

注意2) 少し「腐」です。

注意3) オリジナル設定、作者の妄想もあります。

注意4) 原作に入るまで20話ぐらいかかります。

こんな小説でも読んでくれるのならとてもうれしい限りです。

## 第1話 「GXの世界に行くのが俺の夢だ」by主人公（前書き）

こんにちは…いやこんばんわかも…おはようございますの可能性も……いや、

面倒くさいからなんでもいいや、えっと改めまして、なすびです、感想くれるとうれしいです。

「クリボーにもわかるなすび（作者）の小説上達術！」

- 1、褒められると伸びます。
- 2、だけど、褒めすぎはいけません、天狗になります。
- 3、叩かれすぎると落ち込みます。
- 4、けどその失敗を糧にして改良しようと試みます。
- 5、感想くれると執筆スピードが上がります。
- 6、評価くれると執筆スピードが上がります。
- 7、作者は少し腐ってます。
- 8、エサをあげてはいけません。
- 9、ピーマンが嫌いです。

こんな我侷な作者ですがこれからよろしく願いします。

# 第1話 「GXの世界に行くのが俺の夢だ」by主人公

『ブラックマジシャンで攻撃！ブラックマジック！』

『グワアアアア』

「やっぱり面白いな遊戯王」

おっす、オラ山田<sup>やまだ</sup>、ゴメン今の嘘本当は雷堂優<sup>らいどうゆう</sup>、どこにでもいる極普通の少年さ！

今TUTAYAから借りてきた初代遊戯王のDVDを妹と二人で見っていた所だ、シャキン！！

「遊戯はやっぱりかっこいいな、俺も言いたいぜブラックマジック！  
って」

ついでに今の俺には夢がある、それは

「転生してGXの世界に行くことだ」

「兄さん、相変わらずバカな事言っでないで、受験勉強したらどうですか」

今ツツコンこんで来たのは俺の妹、  
両親がいつも二人そろって出かけるため昔からよく二人で遊んでい  
る。

「妹よ、おまえには夢が無いな、全国のデュエリストの共通の夢、遊戯王の世界に、転生！それしかないだろ！！」

「それは小説の中だけで本当は転生なんてできませんよ、そんな夢ばっか見てないで勉強しないと高校落ちますよ」

「転生術は本当に存在する！間違えて神に殺されて、そのお詫びに転生させられるというのが王道だろ！」

「いつまでもおめでたい頭ですな兄さん」

「行きたい行きたい！転生したい、したいよー、  
したいしたいしたいしたいしたいしたいしたいしたいしたい  
い  
い」

「はあ、テレビが聞こえませんが、静かにしてください兄さん」

「やだやだやだ！俺は転生するんだ！」

「はあ……」

『ブルルルルル』

「もしもし精神科ですか、兄の頭がおかしくなっただんですけ  
」

「いや！病院に連絡するなよ！俺の頭は正常だよ！！」

俺は妹から携帯ととりあげる。

「転生したいとかほざく人間のどこが正常ですか、兄さん……………」

「妹お前、転生をバカにしてるな！転生なめんなよ！」

妹も言ってみたいだろ、シンクロ口上」

「そんな中二くさい台詞言えるわけないでしょ兄さん」

「集いし星が新たな」

「本当に言ってる!」

「妹も言ってみろよ、スカツとするぜ!」

「謹んでお断りします」

まったく妹は照れ屋さんだな、一回言えばスカツとするのに。

「はあ、転生したいなあ」

マジで転生したいなあ、転生転生転生転生

「…兄さん、それは転生して、  
私たち家族や学校の友達とも一生あえなくても良いとゆうことですか?」

転生転生転生転生転生転生転生転生転生転生

「私は嫌です、私は兄さんと一緒にいたいのです、  
だから転生したいなんてバカなこと言わないでください  
(ああ、私ったら兄さんにこんなことを、恥ずかしい、  
でもこれで私の気持ちが兄さんに伝わったら………ウフフ)」

転生転生転生転生転生転生

「ん？なんか言ったか妹よ？」

「な、なんでもないです、  
に、兄さんのバカ！！」

何なんだ、いつたい、妹ったら顔を赤くして、熱でもあるのか？  
今考え事していて、聞いてなかった。

「はあ、転生したいしたい、  
デュエルディスクでデュエルやりたい！  
やりたいやりたいやりたいやりたい！」

「全く、次から次へと我儘わがままいつて、  
(でも兄さんのそうゆう所も嫌いじゃないです)」

「やりたいやりたいやりたいやりたいやりたいやりたいやりたい  
りたいたいりたいたい」

「(でも少し五月蠅いです)」

『プルルル』

「もしもし警察ですか？兄がさつきから殺りたい、  
犯りたいと終始叫んでいるのですが」

「いや、警察に通報するなよ！！」

俺は再び、妹の携帯を取り上げ、

「すいませんすいません、間違えです、俺病んでません、本当にス  
イマセン、じゃ」



と言い、携帯をきる。

「お前のツッコミはたまに度を超えてるぞ……！」

「誰のせいですか誰の」

「母さんかな？」

「兄さんのせいです」

「まあ、これが俺と妹の日常だ、  
この話を読んで俺を転生してくれる神様どんどん募集中だぜ！ピカ  
ーン」

「誰に言ってるのですか………」

第1話 「GXの世界に行くのが俺の夢だ」by主人公（後書き）

おもしろかったら次も読んでください。

第2話 「神は本当に存在します」 by 田中（前書き）

2話です、残念ながらまだ主人公の優は転生しません。

## 第2話 「神は本当に存在します」 by 田中

次の日

「やっぱりそう簡単にはいかないか……………はぁ」

俺はパソコンの画面をみけに皺を寄せて見ている。

「ん？兄さん何をしているのですか？」

「おお、妹よく来たなちよっと聞いてくれ」

「……………いいですよ」

「すごく嫌そうだな」「気のせいです」

俺は妹に俺の悩みを話し始めた。

「実はな、昨日の俺と妹とのやり取りを小説形式にして、小説家になろう！って言うサイトに投稿して、

それを見た神様に転生させようとしたんだが、いまだに一人も来ない、

どうなっているんだ！俺はこの小説を神様に見せて転生しないと  
いけないのに！

と言うわけだ」

「はぁ」

妹は大きなため息をはいて

「バカですね」

と言われた。

「神様がこの世にいるわけ無いでしょ、  
そんなこともわから無いのですか兄さん」

「い、いやそれは俺たちが知らないだけで本当はいるかもしれない  
だろ！」

「1億歩譲って神様がいるとしましょう」

譲りすぎだな、9桁じゃねーか。

「でも神さまがこんなサイト見てるわけ無いでしょ、  
仕事しろって感じですよ！」

神様めっちゃダメだしされてます。

「1兆歩譲って神様このサイトを見たとしても」

ついに兆の桁突入ですか。

「こんな兄の書いた駄文で糞で屑な小説誰が読みますか、  
粹がるのもいい加減にしてください、神様も転生する気もつせま  
す」

「そんな悪かったか俺の小説」

「はい、そんなことするぐらいなら受験勉強でもしなさい、です」

「……………御もつとも」

「まったくこれにこりたら転生なんてバカなこと考えな」

『ピンポーン』

「神様キター……………」

「なぜネット用語的に!」

玄関のチャイムが鳴り俺は妹の説教を無視して全速力で玄関の扉を開けた。

『ガチャ』

玄関の扉を開けるとそこには1人の男性が立っていた。  
そして一言

「私が神です」

「……………は？」

妹よ、どうやら神様本当に来たみたいだ。

第2話 「神は本当に存在します」 b y 田中（後書き）

どうせ、こないと思ったこの作品にも感想かきました、うれしいです。

### 第3話 「今回は私が語り部です」by妹（前書き）

今のところ、毎日投稿してます、それもそのはず、書き貯めといていたのです、というわけで明日も投稿します。

第3話でやっと主人公は転生します、遊戯王の世界に転生するまで3話使う小説ってあんまないですよね。



### 第3話 「今回は私が語り部です」by妹

「 と言う訳で、神の田中さんに来ていただいた」

なぜこうなったのでしょうか、私の目の前には私の兄あにいもうと雷堂らいどう優よしと、田中と名乗る神様がいます。

田中さんの身長は170後半あるんじゃないかというぐらい背が高く、

顔は爽やかなイケメンさんです、髪はサラサラで男性なのに腰ぐらゐまで伸びて後ろをゴムでとめています、

あ、別にポニーテールではないです、ただ単にまとめてるだけです。

「私の顔に何か付いてますか？妹さん？」

「い、いえなんでもないです」

何でしょう、田中さんは凄くイケメンなのに何故か私のタイプじゃないと言うか、

苦手と言うか、兄さんによくない影響を与えそうな人です、理由？私の勘です！

「それで田中さんは神様なんですよね」

兄さんが田中さんに質問します。

「ええ、もちろん主に転生科の方を専門としています」

転生科！？神様にも専門科目があるんですか！  
と言うより神様って1人じゃなかったんですか！

「えっと転生専門と言うことは、お…僕も転生してくれませんか？」

「はいもちのろんですよ」

何かギャグが古いです。

「ていうか転生科があるってことは他にもあるんですか分野が？」

ナイスです兄さん、私もそれ気になってた。

「はい、ありますよ、

流石の神でもたった一人で世界の人々を見守ることはできませんか  
ら、

例えば、うまい棒科とか、カラスを見守る科とか」

「何ですかうまい棒科って？」

「主にうまい棒を食べるのが仕事です」

「いらなくね！その分野！」

「ごもっともです。

「じゃあカラスを見守る科と言うのはなんですか？」

「それはゴミをあさるカラスを暖かい目で見守るのが仕事です」

「それはもはやしごとではないっ（です）！！」

私と兄さんははもって田中さんにツッコみました。

「神様案外役立たずですね、

ほら、自然災害を事前に阻止するとか、

雨が全然降らない土地に雨を降らすとか？

そうゆうのはないんですか？」

「あ、無いですそんな便利な能力神にあるわけ無いでしょ、  
もっと現実を見なさい」

この世の神も堕ちたな、です、  
と言うかこの人が本当に神様かどうかも分からなくなってきま  
した。

「まあ、では拙速転生の契約でもしましょうか？」

「あ、はいそうですね」

「………うう」

もしこの人が本当の神様で兄さんが本当に転生してしまったら……

でもそれが兄さんの考えた道なら私は止めません、

でも少し寂しいです、もう…会えなくなってしまうのですか………

「じゃあまずどの世界に行きたいか、教えてください」

「遊戯王GXで!!」

「なるほど、メジャーですね、  
では次に契約方法ですが、  
お尻にネギを刺して、リンボードダンスを踊って下さい」

「無理だ!!」

「冗談です」

にっこり笑う田中さん、  
と言うか神なのに田中って………地味です。

「本当はこの書類にサインしてくればいいです」

そう言って一枚の紙を出してきた田中さん。

「なんか、俺がよく読む小説と少し違うな」

「現実はこの様なものです」

「はあ」

少し納得いかない不陰気だけどしっかかり書類にサインする兄さん。  
でもちゃんと内容を確認してから書いたほうが、  
どうなっても知りませんよ、ってもう書いちゃったですか。

「はい、書きました」

「ククク、こいつ書いたな、本当はこの書類は」

「あの、田中さん、声に出ってますよ本音」

「ん、ん、ん、何でも無いです」

「いや聞こえてましたよ！！この書類本当は何なんですか！！」

「冗談です嘘です、ちよつとしたジョークです」

本当ですかね？

「では早速転生しましょう」

「え！今からですか！！」

「今からです」

「でもみんなにお別れの挨拶も」

「問答無用！！」

急に兄さんの足元に不思議な模様の魔法陣が現れました。

「あと、10秒で転生します」

急ぎますね田中さん！！

「6、5、4」

「あ、そうだ神様、遊戯王の二次創作となればつき物の、全カード9種類と大量の札束もつけてください」

「?何を言ってるのですか、私はただ貴方を遊戯王GXの世界に転生するだけ、

そんな夢みたいない機能、あるわけ無いでしょ」

「ええ!!それって!」

「1・0、契約成立です」

田中さんがカウントダウンを言い終わると、

兄さんの足元の魔方陣が光りだして、兄さんが一気に消えてしまいました!

「た、田中さん?これはどうゆう…」

「ふふ」

田中さんはいっこりと、爽やかや笑みで

「無事、転生は終了しました」

この人は本当神様だと言つのですか……………

第3話 「今回は私が語り部です」by妹（後書き）

思ったより読んでくれてる人が多くてすごくうれしいです。

第4話 「カイザー？まだ出ませんよ」bY作者（前書き）

今回は話がむちゃくちゃで分かりづらいかもしれません、スイマセン。



#### 第4話 「カイザー？まだ出ませんよ」by作者

「……………う、うう、」

「ここは？無事、転生できたのか」

田中さんの転生術が成功したのか、目が覚めると自分の家ではなく道路の真ん中に立っていた。

自分の左腕を見て見ると、デュエルディスクは無かった、見事に俺の期待を裏切る神様だ、更には受験票と思われる紙さえなかった。

ショック……………

「ところでココどこだ？と言うより何か世界が広がった気がする」

何か俺の体に変な違和感を感じる、

お！あんな所に鏡が！

俺は道の端っこに何故かある鏡の方へ行き自分の体を確認してみた。

「な、何じゃこりややや！！！！」

え！？何これ俺の体じゃない、

まさか転生はできても体は引き継げないのか！

転生する前は色黒で若いのに少しオッサンっぽい俺の顔は何と色は白くなって、男なのに可愛い容姿をしている、

ロリシヨタって言うのかこれ。

更に顔のあちこちにあったニキビや普通の人より少し多く付いてるホクロも

無くなつて、自分の体なのに見とれそうだ。

「やばいなこれ、神様サービス利いてるな」

まあ、デュエルディスクは愚か自分のデッキすら付いてこなかったけど、

まあそれは何とかするか。

でも俺の体の変化はメリットだけじゃないっぽいぞ、

野球部で鍛えた筋肉もなくなつてるし、

全体的に体力が落ちてる気がする、

まあそれも仕方ないか、この顔と身長で筋肉ムキムキだったら逆に気持ち悪いな。

「しかも声も高くなってる」

さて、それにしてもこれからどうするか、財布もない、

と言うことはもちろん家も無いだろうな、

財布があればインターネット喫茶で夜は越せるのについて中学生ホームレスかよ。

いや……………

「本当にホームレスだよ!!」

どうすんだよ俺！マジでホームレスかよ！  
現実はそのなに甘くないか……………はあ。

そもそもココ本当に遊戯王の世界か、それと今は何年の何月だ、  
この暑さと周りの人の格好を見る限り夏真っ盛りと言っ感じだな。

はあ、とりあえず、その辺でもブラブラするか。

俺は少しでもこの世界の情報が知りたいため、この町を探検する  
ことにする。

「お、ゲームショップだ」

俺はゲームショップを発見し中に入ってみる。

デュエルディスクが売ってる、これは初期型だな、  
バトルシテイ偏でアラオや社長が使っていたタイプだな、  
値段は……………5480円意外と安いな別に買わないけど、あれ？  
その隣にも別のデュエルディスクもある、

これはGXでカイザーやティラノが使っていたタイプ、つまり新  
型か、

値段は……………ゲ！31500円！！高！流石新型、  
でもアカデミアの人はみんなこれつけてたよな、  
アカデミアに入学したらもらえるのかな？それとも無理やり買わさ  
れるのかな？

ま、別にいいか今は。

ココが本当に遊戯王の世界と分かったただけでも収穫だ、俺はこのゲームショップを出ることにする。

夜

とりあはず俺は今日一日使って、情報を自分なりに集めてみた結果、今は8月の1日で、プロデュエリストを教育する学校デュエルアカデミアの受験日は8月21日、そして新学期は9月から始まるらしい、あとVジャンプの発売日は俺のいた世界と同じで21日発売で、任天堂とSONYもありWiiもPS3もあるらしい。

そして今の流行語は「ふう、危なかった」らしい。うん、後半はどうでも言いか。

そして、1000円拾った、が、これは大事にとっとくことにする。さて、そろそろ寝るか、どこで寝るか、もちろん、公園のベンチです。

「うっ、ひもじいよお」

これが俺の望んだ転生した世界か、嫌違う、俺はこんなんじゃない、もっと楽しい学園生活を送り

たかつたはずだ、

「現実もそんなに甘くないと言っことか」

#### 第4話 「カイザー？まだ出ませんよ」b y作者（後書き）

デュエルディスクの値段は僕の予想です、本当にこの値段かは分かりません。

第5話 「お休み、パトラッシュ」「b yネロ（前書き）

初めて、初めて予約掲載を使ったなすびです。

ついに次回初の原作キャラの登場です、長かった…のかな？

## 第5話 「お休み、パトラッシュ」byネロ

### ホームレス生活2日目

「む、朝か、ふわあああ」

初めて公園のベンチで夜を越したな、これも転生したおかげ、田中さんに感謝、するわけないだろおお！！

転生したは良いけど、装備が全然無いつてどうよ！！  
ここは家とデュエルディスクとデュエルアカデミアの受験票、そして全カード9種類ずつが常識だろ！

田中のヤロー神だろうと何だろうと次会ったら絶対一発はブン殴らないと気がすまないぞ！

「とりあいずどうすつか、食料でも探すか、腹減ったし」

俺はなぜ、こんな現代の街中でサバイバル生活をしなきゃいけないんだ、

全国のホームレスさん、いままで哀れみの視線を向けてしまつてごめんなさい、

貴方たちは毎日一生懸命生きていたんですね、本当にごめんなさい。

「腹減った、早く飯探さない」と

俺は今日も食料を求め町に行くのであった（まだ2日目だけど）



『グルウウウウウ』

うう、腹減りすぎて死にそうだ、  
そっぴや昨日から何も食べてなかった、餓死する。

あ！あんな所にカレー屋が！

何々、カレー1つ525円、高いな、

昨日拾った1000円があるから買えなくもないが、此処は我慢、  
この千円はいざという時に取っておくんだ！！

カレーは我慢した、その代わりカレー屋の裏口の前にあるゴミ箱  
を漁り、

食べ残しや、野菜の皮を食べて飢えをしのご事にした、

うう、ひもじいよお……………

「ううううううう、腹、いてええ……………」

俺はただいま公園のトイレで現在進行形でウ　コ排出中です、

やっぱゴミ箱の中なんて漁るもんじゃねえな、

マジ腹壊しました、畜生、この世界に来てまだ一回もデェエルし  
てねえよ、

イテ、いたたたたたった！！でる！！でる！！

しばらくお待ちください。

ふう、やっと腹が治まった、俺はもうゴミ箱の中を漁らないと誓うぞ！！

誰に誓おう…よし！お天気お姉さんに誓おう！！

そうと決まれば早速尻拭いて此処から出よう、んでもって仕事でも探すか！

しかし！俺は大切なことに気づいてしまった！！

「……………紙がない……………」

「ふう、すつきり！いやーもしもの時気のために1000円札とつといてよかったよ！

って言い分けないだろおおおお！！！！！！！！！！

何尻拭くのに1000円使っちゃうんだよ！！！！

そんなことなら普通にカレー食った方がよかったよチクショウ！！！！！！！！！！」

その日俺はショックのあまり、涙が止まらなかった。

### ホームレス生活3日目

「……………腹…減った…し…ぬ……………」

転生して3日が経った、だが腹へって死にそう、

と言うかもう死ぬ、くそう、少しぐらい原作に絡みたかった、

せめて、試験管のグラスンだけでも…見たかった……………

うっ、意識が、薄れていく、神のヤロー、

次会ったら…マジ…ぶん殴るぞ…てか…殺すぞ……………一生、怨んで

やる……

『ガクッ』

ついに俺の意識は落ちていった……。……。

「（おやすみ、パトラッシュ……）」

## 第5話 「お休み、パトラッシュ」「b yネロ（後書き）」

主人公の容姿、分かりづらいかもしれないので、ここにも書いてきます。

主人公・雷堂優

転生前15歳（受験生）（オタク）

転生後10歳（しかし本人は知らない）

容姿

黒髪で目の色も黒、

肌は白く、ニキビ、ホクロ、シミなどは一切無い、

顔はロリシヨタ系

分かりやすくすると『桜欄高校ホスト部』の埴之塚はにのつか 光邦みつくに先輩を黒髪にした感じですよ。

次回ついに丸藤先輩が登場する！？

そういえば、活動報告ってどんなこと書くんだらう？

書いたこと無いな(2011年8月1日現在)

第6話 「カイザーの家ってお金持ちだったんだ」 b y 優（前書き）

どうも、なすびです、ちょっと、どたばたあつて、疲れているな  
すびです。

今回ついに原作キャラが出ます、  
誰かな？明日香かな？カイザーかな？  
それは読んでからのお楽しみです。

## 第6話 「カイザーの家ってお金持ちだったんだ」 b y 優

丸藤亮 視点

ふう、気持ちいい朝だ、

長期休暇でアカデミアから久しぶりに実家に帰った、

やはり、地元の空気はいつきても心地よい、別に田舎だからという分けても無い、

ただの気分の問題だ。

俺は今近所の公園に来ている、昔はよくここで翔と遊んだな、

！？あれは！？

俺が公園を見渡していると、12、3歳程度の少年が倒れていた、俺は急いでその少年のところに行く。

「おい！君、大丈夫か！」

……ふう、ただ単に気絶しているだけだ、

それにしてもなぜこんな所に、家出か？

このまま、ほっとくのも何なので担いで俺の実家まで連れて行くか。



ふう、意外と軽くて運びやすかったな、この少年。  
俺はこの少年を自分の部屋のベットに寝かせる、  
ふむ、それにしても可愛い容姿をしているな、  
似てないが、昔の翔と少し姿が重なる。

翔、元気にしているかな、

10年前のあの出来事以来俺と翔の間には妙な溝みそができてしまい  
一緒に遊ぶことは愚か、話すことも少なくなってしまった。

更に、この後すぐに、親がケンカし別居してしまい、  
翔は母親のところに行ってしまいこのギクシャクした関係のまま離  
れ離れになってしまった。

そういえば、翔は今年のアカデミアの試験を受けるらしいな、  
今の翔の実力で受かるかどうか……..  
自分の弟に言う台詞ではないが、難しいな、精々レッドが限界か？

「それにしてもこの少年、少し汚いな」

何日も風呂に入っていない様子だぞこれは、  
流石に汚いと思い、シャツ、ズボン、パンツ、靴下を全部脱がし  
た、

別に少年だし、男同士だし、良いだろ、多分。

そして何故か家に調度いいサイズの衣服が一式そろってたからそ

れを着せた。

更に、汚れているところをウエットティッシュで拭いて汚れを落とした。

「ふむ、綺麗になった」

この少年、見れば見るほど、可愛いな、俺の隠された性癖が目覚めそうだ、俺の着せ替え人形にしたい、一緒に寝たいぺろぺろしたい。

「……………ん、ここは？」

「目が覚めたか」

雷堂優らいどうゆう 視点

「……………ん、ここは？」

俺は、確か公園で腹減って力尽きたはず、なぜこんな所に。

「目が覚めたか」

目の前には、青と白のデュエルアカデミアの制服を着て、身長は結構高めで、髪は長いロンゲ？

そして目は鋭く怖そうな目をしているが、なにか優しい感じの男性が立っていた。

ってあれ？原作キャラのカイザー？

「1111は？」

「ここは俺の家だ、君が公園で倒れていたの、ここまで運んできた」

「え！あ！そんなんですか！あ、ありがとうございます！」

俺は自分を助けてくれたカイザーと思われる人にお礼を言う。

「例には及ばん、そよより、君はなぜあんな所にいたんだ？」

それは自分が転生したから！ とは言えないな、絶対変な目で見られる、どうしよう……

「……………」

「ふ、別に言いたくないなら言わなくてもいい」

「！あ、ありがとうございます！」

「そして、帰る場所が無いならここに住んでも良いぞ」

「ほ、本当にいいんですか！？」

「構わない、家は意外と裕福な家庭だ、人が1人増えようが、構いわしない」

確かに、俺が今いる部屋を見る限り、この家はかなりお金持ちだと分かる。

大きいベットに高そうな家具の数々などで。

「あ、ありがとうございます!!」

カイザー、思ったより優しいな、

流石俺がGXで一番好きなキャラ!

ヘルカイザーになったときは凄く残念な気持になったな、  
だってあんなデュエルをリスペクトするとか言ってた優しい人が、  
勝つことが全てとか、冷たい人になっちゃったんだもん、  
でもユベル偏のカイザーは感動したな

「えっと、俺は雷堂優と言います、不束者ふつつかものですがよろしくお願ひします」

「別にそう堅くしなくていい、俺は丸藤亮、  
デュエルアカデミアという学校に通っている」

やっぱりカイザーだったか、  
これはラッキーじゃないか、  
俺が好きなキャラに会えたし、一緒に暮らせるし、  
屋根が在る所で寝れるし。

『グウウウウウウウウウウウ』

ヤベ、腹が。

「腹が減ったのか?」

「は、はい／＼／」

「少し待ってる、何か食べ物を持ってきてやる」

「ありがとうございます」

丸藤亮 視点

俺は今食堂に向かっている、

あの少年、優と言ったか、

あの子のために何か食べ物を持ってくることにする、

それにしても…家に住んでくれるのか、

うれしいな、誰にも言えないが俺は幼い男の娘と暮らすのがゆ

なんでもない。

食堂に着いたか。

「理奈、理奈はいるか？」

俺が呼んでいる理奈というのは、我が家に昔からいるメイドだ。

「御呼びでしょうか、亮様」

調理室から出てきたこの女性が理奈だ、

長い金色の髪を後ろにまとめた髪型、

ハーフのため日本人の顔で目が綺麗なクリアブルーの色をしている、  
普通

普通に美人だ。

「ご用件は何でしょうか、亮様」

「あ、ああ、  
少し小腹が空いた、何か作ってくれるか？」

「かしこまりました、  
ではいつものようにサラダでも作ります」

「い、いや、まて！」

きよ、今日はホットケーキが食べたい気分なんだ、  
ホットケーキを作ってくれるか？」

「了解しました。」

(亮様がホットケーキ？いつもは甘いものなど食べないのに)

約10分後

「出来ました」

「ああ、ありがとう、

あと、ミルクも一杯入れてくれるか？」

「了解しました」

しばらくして、理奈がシロップ、バターが掛かったホットケーキ  
と、

一杯のミルクをトレーに乗せて持ってきた。

「ありがとう」

俺はトレーを持って、食堂を出ようとしたら

「亮様、何処へ行くのですか？」

「いや、今日は自分の部屋で食べたい気分なんだ」

「そうですか、

それと亮様、旦那様は犬が大の苦手なのでこの屋敷では飼えませ  
んよ」

「ち、違う！べ、別に犬を拾って来たわけじゃない」

拾ったのは人間だしな。

「それならいいのですが。

（亮様があんなに動揺している、珍しい）」

「い、犬なんて拾ってないからな、変な誤解はするなよ」

「はいはい、

分かっております」

「それならいいんだが」

俺は何とか、食堂を抜けて自分の部屋に戻る。

『ガチャ』

「待たせたな、もって来たぞ」

「いえ待ってません」

俺はトレーを優の前においた。

「さあ、食っていいぞ」

「（やったー！2日ぶりの食事かな！）  
いただきますー！！」

……………よく食べるな、そんなに腹が減っていたのか。

しばらくして、優がホットケーキとミルクを平らげる。

「うちそうさまでした、」

えっと、ありがとうございます……………亮さん？」

「俺のことは亮でいいぞ、優」

「は、はい」

優は腹が満たされおち付いたのか、そわそわしたり、  
部屋をキョロキョロ見渡したりしている、

「どづかしたのか？」

「い、いえなんでもないです」



フム、緊張してるのか、  
俺に対して遠慮した態度だし…

そうだな、このままでは、優が居心地悪そうだし、  
俺的にも楽にしてくれた方が気持ちいい、早く心を開いてほしいし、  
……………そうだ、こんな時は…

「優、デュエルモンスターズを知っているか？」

「（デュエルモンスターズ？なんだそりゃ……………  
あーこつちの世界での遊戯王のことか、思い出した！）  
え、ええ知ってますよ」

「そうか、それはよかった、  
じゃあ、ちょっと付いてきてくれるか？」

「は、はい」

「この部屋だ」

俺は優を連れて、ある部屋までつれてきた、  
デュエル決闘をすれば、優もきつと心開いてくれるだろう。

俺はこの部屋の扉を開ける。

『ガチャ』

「わ~~~~~すごい!!こんなにたくさんカードが!!」

この部屋はこの屋敷のカード保管部屋、  
さまざまなカードを、ここに保管している。

「この中のカードを好きなだけ使ってデッキを作っていい、  
デッキができたなら、俺とデュエルしよう、いいか」

「はいわかりました!

(それにしても凄いなこの部屋のカードの量、  
全てのカードがあるんじゃないかな?)

凄い量のカードですね、全種類のカードがここにあるんじゃない  
ですか?」

「いや、流石に全てではない、

ブルーアイズホワイトドラゴン  
青眼の白龍やブラックマジシャンは無い、

でも、大抵のデッキならこのカードを使えば作れるぞ

(でも、レッドアイズ・ブラックドラゴン  
紅眼の黒龍は1枚あったかな)「

「凄いなあ……」

「じゃあ、俺はここら辺にいるからデッキができたなら呼んでくれ」

「はいー!」

雷堂優 視点

さーて、デッキを作るぞー、

それにしても運がいい、  
始めはデッキが無い、金が無い、家が無いで大変だったのに…  
カイザーに拾われてよかった！。

「そついえば優」

「はい？呼びましたか？」

「ああ、そう言えば、お前の服を脱がしたとき、こんな物が入って  
いたんだが………」

「え…、脱がした、  
それって………」

「ち、違う！変な誤解するな！  
優の服が汚れていたから、取り替えただけだ！」

あ、確かに服が変わってる。

「すみません、一瞬亮さんのことを、変わった性癖を持った危ない  
人だと思っちゃいました」

「一瞬でも思っただのか………」

「い、一瞬ですって！それで、  
何が入ってたんですか？」

「これなんだが」

亮さんの手には3枚のカードが。

「見たことの無いカードなんだが……」

あれ？このカード

「優のズボンのポケットに入っていたから、優のものだろ」

「あ、はい、どうも、」

（こんなカード入ってたっけ？田中のサービスかな？）

だが、このカードは都合がいい、

おかげで俺が作るデッキのテーマができた。

30分後

「亮さん亮さん！完成しました！

<sup>デュエル</sup>決闘してください」

「出来たか、じゃあするか、」

それと俺のことは亮でいい……いや、お兄ちゃんがいい」

「え？最後のほうよく聞こえませんでしたけど……」

「な、なんでも無い！俺のことは亮と呼び捨てでいいし、敬語で話さなくていい」

「わ、わかった、亮がそれでいいならそうする」

「よし、じゃあ早速決闘場デュエルフィールドへ行こう、  
付いて来い」

「はい」

「付いたぞ、ほら」

亮さんから何か、白い板状の機会を渡された。

「これって……」

デュエルディスク  
決闘盤だ、しかもGXのつまり新型か。

「これは優にやる」

「え？でもこれ、高いんじゃない……」

「子供は余計な心配しなくていい、ほら決闘するぞデュエル」

「はい！」

俺と亮さんは決闘場の配置に向かい合って

「  
「  
決闘<sup>デュエル</sup>！！  
」  
」

第6話 「カイザーの家ってお金持ちだったんだ」 b y 優（後書き）

明日から土曜まで部活の合宿までいまませんで今日3日から5日までの3日分いっぺんに投稿します、

それで、水曜日から感想くれた方は帰ってくる土曜に一気に返信します、

これで感想0件だったらへこむな

と、いうわけで次の話も今日中に投稿します

亮と翔の溝というのは、原作7話か8話のパワーボンドの回です。

亮の実家がお金持ちなのは作者の予想です。

亮の両親が別居しているのは作者の予想です。

亮がシヨタコンなのは作者の妄想です。

亮の家にメイドがいるのは作者の妄想です。

第7話 「初デユエルが7話ってどうよ」「b y 優（前書き）

こんにちは、これは4日に投稿する予定の話です、

優のデッキは何でしょう？それは読んでみてからの楽しみです。



第7話 「初デュエルが7話つてどじょ」「b V 優

「「決闘<sup>デュエル</sup>!!!」」

亮 VS 優

「先攻は譲ってやる」

「分かりました」

譲るとか言ってるけどただ亮のデッキが後攻に向いてるから譲っただけだよな。

「俺のターンドロー!!!」

俺はモンスターをセット！ターンエンドです」

凄い！俺の場に裏側のカードが出てきた！これが海馬コーポレーションの力か!!!

優 LP4000 伏せモンスター×1

手札 5枚

「俺のターン、

(裏側表示か、しかしリバーズカードが無いということは、攻撃を誘っているのか?)

相手フィールド上のみモンスターがいる時、

このカードは手札から特殊召喚できる！サイバー・ドラゴン(A TK2100)を特殊召喚!!!」

亮の場には白い機械の蛇が出てきた！リアルだな、本物みたいだ！

「バトルフェイズ、サイバー・ドラゴンで伏せモンスターを攻撃！  
エヴォリユーション・バースト！」

「凄い！技名叫んでる！この世界では技名叫んでも変な目で見られないからな。」

「ぐっ！伏せモンスターはグレイブ・スクワーマー（DEF0）、  
だけどこのカードが戦闘によって破壊された時、フィールド上の  
カード1枚破壊する！」

「サイバー・ドラゴンを破壊！」

サイバー・ドラゴンの吐いた光線がグレイブ・スクワーマーに直  
撃し破壊される、

けど、その後、サイバー・ドラゴンの下から沢山の包帯が出てき  
て、

サイバー・ドラゴンを道ずれにする。

「く、やるな、俺はカードを2枚セット、ターンエンドだ」

亮 LP4000 モンスターなし

手札 3枚 伏せカード2枚

「俺のターンドロー！」

（よし、モンスターがない今が攻撃のチャンス！）

俺は暗黒界の狩人ブラウ（ATK1400）を召喚」

弓を持った悪魔が出てくる。

「ブラウで亮にダイレクトアタック!!」

亮 LP4000                      LP2600

ブラウが亮の胸に弓矢を放つが、亮は何事も無かったような顔をしている、

ま、ソリットビジョンだし。

「カードを1枚セットしてターンエンド」

優 LP4000 暗黒界の狩人ブラウ ATK1400  
手札 4枚 伏せカード1枚

「俺のターン、ドロー、

俺はもう一枚のサイバー・ドラゴン（ATK2100）を特殊召喚、

更にサイバー・ドラゴン・ツヴァイ（ATK1500）を通常召喚」

亮の場に2体の機械の蛇が、迫力が凄い！

「なら、<sup>トラップ</sup>畏発動！暗黒の謀略、

お互いのプレイヤーは手札を2枚捨て2枚ドローする、しかし相手は手札を1枚捨てればこのカードの発動を無効に出来る、

とうする、亮

「（折角相手が発動したカードを無効にするのは、

サイバー流のリスクデュエルに反する）

いいだろう、俺は暗黒の謀略の効果は無効にはしない」

「そうですね、なら2枚捨て、2枚ドロ、  
更に今捨てたカード、暗黒界の刺客カーキと暗黒界の龍神グラフィの効果発動！

カーキの効果発動！このカードが手札から捨てられた場合フィールドのモンスター一体を破壊する、

サイバー・ドラゴンを破壊！

次にグラフィの効果発動このカードが手札から捨てられた場合フィールドのカード一体を破壊する、

サイバー・ドラゴン・ツヴァイを破壊！」

一気に亮のモンスター2体を破壊する。

「ふ、やるな、なら俺も手札を2枚捨て2枚引く、

フフ」

亮さんが笑った、だがもう亮さんはこのターン通常召喚をしたし、このターンの逆転は普通無理

「サイバー・ドラゴン（ATK2100）を特殊召喚」

「ええっ！！」

再び現れる機械の蛇。

「サイバー・ドラゴンでブラウを攻撃！エヴォリューション・バースト！」

「ぐおお！！」

優 LP4000 LP3300

「俺はターンエンド」

亮 LP2600 サイバー・ドラゴン ATK2100  
手札 1枚

流石カイザー、下手すりゃ十代以上のチートドロ―と決闘戦術デュエルクイクスの持ち主。

でも、俺も負けられないぜ！

「俺のターンドロ―、

暗黒界の策士グリーン（ATK300）を召喚」

「（攻撃力300を攻撃表示？何か策があるのか？）」

「墓地の暗黒界の龍神グラファの効果発動」

「墓地からモンスター効果？」

「自分フィールド上の暗黒界と名の付いたモンスター一体を手札に戻しこのカードを墓地から特殊召喚する！」

「自身の効果で蘇生か、珍しい効果だな」

「蘇れ！暗黒界の龍神グラファ（ATK2700）！」

俺の後ろからグラファが『ズズズ』と床から這い出てきた、かっこいい！

でも、出てくるの遅い！と言うかグラファの顔近くで見ると怖い

な！

「暗黒界の龍神グラファ………悪魔の龍か……」

「行くぞ！グラファの攻撃！ダークネスフレイム！！」

あつ！技名言っちゃた！恥ずかしい、でも一回言つと癖になるかも、気持ちいいし。

亮 LP2600 LP2000

「カードを2枚伏せターンエンド」

優 LP3300 暗黒界の龍神グラファ

手札 2枚 伏せカード×2

「俺のターン、ドロー！！」

フフフフ」

「何笑ってるんですか？」

「いや、面白かったな、この決闘<sup>デュエル</sup>」

「まだ終わってませんよ、この決闘<sup>けつとつ</sup>」

「フ、そうだな、悪かった、俺は手札から強欲な壺を発動、デッキからカードを2枚ドローする」

強欲な壺！そうか！この世界では禁止カードじゃないのか！忘れてた！

「手札から魔法カード発動、大嵐！フィールドの魔法、罫を一掃する！」

フィールド全体に風が吹き、俺の伏せカードが吹き飛んだ、うう、俺のセイバリ、マジシリが……

「更に融合魔法、パワーボンドを発動！」

これは機械族専用の融合カード、融合した融合モンスターの攻撃力を倍にする！」

「倍！！でも亮さんの手札はもう1枚、

融合には、融合カードを含め最低3枚は必要はず……」

「甘い、俺は最後の手札、サイバネティック・フュージョン・サポート、

このカードの発動によりこのターン機械族の融合は

手札、フィールド、墓地のカードを除外すれば融合素材に出来る」

「な、なんだつてー！！！」

「墓地のサイバードラゴン3体を除外し、

サイバー・エンド・ドラゴン（ATK4000）を…融合召喚！

「！」

「で、でかい」

亮の場には、首が3つあるサイバー・ドラゴン、いや、よく見ると首1つ1つ顔が

「パワーボンドの効果で、サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力倍にする」

サイバー・エンド・ドラゴン    ATK4000            ATK8000

違っつて！攻撃力8000！？サイバー・エンドの首なんて関係ないよ！

そうだ！確かマジシリを伏せていたような  
いや！！大嵐で破壊されたんだった！！！！

「りよ、亮、タンマ」

「サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃、  
エターナル・エヴォリューション・バースト！」

サイバー・エンドが3つの首からそれぞれ光線を吐いてくる。

そしてサイバー・エンドの光線がグラフィアの胴体を丸々飲み込んで

「ぐあああああああああ！！！！」

優    LP3300            LPO

デュエル  
決闘が終わりフィールドに唯一残っているサイバー・エンドが消えた。



「流石亮、強いな」

「まあ、デュエルアカデミアでは実力1位とは言われているからな」

「ははは」

「ふふふ」

「よし、次は負けないぜ、そのときはまた俺と決闘デュエルしろよ！亮」

「ああ、元論だ。」

（よかった、優ももう俺に心を開いてくれた、そっちの方が俺も話しやすい）

「よし、次は勝つぞー！」

「それと優」

「ん？何だ？」

「その、優は自分の一人称は俺より僕の方がいいと思っぞ」

「何でだ？」

「そっちの方が好　ん　ん、  
折角こんな可愛い容姿をしているんだ、  
もっと、可愛い喋り方をした方がいいぞ」

うーん、確かに、折角良い容姿になったんだから、  
そうゆう喋り方をしたほうがモテるのかな？うーんと……

「わかった、これからよろしくね！お兄ちゃん」

うーん、少し声を高くして可愛く言ってみただけど、こんなんでいいのかな？

やっぱ、お兄ちゃんはまずかったかな？一樣亮には弟いるし……

「お、おお、おおお、

（可愛すぎるぞこんちくしよ

）「

「ど、どうしたの亮！大丈夫、  
凄くふらふらしてるよ！」

「だ、大丈夫だ今少し、お花畑に天使が飛んでる風景が流れてきた  
だけだ」

「それって、結構危ないんじゃない？」

そんなかなで、転生して俺おれの、いや、僕ぼくの初めての決闘デュエルは終わっ  
たよ！

次も読んでくれるかな？これからも応援よろしくね！

.....  
「こんなんでも良いのかな、俺おれの喋り方.....」

第7話 「初デュエルが7話ってどうよ」「b y 優（後書き）」

優VS亮の初デュエルが終わりました、

誤字、デュエルでおかしい部分、あつたら感想でお願いします。

サイバー・ドラゴン・ツヴァイはGXでは無いカードですが、サイバーなので出しました、いいですよね……

優のデッキは暗黒界デッキ、しかも最近発売したストラクのもの、理由は作者が最近一番使ってるデッキだから。

第8話 「さりげなく6話にも出ています」「bY埋奈(前書き)

書き貯めておいた話がなくなりつつあります……

今回の話は少し分かりづらいかもしれないです。

第8話 「さりげなく6話にも出ています」by理奈

丸藤亮 視点

「実はみんなに1つ言いたいことがある」

「何でしょうか、亮様」 「一体何事でござるか、亮殿じやんの」

「実はな…」

ここは食堂、今は家に住んでいる使用人全員をここに集めている、全員といってもメイドの理奈と料理長の二人しかこの屋敷に住んでいないが…

「優、入っていいぞ」

俺が合図をすると食堂への出入り口が開きそこから小柄な少年、雷堂優が入ってきた。

「りよ、亮様、この少年は誰ですか？

（な、なんですかこの愛らしい少年は！可愛すぎますよー！！） 「

「亮殿、何処で拾ったでござるか？

（はあ、はあ亮殿、一体何処でこんな少年を買ったでござるか） 「

「子供を拾ってな、何かわけありで親も家も無いらしい、だからこの屋敷に住んでもらおうとな……」 「

「旦那様が留守にしている間この屋敷の主は亮様です、私は亮様の

おうせのとおり」。

（OKにきまつてるじゃないですか！ここで餓うんですか！マジですか！ハッスルしちゃいますよ！

良いんですか！）」

「拙者は構わないで」

（え！？マジでござるか！と言つことは拙者もお世話して良いでござるか！拙者やっちゃうでござるよ）」

「それはよかった」

雷堂優 視点

何だろう、ここに住んでいいことになったらしいけど、この人達、なんか嫌な気がする。

「とりあえず自己紹介を優」

「あ、はい！

えっと、雷堂優です、これからよろしくお願いします」

「こちらこそよろしく申し上げます優様、私わたくし、丸藤家のメイド東雲しののめ理奈めりなと申します。

（雷堂優：何と可愛らしいお名前、私命わたくしを賭けてご奉仕させていただきます）

理奈さんか、というか日本に本物のメイドとかいるんだ。

そんなことより理奈さんって、美人だな、

髪は長い金髪で、目は青色、外人かな？ハーフかな？

「優殿でござるか、拙者は代々丸藤家で料理長を務めている坂本武蔵でござる」

えっと……サムライ？この屋敷の料理長？

料理長、格好は着物で腰には黒い棒、日本刀？をつけている、

顔は少し薄汚いオジサン顔で髪型はチョンマゲ、口調は何故かサムライみたい、

というか、サムライじゃん！！

「ところで亮様、優様は何処の部屋で住ませますか？

（というより、私の部屋で預かりたいです）」

「ああ、俺の部屋の隣の空き部屋を使ってもらう」

「左様ですか……………」

「亮殿、ここは拙者の部屋に住ませたいでござる」

「（料理長、抜け駆けですか！）」

「どうしてだ」

「それは……………」

「それは？」

「ここだけの話、拙者がチホモでござる」

「よし、料理長、お前解雇だ」



「えつつつつ!!!」

「俺はこれから優と風呂に入ってくる、食事の準備頼むぞ」

「りよ、亮さま、何を、い、一緒にお風呂なんて、不謹慎です!」

「優は暫く風呂に入っていないらしい、  
しかも優はまだ子供だぞ」

「僕、これでも15ですけど」

「な、本当ですか!」

「ええ、まあ」

「ええい、子供でも15でも関係ない、俺は優と風呂に入ってくる、  
理奈、料理長、食事の準備頼んだぞ」

「はい、かしこまりました」 「了解でござる」

「いくぞ、優」

「はい」

この屋敷の人たちみんな優しそうな人でよかった、  
でもなんか、何かわから無いが嫌な気予感ががする………

第8話 「さりげなく6話にも出ています」「b y埋奈(後書き)

よし、3日分終わった、これで安心して合宿に行けます、と言っ  
わけで次の更新は土曜になります。

ネ、ネタが尽きて後書きに書くことが無い…

じゃあキャラ紹介でもします。

キャラ紹介

東雲理奈19歳 メイド

金髪で青い目の美女のメイド

坂本武蔵 意外と若い28歳!?

なぜに、チヨンマゲ!? 尊敬する戦国武将は宮本武蔵。

第9話 「拙者、実はガチホモでございます」bY料理長(前書き)

疲れた、どうも、合宿から帰ってきて、死にそうだなすびです、

だんだん、文章がへたくそになってきています、なぜだ!?

第9話 「拙者、実はガチホモでござる」b y料理長

「ふう、気持ちいい」

「それはよかった」

凄いな、亮ん家の風呂は、大浴場って言うんだっけ？銭湯みたいに大きい。

そしてなぜか亮は頭の上に畳んだタオルを頭に乘せるという漫画でよくあるスタイルをしている、あれやってる人始めてみたよ。

「どうした？優？」

「い、いやなんでもないよ」

「それならいいんだが」

丸藤亮 視点

優とお風呂、ふふふふ、

優やっぱいつ見ても可愛いなあ、

白い肌と、男なのにとても細い手足、やはり優は男の子というより男の（の）娘だな。

「亮どうしたの？」

「な、なんでもない」

「それならいいけど」

「（なんでタオル乗せてるんだらう？）」

「（どうしてこんなに可愛いんだらうか）」

雷堂優

「ふう、さっぱりした！」

「体はよく拭くんだぞ」

「はい、分かってるよ」

「よし、着替え終わった、亮早く行こうよ！」

「まで、優、ちょっとこっちに来てい」

「ん？」

僕が優のとこに行くと、いきなり頭の上にタオルをかけられた。

「え、何！？」

「よく拭けと言ってるだろ」

そう言って亮は僕の頭を丁寧に拭いてくれた。

「よし、これでいいぞ」

「あ、ありがとう／＼／」

／＼／  
「なんか、少し恥ずかしいな、何か、お兄ちゃんが出来たみたいだ」

「いくぞ、優」

「はい」

77

## 食堂

「どつぞ、召し上がりください」

僕と優がお風呂から、上がって食堂へ行くと、

メイドの理奈さんと、料理長の武蔵さんが料理の準備をすませ、僕と亮を迎えてくれた。

「いただきます」 「えっと、いただきます」

よくテレビで見る長く長いテーブルの上に二人分の食事がおいてある、

主食はクロワッサンに何枚かに切ったフランスパン、

主菜は美味しそうさステーキ、

副菜はレタス、プチトマト、コーン、ツナマヨのサラダ、

どれも綺麗に盛り付けされてて美味しそう。

「ふう、美味しかった」

「そうでござろう、何せ拙者が作った料理でござるからな」

料理長、サムライなのになぜ洋食？とは聞かないでおこう。

「デザートです」

そう言って理奈さんは僕の前によくファミレスなどで見るパフェをおいてくれた。

「わぁ、おいしそうー！」

「それは、よかったですね」

「拙者が作ったでござるよ」

そして亮の前には理奈さんが紅茶を置いた。

「亮はパフェ食べないの？」

「ああ、甘い物は苦手だな」

そう言って紅茶を飲む亮。

「ふーん」

うん、パフェもおいしい！



**第9話 「拙者、実はガチホモでござる」bY料理長（後書き）**

今回の話、デュエル無し、ギャグ無し、面白いところ何も無い9話です、

何ででしょう、凄く疲れたからだだと思います。

第10話 「はぁ、優、可愛いぞ、ぺろぺろ」b y 亮(前書き)

今回のついに亮の変態度が80パーセント突破!!  
するの  
か?

相変わらず、デュエルが少ないこの物語です。

第10話 「はぁ、優、可愛いぞ、ぺろぺろ」b y 亮

雷堂優 視点

夜

美味しい夕飯を食べた後、僕と亮は今亮の部屋にいる。

「ふあああああ」

ん、あくびが。

「どうした？眠いのか？」

「え、うんだぶんそうかも」

おかしいな、まだ9時半だよ、いつもは深夜0時以降に寝るのに…  
やっぱ、この体になったからかな、  
この体になって時間が経てば経つほど僕の頭もだんだん、変わってきた、

口調を変えて数時間たっただけで意識しなくてもこの口調になるし、

全体的に子供っぽくなった。

「ねむ……」

あれ、頭がくらくらして、ホームレスの時の疲れが一気にまわって

『バサッ』

ああ、気持ちい、そうか…ベッドに倒れたのか…  
でも…ここ…亮の部屋じゃ、まあ、……………いっか……………

そして、僕は深いまどろみにはまっていった……………

丸藤亮 視点

優がふらふらしたと思うと、急にベッドに倒れこんだ。

「スースースー」

「寝たのか、早いな」

優は俺のベッドでとても気持ちよさそうに寝ている、  
いままで、色々あったんだな。

相変わらず可愛い寝顔だな。

思わず俺は優の頭をなでる。

「にゅふー」

優は気持ちよさそうに笑った。

このままにしとくか、優を隣の部屋まで連れて行くことは出来るが  
とても気持ちよさそうに寝ている優が起きたりでもしたら悪いし。

俺はもう一度優の頭をなでる。

「にゅー」

やばい、凄く可愛い、可愛い可愛い、  
にゅーて、可愛すぎるだろ、こつなったら

「よし、少し早い俺ももう寝るか」

俺はデュエルアカデミアの制服を脱ぎ、寝巻きに着替える、  
寝巻きは全体的に黒色の服、  
さて、寝るか、

俺は優が寝ているベットの中に入る、  
いいだろ別に一緒に寝ても、優はまだ子供だし……15歳？知っ  
たこととか！

まだ眠くないが、いいか、目でも瞑れば時期に眠くなるだろ。

『ギョ』

！っ、ゆ、優が俺に抱き付いてきた！  
な、何でだ！でも……暖かいな、  
子供は体温が高いとたまに聞くが、確かに暖かい。

俺も優のことをそっと抱きしめた、  
優しく、優しく、壊さないように、そっと……

そしたら優はもっと強く抱きついてきた、  
小さな体、小さな手で、強く、強く抱きしめてきた、

そうだ、こいつ、優はこの前まで一人ぼっちだったんだ。

家も無く、

家族も無い、

不安だったんだろう、

寂しかったんだろう、

それでも、優は生きてきた、

どれくらい一人だったか何て関係ない、

優は、優は……………

そう思うと心が痛くなる、苦しくなる、

辛かったんだな、分かる、俺にもわかるぞ、

その気持、でも、今は俺がいる、いや、これからも俺が付いてい  
る、

だから

これからも、一緒にいてくれ……………優

俺はもう一度、優の頭をなでる。

「にゅー」

また優は気持よさそうに笑う。

第10話 「はぁ、優、可愛いぞ、ぺろぺろ」b y 亮（後書き）

僕が小説を書いて一番嬉しいのは、感想の返事を書いてるときです、

さて、次回ですが、デュエルは……無いです、

ごめんなさい、デュエルないです、遊戯王小説なのに、でもその次の回はきつとデュエルします（多分）

第11話 「今日はZEXALの放送日」by作者(前書き)

最近暑いですね、暑いと言えば夏、それはおいといて、

デュエルアカデミアって新入生が入ってくるの秋だったような…

違つかもしれませんがこの物語は9月から新学期ということをお願いします。



第11話 「今日はZEXALの放送日」by作者

雷堂優 視点

「……………んん、もう、朝かな……………」

あれ、どこぞ？

……………ああ！亮の家に住むことになったんだっただ僕。

それにしても暖かいな、ここ。

「……ああ！りよ、亮！」

なんと、僕の前には、亮が寝ていた！な、何で！

……………あ！たしか昨日僕、途中で亮の部屋で寝ちゃったんだっけ  
！？

だから、一緒に布団で、

でもいいや、暖かいし、いい匂いがする、亮……

「もう少し、寝よう……………」

僕は亮の背中に両手を伸ばして、顔を亮の胸に付けた。

暖かいな……そして、聞こえる

トクン、トクンと、亮の心臓の音、

体が違うから僕の心臓とは、音も大きさも動くスピードも違う、



しかし、起きようとしても体が動かない、なぜだ！

自分の体をよく見てみると俺の体に小さな天使、じゃ無くて、優が抱きついていて、優くっ付きすぎだ、

でも、か、可愛い、このまま起こすのがもつたいない、

ならば……………

「もう少し寝るか」

俺は再び布団に入　　りはしない、だから今日は大切な用事が

あるんだ！

俺は優を起こさないように優を放して、着替えることにする。

さつきも言ったが今日は大切な用事があるため外出する、  
だから服装はいつもはデュエルアカデミアの制服ではなく、  
私服を着る。

「ふう、着替え終わった、そろそろ優を起こすか」

今の時間は7時30分、

そろそろ料理長と理奈が朝食の用意をし終える時間だろう。

「優、優起きろ、朝だ」

「んん、た、頼む、命だけは勘弁してくれ！」

どんな寝言だ！え！『命だけは勘弁してくれ』悪夢なのか！助けたほうがいいのか？

「ゆ、優……」

「わかった、うまい棒3本でどうだ！……  
よし、契約成立だな」

何か知らないが助かったらしいぞ！しかし相手のほうは30円でいいのか！

とか言ってる内に時間はもう35分、そろそろやばい。

「優、起きるんだ、朝だぞ」

「んー、あれ、ここは？」

あーりよ、亮、おはよう」

「ああ、おはよう、早速だがそろそろ朝食だ、  
着替えはここに置いておく着替えておけ、

今着ている服はその辺に置いておいてくれ、じゃあ俺は部屋を出て  
るから、

着替え終わったらこい」

「うん、わかった」

雷堂優 視点

「うん、わかった」

僕がそう言うと亮は部屋を出て行った、  
そっぴゃ僕この服のまままで寝ちゃったんだ。

「えっと、服服、これが」

僕は机の上にTシャツと半ズボンがおいてあったので、  
着替えることにする。

僕が服を脱ごうとすると、後ろから視線が……

振り向いてみると、ドアの隙間から、亮が僕を覗いていた。

「亮、何してるの?」

「!」

すると亮は驚いた顔をして

「ち、違う!覗いていた訳じゃない!

本当だ、少しドアが開いていて、閉めようとしたら、中が少し見えただけだ!」

「本当?」

「ほ、本当だ……お、俺がう、うしょしょ、つく訳にやいだる」

「亮、日本語でお願いします」

「だ、だから俺が嘘をつく訳無いだろう！」

必死になっている亮、  
なんか、逆に怪しいです。

「わかったよ、じゃあ僕もう着替えるから」

「わ、わかった、着替え終わったら来てくれ」

閉まる扉、  
別に着替えぐらい見られても僕的には困らないんだけどな  
男同士だし。

しばらくして、無事着替え終わった僕は、亮の部屋から出る、

そして部屋の外は赤い絨毯とんないふじが引かれた大きな廊下、  
相変わらず大きいな、亮の家。

「着替え終わったのか、優？」

「うん」

「じゃあ行くか」

「はい」

先に行く亮の後姿を僕は付いて行く。

第11話 「今日はZEXALの放送日」 by 作者（後書き）

〜作者のどうでもいい話コーナー〜

やってきました新コーナー、このコーナーでは作者の本当どうでもいい話をここに書くというどうでもいいコーナーです、でもやります、では第一回！いってみよう！

第一回「どうでもいい話」

今日部活があつて、電車で学校まで行ったんですよ、そしてその帰りのどが渴いたので「スーパーで飲み物でも買おうかな」と思いスーパーに入ったらなんとかなり安い値段でソーダが売ってたので買うことにしました。

レジに並んでPASMで払おうとしたら使えないと言われ仕方なく小銭が無かったので野口さんで買ったんです、そしてやっと飲めると思いソーダを飲もうとするとソーダというよりただの炭酸水で甘くなく味が無かったので凄くショックでした。

まあこんな感じですが、ホントどうでもいい話でしたね……………



第12話 「優様と2人っきり」フッフ」by理奈（前書き）

つ、ついに書き貯めが無くなった、よって明日から毎日投稿できるか分かりません。

そういえばZEXALの世界では表側守備でモンスターを召喚しませんね、GXや5D'sのせいで表側守備で召喚できると勘違いする小学生がたくさん出るからだろうか？しかもZEXALってなんか初心者に優しい物語だし。

最近勉強が難しい、娯楽遊樂が断ち切れないです、しかも最近アニメが面白い。

第12話 「優様と2人つきり…フッフ」by理奈

食堂

「おはようございます、亮様」

「おはようございます、亮殿」

食堂に着くと、テーブルの上にはもう朝ご飯は並べられていて、この屋敷のメイド、理奈さんと、料理長さんがあいさつをしてくれた。

「おはよう、理奈」

「おはようございます、理奈さん」

僕と亮は理奈さんに、挨拶をする。

「おはようございます、優様」

「優殿、おはようございます」

「理奈、今日の朝食は何だ？」

「はい、こちらでございます」

理奈さんは僕たちをテーブルまで連れて行き、イスに座らせてくれた。

朝ご飯は、パンに、スクランブルエッグ、ベーコンとサラダ、そしてコーンスープだ。

「わぁ、おいしそう!」

「そうでござろう、拙者が作ったでござ

」

「それは、よかったですね、優様」

「……………」

「では、冷めない内にどうぞ」

「うむ、いただきます」

「いただきます!」

うん、おいしい、特にコーンスープ、

転生前に妹とよく飲んだインスタントのコーンスープは、  
味が濃かったり、薄かったり、しておいしくなかったからな  
最後のほう溶けてないし、これだから安物は。

「（優様、とっても美味しそうに食べていらしています、  
可愛いですわ、キョートですわ、ラブリーですわ）」

「（なんだろう、背筋に寒気が…………）」

「ごちそうさま」

僕が朝ご飯を4分の3ぐらい食べ終わると、

亮はもう食べ終わっておりごちそうさまも言っていた。

「理奈、いきなりで悪いが俺は出かけてくる、家の事、優の事頼んだぞ」

「そう言えば、今日でしたね、行ってらっしゃいませ、亮様」

「ああ、行ってくる」

「今日どっか行くの？」

「ああ、少し用事があったな、夕飯までには、帰ってくる、それまでいい子にしているんだぞ」

「はい」

「いい返事だ」

亮は僕の頭を撫でる、気持ちいいな

「（優様の頭…私も撫でたい……………）」

「亮行ってらっしゃーい」

「行ってくる」

亮は食堂から出ようとする、

亮、今日はないのか、

寂しいな…まあ用事があるのなら仕方ないか。

「亮殿、行つてらっしゃいでござる」

「……………」

「（なんでだろうか、今日はいまだに人と会話していないでござる）」

しばらくして、僕も朝ご飯を食べ終わった。

「「ごちそうさま！」」

そう言つと理奈さんが僕の食器を片付けてくれた。

亮がないのか…じゃあ今日はどうやって過ごそう…

とりあはず自分の部屋に行こうかな？

「じゃあ僕、部屋に戻ってるね」

「そうですか……………」

僕は自分の部屋に戻ることにする、

少し、理奈さんが残念そうな顔をしたのは気のせいだろうか…

「えーっと、たしかここが亮の部屋だから……ここか」

自分の記憶をたどり、食堂から亮の部屋まで戻った、  
ふう、よかったじゃあ部屋に入るか。

『ガチャ』

「わああ！綺麗な部屋だ！」

昨日亮が使っていていいと言われた僕の部屋は、  
転生前住んでいた、自分の部屋より広くて、綺麗だ、  
うん、広い、ベットに机とダンスしか家具が無い……

なんか…綺麗過ぎて寂しい部屋だな。

「とり合図、何かしようかな……」

何もしないのは、好きじゃないのでとり合図この部屋にあるものを確認してみる。

まずはダンス……中身は

お！たくさんの子供服が、この家は亮と理奈さんと料理長の  
3人で暮らしていると言ってたのにどうしてこんなに服が……

「あれ？」

そう言えば、原作キャラの翔って、亮の弟だよ、  
なんで一緒に住んでないんだろう……謎だ。

ま、それは置いて、次は机の中をしてみる。

「何も入っていない……」

1つ分かった……この部屋、何も無いな……

「……ひまだ」

.....

「ひまだ」

な、なんてこった！これ以上になく暇だ、  
どうしたものか…今の時間は…9時、  
朝ご飯からまだ2時間経ってない…

「ひまだな」

！そうだ！！探検でもしよう！！」

このままだと暇すぎて、死にそうな勢いなので、  
この屋敷の探検に行こうと思う。

じゃあ、早速屋敷探検に出発だ！

亮の家の探検中、広いな、亮の家は、

大きい廊下に、壁には、高そうな絵が何枚も架けられている。



更に暫くこの屋敷を探検していると、金髪の女性が窓を拭いていた、

と言うか、理奈さんだね、この家は亮と理奈さんあと料理長の4人しか住んでいないみたいだし。

声かけてみようかな？

「おい、理奈さん！」

「あ！ゆ、優様！」

「理奈さん、何してるの？」

「まあ、仕事です」

「仕事？」

窓拭きが仕事？

「はい、私の仕事は、この屋敷の掃除、洗濯、買出し、調理、などの家事全てをするのが仕事です」

「ホント！すごい！大変じゃないの!？」

「はい、確かに大変ではありますが、もう慣れました、さらに、料理は料理長がほとんどやっていますし」

この屋敷の家事をほとんど1人で、凄いなあ、  
どっかの借金執事レベルだ。

「じゃあ、僕も手伝うよ！」

「えーいや、めっそも無い、優様に私の仕事を手伝わせるなんて  
「！」

「いいよ、いいよ、僕も暇だし」

「しかし……………」

「…だめ？」

「（やっぱり優様は可愛いですわ！）

分かりました、でしたらお言葉に甘えてさせてもらいます  
じゃあ、この雑巾で窓を拭くのを手伝ってください」

「うん、わかった！」

僕は理奈さんから雑巾をもらい、窓拭きを手伝うことにする。

「ところでさあ、理奈さん」

窓を拭きながら理奈さんに声をかける。

「何でしょうか？優様？」

「この屋敷ってさあ、今は僕と亮、  
理奈さんと料理長の4人しか住んでいないんでしょう」

「はい、そうですが」

「亮のお父さんや、お母さんとか、弟さんとかいないの？」

僕の質問に対して理奈さんは、

動かしていた手を止めた、そしてしばらくして、喋りだした。

「旦那様は、仕事でしばらくこの屋敷には帰ってきません、

そして奥様は……数年前、亮様の弟の翔様を連れて、

この屋敷を出て行ってしまいました」

「…そ、そうだったんですか」

離婚、別居ってやつかな、あまり、いいことではないよね。

「もしかして、聞いちゃいけないことだった？」

「い、いえ！そうゆうことではないです！」

少し、暗い感じになってしまったが僕と理奈さんは無事この屋敷の掃除を終えた。

「ふうう〜、おわったー」

「ありがとうございます、優様」

「いいよお礼は、暇つぶしにやってただけだもん」

「そうですか、時間はまだ10時、  
昼食まではまだ時間がありますね、どうしましょう」

『グウウウウウウ』

あれ？お腹が……

「ふふ、何かお作りになりましたか？優様？」

「お願いします」

ここは、理奈さんの優しさに甘えることにする。

## 食堂

いま僕は食堂にいる、掃除を手伝ったお礼に  
理奈さんが何か作ってくれるらしい。

「お待たせしました」

理奈さんがホットケーキを焼いて持ってきてくれた。

「いただきます」

うん、おいしい。

「よかった、美味しそうに食べてくれますわ、  
ああ、優様はいつ見ても可愛いわぁ」

僕がホットケーキを食べている間、  
理奈さんはずっと僕の顔を見ていた、何か怖い…

「あ！そう言えば理奈さんってどうしてここで働いているんですか  
？」

ホットケーキを食べながら理奈さんに質問する。

「ここで働いている理由？」

そうですね、話すと長くなりますが

「

10年以上前のことで、よく覚えていませんが、  
私の父が自殺して、母が事故で死んでしまって、

私は1人きりになってしまったのです。

周りには頼れる親戚がいなくて本当に1人になってしまって。

しかし雨の日に、近所の公園で雨宿りしていた時です、  
亮様が現れて、私を家まで連れて行ってくれたのです、

家の人たちはみんな優しい人たちで、私はこの屋敷に住んでいいことになりました、

そして私はその恩返しとしてこの屋敷のメイドになることを決意したのです。

「ま、簡単に言うところな感じですが、  
すいません、かなり昔の話なのでうまく話せなくて…」

「そ、そうか、理奈さんにそんな過去が……………」

と、いうことは僕は亮の執事ならないといけないのかな？

とか思っている内にもうホットケーキは全部食べ終わっていた。

「ふう、おいしかった、

「ごちそうさまでした」

「それは良かったです、

しかしまだ11時、

「昼食までまだ時間がありますね」

「そっか、掃除はもうしたし、

他に何か手伝うこと無い？」

「い、いや、もう優様に手伝ってもらうことは無いですね

（私は優様に掃除を手伝ってもらったただけでもう十分ですわ！）

「じゃあさあ、決闘デュエルしようよー！

時間があるんでしょ!」

「でゆ、決闘デュエルですか?

一様できますが」

「じゃあ決まり!早速決闘場デュエルフィールドに行こうよ!」

僕は理奈さんの手をつかみ、決闘場デュエルフィールドに行こうとする。

「(ゆ、優様の手………小さくて暖かい……)」

「どうしたの?早く行こうよ!」

「はい、そうですね!」

東雲理奈しのめりな 視点

私と優様は決闘場デュエルフィールドに行く前に優様の部屋に向かっています、理由はデッキと決闘盤デュエルディスクをとりに行くため。

そういえば私もここしばらく決闘デュエルしてませんでしたわ、

昔は料理長とよく決闘デュエルしたものです、

ま、1日中決闘デュエルしてて旦那様に昔とても怒られた事もありました  
が……

「ついた、少し待ってね、すぐ取ってくるから」

「はい、了解しました」

しばらくして、優様がデッキと決闘盤デュエルディスクを持ってきたため、次は私の部屋に向かっています。

久しぶりの決闘デュエル、ワクワクしますわ、さらにお相手が愛いとしの優様だなんて、今日はとてつもなく付いてますわ！！

デュエルフィールド  
決闘場

今私と優様は決闘場デュエルフィールドにいます、そして2人は向かい会い決闘デュエルできる状態です。

「理奈さん、行くよ！」

「ええ、いつでもどうぞ」

「「決闘デュエル！！」」



第12話 「優様と2人つきり」フッフ」by理奈（後書き）

ふう、疲れた、この話、アニメの遊戯王見ながら作ったため凄く  
下手な文です。

（作者のどうでもいい話コーナー）

やってきましたこのコーナー、2回目本当にあったのが、見たい  
な感じですがあります、では行ってみよう!!

第2回「どうでもいい話その2」

最近オタクの部活友達からギャルゲーを借りてやってみたところ、  
凄く面白くていままでギャルゲーをバカにしていた自分をぶん殴り  
たい気分になりました。

終わりです、うん第一回より話のボリュームが落ちたな、まあい  
つか、どうせどうでもいい話なんだし、きつとみんなこのコーナー  
飛ばしてると思うし……………

第13話 「理奈殿！抜駆けでござるか！」 b y料理長（前書き）

長かった、そして明日は投稿できそうでないです、  
更に、書き貯めが無くなったと同時にネタも無くなった、  
ネタを考えとかないと。

第13話 「理奈殿！抜駆けでござるか！」 by 料理長

「決闘<sup>デュエル</sup>！！」

「先攻は理奈さんにあげるよ、

レディーファーストってやつだよ」

「紳士ですね、ではお言葉に甘えて、

私のターンドロ、私は手札からヘカテリスを捨て効果発動」

ヘカテリス？まさか天使デッキ！？

「ヘカテリスの効果、このカードを手札か捨てる事で

デッキから神の居城 ヴアルハラを発動」

これはまた厄介なカードを…

「ヴァルハラの効果発動、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、

手札から天使族モンスター1体を特殊召喚する、

私は手札から光神テテュス（ATK2400）を特殊召喚！」

大きな羽が生えた天使だ、綺麗だな……………

「更に、手札から代行者と名のついたモンスター1体をゲームから除外し

マスター・ヒュペリオン（ATK2700）特殊召喚する」

今度はとても大きな天使？なのかな？

何か炎の翼を持ったおっさんが出てきたと言った方が合ってるかもしれない…………

「更に私はモンスターをセット、ターンエンドです」

理奈 LP4000 光神テテユス ATK2400 マスターヒ

ユペリオン ATK2700

手札 1枚 伏せモンスター 神の居城 ヴァルハラ

やばいな、理奈さんの場には2体の上級モンスターが、さて、とりあはずカードを引いてから考えるか。

「僕のターン、ドロー、

僕はカードを2枚伏せ、魔法カード手札抹殺を発動、

お互いのプレイヤーは手札を全て捨て、捨てた枚数カードをドロする

僕は3枚ドロー！」

「私は1枚ドロー」

「行くよ！今墓地に送った暗黒界の武神ゴールド（ATK2300）の効果発動、このカードが手札から捨てられた場合、

このカードは特殊召喚できる」

ゴールドってゴールドを文字った感じだから金色してると思いきや暗い黄色だな、ま、いいか。

「更に、ゴールドと一緒に墓地に送った暗黒界の龍神グラファの効果発動、

このカードは手札から墓地に送られたとき相手フィールド上のカ

カード1枚を破壊する、  
理奈さんのマスター・ヒュペリオンを破壊！」

「く、ヒュペリオンが、  
しかし優様のゴルドの攻撃力は2300、  
私のテテユスの攻撃力2400には100ポイント足りませんよ」

「分かってます、僕は暗黒界の尖兵ベージ（ATK1600）を召喚」

「しかし、このカードの攻撃力は1600、伏せモンスター狙いで  
すか？」

「ううん、両方だよ、僕は場の暗黒界の尖兵ベージを手札に戻すこ  
とで、

墓地の暗黒界の龍神グラファ（ATK2700）を特殊召喚する  
！」

亮のときみたいに僕の後ろからグラファが『ズズズズ』  
と音を立てて床から這い上がってくる。

「いくよ！バトルフェイズ！  
ゴルドで伏せモンスターを攻撃！」

「伏せカードはライトロード・ハンターライコウ（DEF100）  
このカードがリバーズした時フィールド上のカード1枚を破壊す  
ることができます」

「えええええ！！！」

「暗黒界の龍神グラファを破壊します」

「ゴールドが伏せカードを攻撃すると、伏せカードからライコウが現れ、

ゴールドの攻撃をかわした、そしてそのままグラファに噛み付いた、グラファは何故か攻撃力200のモンスターに噛まれただけで破壊されてしまった。

「グラファ!!!」

ライコウはグラファを破壊した後、  
時空を歪めて、どっかに行ってしまった、  
ジャステイスワールドにでも帰ったのかな？

「攻撃する順番を間違えましたね、優様」

「くっそう、僕はカードを1枚伏せターンエンド」

優 LP4000 暗黒界の武神ゴールド ATK2300  
手札 2枚 伏せカード×3

理奈さん、強い……でも、負けないぞ！

「私のターン、ドロー、」

このとき、テテユスの効果を発動、

ドローしたカードが天使族モンスターだったとき、

もう一度ドローできる、私が引いたカードは天使族の神聖なる（  
シャイン）球体（ATK500）

よって一枚ドロー、引いたカードは神聖なる球体よってもう一枚  
ドロー、

引いたカードは神聖なる球体、よつてもう一枚ドロ、  
マスターヒュペリオンドロー……………これで終わりです」

神聖なる球体3枚つて……………手札に来てそんな意味無いな……………

「バトルフェイズ！テテユスでゴールドを攻撃します、  
シャインスパーク！！」

「なら、畏発動、聖なるバリア ミラーフォース、  
相手の攻撃宣言時に発動でき、相手攻撃表示のモンスター全てを  
破壊する」

テテユスの攻撃が弾き返され理奈さんの場合は、  
永続魔法のヴァルハラのみ。

「…少し油断しました、  
メインフェイズ2に入ります、  
ヴァルハラの効果で手札の神聖なる球体（DEF500）を守備  
表示で特殊召喚、  
さらにもう一体神聖なる球体を守備表示で召喚、ターンエンドで  
す」

そうか、そついやこの世界では表側守備ができたんだつげ。

理奈 LP4000 神聖なる球体DEF500 x2  
手札 3枚 伏せカード無し 神の居城 ヴァルハラ

「僕のターンドロ、魔法カード闇の誘惑を発動、  
デッキからカードを2枚引き、その後手札の闇属性モンスター1  
体をゲームから

除外する、僕は2枚ドロ、そして暗黒界の軍神シルバを除外」

「手札を2枚補充するカード、だったら強欲な壺の方がいいのでは？」

「それを言うてはだめです

でも、このカードを使えばどうか……… 畏発動！闇次元の開放、ゲームから除外された闇属性モンスターを蘇生させる、

さつき闇の誘惑で除外した暗黒界の軍神シルバ（ATK2300）を特殊召喚！」

ゴルドの次はシルバ、なんか金閣、銀閣みたいだな、ほら瓢箪のあれ。

「さらに暗黒界の尖兵ベージを召喚、

そしてさっきのようにベージを手札に戻し、

墓地からグラフィア（ATK2700）を特殊召喚する」

「自分で何度も蘇るモンスターですか……… 厄介です」

僕の場合には攻撃力2300のゴルドとシルバ、更に切り札のグラフィアもいる、

そして理奈さんに場に伏せカードは無い、これはチャンス！！

「バトル！ゴルド&シルバで球体を攻撃！」

ゴルドは斧、シルバは剣で球体を破壊する。

「そしてグラフィアで理奈さんにダイレクトアタック！

ダークネスフレイム！」



「グラフィアが理奈さんに黒い息？光線？ゲロ？を吐く、多分光線かなんかだろう。」

「きゃああ！！」

理奈 LP4000 LP1300

「ターンエンド」

優 LP4000 暗黒界の武神ゴルド ATK2300 暗黒界の軍神シルバ ATK2300

手札 4枚 暗黒界の龍神グラフィア ATK2700

闇次元の開放（シルバ対象）伏せカード×0

「やりましたね、優様、なら私も行かせてもらいますよ、

私のターン、ドロー、ヴァルハラの効果でマスター・ヒュペリオ

ン（ATK2700）

を特殊召喚！」

再び出てくる、天使。

「更に死者蘇生を発動、墓地の光神テテュス（ATK2400）を蘇生」

コイツもさつき見たやつ。

「そして私の墓地の天使族モンスターが4体のみの場合、大天使クリスティアは特殊召喚できる、

私はの墓地にはヘカテリス、マスター・ヒュペリオン、

そして2体の神聖なる（シャイン）球体<sup>ボール</sup>、よって現れなさい！」

理奈さんの場の上空に大きな雲の渦ができて、そこから赤い羽根をもった光輝く天使が降りてきた。

「大天使クリスティア（ATK2800）光臨！」

やばいな…理奈さんの場には、攻撃力2000以上の上級天使が3体もいる、

しかもクリスティアがいる限りモンスターの特殊召喚は出来なかったような……

つまり手札のバトルフェーダーが使えないだと！

「マスター・ヒュペリオンの効果を発動します、墓地の天使族、光属性のモンスター1体を除外することで、フィールド上のカードを1枚選択し破壊します、墓地のヘカテリスを除外して、グラファを破壊します、ビッグバンスヒィア！」

ヒュペリオンが手に真つ赤な球体を作り出し、グラファに向かって放った。

ヒュペリオンが放った、球はグラファに直撃し、そのまま溶けてしまった。

「このカードは、自身の効果で何度も蘇生する厄介なモンスター、しかし私の場にクリスティアがいる限りお互いに特殊召喚は出来ませんよ、

つまり、もうグラファは無力です」

「く、くそう……」

「行きます！テテユスとヒュペリオンでゴールドとシルバを攻撃」  
ゴールドはテテユスのビームで、  
シルバはヒュペリオンが作り出した赤い球体で破壊された。

優 LP4000 LP3500

もう僕の間にはカードが無い、このままじゃ危ない。

「クリスティアで優様にダイレクトアタック！」

「あわああー！」

ソリットビジョンだと分かっててもモンスターのダイレクトアタックは怖いなあ……

優 LP3500 LP700

「私はターンエンドです」

理奈 LP1300 光神テテユス ATK2400 マスター・  
ヒュペリオン ATK2700  
手札 1枚 大天使クリスティア ATK2800 伏せカード  
x0

「くそう、僕のターン、ドロー！」

こ、このカードは、よし！僕は手札から魔法発動強欲な壺  
効果でデッキからカードを2枚ドロー

（よかった、昨日夜ご飯食べた後亮に頼んでデッキ編集させても

らったから)」

「この状態からの強欲な壺、偶然か、優様の引きの強さか……………」

僕がドロ―したカード、それは……………」

「きた！やったあ！」

「（な、何を引いたのでしょうか……………」

「行くよ！僕はフィールド魔法、暗黒界の門を発動！」

僕の後ろから、『ガガガガ』と音を立てて、  
大きな門が現れた。

「早速、暗黒界の門の効果を発動、1ターンに1度墓地の悪魔族モンスターをゲームから除外し、  
手札を一枚捨てる」

「一見デメリットまみれの効果と思いきや、  
手札から捨てられることで発動する暗黒界デッキにとっては十分にメリットがある。」

「墓地の暗黒界の斥候スカーをゲームから除外し、  
手札の暗黒界の刺客カーキを捨てる、

そしてカーキの効果、このカードが手札から捨てられたとき、フィールド上のモンスター1体を破壊する、  
大天使クリスティアを破壊」

「しかし、クリスティアは墓地に行くときデッキの一番上に戻りません」

クリスティアは光の粒子になって理奈さんのデッキの上に集まり、カードになった。

でも、山札の上に戻っても関係ない、  
このターンで決着を決める！

「暗黒界の門の効果はまだ続いている！  
手札を1枚捨てた後、デッキからカードを1枚引く」

僕が引いたカード、それは

「今引いたカード、暗黒界の門を発動！」

「に、2枚目ですか！」

後ろにある門が鏡のように『パリン』と割れたと思うとすぐにまた門の形に戻った。

「暗黒界の門の効果発動！墓地の暗黒界の刺客カーキを除外し、手札の暗黒界の龍神グラファを捨てる」

僕は手札のグラファを上投げると、門が少し開き吸い込んでいった、

これ本当にソリットビジョン？

「グラフィアが捨てられたとき、フィールド上のカード1枚を破壊する、

マスター・ヒュペリオンを破壊」

グラフィアのカードを吸収した門からいきなり黒いビーム砲が飛び出し、

マスター・ヒュペリオンに直撃した、

もちのろんでマスターヒュペリオンは破壊されたよ。

「く、私の天使が2枚も……」

「そして、門の効果で1枚ドロー」

引いたカードは……

ふふ、今日は付いてる。

「僕は暗黒界の尖兵ページを召喚、

そして例の如くページを手札に戻し、墓地のグラフィアを特殊召喚

」！

今回3回目の登場ページさん、

でも全部グラフィア蘇生のために手札に戻されている気が………気のせいだよね！

暗黒界の龍神グラフィア ATK2700

ATK3000

「グラフィアの攻撃力が上がった!?」

「何と、暗黒界の門にはまだ効果があつて、場の悪魔族の攻撃力・守備力を

300ポイント上げる効果があるんです」

「万能ですね、その門」

「そして最後に死者蘇生を発動、墓地の2枚目のグラファを蘇生！」

後ろにある門が『グラグラ』とゆれると、

門が『バン』と大きな音を立てて開き、そこにはグラファが立っていた。

『グラアアアアアアア！！！』

大きな雄叫びを上げるグラファ、

何故か門があると、決闘<sup>デュエル</sup>の演出が濃くなるな……………

「僕の場合には攻撃力3000となったグラファが2体、

理奈さんの場合は攻撃力2400のテテユス、

理奈さんの場に伏せカードは無し、

つまりこの決闘<sup>デュエル</sup>僕の勝ちですね」

「甘いですよ優様、私のこの手札、これはオネストです、攻撃した瞬間、カウンターで私の勝ちですよ」

「いや、これ3枚目の神聖なる（シャイン）<sup>ホーリー</sup>球体<sup>ボール</sup>でしょ、テテユスの効果で引いた」

「……………記憶力がいいですね……………優様」

理奈

LP1300

LP0

「ありがとうございます、優様、久しぶりの決闘<sup>デュエル</sup>、楽しかったです」

「いや、いいよお礼は、さっきも言ったけど、僕も暇だったし、悪く言っちゃうと暇つぶしの決闘<sup>デュエル</sup>だったし」

「いえ、それでも、十分に楽しめました、ありがとうございます、優様」

「じゃあ、僕も、理奈さんと決闘<sup>デュエル</sup>して、楽しかった、ありがとうございます、理奈さん」

「あら、うふふ」

理奈さんは上品に笑う。

「あはは」

僕も笑う。



今日は、僕と理奈さんが少し仲良くなった気がする日だった。

夜  
食堂

亮は夕食前に帰ってきて、今僕と亮は一緒に夜ごはんを食べている、

理奈さんと料理長はいつもの通り僕たちが食事している所を見ている、

いつも思っけどこの2人はちゃんと僕たちが食べた後、しっかり食事とってんだよね、たまに不安になる………

「えー！理奈殿今日優殿と一緒に掃除して、ホットケーキ食べて、決闘デュエルしたのでござるか！」

料理長がいきなり叫び出した、その言葉に亮が、反応した。

「料理長、今何て言った？」

「え、いや、だから、優殿と理奈殿が今日2人っきりで、掃除したり、決闘デュエルしたらしいでござるよ」

「ほ、本当か理奈？」

「はい、もちろんです」

何故か自信満々に答える理奈さん。

「（う、うらやましい…）」

「優殿、では明日は、拙者と優殿の2人っきりで料理したり、決闘デュエルしたり一緒に寝たり、楽しいことしようぞる」

「な、何で………」

「拙者、実はガチホモでござる」

「亮、いままでありがとうございました」

「ま、まて！優ここは料理長を解雇にするから、それでいいだろ」

「うん、わかった」

「優殿、何で拙者が解雇になるとこんな満面の笑みになるでござるか！」

そんなかなで今日も、1日楽しかったな。

「優、明日は俺と一緒に決闘したり、遊んだり、お話しおはなししよう！」

「りょ、亮まで……………」

第13話 「理奈殿！抜駆けでござるか！」 by 料理長（後書き）

ふう、皆さんお気づきだと思いますが優のデッキはSD『デビルズゲート』を少しいじったものです、デッキの内容はSDデビルズゲートを3つ買って、使える罠・魔法カードを何枚か入れた感じですが、詳しくは言いません、理由は作者の都合によってデッキの内容が変わることがあったりするためです、

だから優のデッキは暗黒界デッキだと思ってくれればいいです。  
はい！優のデッキ紹介終わり。

ところで遊戯王のルールの『コスト』って何でしょう？  
少しなら分かるんですが、詳しくは分かりません、  
知ってる人がいたら教えてください！

自分で調べるよという感じですが、僕のパソコン『遊戯王Wiki』が見れないのです、くそ、無念……………

作者のどうでもいい話コーナー

後書き結構書いてるのに、このコーナーはやりませ、一様2000文字まで入力できるらしいので。

第3回「どうでもいい話その3」

遊戯王カードが付いてくるということでジャンプを買ったんですが、いつの間にか知らない漫画がふえてて話が全然分かりませんでした、付録のカードも自分のデッキとはあまり合わないし、使い難かったです。

うん、なんか遊戯王小説っぽい後書きが書けた気がします。

第14話 「料理長の部屋汗臭っ！」 b y 優（前書き）

今回の話しは文がいままで以上に下手糞でした、いいですよねた  
まには、

え？いつもそつだって、そんな事言わないでください、心が折れそ  
うです……………

第14話 「料理長の部屋汗臭っ！」 b y 優

『ミン、ミン、ミンミンミン、ミン、ミン、ミンミンミン』

「う、うるさい」

今日僕は、聞いてるだけで暑苦しくなるセミの鳴き声で目を覚ました。

「どうせなら、小鳥の囀りたぐりで目を覚ましたかったな………」

まあ、その程度のことのでグチグチ言っても無駄なので、早速着替えることにする。

今着ているパジャマを脱いでベットのの上に置く、  
そしてタンスの中から適当にTシャツと半ズボンを取り出し着替える。

「よし！こんなもんか」

着替え終わったので、隣の亮の部屋に行こうと思う、  
まだいまいちこから食堂までの道のりがよく分からないから、  
広すぎるよ丸藤家。



『コンコン』

「亮、起きてる?」

亮の部屋の扉をノックする。

『ガチャ』

「早いな、優」

暫くしてデュエルアカデミアの制服を着た亮が出てきた、  
亮いつもこの格好なのかな?

「おはよう、優」

「あ、うん、おはよう亮」

「さあ、朝食を食べにいくぞ」

「うん」

僕と亮は食堂に行って朝食を食べた、  
今日も料理長がガチホモ発言して亮が解雇しようして、  
料理長が命乞い、いや解雇乞いしている感じだった。

「亮は今日も用事があるのか」

ここは自分の部屋、亮は今日も用事があるらしく  
何処かへ行ってしまった、よって今日もヒマだ、どうしよう………

「昨日みたいに探検に行こうかな？」

今の時間は9時、亮は今日もないからつまらない、  
と、言う訳で僕は再び探検に出発する。

10分後

ただいま丸藤家を探索中、

うーん、少し遠くまで来ちゃったな、

自分の部屋まで戻れるかな？って家の中で迷子ってシユールすぎるな………

とゆう不安を抱えながら屋敷を歩いていると、何か普通とは違う

部屋を見つけた、

何故かこの部屋だけ扉ではなく襖ふすまだった。

僕は好奇心で襖を少し開けると

「ふんっ！……ふんっ！……ふんっ！……」

中には着物を着てチヨンマゲで30代後半ぐらいのおじさん

んが  
木刀をもって素振りをしていた、

というか料理長だよね……この家僕と理奈さんと亮と料理長の4人しか住んでないもん。

「む、何者！？……なんだ優殿でござるか」

「こ、こんにちは、料理長さん」

「何か用でござるか？」

「いや、別に、特に用はないよ、

偶然通りかかっただけ」

「そつでござるか、でも折角来たんだし、

お茶ぐらい出すでござるよ」

「そつ、じゃあお言葉に甘えて」

僕は料理長の部屋に入る、

この部屋だけ畳みだ、そして汗臭っ！

「お茶でござる」

そう言つて料理長から紅茶をもらった、  
ここは日本茶じゃないんだ。

とりあはず、料理長からもらった紅茶を飲んでみる、あ、意外と  
おいしい。

「意外とおいしいですね」

「意外は余計でござる……………」

「ははは、」

それはそうと、何をしていたの？」

「ああ、ちよつと鍛練を」

「たんねん？」

「そつでござる、」

毎日の日課で空いた時間に修行を……………」

「修行……………」

何の修行？

剣道かな？

「そつだ優殿、折角来たのだから何かしていくでござるか、  
ふとんならもう用意してあるでござる」

「いえ……結構です」

「ははは、冗談でござる、  
デュエリストデュエル  
では決闘者らしく決闘でもしてくでござるか」

デュエル決闘か、まだ料理長とは決闘したことなかったな。

「うん、いいよ」

「じゃあ決まりでござる」

「あ！でも決闘盤部屋に忘れた、  
デュエルディスクデュエル  
デッキなら持ってきたけど………」

「それなら心配無用、拙者決闘盤2つ持っているでござる」  
デュエルディスクデュエル  
そう言つて料理長は決闘盤を1つ渡してくる、  
う、汗臭！

「さあ、決闘でござる」  
デュエルデュエル

「う、うん……」  
デュエルディスクデュエル  
（どうしよう、この決闘盤使ったら、デッキがこれ以上になく  
汗臭くなるなる事は確実だよ」

「どうしたでござる？」

「い、いや、なんでもない」

とりあはず持っていたウェットティッシュで軽く決闘盤を拭いて  
デュエルディスクデュエル

おく、

「これでなんとか………」

「<sup>デュエル</sup>決闘!!!」

第14話 「料理長の部屋汗臭っ！」 b y 優（後書き）

次回料理長VS優、どちらが勝つのか？

そして料理長のデッキは何なのか！？

～作者のどうでもいい話～

このコーナーいつまで続くんだろう？まあ続けば続くほど僕の人  
生に無駄が多いことが証明されますね。

第4回「どうでもいい話その4」

この前遊戯王の映画を動画で見たんですが、映画のSinの効果  
ってOCGとかなりちがいますね、映画のSin強すぎ。

なんかもうどうでもいい話じゃなくなってきましたね……………次回  
からやめよっかなこのコーナー。

第15話 「理奈殿、これでおあいこでござる」b y似非侍(前書き)

一週間連続投稿達成！次は2週間連続投稿を目指そうかな？無理っぽいなもう書き貯めないし、今週は親がいなくて、1日中PCの前にいられたからできたわけだし。



第15話 「理奈殿、これでおあいこでござる」by似非侍

「決闘<sup>デュエル</sup>!!!」

「先攻はいただくでござる、拙者のターンドロー!

拙者はクイーンズ・ナイト(ATK1500)を召喚でござる」

西洋の鎧を着けた金髪の女性騎士……

料理長のことだから侍系のカードを使うと思ったのに……

「そしてカードを2枚セット、ターンエンドでござる」

料理長 LP4000 クイーンズ・ナイトATK1500

手札 3枚 伏せカード×2

「僕のターン、ドロー!

僕は暗黒界の狂王ブロン(ATK1800)を召喚」

狂王ブロン、王ってことはコイツが暗黒界の親玉かな?

「ブロンでクイーンズ・ナイトを攻撃!

イビル・ハンド!!!」

ブロンが腕を伸ばしクイーンズ・ナイトの心臓を貫いた、クイーンズ・ナイトは消滅してしまった。

料理長LP4000

LP3700

「ブロンの効果発動、このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、自分は手札を1枚捨てる事ができる」

「自分の手札を捨てるって、そんなデメリットしかないモンスターなんで入れてるでござるか？」

「それがそうでもないですよ、

僕は手札の暗黒界の尖兵ベージ（ATK1600）を捨てる、

このとき今墓地に送ったベージの効果発動、

このカードが手札から捨てられた場合、

このカードを墓地から特殊召喚する」

地面から槍を持った人型の悪魔のようなモンスターが出てきた。

「今召喚したベージで料理長にダイレクトアタック！」

「ぐぼあっ!!」

料理長LP3700

LP2100

「やるな、優殿、なら拙者も…」

<sup>トランプ</sup>畏発動ダメージ・コンデンサー

手札を1枚捨て発動でき、今受けたダメージ以下のモンスター

1体をデッキから特殊召喚する、

拙者は攻撃力1200のコマンドナイトをデッキから特殊召喚するでござる」

料理長がデッキからカードを1枚手札に加え、

そのカードを決闘盤<sup>デュエルディスク</sup>セットした。

そして出てきたモンスターはコマンドナイト、赤い鎧を着た女性戦士だ、さつきから女性のモンスターしか出てきてないような……

気のせいですよね料理長!!

「じゃあ僕はカードを1枚セットしてターンエンド」

優 LP4000 暗黒界の狂王ブロン ATK1800 暗黒界  
の尖兵ベージ ATK1600  
手札 3枚 伏せカード×1

「拙者のターンドロロー!

<sup>トランプ</sup>罫カード発動、リビングデットの呼び声、

これは墓地のモンスター1体を蘇生させるカード、拙者は墓地のクイーンズ・ナイト(ATK1500)を蘇生」

再び現れる女性騎士。

「そしてキングス・ナイト(ATK1600)を通常召喚」

あ、よかったちゃんと男性モンスターも入ってるじゃん。

「キングス・ナイトの召喚に成功したとき、自分の場にクイーンズ・ナイトが

存在する場合デッキからジャックス・ナイト(ATK1900)を特殊召喚するでござる」

オレンジ色の鎧を着けたオジサン戦士が出て、その隣に青い鎧を着けた青年戦士も出てきた。

「クイーンズ・ナイト、キングス・ナイト、ジャックス・ナイト、  
絵札の三銃士、ただいまケンザン!!」

少し危ないな……………一気にモンスターが4体も並んだ……………

「まだまだ! コマンドナイトの効果発動、  
自分フィールド上の戦士族モンスター全ての攻撃力を400ポイ  
ント上げる」

クイーンズ・ナイト	ATK1500	ATK1900
キングス・ナイト	ATK1600	ATK2000
ジャックス・ナイト	ATK1900	ATK2300
コマンドナイト	ATK1200	ATK1600

もっと危なくなってきたな……………

ここで料理長に負けるのは何故かプライドが許せないな、  
亮や理奈さんなら1回負けたくらいじゃなんとも思わないけど  
料理長にだけは負けたくないな……………

「行くでござるよ!」

クイーンズ・ナイトで暗黒界の尖兵ベージを攻撃、クイーンスラ  
ッシュュ!」

「このままじゃ危ない!

畏発動、暗黒の謀略、

お互いのプレイヤーは手札を2枚捨て、2枚引く

しかし相手は手札を1枚捨てることでこのカードの発動を無効に  
出来る」

「手札を交換するだけでござるか、  
なら拙者は2枚捨て2枚引くでござる」

「じゃあ僕も、手札を2枚捨て2枚ドロ」

「ではクイーンズ・ナイトの攻撃続行!!」

「まだまだ！今捨てた暗黒界の導師セルリの効果発動」

「すてて発動する効果モンスター!?!」

「このカードが手札から捨てられたとき、相手フィールド上に特殊召喚する」

「拙者の場に?ではいただくでござる」

「そしてセルリが暗黒界と名のついたカードの効果によって特殊召喚されたとき、

相手は手札を1枚選び捨てる、

セルリは今料理長のフィールドにいる、

よって手札を捨てるのは僕」

「優殿が手札を捨てる?」

やはりデメリットまみれのカードござるね」

「油断こいていられるのも今のうちですよ、

僕はセルリの効果で暗黒界の魔神レインを捨てる、

そして！墓地に送られたレインの効果発動!

相手によって捨てられた時、墓地から特殊召喚する」

僕の決闘盤の墓地が黒く光りだした、

デュエルディスク

そして黒い煙が出てきて、部屋天井に集まり渦を作り出す、渦の中心から雷が降ってきた、

そして天から光臨する巨大な悪魔、

そう、口であらわすなら…『悪魔』としか言い表せないモンスター

それが！

「暗黒界の魔神レイン（ATK2500）特殊召喚！」

大きな角、大きな翼、そして全てを貫きそうな巨大な槍

「く、だがクイーンズ・ナイトの攻撃は続行！」

「え、無理だよ？」

レインがこの効果で特殊召喚に成功したとき、相手のモンスターを全て破壊する」

「な、なんですと！！！」

「暗黒地獄炎！」

レインが持っている槍を地面に突き刺すと

料理長のフィールドが青い炎に包まれモンスターが全て燃え尽きた。

「く、拙者はカードを2枚セットし、ターンエンドでござる」

料理長 LP2000 伏せカード×2

手札 0枚

「僕のターン、ドロ―

暗黒界の魔神レインでダイレクトアタック!

暗黒地獄斬!」

「ぐべりゃ〜」

料理長LP2000

LPO

「負けたでござる」

なんだ、伏せカードはブラフか。

「流石優殿、お強いですが、あの理奈どのに勝っただけのことではある」

「亮には負けたけどね」

「お!そろそろ昼食の支度をせねば、

優殿、申し訳ないが手伝ってくださいるか?」

「うん、いいよ!」

「今日の昼食はスパゲッティでござる」

「僕スパゲッティ好きだよ!」

「それは良かった」

夜  
食堂

夕方ぐらいに亮が帰ってきた、  
そして今は亮と一緒に夜ごはんを食べていると

「料理長、あなた今日優様と一緒に決闘デュエルしたり食事の準備をしたの



ですか！」

その言葉に亮が反応した。

「理奈、今なんて言った？」

「え、ですから優様と料理長が今日2人つきりで、  
食事の準備したり、決闘デュエルしたらしいですよ」

「ほ、本当か料理長？」

「もちろんでござる」

何故か自信満々に答える料理長。

「（う、うらやましい…）」 「（まあ私は昨日優様と2人つきり  
でしたし）」

「優、明日は俺と一緒に決闘デュエルしたり、遊んだり、お話しはなししよう！」

「それ、昨日も聞いたよ……………」

第15話 「理奈殿、これでおあいこでござる」b y似非侍（後書き）

よし、これで丸藤家全員のデュエルが終わった、次は亮VS理奈や亮VS料理長とかしてみようかな？

（作者のどうでもいい話コーナー）

やめるといつときながら、結局続くこのコーナー、いつまでたってもこのコーナーのネタは尽きない、きっとどうでもいいことばかりしてるからですよね。

第5回「どうでもいい話その5」

ティッシュペーパーってどうして2枚1組になってるんだろう。

お！今回はこれ以上になくどうでもいい話でした、てかここに書かなくてよくな、今の。

と、いうわけで今回でこのコーナーは本当に終了、丁度5回で区切りいいし。

第16話 「僕が寝ている間に何やってんの!」b y 優(前書き)

最近感想が増えてきて『ウツヒヨウウウ!』な気分のなすびです。

今回ネタバレすると………いやしません、言ったらつまらないので、では本編スタートオオオ!!!

第16話 「僕が寝ている間に何やってんの！」 by 優

僕が亮の家に来て早くも一週間がたった、

この家の人はみんないい人ばかりで僕もすぐなじめた、

この一週間でこの家の探検もしたため、

半分ぐらいはどこにどの部屋があるのかわかった。

「と言うより、一週間たって半分だけか……… どんだけ広いんだよ」

ふあああ、何か今日は暑いというより暖かいな、少しお昼ねしようかな？

「おやすみ………」



2回戦『1回戦の勝者VS私、東雲理奈』でよろしいですね」

さりげなく自分に有利な対戦表にしている理奈だが俺には関係ない、俺はただ全力で相手を倒すだけだ。

「構わない、さっさと始めよう、

昼食に優の食事にだけ入れた時間差で発動する睡眠薬の効果はそんなに持たない、

早くしないと優が起きてしまう」

「そうでござる」

「そうですね、では『第1回、優様をデートに誘う権利争奪戦』第1回戦を開始します！」

俺と料理長は決闘場に立つ、  
そして決闘盤の電源を入れ

「「決闘!!!」」

「先攻はいただくござる、ドロー！」

切り込み隊長（ATK1200）を召喚」

傷だらけの戦士……たしか厄介な効果だったな。

「切り込み隊長の効果発動、このカードの召喚に成功した時手札のレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する、

拙者はクイーンズ・ナイト（ATK1500）を特殊召喚する」

切り込み隊長に続いて金髪の女性騎士が出て来た。

「カードを1枚セットし、ターンエンドでござる」

料理長 LP4000 切り込み隊長 ATK1200 クイーン  
ズ・ナイト ATK1500

手札 3枚 伏せカード×1

「俺のターン、ドロー、相手フィールド上にのみモンスターがいる時このカードは特殊召喚できる、

サイバー・ドラゴン（ATK2100）を特殊召喚」

俺のフェイバリットモンスターサイバー・ドラゴン、  
今回もよろしく頼む。

「サイバー・ドラゴンで切り込み隊長に攻撃！  
エヴォリューション・バースト！」

料理長 LP4000 LP3100

「く

（だがクイーンズ・ナイトは守れた、次のターンキングス・ナイトを出せば）」

「カードを3枚セットし、ターンエンド」

亮 LP4000 サイバー・ドラゴン ATK2100  
手札 2枚 伏せカード×3

「拙者のターンでござる、ドロー！  
魔法カード、増援を発動！

デッキよりレベル4以下の戦士族モンスター1体を手札に加える、拙者はデッキよりキングス・ナイトを手札に加えるでござる」

キングス・ナイトか…料理長お得意の戦術だったな。

「拙者は増援で手札に加えたキングス・ナイト（ATK1600）を召喚するでござる、

そして、キング、クイーンがそろったとき、

デッキからジャックス・ナイト（ATK1900）を特殊召喚するでござる」

料理長の場にそろった絵札の三銃士、

だが最高攻撃力のジャックス・ナイトでも攻撃力は1900、

俺の場のサイバー・ドラゴンの攻撃力は2100には200足りない、

だが何も考えず三銃士をそろえた料理長ではあるまい。

「装備魔法、稲妻の剣をジャックス・ナイトに装備、

装備モンスターの攻撃力は800ポイントアップする！」

ジャックス・ナイト    ATK1900                    ATK2700

「攻撃力が上がったジャックス・ナイトでサイバー・ドラゴンを攻撃！

稲妻斬り！」

電気を纏った剣でサイバー・ドラゴンが2つに割れる。

亮LP4000                    LP3400



「そしてクイーン、キングでこゝ」

「<sup>トランプ</sup>畏発動、時の機械タイムマシン、  
戦闘で破壊されたモンスターを特殊召喚する、  
サイバー・ドラゴンを特殊召喚」

黒い機械が現れ、その中からサイバー・ドラゴンが出てきた。

「く、ならクイーンズ・ナイトを守備表示に変更し、ターンエンド  
でじゅる」

料理長 LP3100 クイーンズ・ナイトDEF1600

手札 2枚 キングス・ナイトATK1600

ジャックス・ナイトATK2700（稲妻の剣

装備）

伏せカード×1

「俺のターン、ドロウ、

魔法カード、融合を発動、場と手札のサイバー・ドラゴンを融合、  
サイバー・ツイン・ドラゴン（ATK2800）を特殊召喚」

首が2つあるサイバー・ドラゴン、たまにサイバーエンドより使  
えると思うときがあるのだがそれは気のせいだろうか……

「バトルフェイズ、サイバー・ツイン・ドラゴンでジャックス・ナ  
イトを攻撃、

エヴォリューション・ツイン・バースト！」

料理長LP3100 LP3000

「サイバー・ツイン・ドラゴンは2回攻撃が可能、サイバー・ツイン・ドラゴンでキングス・ナイトを攻撃、エヴォリューション・ツイン・バースト！」

料理長LP3000      LP1800

「ぐ、畏発動、ダメージ・コンデンサー、手札を1枚捨て発動でき、

今自分が受けたダメージ以下の攻撃力を持つモンスター1体をデッキから特殊召喚するでござる！

拙者は攻撃力1200のコマンド・ナイトを特殊召喚」

コマンド・ナイト、戦士族モンスターを強化する実質攻撃力1600のモンスター。

「甘いな、速攻魔法発動、融合解除、

サイバー・ツイン・ドラゴンの融合を解除する、

そして融合が解除されたサイバー・ドラゴンは攻撃が可能！

サイバー・ドラゴンでクイーンズ・ナイトを攻撃！」

「さらにサイバー・ドラゴンでコマンド・ナイトを攻撃！」

「ぐ、モンスターが1ターンで全滅……………」

流石でござる」

料理長LP1800      LP1300

「サイバー・エスパー（DEF1800）を守備表示で召喚し、ターンエンド」

亮 LP3400 サイバー・ドラゴン×2 ATK2100  
手札 1枚 伏せカード×1

「拙者のターンドロ―」

「その瞬間サイバー・エスパーの効果発動、  
相手がドロ―したカードを確認できる」

サイバー・エスパーが超音波のようなものを出すと、  
俺の目の前にソリット・ビジョンでカードが現れた。

「（ふむ、魔法再生か、しかもコストが要らないほう、厄介だ）」

「男性に手札を見られるのって…………ドキドキするでいける」

「だまれ料理長、お前のストライクゾーンはどんだけ広いだ」

「男性なら誰で」

「さっさとしろ、エンドでいいのか？」

「いや、だめでいける」

「それとも貴様の人生のターンを終了させてもいいんだぞ」

「亮殿…怒ってるでいけるか…………」

「いいからやれ…………」

「わ、わかったでいける」

「（この状況を見る限り圧倒的に亮様が有利、さてどうするのです料理長、これは優様とのデートをかけた戦い、そう簡単に負ける料理長ではないはず……………」

「亮殿、悪いがアンチカードを使わせてもらおう！」

「何…？」

「魔法カード発動、酸の嵐、

フィールド全体の機械族モンスター全てを破壊する」

「何！？」

フィールド全体に雨が降り、サイバー・ドラゴンたちはみな錆びて破壊されてしまった。

「更に戦士の生還を発動、墓地の戦士族モンスター1体を手札に戻す、

クイーンズ・ナイトを手札に戻し、クイーンズナイト（ATK1500）を召喚、

そしてクイーンズ・ナイトで亮殿にダイレクトアタック！クイーンスラッシュ！」

「くっ……………」

亮LP3400                      LP1900

「（凄い！あの状況から一気に逆転ですか、

やりますね料理長………）」

「ターンエンドでいじめる」

料理長LP1300 クイーンズ・ナイトATK1500

手札 1枚 伏せカード×1

「俺のターン、ドロー、

プロト・サイバー・ドラゴン（DEF600）を召喚、ターンエンド」

亮 LP1900 プロト・サイバー・ドラゴンDEF600

手札 1枚 伏せカード×1

「拙者のターン、ドロー！

拙者は魔法再生を発動、墓地の魔法カード1枚を手札に加える、酸の嵐を手札に、そして酸の嵐を発動、

再びフィールド全体の機械族モンスターをすべて破壊する」

「ぐぐぐ………」

錆びるプロト・サイバー・ドラゴン、かなりまずい状況だ………

「クイーンズ・ナイトでダイレクトアタック！」

「……………くそ」

亮LP1900 LP400

「ターンエンドでいじめる」

料理長LP1300 クイーンズ・ナイトATK1500  
手札 2枚 伏せカード×1

や、やばい、かなりまずい、アンチカードを使われたとはいえ、料理長にここまで追い詰められるとは、丸藤亮一生の不覚……

「お、俺のターンドロ、サイバー・フェニックス（DEF1600）を守備表示で召喚、ターンエンド……」

亮 LP600 サイバー・フェニックスDEF1600  
手札 1枚 伏せカード×1

「行くでござるよー！ドロー！！」

拙者はブレイドナイト（ATK1600）を召喚そして  
ミストボディをブレイドナイトに装備、

これでブレイドナイトは戦闘で破壊されないでござる、  
そして自分の手札が1枚以下の時ブレイドナイトの攻撃力は40  
0上がる」

装備モンスターに戦闘耐性を持たせるカード、ますます厄介にな  
ってきた…

「ブレイドナイトでサイバー・フェニックスを攻撃！」

剣で首を切られ破壊されるサイバー・フェニックス。

「サイバー・フェニックスが破壊されたとき、カードを1枚ドロ  
する」

「だがこれで終わりでござる、  
クイーンズ・ナイトでダイレクト・アタック！」

剣を構え、こっちに向かってくるクイーンズナイト

「（つ、ついに拙者が亮殿を！）」

「（亮様が料理長に負けるなんて……………）」

「<sup>トラップ</sup>畏発動、ガードブロック、

戦闘ダメージを1度0にしその後デツキを1枚ドロウする」

「く、流石亮殿、しぶとい……………」

「（はあ、はあ、あ、危なかった……………）」

「仕方ない、だがまだ拙者のほうが有利！ターンエンドでござる」

料理長LP1300 クイーンズ・ナイトATK1500 ブレイ

ドナイトATK1600（ミストボディ装備）

手札 1枚 伏せカード×1

「俺のターン…………サイバー・ヴァリー（DEF0）を召喚、ターン  
終了」

亮 LP400 サイバー・ヴァリーDEF0

手札 3枚 伏せカード×0

「拙者のターン、ドロウ！」

「拙者は荒野の女戦士（ATK1100）を召喚」

「（金髪で西部劇のような格好をした女性、

カウボーイでしたっけ？いや女性だからカウガールですね、

それにしてもクイーンズ・ナイトにコマンド・ナイト、

そして今出た荒野の女戦士、妙に金髪の女性が多いですね、

料理長の好みでしょうか……………

あ！私も金髪！いや…まさか、ね、料理長、ゲイだし…

イヤ…もしかすると……………）」

「バトルフェイズ、荒野の女戦士でサイバー・ヴァリーを攻撃！」

「まだまだ！サイバー・ヴァリーの効果！

このカードをゲームから除外しバトルフェイズを終了させる、

更にその後デッキからカードを1枚ドローする」

「し、しぶとい！悪足掻きもいい加減にしてほしいでござる、

見苦しいでござるよ」

「く（た、確かにこの状況は危ない、俺は、負けるのか…料理長に）

「ターンエンド、次こそとどめをさすでござる」

料理長 LP1300 クイーンズ・ナイトATK1500

手札 1枚 ブレイドナイトATK2000（ミストボデー

イ装備）

荒野の女戦士ATK1100

伏せカード×1





「俺のターン！ドロオオ！！」

魔法カード強欲な壺を発動、デッキからカードを2枚ドロウする！  
相手フィールドにのみモンスターがいるとき

サイバー・ドラゴン（ATK2100）を特殊召喚する！」

俺のデッキの最後のサイバー・ドラゴン。

「そして魔法カード、融合を発動！」

それにチェインしてサイバネティック・フュージョン・サポート！  
ライフを半分払い、場、手札、墓地のカードを除外し  
融合素材にする！」

亮LP400            LP200

「場のサイバー・ドラゴンと墓地の2体を除外し、

サイバー・エンド・ドラゴン（ATK4000）を融合召喚！！

！」

「甘い！畏<sup>トラップ</sup>発動！挟み撃ち！」

自分のモンスター2体と相手のモンスター1体を墓地に送る」

クイーンズ・ナイトと荒野の女戦士がサイバー・エンドの左右に

回りこみ

左右同時に攻撃した、流石のサイバー・エンドも2対1じゃ  
部が悪かったのか爆発してしまった。

「これで拙者のか            」

「まだだああ！！！！」

「何!？」

「魔法カード発動!オーバー・ロード・フュージョン!!  
場と墓地の融合素材を除外して、  
機械族、闇属性の融合モンスターを融合召喚するううう!!!  
墓地のプロト・サイバー、サイバー・エスパー、サイバー・フェ  
ニックス、  
サイバー・エンドを除外し、現れる」

俺の墓地のモンスターが融合し、  
火花を散らし爆発した、そしてその爆発の後に現れた  
穴がたくさん空いた銀色の物質、  
その物質の穴から融合素材と同じ4つサイバー・ドラゴンの  
首が出てくる。

「キメラテック・オーバー・ドラゴン(ATK3200)!!!!!!」

「こんなカード、始めてみたでござる」

「キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃いい!  
エヴォリューション・リザルト・バーストオオオオ!!」

料理長LP1300 LP100

「だがライフは1000のこるでござる、  
しかもブレイドナイトはミストボディを装備しているため破壊さ  
れない!

(次のターンブレイドナイトを守備にし、時間を稼ぎ  
酸の嵐のようなカードを引けば拙者の勝ち……………)」

「はあん、残念だったな…」

キメラテック・オーバー・ドラゴンは4回攻撃できる」

「な、なんですと!」

「(よ、4回攻撃ですって!?)」

「キメラテック・オーバー・ドラゴン!

エヴォリューション・リザルト・バースト!!!!

サンレンダアアアア!!!!!!」

「ぐびよあああああ!!!」

料理長LP100 LP0

「ぐ、ま、負け……た」

「フッフ、これだ、この力だ!

さあ待っている優、今行くぞ…ハハハハハハハ」

「りよ、亮…様…?」

「んん?

そうか、次は理奈か、

さあ、理奈、決闘だあ………」

「(ち、違う、亮様はこんな目をしていない、

それとも我を忘れて、いや、どちらにせよ今ここで亮様を  
決闘で倒さないと優様の貞操がリアルに危ない!!!)」

「<sup>デュエル</sup>決闘だああ、理奈あ」

「は、はい、分かりました……………」

「<sup>デュエル</sup>決闘！！」

第16話 「僕が寝ている間に何やってんの！」 b y 優（後書き）

今回アンチまで使って勝とうとしたのに原作入ってないのにヘル可した亮に負けた料理長、残念すぎ

次回は『理奈VSヘル？カイザー』理奈が勝たないと優が危ない！！！！

そして自分の小説を読み返してみるとなんか話の展開がBFまでとは行きませんが意外と速いことに気づきました、よって感想などにこの物語の質問などを書いてくれれば可能な限り返します、なにかあったら言ってください、何でもいいので。

僕のプライベートのことも少しなら答えます（使用デッキや好きな食べ物位なら）

うーん少し眠い、一昨日パソコンに触れられず、昨日ほとんど書いてなかったため今日がんばりすぎました、これ投稿したら寝ます、おやすみなさい。

第17話 「ジユウサンレンダアアアア！！！」 b y ヘル？カイザー（前書き

意外と長い17話、今回はR15指定しなかったことに少し後悔する話です。

お盆休み、部活も無ければ何処にも行かないなすびです（別にいっか）

第17話 「ジユウサンレンダアアアア！！！」 b y ヘル？カイザー

「……………うう、むにや…？  
ふう、少し寝ちゃった……………  
……………みんなは……………探しに行こうかな」

東雲理奈 視点

「「決闘<sup>デュエル</sup>！！」」

「私のターン、ドロー、  
永続魔法神の居城 ヴァルハラを発動、  
自分フィールドにモンスターがいない時手札の天使族モンスター  
を特殊召喚できる！」

マスター・ヒュペリオン（ATK2700）を特殊召喚！」

炎の翼を持つ代行者の長、

1ターン目から攻撃力2700のモンスター、どうします亮様。



「更にコーリング・ノヴァ（DEF800）を守備表示で召喚しターンエンド」

理奈LP4000マスター・ヒュペリオンATK2700コーリング・ノヴァDEF800

手札 3枚 伏せカード×0 神の居城 ヴァルハラ

「フッフ……俺のターン、ドロオオー！」

マジック魔法カード、融合を発動、手札のサイバー・ドラゴン（ATK2100）

3体を融合！サイバー・エンド・ドラゴン（ATK4000）を融合召喚！！」

1ターン目から、サイバー・エンド！？  
亮様いきなり本気ですか！？

「バトル・フェイズ！」

サイバー・エンド・ドラゴンでマスター・ヒュペリオンを攻撃！  
エターナル・エヴォリューション・バースト！！！」

サイバー・エンドの口からそれぞれ光線が吐き出される、  
く、私の場にサイバー・エンドの攻撃を防ぐカードは無い…………

理奈LP4000 LP2700

「まだだああ！速攻魔法、融合解除！」

サイバー・エンドの融合を解除しサイバー・ドラゴン3体を特殊召喚！」

サイバー・エンドの融合が解け、3体のサイバー・ドラゴンになる、

厄介なサイバー・エンドがいなくなったのは良かったのですが、融合が解除されたサイバー・ドラゴンたちはこのターン攻撃が可能……………

「サイバー・ドラゴンでコーリング・ノヴァを攻撃、エヴォリューション・バースト！」

破壊されるコーリング・ノヴァ、けれどコーリング・ノヴァはリクルートモンスター、  
ただじゃやられません！

「コーリング・ノヴァが戦闘で破壊されたとき、デッキから攻撃力1500以下の天使族、光属性のモンスターを特殊召喚する！」

私はデッキからもう1体コーリング・ノヴァを守備表示で特殊召喚」

「なら2体目のサイバー・ドラゴンでコーリング・ノヴァを攻撃！エヴォリューション・バースト2発目え！」

「くう、ですがコーリング・ノヴァが戦闘破壊されたため、最後のコーリング・ノヴァを守備表示で特殊召喚！」

「3体目のサイバー・ドラゴンでコーリング・ノヴァを攻撃！エヴォリューション・バースト3発目ええええ！！！」

「く、だがデッキからシャインエンジェル（DEF800）を特殊召喚します」

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

亮 LP4000 サイバー・ドラゴン×2 ATK2100  
手札 0枚 伏せカード×1

「私のターンドロ、よし。」

私の墓地に天使族モンスターが4体のみのとき、  
このカードは特殊召喚できる！！

大天使クリスティア（ATK2800）光臨！！」

出ました、私の切り札、クリスティアがいる限り  
お互いにモンスターの特殊召喚は出来ない、

よって亮様のデッキをこれで半分封じた様なもんです！（どうだー）

「さらにこの効果でクリスティアが特殊召喚に成功したとき  
墓地の天使族1体を手札に戻す、ヒュペリオンを手札に  
バトルフェイズ！クリスティアでサイバー・ドラゴンを攻撃！  
シャイン・スパーク！！」

「馬鹿め！畏発動！フローラル・シールド、  
相手の攻撃を1度無効にしデッキからカードを1枚ドロウする」

クリスティアの攻撃を花びらの盾でガードする亮様、  
でも機械族にこんな植物族みたいなカード使うなんて  
いや、どんなデッキにも使えそうなカードですが……………

「勝つためなら使えるカードは全て使う！！」

心が読まれてる！？

「仕方ありません、カードを2枚伏せターンエンド」

理奈 LP2700 大天使クリスティア ATK2800 シャ  
インエンジェル DEF800

手札 2枚 神の居城 ヴアルハラ 伏せカード×2

「勝つためなら……いや！優のためなら何でもしよう！！  
俺のターン、ドロー！！魔法カード、エヴォリユーション・バ  
ストを発動」

「サイバー・ドラゴンと同じ攻撃名のカード!？」

「エヴォリユーション・バーストは俺の場にサイバー・ドラゴンが  
いるとき

場のカードを1枚破壊する、クリスティアを破壊！」

「しかし、クリスティアは破壊されるとき、  
墓地ではなく、デッキの1番上に戻る」

「強欲な壺を発動、デッキからカードを2枚ドロウそして、  
サイバー・ヴァリー（ATK0）を召喚」

あれは確か、自らを除外してバトルフェイズを強制に終了させる  
カードのはず……

「魔法カード、機械複製術を発動攻撃力500以下の機械族を選択  
して

デッキから特殊召喚する、もう1体サイバー・ヴァリーを特殊召  
喚」

もう1体出てくるサイバー・ヴァリー、これで亮様のモンスターゾーンは

すべて埋められた、まさか！キメラテック！？

「サイバー・ヴァリーの効果発動、

このカードと他のカード1枚をゲームから除外しデッキを2枚引く、

サイバー・ヴァリーとサイバー・ドラゴン、それぞれ2枚ずつ除外し

デッキからカードを4枚ドロー！！」

「よ、4枚も……………」

（俺がサイバー流を卒業したときに師範からサイバー・エンドと一緒にもらった

3枚のカード、このカードたちはサイバー流のリスpektデュエルとは

あまりにもかけ離れているため滅多なことが無い限り使うなど言われている

だが俺は、勝つためにこのカードたちを使う！）

魔法カード、エマジエンシー・サイバーを発動、

デッキからレベル8以上のサイバーと名の付くカードを手札に加える」

レベル8！？亮様のデッキのサイバーは融合モンスターを除くとレベル7のサイバー・レーザー・ドラゴンが最高のはず！？

「デッキからサイバー・エルタニンを手札に」

エルタニン？こんなカード、いままで亮様使ってたでしょうか？  
でも亮様の場にはサイバー・ドラゴン1体、  
しかもこのターン通常召喚は行っています。

「更に手札から魔法発動、ボーン・フロム・ドラゴニス、  
場と墓地のサイバーと名の付くカード全てを除外し、  
手札のレベル10のサイバーと名の付くカードを特殊召喚する、  
場のサイバー・ドラゴンを除外し、サイバー・エルタニン（AT  
K？）を特殊召喚！」

巨大なサイバー・ドラゴンの顔、その周りに5つの竜型ユニット  
が、

ファ、ファンネル……………？

「サイバー・エルタニンが特殊召喚に成功したときゲームから除外  
されている

サイバーと名の付くカードだけ相手モンスターを破壊する、

俺の墓地に除外されているサイバーと名の付くカードは5枚よって  
理奈の全てのモンスターを破壊！

コンステレイション・シュージュー！！」

エルタニンの5つのドラゴンユニットが口からレーザーをはく  
キュ、キュベレイ？

「エルタニンの攻撃力は除外されてるサイバーと名の付くモンス  
ター×500となる、  
よって攻撃力は2500」

サイバー・エルタニン    ATK？                    ATK2500

「エルタニンで理奈にダイレクトアタック！  
ドラコニス・アセンション！！」

エルタニンの周りの小さなドラゴンの顔……もうファンネルでいいですよ、

ファンネルが私の周りを囲んで一斉にレーザーを出したって怖っ  
！！

「きゃああー！！」

理奈 LP 2700      LP 200

「カードを2枚伏せターンエンド」

亮 LP 4000   サイバー・エルタニン ATK 2500  
手札 0枚   伏せカード×2

「わ、私のターン、伏せカードオープンサイクロン、  
亮様の右の伏せカードを破壊します」

「……………勝手にしろ」

破壊したカードはトラップ・ジャマー、  
バトルフェイズに発動した罠カードの発動を無効にして破壊する  
効果。

「私は手札の代行者をゲームから除外します、  
マスター・ヒュペリオン（ATK 2700）を特殊召喚します、  
ヒュペリオンの効果、墓地の天使族、光属性のモンスターを除外し  
相手のカード1枚を破壊する、シャインエンジェルを除外し

サイバー・エルタニンを破壊します」

ヒュペリオンが出した赤色の球体がエルタニンに当り、爆発した。

「ふふふ、はははははははは！！！」

「な、何をそんなに笑っているのですか」

「貴様がこのターン引いたカードはクリスティア、

そしてお前の墓地の天使族は4枚だった、

しかしお前がヒュペリオンの効果を発動したため墓地の天使族は3体、

クリスティアを特殊召喚してからヒュペリオンの効果を使っていれば

貴様の勝だったんだがな」

「！（た、確かに……………く、でも今亮様の場にモンスターは0、失敗を後悔してはいけませんわ）

マスター・ヒュペリオンでダイレクトアタック！」

「ふふふ、畏発動、パワー・ウォール、

俺が受ける戦闘ダメージをデッキのカードを1枚墓地の送るたびに

100減らす、俺は23枚墓地に送るよってダメージは400！

！」

亮LP4000           3600

「23枚デッキから墓地に送ったら…亮様のデッキは           」

「1枚だ！貴様を倒すのにはあと1ターンで十分！」



「なんという自信、  
それはそうと亮様パワー・ウォールなんてカード、持ってました  
っけ？」

「それは袖に隠      サイドデッキに入れていたのだ！  
俺のターン、ドロー！！魔法カードマジックオーバー・ロード・フュー  
ジョンを発動、

墓地のサイバー・ドラゴンを含む13枚の機械族を除外し  
キメラテック・オーバー・ドラゴン（ATK10400）！！！！  
融合召喚！！！！」

やはり出ましたねキメラテック、しかし今度の首の数は13個  
料理長のときの倍以上ですね、どうやら融合素材の数と首の数が  
関係しているようです

って！こんなこと言ってる場合じゃないです！

「キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃！  
エヴォリューション・リザルト・バースト！  
ジユウサンレンダアアアアアアアアアアア！！！！！！」

「きゃあああああああ」

理奈LP200      LPO

「はははははははは、はははははははははははは、  
俺が1番だ！さあ優待っている、グハハハハハ」

「（もうあれは、亮殿じゃ、無いでござる、  
優殿と暮らして性欲が押さえきれずに飢えた若者でござる）」

「う、このままでは優様が……………」

と、思っていると決闘場の扉デュエルフィールドが開いて中から小柄な少年が入ってきました

って！優様！これ以上に無く悪いタイミング！！

『ガチャ』

「あれ、みんなどうしたの、みんなが集まって？  
料理長は寝てるし……………」

雷堂優 視点

「あれ、みんなどうしたの、みんなが集まって？  
料理長は寝てるし……………」

みんなを探して決闘場デュエルフィールドに来てみると  
床で倒れている料理長、肩膝を付けている理奈さん、高笑いして  
いる亮、

何かわけのわからない3人がそこにいた。

「優……………よくきたな……………グハハ、グハハハハ」

亮が僕のことを見つけると亮は僕に向かって走ってきた。

「優殿！速くここから逃げるでござる！！」

「え？何、料理ちよ」

っっておわあ！走ってきた亮が僕を押し倒してきた！え、な、何で！？

「優：優、はあ、はあ……」

「りよ、亮、何！よだれ出てる、汚い」

「何を言う、俺はまだ綺麗な体だぞ………さあ、優、速く始めないか？」

「な、何を！もう何に言ってるのかわかんないよ！？」

「優う、優う、優！」

「だからなにー！！」

「というか服脱がさないでよー！！」

亮は僕を押し倒した後、服のボタンを乱暴に外していったってやめてー！！

「理奈殿、このままでは優殿が危ない、ここは協力して」

「料理長と協力するのはかなり不本意ですが優様のピンチです、行きますよー！」

「了解でござるー！」

「や、や、やめてー！」

あんっ、く、くすぐりたい、うっ」

あうう、服のボタンを全て外されると次はズボンを脱がされそうになる、

もうこれ冗談じゃすまないよ！

「あああ、うう、や、やめ……………いやっ」

「目を覚ますでござる亮殿！」

「落ち着いてください亮様」

「うがああー！」

は、はあ、気づくと料理長と理奈さんが2人で亮を取り押さええていた、

亮は『うがああ』とわけのわからない叫びを上げている、

理奈さんと料理長は2人で抑えているのに苦しそうだ。

「りよ、亮殿、速く逃げ　　やっぱり亮殿の気を失わせてほしいでござる」

「え？え？どうやって」

もう、色々ありすぎて何が何だか分からなくなってきたよあ！！

「はなせええ！！はなせええ！！」

「い、いいから、今は鈍器のようなもので亮様の頭を思いっきり叩いてくださいー！」

「えええ、なんで！」

亮が暴れて服を脱がそうとするし、理奈さんと料理長は亮をおさえてるし、鈍器で亮の頭を叩けとか言っし、もつてっすねば……………」

「は、はやく、とにかく速く亮殿を気絶させてください」

え、気絶させる、鈍器、亮の頭、  
そしてふと左手を見たとき視線に入った白い機械……………」

「もつとつにでもなれええ！！！」

僕は左手の決闘盤デュエルディスクを亮の頭目掛けて振りかざす。

『ガコッ』 『バタン』

何か嫌な音になったと思うと亮が床に倒れる。

「はあ、はあ、はあ、りよ、亮…？」

「はあ、助かりました、ありがとうございます優様」

「え？あ！うん、何か助かったのは僕みただけど……………」

「ふう、一見落着いでっせぬ」

「えっと、まだ何がどうなってるのかわからないのだけど……………」

「そうですね、では順を追って説明していきます」

理奈さんはここで一体何があったのか分かりやすく説明してくれました。

ふむふむ、僕の許可を取らずに僕と1日一緒に過ごす権利をかけた戦いがあった、亮がリスクトする心を捨ててまで勝とうとしたそして亮の精力？が抑えきれなくなり僕を襲ってきたと……ふむそれって

「僕の許可も取らずに何やってるのみんな!!」

「いやー、それがなんかその場の空気でもいい拙者の言葉がどンドン発展していつの間にかこうゆうルールになってしまった、みたいな」

「みたいな、じゃないよ！僕死に掛けたよ一瞬！なにが起こっているのかわからないまま亮に服脱がされそうになったよ！」

「いやー、面目ない」

「申し訳ございません」

「それと、もしかして亮って、世に言うゲ」

「ち、違いますよ！亮様はそんな性癖の持ち主ではないです！優様が可愛いから亮様は弟のようなかんじで優様のことを愛しているのです」

「それってブラ」

「違います、亮様はそんな性癖の持ち主ではないです！」

しかし亮様はとにかく優様を愛しているのです、変な意味ではないです」

「あ、うん、自分で言うのもなんだけど、多分そうだと思うよ、じゃなかったら亮は僕を捨ててくれなかったし、亮といてこんなにたのしい気持になることも無かったと思う、だから僕も亮のことが好き！あ！もちろん友達みたいな好きで！」

「わかっていきますよ」

にっこり笑う理奈さん

「そうゆう意味では理奈さんも好きだよ！」

「え／＼／ゆ、優様／＼／」

少し照れる理奈さん。

「優殿！拙者は？」

「……………」

「なんで黙るでござるか！？」

拙者は優殿のこと恋愛的な意味で愛してい

「デュエルの神様ごめんなさい！」

『ゴボツ』

「ぐぎょあ

急に床に倒れる料理長、どうしたのかなー？

「あはは、とりあいず今は亮様を亮様の部屋に連れて行かないと

「うん、そうだね、あと料理長は？」

「置いていきましょう」

「賛成」

てなやり取りをしながら僕と理奈さんは亮を部屋に運んでいった。

「それと優様」

「ん？何？理奈さん」

「もし亮様の意識が戻ったら」



丸藤亮 視点  
亮の部屋

「……………ん、こ、こは」

気が付くと俺の上には知ってる天井が、  
まあそうか、ここ俺の部屋だし。

「あ、目が覚めた、亮」

俺の隣には優が椅子に座っていた

「ゆ、優　　うぐっ、あ、頭が痛い、俺は何を……………」

「えー、なんか廊下に倒れてたからここまで運んできたんだよ」

「え？そ、そうか、」

「なんだか、これ以上に無く悪い夢を見ていた気分だ……」

「まあまあ、いいじゃん！夢なんだし、それとさ亮！ついい？」

「何だ？」

「あのを、明日、僕と！ロゲーとして」

「……………え」

「！」

数十分前

ある居候とメイドの会話

「亮、意外と重いね」

「そうですね、料理長がいたら少しは楽になったのですが…」

「ぐ、すみません」

「いや、優様を責めているわけではありません、それと優様？」

「ん、何？理奈さん」

「もし亮様の意識が戻ったら、

優様、亮様とデートしてもらってもいいですか？」

「な、なんで!？」

「いや、優様には許可を取っていなかったとはいえ  
そうゆうルールで決闘デュエルしましたので」

「……うーん、」

うん！別にいいよ」

「よかった、亮様もきつと喜びます」

「そうかなー？」

「そうです」

第17話 「ジユウサンレンダアアアア！！！」 b y ヘル？カイザー（後書き

ボーン・フロム・ドラゴニスはトラップカードですが手札の都合  
上魔法カードにしました。

それとサイバー・エルタニンは漫画効果です。

ここだけの話、僕、遊戯王GXは再放送のやつしか見ていないた  
め最終回まで見ていません、まあいいか、そんなことよりGXの再  
放送が終わるころ、この小説まだ続いているでしょうか？途中で終わ  
らないようにがんばります！！

第18話 「もそもそ……そもそも」 bY埋奈&料理長(前書き)

今回は短いですが、あと自分で自分の小説を読むとなぜか、話の展開が早く感じてしまいます、みなさんはどう思いますか？

第18話 「もそもそ……そもそも」 b y 理奈 & 料理長

数時間前

丸藤亮 視点

今日は早く起きたから1人で食堂まで行った、  
優は置いてきてしまったが優ももう1人でこれるだろう。

「亮殿、亮殿！」

「……………」

「亮殿、少し相談が」

「……………」

「亮殿！無視しないでほしいでござる！」

「USA」  
「おっさんおっさんがあつた」

「なぜ略した!？」

さっきから俺の隣から料理長が話しかけてくる、  
無視しようとしたが、しつこいため仕方なく返事をしてやった。

「朝からうるさいな料理長何のようだ？」

「あ、あれ、亮殿今日冷たい……」

それはそうと拙者、亮殿に言いたいことが」

「何だ？」

「拙者、優殿のことが好きすぎて、夜も眠れないのでござる、だから優殿と一緒に夜を過ごしたいのでござる、でその許可を……………」

「俺がその許可を出すと思っているのか!?!」

「お待ちください亮様」

「理奈までなんだ!?!」

「料理長の言うことにも一理あります」

「何が一理あるんだ」

「私も優様と一緒に夜を越したいです!」

「お前たち今日はどうした!?!」



「はあ、つまり優と長い間一緒にいるせいで性欲が押さえきれなくなって我慢限界と……」

「はい」

はもって返事する理奈と料理長。

「そんで色々話あつた結果決闘デュエルでの勝者が優と寝る…  
までは行かないがデートする権利をかけた戦いをノリで行ってしまつたというわけです」

「そういや、そんな感じだつたでござるな」

「何か、その日の朝はテンションが異様に高くなって、  
優様の昼食に睡眠薬をいれる所まで行ってしまいましたね」

「なんだかんだ言っ  
て亮殿が1番性欲溜  
まっ  
てでござるな」

「  
そうですねえ」

「  
そうですなあ」

第18話 「もそもそ……そもそも」by理奈&料理長(後書き)

うん、流石に短すぎた、17話書いた後にすぐ書いたため集中力もほとんど残ってなかったため文もメチャクチャです、次はちゃんとしたのを書きたいなあ〜

第19話 「遠足の前日って緊張して眠れないよね」b y 優(前書き)

最近短い、そして雑だ、どうしよう夏ばてかな書く速さを遅くして中身をもっとしっかりさせようかな？

第19話 「遠足の前日って緊張して眠れないよね」b y 優

丸藤亮 視点

「あー、どうすればいいんだ！デート、デート！

俺が優とデート！もう死んでもいいかもしれない、

いや、死んでたまるか優とデートするまで死んでたまるか！」

あー、どうすれば、何か知らんが俺は優とデートすることになった。

デートって言ったらあれだろ、とりあはず最後はホテルに行くあれだろ、

そこまでの過程は知らないが最終的ホテルに行く奴だろ！

「お、落ち着け、まずは深呼吸だ、

スーハースーハ……ふう、落ち着いた」

ここだけの話、俺はデートと言うものを1度もしたことがない、

17年間決闘ばつかしてきた男だ、こんな時こうゆうことに慣れている友人がいれば……

くそ、吹雪め、話したくないときに限っていつも電話かけてくるのに、

必要なときに限って行方不明って何だよ！

特待生だからって調子こいてるから行方不明なんかになんだよ！

「お、落ち着け、俺としたことがつい熱くなってしまった……」

落ち着くんだ、順番に考えて行こう……

まずは服だ、何を着ていくか、どうする、

いつも理奈に適当に買ってきてもらっていたから何を着ていくか  
……  
くそ、吹雪が読んでいたファッション誌1度だけでも読んどけば  
良かった……

「そしてデートって何するんだ、  
ホテル意外に何かするの？」

「はあ、はあ、まあ、こんなもんだろ、  
早く明日に備えて寝よう」

パジャマに着替え布団の中に入る…

.....  
.....  
.....

「.....」

.....

「.....眠れない.....」

なんだ！なぜ眠れない、き、緊張してるからか！

『チツク、タツク、チツク、タツク、チツク、タツク、チツク、タツク、』

気づくと時間はもう2時半、早く寝ないと寝坊する！

俺は布団に入り目を瞑る、早く、寝ないと！

次の日

「あ、亮おはよう」

「お、おはよう……」

結局デュエルアカデミアの制服で来てしまった、  
いいよな別に、俺いつもこの格好で過ごしてるし……  
優の格好は普通のTシャツに半ズボン、まあそうたる  
優の服は全部昔翔が使っていた奴のお下がりだし。

「じゃあ、行こうか」

「あ、ああ……」

俺と優は2人で家をでて町へ行く。



第19話 「遠足の前日って緊張して眠れないよね」b y 優（後書き）

色々な遊戯王小説読んでたら時間が無くなった……………  
次はもっと長くて中身もしっかりしてる話を書きます！

あといつの間にか総合評価が100超えてた、やったー！。

第20話 「初デート、相手は同性ですが……………」 b Y 優（前書き）

ついに優と亮のデート、そしていつになったら原作に入るんだ！  
まさかこのまま入らない方向に……………

第20話 「初デート、相手は同性ですが……………」 b Y 優

「とりあはず何処行く?」

現在亮とデート?中、亮が何か少しふらふらしてて目の下にクマがあるけど亮は『大丈夫だ』としか言わないし、どうしたのかな?

「ああ、何処行こうか?」

「僕が聞いているんだけど……………」

「そ、そうだったな、俺は…何処でもいいぞ」

「そう」

何処でもいいって何処に行けばいいんだろう、

僕転生前1度もデートなんてしたこと無かったから……………」

- 1、映画館
- 2、カラオケ
- 3、ホテル

うん、3は無しとして、僕の思っているデートと言ったらそれくらいかな?

うーん、どうしよう……………」

ん?あれはゲームセンター、そう言えば暫く行ってなかったな!

「じゃあさ、亮ゲームセンターに行こうよ!」

「ゲームセンター、ああいぞ  
（ゲームセンター、中学の時吹雪に誘われて1度だけ行ったことがあつたな）」

「じゃあ決まり、早く入ろうよ！」

僕と亮はゲームセンターの中に入る。

「何からしようかな？」

「どれがいい、亮？」

「な、なんでもいいぞ」

（あのときは吹雪に誘われ勝手に色々やらされたから何が何だかよく分からん

やはり最近の若者はゲームセンターとかよく行くのか……………」

「じゃああれしようよー！」

いたって何処にでもあるシューティングゲーム、  
出てくる敵をひたすら銃で撃ち続けるゲーム。

「どうやってやるんだ？」

「もしかして亮ってゲームセンター行ったこと無い？」

「まあそんな感じだ」

「えっとねえ、簡単に説明するとこの銃で画面に出てきた敵を撃って

弾が無くなったらリロードする所を引くんだよ、  
とりあはず1回やってみようよ」

「そうだな」

「あと2人で200円ね、僕お金持って無いから亮が払って」

「（まあそれ位はいいだろう、パツクぐらいしか買わないからお金は結構余ってるし）」

亮が200円を入れてゲームが始まる。

「亮始まるよ！」

「わかった…これで撃って、こっちがりロード……………」

ゲームが始まり、画面の中にターゲットが現れる、それを亮と僕は撃ち続ける。

10分後

しばらくプレイしていると亮のHPが0になって画面にはGAME OVERの文字が浮かぶ。

「あー、終わっちゃった」

「意外とおもしろかったな」

「よかった！」

本当にそう思ってるのかな？

亮基本無表情だし実際どんなこと思ってるのかわかんないな

その後色々なゲームをしていった、

亮は太鼓を叩いて達人を目指すゲームにはまって1時間ぐらいやつてた。

「亮そろそろ、他のゲームしようよ」

「ん？そうだな、すっかりはまって軽く10回はやってしまった」

「次は何しようか？」

「優、あのピンクの機械は何だ？」

「あー、あれはプリクラといって、

写真を撮る機械だよ、入ってみる？」

「よし、行ってみよう！」

亮すっかりゲームセンターにはまってる、

あんま表情変わってないけど楽しんでるのが分かる。

「まずここにお金入れて」

「（400円、意外と高いな、たかが写真ごときに）」

「設定はどつする？」

「よくわからいから適当にやっといてくれ」

「うん、分かった！」

えーと、こつして、背景は

「よしできた！」

「亮そろそろ撮るよ！」

「わかった」

『ジジジジジジジジジ…パシヤ』

「もう、撮れたのか？」

「うん、もう1枚とるよ！」

次は何かポーズして」

「ポ、ポーズ!？」

その後2枚写真をとって2枚目は亮がテンパってよくわからないポーズで

3枚目は僕の提案で『ガツチャ』のポーズで撮った。

撮れた写真は2人で半分にした、デート？の形に残る思い出が出  
来たから良かったと僕は思う。

「ゲームセンターは意外と面白かった、  
いつかまた行こうか、優」

「うん、そうだね！」

そうして僕たちはゲームセンターを出た。

「次は何処行こうか？」

ゲームセンターを出て少し歩いた所にある公園まで来た。

「どこでもいいぞ……」

うーん、だから何処でもいいが1番難しいんだよな。  
ん？あれは！

「じゃあさ、亮クレープ食べよう！」

クレープ屋の屋台を見つけた、  
最近クレープ食べて無かったな、転生前はよく友達と行ったな。



「ク、クレイプ？」

不思議そうに言う亮。

「もしかして、食べたこと無い？」

「あ、ああすまない、デュエルアカデミアは全寮制で中学のときから基本的学校から出たことが無いんだ……」

世間知らず？お坊ちゃま？何か違うな……

学校での生活が長すぎてそうゆう所にあまり行ったことが無いのか……

小学生じゃ買い食いやゲームセンターは行かないと思うし……

「じゃあ初体験だね、初クレイプ！食べてみようよ！」

「わかった」

クレイプ屋の屋台まで行く。

「すみませーん！」

「うーい、いらっしやい！」

中から少し太った中年のおっちゃんが出てきた、おそらく店長だと思っ。

「ク、クレ何とか？」

「クレープね、おじさんクレープください!」

「いいぜ!君たち兄弟?

兄さんはイケメンだし弟くんは可愛いし、  
きっと父ちゃんのイケメンポイントは160超えてるんじゃないか  
い?」

「1ポイントどれくらいだよ……………」

「好きなを選びな」

おじさんがメニューをくれる。  
どれにしようかな?

「どれにする、亮?」

「そうだな……………店長」

少し考えて決まったのか亮が店長に声をかける。

「なんだい?兄さんの方?」

「皮だけのヤツは無いのか?」

「何言ってるの亮!??」

亮が何か変なこと言い出した、なぜ皮だけ?

「もしくは、具なしのヤツ」

それ皮だけと同じだよね！

「えー、作ればあるけど、いいのかいそれで……………」

困った顔をする店長。

「構わん」

「…じゃあ、弟くんは……………」

「イチゴのクレープで」

注文すると店長は手馴れた手つきでクレープを作ってく、

店長は皮を作った後『本当にこれでいいのか？』

みたいな顔をして亮に皮だけ（具なしとも言つ）クレープを渡す。

「イチゴクレープが450円、クレープの皮は……………1000円でいいよ……………」

凄く変な顔をする店長…なんかごめんなさい、  
とりあはず謝るときます……………

クレープをもらって丁度誰も座っていないベンチがあったからそこで座ってクレープを食べることにする。

「（味が無い……………）」（「（でしょうね）」

「（おいしいな、おっとクリームがこぼれる！…ふう、危ない）」

「優、頬にクリームがついてるぞ」

そう言って亮は指でクリームを取ってくれる。

「食べるか？」

亮がクリームが付いた指を僕に向けてくる。

「うん」

どっせって取るう、手はクレープでふさがってるし………口でい  
つか。

『ぱく』

クリームが付いた亮の指を直接指でなめる。

「ありがとう、亮」

「（ゆ、優の唾液、  
これなめたら間接キスに………いやそれはだめだろ、  
なんかそうしたら男として、いや人間としてアウトな気がする）」

「どっせしたの、亮？」

亮が自分の指を見て難しい顔をしている。

「いや、この手は一生洗わないと誓っただけだ」

「それは汚いと思う………」

クレープを食べ終わり、少し休憩しようということになった。

「そろそろ行く？りよ」

「……………」

「うっ？」

寝てた…目の下にクマがあつたし寝不足なのかな？  
じゃあ僕も寝ようかな、クレープ食べて眠くなっちゃった。

「少し、肩借ります……………」

僕は亮の肩によっかかって目を閉じる……………」

そしていつの間にか意識が落ちていった……………」

丸藤亮 視点

「……………う、

寝てた…のか？」

折角優とデートのデートで寝てしまうなんて、  
一生の不覚う……………

「優、すまな……………」

なんだ優も寝てたのか」

優は寝息を立てて眠っていた。

「すう、すう」

相変わらず可愛い寝顔だ、  
綺麗な肌、柔らかそうな頬、長いまつ毛、小さな唇、  
女子みたいな容姿だな………！  
まさか優は女だったのか！

いや、それは無い、多分無い、この前優と一緒に風呂入ったし……

……  
しかも俺幼い男の子しか興味ないし……今の台詞はNGだったな……

……  
結構寝てしまって時間も遅くなってきたから帰るか。

優、起こすのも悪いしおんぶしてくか。

優を背中に乗せるとあることに気が付いた

「そういえば、優と初めて会ったのも、この公園だったな」

優にであつてもう1週間ぐらい経つのか……優が来て色々あつたな、  
これからも、よろしくな……優。

俺は優を連れて家に向かって歩き始めた。

「あ、ホテル行くの忘れた…」



第20話 「初デート、相手は同性ですが……………」 b Y 優（後書き）

亮が具なしクレープを頼んだのはTFで亮の好物が具なしパンだからです、きつとクレープも具なしが好きなんだろうと思ひまして。

そろそろこの物語も原作に突入します、と言うことは、  
サンダーさんやガツチャさんや空気君もでるということですね！

第21話 「机の角に小指ぶつけたでいじめる」bY料理長(前書き)

今回は亮と優のデュエルです。

## 第21話 「机の角に小指ぶつけたでいじめる」b y料理長

亮とのデートから早くも1週間がたった、つまり僕がこの家に来て2週間、

僕が転生して16日が経った、つまり今日は8月16日、8月も後半、

9月になったらデュエルアカデミアの新学期で亮がいなくなる、あれ……………そしたら僕、どうしよう……………

「ん、どうした優、廊下の真ん中で？」

「亮！9月から亮がいなくなたら僕どうしようー！」

「？何を言っているんだ優、お前も来るんだぞ、デュエルアカデミアに」

「……………え？」

「えー！僕、デュエルアカデミアを受験するの！！」

「そうだけど、嫌か？」

「いや、嫌とかそういう問題じゃなくて初めて知ったよそれ！  
願書とか出してないし、学校説明会とか受験勉強とか！」

「それなら心配ない、願書なら俺が先日出してきたし、  
学校のパンフレットだってある、受験勉強なら俺が教えてやる、  
しかも優15歳だろ、なら丁度デュエルアカデミアの高等部から  
入れるし」

「いや、そうだけど、」

もう色々ごっちゃんになってわけわかんないよー！！！！」

状況把握中

「はあ、はあ、

つまり僕は来週デュエルアカデミアを受験して  
受ければ9月から亮と同じデュエルアカデミア高等部に通つと

「ああ」

「そして願書とか色々受けるのに必要なものは全て亮がそろえてく  
れて

僕は筆記テストと実技テストを受けるだけと…」

「そうゆうことだ」

「もし落ちたら？」

「そのときは普通の勉強をして、冬に普通の高校を受けてもらう」

「そ、そうだよね…」

だったら、頑張つて勉強してデュエルアカデミアに通おう！  
転生までして普通の高校行ったら転生した意味無いよね、  
それに亮と同じ高校に行きたいし。

「わかった！僕デュエルアカデミアに行くよ！」

「いい返事だ、じゃあ早速勉強だ」

「う、うん大丈夫かな……………」

そうして僕はデュエルアカデミアに行くために残りの夏休みを勉強に使うのであった。

8月18日

亮の部屋

「ふうー、つかれたー」

亮の部屋で勉強中、国語はカードの漢字を書いたりカード効果を書いたり、

数学はLPの計算関係、社会はデュエルモンスターの歴史についてetc

「優は読み込み速いな、もう半分は終わった」

「でもつかれたよぉ」

「じゃあ休憩がてらに決闘デュエルでもするか？」

「うん！やろう！」

受験勉強は大変だけど亮に分かりやすく教えてもらえるし、亮と同じ学校に行きたいから頑張って勉強する！

デュエルフィールド  
決闘場

「亮と決闘するの久しぶりだね」

「そうだな、だが相手が優でも全力で行かせてもらっぞ」

「全力じゃないとつまらないよ」

「そうだな……………」

僕と亮はお互いに向かい合って決闘盤デュエルディスクを構えた。

「「決闘！！」」

「先攻は優に譲ろう」

「じゃあ遠慮無く」

だから譲ったんじゃないかって亮のデッキが後攻に向いてるだけだよ  
ね。

「僕のターン、ドロー、」

暗黒界の騎士ズール（ATK1800）と召喚、  
カードを1枚セット、ターンエンド」



鎧をきた悪魔、攻撃力は暗黒界の王ブロン様に匹敵するぞ！  
(某ポケモン博士的な感じ)

優 LP4000 暗黒界の騎士ズール ATK1800

手札 4枚 伏せカード×1

「俺のターンドロ、相手フィールドにのみモンスターが存在するとき

サイバー・ドラゴン(ATK2100)は特殊召喚できる」

亮が後攻をとると必ず1ターン目から出してくるモンスター、まさか仕込んで……いや、亮に限ってそんな事無いよ、きっと神に与えられた反則引き(チートドロ)だよ、まてよ……田中にそんな力あるわけないだろ！  
と言うことは才能か。

「更にサイバー・フェニックス(ATK1200)を召喚」

サイバー・ドラゴンが機械の蛇だとしたら、  
サイバー・フェニックスは機械の鳥だね。

ドラゴン 蛇

フェニックス 鳥

「……………」

「どつした優この顔は！」

「いや、なんでも無い、少し考え事してただけ」

「それならいいんだが……」

まあいい、バトルフェイズ、

サイバー・ドラゴンでズールを攻撃！

エヴォリユーション・バースト！」

優 LP4000 LP3700

サイバー・フェニックスの効果は

攻撃表示のとき機械族1体を対象にする魔法罠を無効にし破壊する、

だから僕の伏せカード炸裂装甲が使えない、

正確には使っても意味が無いだけだ。

「続けてサイバー・フェニックスで優にダイレクトアタック」

優 LP3700 LP2500

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

亮 LP4000 サイバー・ドラゴン ATK2100

手札 3枚 サイバー・フェニックス ATK1200

伏せカード×1

1ターン目から結構ライフもってかれたな、

でも決闘は<sup>デュエル</sup>まだ始まったばかり、まだまだ逆転のチャンスはある。

「僕のターン、ドロー！」

魔法カード、手札抹殺を発動、

お互いのプレイヤーは手札を全て捨て、

捨てた枚数カードを引く、  
僕の手札は4枚、だから4枚ドロー」

「俺は3枚ドロー」

「そして今墓地に送ったグラファアの効果発動、  
このカードが手札から捨てられたときフィールド上のカード1枚を  
破壊する、亮の伏せカードを破壊」

破壊したカードはサイバネティク・ヒドウン・テクノロジー、  
効果は……知らない、多分マイナーカードだろう、  
サイバー・ドラゴン関係と言うことは分かるが。

「暗黒界の狩人ブラウ（ATK1400）を召喚、  
そしてブラウを手札に戻し墓地の暗黒界の龍神グラファア（ATK2  
700）  
を特殊召喚する」

いつものように床から這い出てくるグラファア、  
やっぱり顔は近くで見ると怖い……

「グラファアでサイバー・ドラゴンを攻撃！ダークネスフレイム！」

「……………」

亮 LP4000                      LP3400

「ターンエンド」

優 LP2500                      暗黒界の龍神グラファア ATK2700

手札 4枚 伏せカード×1

「俺のターンドロー、

魔法カード融合賢者を発動、デッキから融合を手札に加える、  
そして今手札に加えた融合を発動、それにチェインし

サイバネティック・フュージョン・サポートを発動、

ライフを半分払い場、墓地の融合素材を除外して

融合モンスターを融合召喚する」

亮 LP3400 LP1700

「墓地のサイバー・ドラゴン3体を除外し、

サイバー・エンド・ドラゴン（ATK4000）を特殊召喚！」

亮の場に現れる巨大な首を3つ持つサイバー・ドラゴン、

やばいな、リミッター解除なんか使われたら僕の負けだぞ……

「サイバー・エンド・ドラゴンでグラフィアに攻撃！

エターナル・エヴォリューション・バースト！」

「く………やばい」

優 LP2500 LP1200

「サイバー・フェニックスでとどめ！」

「まだまだ！手札のバトルフェーダー（DEF0）を特殊召喚！」

サイバー・フェニックスが口から火を吐きだしたが、

僕のフィールドに振り子のようなモンスターが現れ攻撃を防いだ。

「何？」

「バトルフェーダーはダイレクトアタックされるとき、手札から特殊召喚でき、バトルフェイズを強制終了させる」

「粘るな……カードを2枚セットしターンエンド」

亮 LP1700 サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000

手札 0枚 サイバー・フェニックス ATK1200

伏せカード×2

「ぼ、僕のターンドロ、

カードを1枚伏せ、ターンエンド」

優 LP1200 バトルフェーダー DEF0

手札 3枚 伏せカード×3

「俺のターン、ドロ」

サイバー・フェニックスでバトルフェーダーを攻撃」

さつきはカッコ良くサイバー・フェニックスの攻撃を防いだのに今回は呆気無くやられてしまった、もうちょっと粘ってよ、ま、守備力0に言っても無駄な話か……

「これでトドメだサイバー・エンド・ドラゴンで攻撃！

エターナル・エヴォリユーション・バースト！」

「まだ粘らせてもらいます、ガードブロック、

戦闘ダメージを1回0にしデッキからカード1枚ドロする」

「粘るな」

「最後まで諦めないよ」

「そうか、なら精々粘ってみろ」

「言われなくとも」

亮 LP1700 サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000

手札 1枚 サイバー・フェニックス ATK1200

伏せカード×2

「僕のターンドロ、

罨カード罰則金を発動、自分は手札を2枚捨てる、

手札の暗黒界の武神ゴールド（ATK2300）、軍神シルバ（ATK2300）

捨てる、そしてゴールド、シルバは手札から捨てられた時

特殊召喚される」

でた暗黒界の最強コンビ！力のゴールドと知恵のシルバと言った所だろうか。

「一見使えないと思うカードも、

他のカードと組あわせることで力を十分に発揮することが出来る、か」

「そのとおり！

そして更に魔法カード、ユニオンアタックを発動、

僕のモンスターの攻撃力を1つにする」

暗黒界の武神ゴールドATK2300 + 暗黒界の軍神シルバATK  
2300 = 4600

「攻撃力4600!？」

「行くよ!ゴールド&シルバでサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃!  
ダークネスコンビアタック!」

ゴールドとシルバのナイスコンビネーションで2体1だが  
サイバー・エンドを破壊する。

「ユニオンアタックを使ったターン、  
戦闘ダメージを与えることは出来ない、ターンエンド」

優 LP1200 暗黒界の武神ゴールドATK2300 暗黒界の  
軍神シルバATK2300

手札 1枚 伏せカード×1

「ふ、面白くなってきた、

俺のターンドロー!!」

サイバー・ヴァリー（ATK0）を召喚、  
サイバー・ヴァリーの効果、このカードと他のカードを  
ゲームから除外しデッキからカードを2枚ドロウ」

2枚ドロウか、常にデステニードローしてるような人が  
2枚引いたら勝ちルートに入ったようなもんだよ!

「<sup>トランプ</sup>畏カードオープン、ボーン・フロム・ドラゴニス、  
場、墓地のサイバーと名の付くカード全てを除外し

手札のレベル10のサイバーと名の付いたモンスターを特殊召喚できる」

「レベル10サイバー!？」

「サイバー・エルタニン（ATK?）を特殊召喚!」

亮の場に現れた機械で出来た大きな竜の頭、  
そしてその周りに飛んでいる6体の小さい竜の頭。

「サイバー・エルタニンの攻撃力はゲームから除外されているサイバーと名の付くカード×500となる、ゲームから除外されているサイバーと名の付いたモンスターは6体、

よって攻撃力は3000」

攻撃力3000か、強いな、でも僕のモンスターの攻撃力は2300

攻撃されてもライフは500残る。

しかも始めのターンにセットした炸裂装甲がある、しかも今亮の場にサイバー・フェニックスはいない。

「サイバー・エルタニンが特殊召喚に成功したとき、ゲームから除外されているサイバーと名の付いたカードだけ相手モンスターを破壊する!コンステレーション・シュージュ!」

「ぐわああ」

く、僕のモンスターが一掃された、



でもまだ炸裂装甲がある。

「これでトドメだサイバー・エルタニンで優にダイレクトアタック」

僕の横前後ろ、上に小さなドラゴンの頭が……………これぞ四面楚歌だが、僕には最後の切り札が！

「<sup>トラップ</sup> 罠発動！<sup>リアクティブジャマー</sup> 炸裂装甲！攻撃してきたモンスターを破壊する！」

僕の周りに光る板がはられる、これに触れると爆発する仕組みになっっているらしい。

「もう、サイバー・エルタニンの攻撃は止まらないよ！残念だったね亮」

「それはどうか…<sup>トラップ</sup> 罠発動、<sup>トラップ</sup> ジャマー、バトルフェイズに発動した罠の発動を無効にし破壊する！」

「ななな、なんだってー！！」

僕の周りの光る板がどんどん無くなって、

僕の周りには僕の方を向いている6つの竜の頭、  
ば、万事休す……………か。

「ドラコニス・アセンション！！」

「うわあああ！…！」

優LP1200      LPO

「また負けた……………」

「そう気を落とすな、優」

「うん、そうだよね、次また頑張ればいいよね」

「次も俺が勝つがな」

「それはやってみないとわかんないよ」

「そうだったな、

さあ、勉強の続きだ、夕飯までまだ時間があるし」

「うん、わかった！」

そうして僕と亮は決闘場を後にする。

デュエルフィールド

第21話 「机の角に小指ぶつけたでござる」by料理長(後書き)

この話、前書き後書きはかなりハイスピードで書いたため、誤字  
多いかのせい大です、あつたら感想にお願いします、いそげいそげ  
! ! ! !

サイバー・エルタニンは漫画の亮が使うカードですがこっちの亮  
は使うことにします、漫画でも亮サイバー・ドラゴン使ってたし、  
いいんじゃないかな？

第22話 「人差し指を見るたびなめるか悩む」bYカイザー（前書き）

さっさと原作に入るか、日常をもっ少しやるか悩む……

第22話 「人差し指を見るたびなめるか悩む」byカイザー

「ふう〜、つかれた〜」

今日亮は用事があるらしく、家にいない、だから今は亮がくれた問題集をひたすら解いている最中、でも疲れたから少し休憩。

「それにしても暑い……………」

丸藤家、お金持ちなんだけど地球温暖化がなんだかんだでクーラー使ってないんだよね、現代の若者である僕にはちとキツイです……………」

「汗かいたしお風呂に入ろうかな？」

今日亮はいない、理奈さんは仕事、料理長は多分剣道の練習、そして僕は試験勉強、勉強ばっかじゃ疲れるし休憩がてらにお風呂に入ろうと思う。

## 風呂場

「おつふるー、おつふるー、おつ、おふるー」

何かよくわかんない歌を歌いながら、

服を脱ぐ、亮の家の風呂は大きいからいつも入るときテンションが上がる。

服を脱ぎ終わりタオル1枚持って風呂場に行く、風呂場には誰もいない、と言うことは貸しきりだああ！

「はあくいい湯だ」

この風呂に1人で入るのはもしかして初めてかもしれない、いつも亮と入ってたし、僕が入ろうとすると亮が

「お、俺も一緒に入るぞ、優に拒否権はない」といつも言い張るから仕方なく一緒に入ってる。

「1人で入るのが怖いのかな？」

意外と亮は怖がりなのかもしれない、

理奈さんは女性だし、料理長は臭いから僕と入ってるのか：なるほど、亮も可愛い所があるんだな。

「はあくそれにしてもいい湯だ、これ温泉じゃないかな？」

それは流石に無いか、温泉掘り起こすの凄く大変って聞いたし。

『ピチャ』

「！」

ん、何か今音が、誰かいる？

まさか……………幽霊、ま、まさかね、

僕はおそろおそろ音が鳴った方を見てみると……………

入浴中の理奈さんがいた。

「きゃあああああああ！！！！！！」

大きな悲鳴を上げる

僕が

「優様、この台詞は本来女性が出す台詞です」

「い、ごめんなさい、理奈さん！

は、入ってるとは思わなくて、わ、わざとじゃないんです！

僕出て行きますから！！！！」

僕は急いで湯船から上がろうとすると

「待ってください優様！」

理奈さんに手を掴まれた。

「は、はなしてください！」

「だから待ってください優様」

「お願い！放してっ！」

「台詞だけ聞いたら優様が痴漢に襲われる光景ですね」

「きゃああああ！助けてえええ！！」

「だから落ち着いてください優様！」

僕の必死の抵抗もむなしく、僕は理奈さんに捕まってしまった、  
ううう、何されるんだらう僕。

「い、ごめんなさい理奈さん」

いつも上に上げて止めている理奈さんの髪は下ろしてあって、



化粧もされていない、あれ？理奈さん化粧しないほうが可愛いかもしれない、

いつもは綺麗な理奈さんだけど可愛い理奈さんもいいかもしれないってそんなこと言ってる場合じゃないよ！

「だから、私は怒ってませんよ」

「え？」

ドムコト???

「別に私は優様に裸を見られたからって特に気にしません」

「……………どうして…?」

「だって優様子供ですし」

あー、そうゆうことかなら納得

「 じゃないよ！

僕これでも15だよ！中学3年生だよ！」

「大丈夫、優様あそこは子供ですし」

「どうゆう問題!？」

って何処見てるんですか!！」

「まあまあ」

「もう僕出ます!！」

そう言って湯船から上がるつとすると

「だから待ってください、優様」

再び理奈さんに引つ張られた。

僕の抵抗はむなしく再び捕まる僕、  
今は僕が逃げられないように僕の後ろから抱きつくようにつかま  
れた。

「なんで逃げるのですか優様？」

「だって僕男子だし、理奈さん女性だし」

しかも僕が逃げないように強く掴んでるせいか、  
む、胸があたってます……チキンの僕には、正直そんなに喜べな  
い……

「いいじゃないですかたまには、  
しかも優様には色々お話したいことがあるんです」

「どつゆつことっ」

や、やばい頭がくらくらしてきた。

「いや、私1日中仕事があつて優様とあまり話さないじゃないです  
か、

だからこうやって2人きりになる機会が少なくて、  
私買出し以外で外出しないし、友達もいないから、

優様と仲良くなりたいし……………」

そう言って少し暗い顔をする理奈さん。

「あ、そうゆうことが」

やっと理由がわかった、理奈さん、僕と仲良くなりたくて。

「そうゆうことならいいよ、今日はいっぱいお話しよう」

「いいんですか？」

「いいもなにも、もう僕と理奈さんは友達じゃん！」

「とも……………だち、私と優様が……………」

「そう！だからなんか話そう！」

「そうですね、優様」

そんなかなで結構長い時間お風呂で理奈さんと話しをした、  
内容はどうでもいい世間話、でも友達との会話って大体そんなも  
んだよね。

「あれ？もうこんな時間！  
そろそろ出ないと」

やばい亮が帰ってくる前に問題集が終わらない！

「す、すいません優様、私、つい楽しくてこんなに長く話しちゃっ  
て」

「いや、いいよ僕も楽しかったし、またお話したり決闘デュエルしよね理奈  
さん！」

「はい！分かりました優様！」

「じゃあ僕上がるね」

「私はもう少し入ってます」

「そう」

僕はお風呂場を出て自分の部屋に戻る。  
少しよぼせたかも？頭がくらくらする。

「（優様とお風呂に入って、お話して、今日は最高の1日ですわ）」

坂本（料理） 武蔵（長） 視点

「おっふるっ、おっふるっ、おっ、おっふるっ」

剣道の練習していい汗かいたでござる、だから夕食を作る前にひとつぶろ浴びるでござる。

着物を脱ぎ腰の日本刀を取り、タオル1枚持って浴場の扉を開けると

入浴中の理奈殿がいた

「きゃあああああ!!!!」

「り、理奈殿なぜここに!?!」

「料理長にエツチ!変態!水虫!加齢臭!ガチホモ!ガチホモ!ガチホモ!」

「り、理奈殿これは事故」

おわああ!桶が拙者の顔面に飛んできて

「ぐぼああ!!」

お、お花畑がみ、え……………

第22話 「人差し指を見るたびなめるか悩む」b yカイザー（後書き）

今回の話、描写がかなり少なかったです、やっぱりこつゆつのは向いてないのかな？

明日はVジャンプの発売日、僕は毎月買ってますよ。

第23話 「何時になったら原作に突入するんだ」by優（前書き）

今回は作者の妄想盛りたくさん、今回は筆記試験の話です。

今日はVジャンプの発売日、噂だと昨日から発売してるらしいけど………



## 第23話 「何時になったら原作に突入するんだ」 b Y 優

8月21日

8月21日、それはVジャンプの発売日、  
は、今は関係ない、そんなことより今日は  
デュエアカデミア、筆記試験の入試日、  
入試の範囲は大体覚えた、後はテストを受けるだけ。

理奈さんに車で試験会場まで送ってもらい、  
ここはもうデュエルアカデミアの筆記試験の受験会場、  
僕と同じ受験生と思われる人達はみんな緊張してるみたいだ、  
僕もとっても緊張してる、落ち着け……………

暫くして試験管の人が2人来て問題用紙と回答用紙を配ってくれ  
た、

そして試験の時間がきて試験管の合図とともに試験が開始される。

問題用紙を開くと、1ページからもう問題がびっしりと、  
えーと……………

Q1 リアクティブアーマーを漢字で書け。

あ、それなら簡単、僕デッキに入れてるし、たしか…

A 炸裂装甲

Q2 ブルーアイズホワイトドラゴンを漢字で書け。

ブルーアイズ…社長の嫁か。

A 青眼の白竜

あれ？竜だっけ？龍だっけ？

Q3 ブルーアイズホワイトドラゴンの技名と同じ魔法カードを漢字で書け。

あれでしょ、粉碎、玉砕、大喝采でしょ、あれ違うなそれは社長の名言だ。

A 滅びの爆発旋風

こんなんでいいだろ、自信は無いけど……

そんなかなで漢字は終わり次は知識問題。

Q17 ブラッド・ヴォルスの召喚に奈落の落とし穴が発動された、それにチェーンし収縮をブラッド・ヴォルスに使った場合奈落の落とし穴の効果は発動する？

えーと、どっちだろう？

A 攻撃力が1500以下になったため奈落の落とし穴は不発になる。

これでいいでしょ。

そして次は作文制作か、めんどくさそう……

Q49 全国の子供達に夢と希望を与える海馬コーポレーションの社長海馬瀬戸の美しさを200字以上800字以内で書け。

なんでだよ！なんでこんな問題だしたんだよ！

たしかデュエルアカデミアって海馬コーポレーションが作ったんだよね、

だからってこの問題はないだろ、

でも白紙はやばいために適当に書いておく。

Q50 現在凡骨デュエリストとして有名城之内克也を漢字1文字で表せ。

なんでだよ！なんで漢字1文字、屑か糞か、書いていいのかそれ、てか社長どんだけ城野内のこと嫌いなんだよ！

自分のことは200以上で書かせてるのに城之内は1文字かよ！

A 運

これでいいっしょ、あいつ運つよいし。

そして古文にだって国語は終わった、

次は数学

Q51 ガガギゴに突進を使った場合、ガガギゴの攻撃力を答える。

ガガギゴの攻撃力は1850それに突進の700を足せば…

A 2550

Q78 自分のライフは2100、相手がブラックホールを使ってきて、自分は神の宣告を使った、それにチェーンし相手はカウンターカウンターを発動、更にそれにチェーンし自分は盗賊の七つ道具を発動、結果ブラックホールの発動は成功するか？そして自分の今のライフは？

えーと、ややこしいな…えーと2100を÷2して更に1000引くから…

A ブラックホールの発動は無効になる。

自分のライフは50

自分のライフぎりぎりじゃん！

そんなかなで次は歴史

Q112 第1回バトルシティ第3位の決闘者を答える。

それなら簡単だ、転生する前に妹とTUTAYAから借りたDV  
Dで見たことある、

そっぴい妹…元気にしてるかなあ…

はっ！そんなことより今はテストに集中しないと。

A 城之内克也

しかし、なぜ3位？1位じゃないのか？  
確か社長はバトルシティ第3位、あーなるほど…

A 海馬瀬戸

これでいいでしょ。

次は理科、内容は全略

その次は英語、内容は前略

最後は特別問題おまけみたいなやつ。

Q251 貴方が好きなアイドルカードは？次の3つから選べ。

- 1、ブラック・マジシャン・ガール
- 2、青眼の白龍
- 3、雷電娘々

なぜブルーアイズが……

でもこっちは

A 1

多分僕がいた世界の男決闘者はみんな1を選ぶだろう、僕も男子だし。

Q252 貴方の直感試しますか？

1、

2、

3、

あれ、これどっかで見たぞ！

Q252、現在子供達に人気テレビアニメ『正義の味方かイバーマン』の必殺技は？

A 知らんがな

Q253 海馬コーポレーションの年商は？

A 知らんがな

Q254 海馬瀬戸が好きな食べ物？

A 知らんがな

Q255 海馬社長の

A 知らんがな

Q256 か

A ・ 知らんがな

Q

えーい！全部知らんがな！

後全海馬のプライベートのことじゃねーか！

Q277の海馬社長はブルーアイズのどの部分が好き？

とか知らないよ！

『キーン、コーン、カーン、コーン』

あ、試験終わった…

「では鉛筆を置いて回答用紙だけを後ろから裏向きにして前に渡すように、

ついでにQ251からQ300はやらなくても結構だ、

時間が余った人の時間つぶしのようなものだから、

では解散、試験結果は今日中に郵送で送る、

実技試験は8月22日詳しいことは結果と一緒に送られてくる

プリントかデュエルアカデミアのHPホームページを見てくれ、じゃあ」

262

そう言っただけで教室から出て行く試験管の人、なんだ最後の問題はやらなくてよかったのか、

そうだよな普通、よく見ると問題用紙にも書いてあるし……

「僕も帰るか………」

他の受験生もどんどん帰ってるし。

僕も試験会場から出ることにする。

試験会場の外の出ると、理奈さんの車があった、  
ずっとまっててくれたのかな？

「ただいま理奈さん」

「お帰りなさいませ優様」

「もしかしてずっとここで待ってたの？」

「はい」

「ヒマじゃなかった？」

「大丈夫です、頭の中でずっと楽しいこと考えてましたから」

「……………」

「なぜ黙るのですか!？」

「いや、何でもないよ、速く家に帰ろう」

「わ、わかりました」

なんか納得しない様子だったけど理奈さんは車を走らせてくれた。



家に着いた頃にはもうデュエルアカデミアの筆記試験の結果が返ってきた、

仕事が早いなデュエルアカデミア。

「亮、受験番号30番だって！これって数字が少ない方が結果がいいんでしょ」

「ああ、優は30番か頑張ったな」

亮は僕の頭を撫でてくれる、

亮に頭を撫でられると何故か気持ちよくなる。

「明日は実技試験、頑張れよ、

実技試験は俺も行くぞ、新入生の実力も見たいし」

「うん！頑張るよ！」

第23話 「何時になったら原作に突入するんだ」by優（後書き）

あー、気づくとこの1週間家から出てない、体力落ちたな……  
取り戻さないと部活で死ぬ……

今回は明日投稿、それと現在1週間連続投稿達成中だぜ！

第24話 「僕の勝率は50%主人公とは思えない勝率の低さ」by優（前書き

今回は実技試験、優はデュエルアカデミアに無事受かるのか！？  
え？まだ試験じゃない！？原作キャラとデュエル？しかも相手は  
エアーマンらしい。

第24話 「僕の勝率は50%主人公とは思えない勝率の低さ」by優

8月22日それはデュエルアカデミアの実技試験の日、  
理奈さんの車で亮と一緒に試験会場まで来た。

「俺は受験生じゃないから向こうから入る、  
優はあの入り口からはいるんだ」

「はい、亮僕の決闘<sup>デュエル</sup>見ててね！」

「ああ、見るよ」

「亮と別れ、受験生が入る入り口まで来た。」

「あの一、僕受験生なんですけど……」

入り口の前にいるグラサンの男性に話しかける。

「そつか、なら受験票を見せてくれ」

「はい」

受験票をグラサンに見せる。

「うん、本物だね、入っていいよ、  
試験開始は9時から、今はまだ8時40分だから  
それまでにデッキの調整、トイレ等をすませておくんだよ」

「わ、わかりました」

はあく緊張するでも大丈夫、自分の決闘が出来ればきつと勝てるはず。

廊下を暫く歩くとその先に受験会場があつた、結構早く来たつもりんだけど10人ぐらいもう来てる人がいてデッキの調整したり、携帯弄つてたり、友達と会話してる、さて、僕も適当な所に座るか。

「よっこいしよ……」

誰もいない列のベンチに座る。

「君受験生か？」

「ん？」

急に隣から声をかけられた、誰だろう？

「はい？」

声がするほうを向くと、灰色の学ランを着た男の人がいた。

「だから、君も受験生なのかと聞いているんだ」

「ああ！そつだよ、じゃなかったらここにきてないし」

「ははは、それもそつだ、俺の名は三沢大地、よろしく」

三沢、大地：あ！原作キャラの、あの影が薄くて有名な三沢君か、

学ランだから気づかなかった。

「僕は雷堂優、こちらこそよろしく」

そう言い僕と三沢君は軽く握手をする。

「どうだ？受かりそうか、試験」

「うーん、どうだろう？絶対受かるっていう自信はないけど  
多分、大丈夫かなって、筆記試験も結構良かったし」

「ほー、そうか、ところで優、

君はなんで私服で来ているんだ、普通は中学の制服でくるだろ？」

「えー、それは……」

しまった！そこんとこ忘れてた……僕転生者だからこの世界で中  
学通ってないし……

「そう、あれ、燃えた」

「燃えた！？何が!？」

「せ、制服………」

「制服が燃えた、君いったい何したんだい!？」

「えっと、虫眼鏡と一緒に外に干してたら……燃えた」

「え、マジ!？」

「ほら三沢君も小学校の時理科で習ったでしょ」

「いや、それでも燃えないだろ……」

「もう、燃えるの！僕の熱い決闘者魂で燃えたの！わかった！」

「わ、わかった……」

ふー、何とか誤魔化せた……

「（何だこの優という少年は、背や顔は小学生のようだが、デュエルアカデミアを受験してるし制服が無い……」

飛び級か……でも飛び級なら飛び級と言えばいいのになぜ隠す……あれか、同じ年じゃないとばれると苛められると思ってるからか

……  
それとも飛び級ってことを一般生徒にはばれてはいけないのか、謎だ……）

ん、反対側の席に亮がいる、手振ってみようかな？

「おーい！亮！」

僕の声に気づいたのか亮は手を振り替えてくれた。

「おい、亮って……お前デュエルアカデミアの帝王カイザー亮の知り合いなのか？」

「え、あー、なんて言うか……うん知り合いつてこと……」

「（カイザーとも繋がっている…ますます怪しいぞ…この少年）  
そうだ優、俺と君はデュエルアカデミアという狭き門を目指すラ  
イバルであって同士だ、

別に実技試験は受験生同士が決闘をするわけではない、  
しかも試験の前にデッキの調整もしたい、  
というわけで決闘だ！優デュエル！」

「え、決闘、いいよ別に、まだ試験まで時間あるし」

「（優が一体何物かは分からないが決闘をすればなにか分かるかも  
しない、

見た目が小学生、制服を着ていない、カイザー亮と知り合い……  
この3つのピースを上手く枠にはめ方程式を完成させるんだ、  
もしかすると優は凄い秘密がある可能性が大だ）」

「でも何処でする、ここはまだ他の受験生が来るし……」

「なら、決闘盤を使わずここでやるう、  
俺デュエルシート持つてるから」

三沢君は鞆の中からストラクチャーデッキ買ったら一緒について  
くるシートを

2つ取り出しイスの上に敷いた。

「さあ、始めようか」

「わかった」

デッキをシャッフルし山札ゾーンに置く、



三沢君も同じように山札ゾーンにカードを置いた。

そしてお互いの準備が整ったら

「<sup>デュエル</sup>決闘!!!」

「先攻はもらっていい？」

「かまわないぞ」

「ありがとう、僕の先攻ドロ、暗黒界のスカー（DEF500）を守備表示で召喚、

カードを1枚伏せターンエンド」

僕はモンスターゾーンにカードを置く、

何か久しぶりに床で決闘したな、転生してからはずっと決闘盤でやってたし。

優 LP4000 暗黒界の斥候スカーDEF500

手札 4枚 伏せカード×1

「次は俺のターンドロ、ハイドロゲドン（ATK1600）を召喚」

三沢君は茶色いトカゲみたいなモンスターを出した。

「ハイドロゲドンでスカーを攻撃！」

「でもスカーは破壊された時デッキのレベル以下の暗黒界を手札に加える、

「暗黒界の術師スノウを手札に加える」

「なら俺もモンスター効果発動だ、ハイドロゲドンがモンスターを破壊したとき

デッキからハイドロゲドンを特殊召喚する、

2体目のハイドロゲドンで優にダイレクトアタック！」

「受けます」

優 LP 4000                      LP 2600

ソリットビジョンじゃないと攻撃受けても驚かないですむ、  
決闘盤だと攻撃が本当に来たと思ってビックリするから心臓に悪いよ。

「メイン2、タイムカプセルを発動する、デッキのカードを1枚裏にしてデッキから

除外する、そして2回目の自分のスタンバイフェイズにゲームから除外したカードを手札に加える」

「一体何を除外したんだろう？」

「カードを1枚伏せターンエンド」

三沢    LP 4000    ハイドロゲドン×2    ATK 1600

手札    3枚    伏せカード×1    タイムカプセル

「じゃあ僕のターンドロ、

暗黒界の術師スノウ(ATK1700)を召喚

スノウでハイドロゲドンを攻撃！」

「く、利子は高くつくぞ」

あれ？漫画版三沢君！？

100のダメージでも利子は高くつくのか、厳しいな…………

三沢LP4000            LP3900

「カードを2枚伏せ、ターンエンド」

優LP2400    暗黒界の術師スノウATK1700

手札    2枚    伏せカード×2

「俺のターンドロー、オキシゲドン（ATK1800）を召喚」

「なら畏発動威嚇する咆哮、これでこのターン三沢君は攻撃できない」

「く、やるな、カードを2枚伏せターンエンドだ」

三沢    LP3900    ハイドロゲドン    ATK1600    オキシ

ゲドンATK1800

手札        0枚    伏せカード×3    タイムカプセル

「僕のターンドロー、魔法カード手札抹殺を発動、

お互いのプレイヤーは手札を全て捨てて捨てた枚数ドローする、  
そして今捨てたグラファの効果発動グラファを捨てたとき、  
相手のカードを1枚破壊する、オキシゲドンを破壊」

「させん！速攻魔法わが身を盾に、ライフ1500と引き換えに

モンスターの効果破壊を無効にする」

三沢LP3900                   LP2400

「く、なら場のスノウを手札に戻し墓地のグラファを特殊召喚」

「畏発動威嚇する咆哮、

これで君はこのターン攻撃できない」

優 LP2400 暗黒界の龍神グラファ ATK2700

手札 1枚 伏せカード×1

「俺のターンだ、ふっ、いいカードだ」

何を引いたのかな？

「タイムカプセルの発動から2ターンたった、

よって除外してあったカードを手札に、

ついでに手札に加えたのはボンディング H20」

そ、それは……！

「死者蘇生を発動、墓地のハイドロゲドンを蘇生」

これで三沢君の場にハイドロゲノン2体と、オキシゲドン1体。

「そして最後の手札ボンディング H20を発動！

場のハイドロゲドン2体とオキシゲドン1体を生贖に、

デッキからウォーター・ドラゴン（ATK2800）を特殊召喚」

三沢君が出したウォーター・ドラゴンは水で出来た龍のイラストが書いてあった。

「ここでセットカードオープン！！装備魔法、

幻惑の巻物！幻影の巻物を暗黒界の龍神グラフィアに装備、

装備モンスターは俺が宣言した属性になる、俺は炎属性を選択」

属性を変更？たしかウォーター・ドラゴンの効果は……

「行くぞ！ウォーター・ドラゴンでグラフィアを攻撃！ハイドロホンブ！」

おお、決闘盤使わなくても技名言うのかこの世界では。

「ウォーター・ドラゴンの効果発動！

ウォーター・ドラゴンは炎族と戦闘するとき、

相手モンスターの攻撃力を0にする」

「く、やはり……」

優LP2400      LPO

「ま、負けた……」

「ふうー、勝ったぞ、君の決闘はミスが少し多かったな

例えばグラフィアの効果でタイムカプセルや伏せカードを破壊しておくとか」

「くう〜三沢君強いね！

まさかウォーター・ドラゴンをあんなに上手く使うなんて！」

「そうだろ、俺が計算を練って練りまっくて出来たデッキだからな」

「ホント凄いや、僕が前いた世界ではこんなに上手く使  
やっぱ何でも無い……………」

「優お前今、前いた世界っていったな、  
なんなんだ前いた世界って?」

「あ……………それは……………」

「（思わぬ収穫だ、おそらく前いた世界というのが分かれば、  
優の秘密が分かるはずだ、さあ聞かせてもらおうか、優の秘密）」

「や、やばい、まさか三沢君に僕が異世界人ということがばれそう  
だ……………」

流石秀才決闘者。

「で、なんなんだ前いた世界って、  
なぜカイザー亮と知り合いなんだ、  
なぜ制服を持っていない、実は小学生じゃないのか?」

「え……………あ……………それは……………」

「やばいやばいやばい!!ここは腹をくくって、  
三沢君にだけばらすか?いや、亮にも言えない秘密を  
三沢君に言えるはずが無い……………  
なら……………」

「実は……………」

「実は？」

「実は……」

「実は？」

「実は僕」







第24話 「僕の勝率は50%主人公とは思えない勝率の低さ」by優（後書き

すいません、入力できる文字に達してしまっただため中途半端ですが第24話はここで終わります、まあ本当は嘘です………続きは25話で。

Vジャンプを買ったんですが、そこに載っていた新禁止制限リストを見たら内容が凄く酷い………まさか開闢が帰ってきたとは、さらに大嵐も制限に、遊戯王の環境が大きく変わってしまった………デッキをたくさん持つてるからカードそろえるのが大変（半分ぐらいカスデッキやネタデッキですが）あとサイクロンが無制限になるなんて………

最後に僕今日から26まで学校で自然教室があるので次の投稿は27です、

合宿のときみたいに3話連続投稿はありません、書き貯めがもう無いので………

第25話 「かーめーはーめー波ー!」 b y 悟空(前書き)

久しぶりの更新、つっても4日ぶりか、ついでに今回のサブタイトルは本編とは関係ないです。

第25話 「かーめーはーめー波ー!!」 by 悟空

「実は……………」

「実は？」

「実は僕……………」

「記憶喪失なんだ」

「記憶…喪失？」

「あの、記憶を失うやつか？」

「うん、そう」

ふう〜、何とか丁度いい言い訳を思いついたぞ、  
流石に転生者や異世界人と言うのは不味いだろ……………」

「そうか、記憶喪失なのか…」

「そう、目が覚めたら公園に倒れてて、

自分の名前と決闘デュエルのルールしか覚えてなく

そこを亮に助けてもらったの、

それで亮と同じ学校に通うためにデュエルアカデミアを受験する  
ことにしたの」

「そうだったのか。」

（記憶喪失か、思ったより面白くないな……………」

もっと凄い実は異世界から来た人間かと思ったんだが…残念だ」

なぜか三沢君は残念そうな顔をしている。

「それとき、三沢君……」

僕が記憶喪失ってことは他の人には黙っててくれる？」

「あ、ああ……別に構わないぞ」

「よかった」

ふう〜、まだ少し納得しないようだけど  
信じてくれたみたいだ、よかった。

三沢君に嘘ついちゃったけどいいよね、  
だって異世界人ってばれるわけにはいかないし、  
僕もばれないほうが都合がいいもん、  
多少忘れてるとはいえ原作知識があるほうがデュエルアカデミア  
でも生活が有利だし……

周りを見てみると結構受験生が来ていることに気づいた。  
今の時間は8時55分、実技テスト開始まであと5分  
デュエル  
決闘してる内に結構時間たちやたなあ〜

「そろそろ始まるな………」

「うん、そうだね」

そして9時になった、試験会場の上に付いているスピーカーから  
声が流れてきた。

『これからデュエルアカデミア実技テストを開始します、受験番号101番から120番の人は決闘場まで来ててください』  
デュエルビルド  
たしか実技テストは受験番号が大きいほうから始めるんだった、  
たしか原作キャラの翔が受験番号119番、  
つまり翔よりテストが悪い奴が1人いるのか。

ん、まてよ、翔の筆記テストの成績は後ろから2番目、  
しかし翔は実技テストに勝ったためオシリス・レッドだが  
デュエルアカデミアに受かった、つまり  
色さえ気にしなければ筆記テストはがんばらなくてもいいんじゃないかな？

オシリス・レッドというのはデュエルアカデミアのランクのよう  
なもの、  
男子生徒は成績によって3つのコースに分けられる中等部から成績優秀で上がった

オベリスク・ブルー、入学試験で成績が良かったラー・イエロー、  
入学試験で成績が悪かったのがオシリス・レッドの3つに分けられる。

うーん、でもデュエルアカデミアの全校生徒は150人  
赤、青、黄色を約50人ずつ、デュエルアカデミアは1学年50  
人でクラスは1つのみ、  
つまり今年はいれる1年生も50人、  
赤、青、黄色は1学年約16、7人でもブルーは中等部から上がった  
ってきた人のみ

だから高等部から入れる人数は約32人ほど、四捨五入で30人  
よって受験生120人に対し合格する人間が30人だとしたら  
倍率は約4倍とかなり高い数値となってしまう、  
倍率4倍なのに実技試験に勝っただけで合格してしまうものなの

か？

それとも実技試験で決闘デュエルに勝った人が30人以下だったのかな？でも翔にさえ勝てる試験なのに……謎だ……まさか亮が学校にたくさんお金を

寄付とかしたとか？校長を脅したとか……それとも大人の事情か？

謎はそれだけじゃない、ブルーの人数が1学年約16、7人なら男子と女子で大体8人ずつに分かれてしまう、

かなり少なくないか？万丈目とその取り巻き2人だけで3人も取ってしまう、

女子も天上院とその取り巻き2人で3人も取ってしまう……ブルー少なすぎでしょ……

「どうした優、さつきからボーっとして？」

「いや、考え事」

「そうか、でもお前が考え事していたせいで101番から120番の実技テストは終わってしまったぞ」

「もう終わっちゃったの？速いなあ」

『受験番号81番から100番の人は決闘場デュエルフィールドに来てください』

僕の受験番号は30番、まだまだ先か

「ところで優は何番なんだ？」

「僕？僕は30番三沢君は？」

「俺は1番だ」

「1番！凄っ！」

「それほどでもないさ」

そう言って三沢君は自分の髪をかき上げた。

その後僕と三沢君は他の受験生の決闘を見続けた、  
うーん、65番の決闘は結構良かったな……..  
あと48番も、あのコンボにあのカードを加えればもっと良くなるな。

『受験番号21番から40番の人は決闘場まで来てください』

「あ、僕の番だ、行ってくるね三沢君」

「おう、行ってこい優、落ち着いて決闘すればきつと勝てる、  
優と決闘した俺が言うのだから間違いない」

「そう言ってくれると自信出てくるよ！ありがとっ行ってくるー」

そう言って僕は決闘場に向かう。



デュエルワールド  
決闘場

「えっと、ここかな？」

「君が相手かな？」

「は、はい！受験番号30番、雷堂優です！」

試験官と思われる人は黒い服を着てサングラスを付けていた、  
やっぱりこの学校先生のグラサン率高いな。

「そうか、では早速始めよう」

「分かりました」

「「デュエル  
決闘！！」」

「先攻はもらっつ、ドロー！」

「ワーオ！この先生決闘始まった瞬間一気に先攻取りに行つたよ！  
大人気ない人だ……………」

「私は賢者ケイローン（ATK1800）を召喚、ターンエンドだ」

上半身は人間、下半身は馬のモンスターが現れる、手には杖を持っている。

試験官 LP4000 賢者ケイローン ATK1800

手札 5枚 伏せカード×0

「僕のターン、ドロー、

暗黒界の狂王ブロン（ATK1800）を召喚、  
カードを2枚セットしてターンエンド」

ブロンと相手のケイローンの攻撃力は互角、  
だから相打ち狙いも出来たがそしたら  
僕のフィールドはがら空きになってしまっつ、  
次のターン相手のモンスターにダイレクトアタックを受けてしま  
うから、

ここは大人しくターンエンドしておく。

優 LP4000 暗黒界の狂王ブロン ATK1800

手札 3枚 伏せカード×2

「次は私のターンだな、ドロー！」

賢者ケイローンの効果発動、手札の魔法カードを捨てて、  
相手の魔法、罠カード1枚を破壊する、

君の右の伏せカードを破壊！」

「ならそれにチェインして畏発動、暗黒の謀略、お互いのプレイヤーは手札を2枚捨て2枚ドロウする、しかし相手は手札を1枚捨

」

「このカードの効果は知っている、私は手札を1枚捨て暗黒の謀略の発動を無効にする」

く、そう上手く成功はしないか、流石デュエルアカデミアの教師、カードの知識は豊富ということか……………

「ケイローンを生贄に、地帝グランマーグを生贄召喚！」

帝か、生贄召喚して効果を発動するモンスター……………との帝も厄介な効果を持っている確か地帝は

「地帝グランマーグの効果発動！

このカードが生贄召喚に成功したとき場のセットカードを1枚破壊する、君の残ったセットカードを破壊！」

グランマーグは大きな足で僕の伏せカードを踏み潰す、まあ伏せカードは閻次元の開放、特に大切なカードでは無い。

「バトルフェイズだ！グランマーグでブロンを攻撃！！」

ブロンはグランマーグの大きな足で踏み潰されてしまった。

優LP4000                      LP3400

「カードを2枚伏せ、ターンエンド」

試験官      LP4000      地帝グランマーグATK2400

手札              2枚              伏せカード×2

「僕のターン、ドロー（よし、このカードで）

魔法カード愚かな埋葬を発動、デッキからモンスターを1体墓地の送る

僕は暗黒界の龍神グラファを墓地に送る」

「（デッキから直接墓地にカードを送るカード、死者蘇生とかのカードを使う気か？）」

「暗黒界の狩人ブラウ（ATK1400）を召喚、

暗黒界を手札に戻すことで墓地のグラファは特殊召喚が出来る、

暗黒界の狩人ブラウを手札に戻し墓地のグラファ（ATK270

0）を特殊召喚！」

例の如く床から這い出て来るグラファ、グラファの攻撃力なら

グランマーグを倒すことが可能、でも厄介なのはあの伏せカード、

きっと僕の攻撃にカウンターするカードに違いない、さてどうするか？

「グラファでグランマーグを攻撃！ダークネスフレイム！」

「ここは恐れず攻撃あるのみだ！」

「伏せカードを警戒せず攻撃か……点数 - 1 だな。  
速攻魔法発動、月の書、場のモンスター1体を裏守備表示にする、  
暗黒界の龍神グラファを裏守備にする」

グラファの攻撃はグランマーグには届かず、裏側表示になってしまった。

「くそう、カードを1枚セット、ターンエンドです」

優 LP3400 伏せモンスター（暗黒界の龍神グラファDE  
F1800）

手札 2枚 伏せカード×1

「どうした受験生、君の実力はこんなものか？

ドロー、サイクロンを発動、場の魔法、罨カードを1枚破壊する、  
君の伏せカードを破壊」

竜巻が僕の伏せカードにぶつかり破壊されてしまった、うう僕の  
落とし穴……

「続いてグランマーグを生贄にグランマーグを生贄召喚」

グランマーグを生贄にグランマーグを召喚か、

一見意味のない行動だと思うが、グランマーグは生贄召喚に成功  
したとき

裏側のカードを破壊する効果を持っている……つまり

「グランマーグが生贄召喚に成功したとき

裏側のカードを1枚破壊する、君の裏側表示のモンスターを破壊、  
そのままグランマーグでダイレクトアタック！」

「ぐあああー!!」

優 LP3400                    LP1000

「私はターンエンド」

試験官    LP4000    地帝グランマーグ ATK2400  
手札        0枚        伏せカード×1

「く………僕のターン、ドロー!」

「畏発動!ロスト、相手の墓地のカード1枚を除外する、グラファを除外」

え!?これじゃあグラファを復活させられない!!  
闇次元の開放が破壊されてなければ………

「暗黒界の導師セルリ(DEF300)を召喚、ターンエンド」

優    LP1000    暗黒界の導師セルリ DEF300  
手札    2枚    伏せカード×0

「私のターンドロー、グランマーグでセルリを破壊、  
モンスターをセットしターンエンドだ(今年の受験生はたいしたこと無いな)」

試験官    LP4000    地帝グランマーグ ATK2400    伏せ  
モンスター×1  
手札        0枚        伏せカード×0

「、このままじゃ負ける……」

「ドロー……ん？このカード……よし！」

「（目付きが変わった？いいカードでも引いたのか？）」

「フィールド魔法、暗黒界の門を発動！」

僕の後ろに大きな門が現れる。

「暗黒界の門の効果発動！」

墓地の悪魔族モンスターを除外して、手札の悪魔族モンスターを捨てる、

墓地の暗黒界の導師セルリを除外し手札の暗黒界の狩人ブラウを捨てる」

門の中にカードが2枚吸収される、

その後門の中からカードが1枚出てきて僕の手札に加わる。

「その後、カードを1枚ドローする、

さらに今墓地の捨てたブラウの効果、

このカードが捨てられた時カードを1枚ドローする」

計2枚のカードをドローする。

「今ドローしたカード暗黒界の取引を発動、

お互いのプレイヤーはカードを1枚引き、1枚捨てる」

「私の手札は0枚、つまり引いて捨てるだけか」

「僕も1枚ドロ、そして引いたカードは暗黒界の龍神グラファ、今引いたグラファを捨てる、そしてグラファが捨てられたため貴方の伏せモンスターを破壊」

破壊したカードは番兵ゴーレムか。

「さらに暗黒界の刺客カーキを召喚、カーキを手札に戻し墓地のグラファを特殊召喚、暗黒界の門は場の悪魔族の攻撃力・守備力を300上げる効果もある」

暗黒界の龍神グラファ ATK2700      ATK3000

「グラファでグランマーグを攻撃！ダークネスフレイム！」

「く、やっと初ダメージか」

試験官LP4000      LP3400

「ターンエンド」

優 LP1000 暗黒界の龍神グラファ ATK3000

手札 2枚 伏せカード×0

フィールド 暗黒界の門

「私のターン、ドロ、カードを1枚伏せターンエンド」

試験官 LP3400 伏せカード×1

手札 0枚



「ふふふ、私の伏せカードは魔法の筒、  
攻撃してきた瞬間私の勝ちだ……残念だったな受験生」  
ふふふ、私の伏せカードは魔法の筒、  
攻撃してきた瞬間私の勝ちだ……残念だったな受験生」

「すみません先生、めっさ声に出してますよ、その伏せカード  
魔法の筒なんですか？」

「あ、しまった！く……」

そうか、魔法の筒か……僕の手札に魔法の筒の発動を防ぐカード  
は無い。

「ターンエンドです」

優 LP1000 暗黒界の龍神グラフィア ATK3000

手札 3枚 伏せカード×0

フィールド 暗黒界の門

「く、あと少しで私の勝ちだったのに……口が滑ってしまった」  
私のターン……ドロー……」

あと少しで勝てたのに、つい口が滑ってしまった、悔しい……みた  
いなこと考えてるんだろうなあ

「私は、何もせずターンエンド」

試験官 LP3400 伏せカード×1

手札 1枚

「僕のターンドロ、暗黒界の門の効果発動、墓地の暗黒界の狩人ブラウを除外して手札の暗黒界の龍神グラフィアを捨てる、

グラフィアが捨てられたため先生の伏せカードを破壊」

「く、このままでは負ける!?!」

「その後ブラウと門あわせて2枚カードをドロ、暗黒界の術師スノウ（ATK1700）を召喚、スノウを手札に戻し、墓地から2体目のグラフィアを特殊召喚!」

僕の後ろにある大きな門がガタガタと揺れ始め、その中から2体目のグラフィアが出現する。

「まだまだ!装備魔法DDRを発動、手札1枚捨て発動する、ゲームから除外されたモンスター1体を特殊召喚する、ゲームから除外されている3体目のグラフィアを特殊召喚!」

次元が歪んでその中からグラフィアが出てきた、1体目は床から、2体目は門から、3体目は次元の狭間から、演出が濃いな、海馬コーポレーション。

「門の効果で2体目、3体目のグラフィアの攻撃力は3000上がる!」

暗黒界の龍神グラフィア ATK2700      ATK3000

攻撃力3000のモンスターが3体、相手の場にカードは無い、勝ったな。

しかし攻撃力3000のモンスターが3体いると融合したくなるな……

『暗黒界の究極龍アルティメットグラフィア（ATK4500）  
出ないかな？僕だけの最強オリカで……ないよね、  
田中がそんな気の利いたことしてくれるわけないし、

この世界では無いと思われるグラフィアを3枚も送ってくれたんだからそれだけでも

感謝しとくか、それにしてもアルティメットグラフィアって、  
僕のネーミングセンスかなり悪いな……すこしシヨンボリ。

おっと、そんなこと考えてる時じゃなかった、

試験官さん攻撃力3000のモンスターが3体並んで顔絶望的だし、

速く終わらせないと可哀想だ。

「グラフィア3体で先生に攻撃！！」

「ダークネストリプルバーストオオオ！！！！」

「ぐわわああああ！！！！」

試験官LP3400      LPO

4600のオーバーキルか、少しやりすぎたかな……

「く、流石だ、試験結果は今日中に郵便で送る、  
いい決闘だった、ありがとう」

「こちらこそありがとうございました」

僕は決闘場から出て行くことにする。

廊下

さてこっからどうしよう、試験が終わった人はもう帰っていいんだよね。

外には理奈さんがいるからすぐに帰れるけど今日は亮も来てるから亮を置いて先に帰るわけにはいかないし、

亮の所に行こうかな？

それとも三沢君の所に行って残りの受験生の決闘でも見ようかな？

「……よし、亮の所に行こう！」

僕はおそらく亮がいると思われる所に行く。

第25話 「かーめーはーめー波ー!!」 by 悟空（後書き）

やっと原作に入った、疲れた〜

いつも本編書いてるときにふと後書きに書くネタが思いつくのに、  
本編書き終わって後書き書くことすると何書くか忘れてしまうんで  
すよ……………

色々な遊戯王小説読んでますがどれも面白いですね、僕も頑張ら  
ないと。

第26話 「ペペロンチ ノー!!」 by クロノス(前書き)

今回は凄く疲れたそしてそろそろ夏休みが終わる!大変だ!

第26話 「ペペロンチ ノー!!」 by クロノス

丸藤亮 視点

よかった、優の勝ちか……あの人は確か松村先生、  
地帝グランマーグ切り札にして岩石族を中心的に使う先生だった  
な。

それにしても最後の優のグラフィア×3は凄かったな、9000の  
ダメージ。

「あ！亮いた！」

聞き覚えがある声が後ろから聞こえてきた、  
この声は俺が良く知っている人間、優だ。

「亮！勝ったよ！」

優は俺の目の前まで来る。

「ああ、凄かったな、見てたぞ優の逆転勝ち」

俺は優の頭を撫でる。

そしたら優は目を細め気持よさそうにする、  
可愛いなあ優。

「亮、その男の子は誰？」

雷同優 視点



「亮、その男の子は誰？」

僕が亮に頭を撫でてもらっていると、  
亮の隣にいる青い制服を着た金髪の女性が亮に話しかけた。  
多分原作キャラの天上院さんかな？

「ああ、この男の娘は」

あれ？今亮の男の子の発音が違ったような？

「ああ！この子が前亮が言っていた弟の翔君ね！」

「違う、この娘は雷堂優、  
分け合って俺の家に住んでいる」

「へー、優って言うの、可愛い子ね、  
よろしく、雷堂君、私は天上院明日香よ」

明日香さんはそう言って右手を出してくる。

「こちらこそ、よろしくおねがいます、天上院さん」

僕も右手を出し、握手する、初対面だし苗字で呼んだほうがいい  
よね。

「亮はまだ帰らないの？」

「ああ、一様全ての受験生の決闘は見ておきたいからな」

『受験番号1番から20番までの人は決闘場まで来てください』

これで最後か、三沢君は受験番号1番、つまり最後か。

亮はずっと受験生たちの決闘を見ている、少しあきたなあ〜

「ふわあああ」

「あら、退屈なのかしら雷堂君？」

「え？あ、そうかも、僕の決闘は終わったし、緊張の糸も切れちゃったし」

「そうなの？それと亮ね、雷堂君が来る前、私と2人で見ていたときもずっと」

受験生の決闘ばかり見てたのよ、飽きないのかしら」

「そうだね、綺麗な女性といるのに決闘ばっか見てるなんて、無神経だね、亮は」

「えっ！あ、うん、そうね……」

急に明日香さんは顔を赤くした、何か僕変なこと言ったかな？

その後、亮はずっと決闘ばっか見てるため、

暇になった僕と天上院さんは2人でいろいろお話した、

内容は兄弟いる？とかペット飼ってる？とか何処に住んでるの？

みたいな高校生が始めて出来た友達と話すような会話だった。

「ん、もう全ての決闘が終わったみたいね」

あ！本当だ！しまった三沢君の決闘は見ようとしてたのに！

『全ての決闘が終了しました、これにてデュエルアカデミア入試、実技試験を終了し　え、まだ1人いる？失礼しました、試験遅刻者がいるため、もう1決闘あります、受験番号111番今すぐ決闘場に来るよう』

「遅刻者？」

遅刻者、と言うことは原作第1話の十代VSクロノス先生が始まるということか！

それは見逃せないぞ！

あれ？十代はたしか111番じゃなくて110番だったような…

……ま、いっか別に。

「もう1決闘あるの？最後の決闘だし私も見ようかしら、  
受験番号111番の決闘とやらを……」

決闘場に黒い学ランを来た茶髪の少年、きつと遊城十代だろう、  
相手は原作どおり白い肌、おかつぱ金髪、唇が紫のクロノス先生、  
まさか十代VSクロノスをリアルで見る日が来るとは。

そして十代VSクロノス先生の決闘が始まった。

先攻は十代、E・HEROフェザーマンを召喚し、カードを1枚伏せターンエンドらしい。

次はクロノス先生のターン、クロノス先生は魔法カード押収を発動した、

効果はライフを1000払い、相手の手札を確認し手札を1枚捨てさせる、

クロノス先生は十代の死者蘇生を捨てる、その後カードを2枚伏せて大嵐を使った、

十代の伏せカードはドレインシールド、相手の攻撃を1回無効にし攻撃してきたモンスターの攻撃力分自分のライフを回復させる、クロノス先生の伏せカードは黄金の邪神像、破壊されたときトークンを特殊召喚する

特殊な罠カード、それが2枚破壊されたため2体のトークンが召喚される。

『あれは入試用のデッキじゃない！クロノス教諭の自信の本気のデッキだ！』

『自分のコンボを成立させると同時に111番の罠も封じてしまった！』

決闘を見ているブルーの制服を着た生徒がそんなことを言っている。

『ふん、あの受験生が特別なのかと思っていたが飛んだ勘違いだった。』

クロノス教諭はドロップアウトボーイの儂い夢を徹底的に叩き潰

すつもりなんだ！』

ん、今の声どっかで聞いたことあるな……………

「あの子可哀想、クロノス教諭の気に召さなかったようね」

「見ものだぞ、111番のおかげで伝説のレアカードが拝めるかもしれない」

伝説のレアカード？ああ、アンティーク ギア ゴーレム 古代の機械巨人のことか。

僕の予想通りクロノス先生はトークンを生贄に古代のアンティーク ギア ゴーレム 機械巨人（ATK3000）を召喚した。

「これが、伝説のレアカード！」

そんなに強いかな？あのカード、ただ単に珍しいから驚いてるだけかな？

「クロノス教諭がこのカードを召喚して未だ負けたことは無い。

あの受験生に先生を本気にさせる力があるとは思えないが……………」

そうかな？ギア ゴーレム 機械巨人は効果破壊に耐性無いから地割れや地砕きですぐ破壊できると思うんだけど……………」

「クロノス教諭は気まぐれだから。

気の毒に、アカデミアの鉄の扉が閉じる音が私には聞こえたわ」

「そうかな？僕はあの受験生が勝つと思うけど？」

「あの状況で勝てるわけ無いでしょ雷堂君」

うーん、だから頑張れば普通に倒せると思うけど。

「亮はどう思う？」

「クロノス先生が圧倒的有利なのは分かるが、

決闘は最後まで何が起こるかわからない、111番もまだ諦めてないようだぞ」

確かに十代はこの圧倒的不利な状況でも決闘を楽しんでるように見える。

クロノス先生は機械巨人ギアゴレムでフェザーマンを攻撃した。

機械巨人は貫通効果を持っているため十代は2000のダメージを受け

残りライフは2000。

クロノス先生はそのままターンエンド、次は十代のターン。

十代はドローしたカードを見て少し笑った、なんかいいカードでも引いたのかな？

アニメ、第1話は見たけど、数年前のことだし詳しくは覚えてない、

ついでに何故僕がこっから十代の表情が分かるかということ

この体になって自分の視力がかなり良くなった、16ぐらいかな？

十代は逆転のカードを引いたのかと思ったら、ハネクリボーを召喚し、カードを1枚セットしターンエンドだった。

「見たこと無いカードだわ」

「俺もだ……」

「あら学園のカイザーと呼ばれる亮にも知らないカードはあるのね」

「俺にも知らないカードはある、だから決闘は奥深い」

「だから面白いのよ」

「僕は知ってたけど」

転生前は6枚ぐらい持ってたような……

クロノス先生のターンは機械<sup>ギア</sup>巨人<sup>ゴーレム</sup>でハネクリボーを攻撃、ハネクリボーは破壊されたターン自分が受けるダメージは0になるため十代は無傷、

さらに十代は罠カードヒーローシグナルを発動しデッキからレベル4以下のE・HERO

E・HEROバーストレディ(ATK1200)を召喚する。

バーストレディか…僕が転生する前遊戯王しりとりというのが一

時期はやって

たけど『え』から始まるのでまず思いつくのがE・HERO、  
けどE・HEROって殆ど『ン』で終わるからバーストレディ  
ぐらいしか思いつかなかったな。

今思うとネオス系も『ん』で終わらないな………やべ話がそれた！

どうでもいいこと考えてる内にいつの間にか、

フィールドが高層ビルがたくさん建つ町みたいになってるし、  
十代の場にはE・HEROフレ임・ウイングマンがいる、

死者蘇生……いや、死者蘇生は先生によって捨てられたから戦士の生  
還で

フェザーマンを手札に戻しバーストレディと融合したのかな？

フレ임・ウイングマンは高層ビルが一番上に立って、

ギア機械巨人を上から攻撃する。

フレ임・ウイングマンの攻撃力は21000で攻撃力30000の  
アンティーク古代の機械巨人には敵わない、しかしフィールド魔法、おそらく摩  
てんろう天楼 スカイスケレイパー は自分より強いモンスターと戦う時攻  
撃力を10000ポイント上げる効果つまりフレ임・ウイングマン  
の攻撃力は

E・HEROフレ임・ウイングマン ATK21000 AT  
K31000

フレ임・ウイングマンがギア機械巨人を倒す。

クロノス LP3000 LP2900

それにフレ임・ウイングマンは破壊したモンスターの攻撃力分



ダメージを与える。

壊れた機械巨人はクロノス先生の頭の上に崩れ落ちる。

「ああ！先生が古代の機械巨人の下敷きに！」

「大丈夫だ優、あれはソリットビジョンだ……………多分」

クロノスLP2900      LP0

「ちょっと、面白いんじゃない…あの子」

「そうだね、なんか何度も世界を救ってくれそうな人だね」

「なにを言っているんだ優？」

「いや、なんでも無い！」

もう試験終わったし速く帰ろうよ！」

「そうだな、じゃあな明日香、次はデュエルアカデミアで」

「ばいばい天上院さん」

「さよなら、亮、雷堂君、試験受かるといいわね」

天上院さんと別れ、僕と亮は試験会場を出る。

丸藤家

「ただいま」

「おかえりなさいでござる」

家に帰ると料理長がいた、料理長の手には、少し大きめの封筒と、大きいダンボール箱があった。

「料理長、その持っている物はまさか」

「そう、優殿の合格通知表と制服、バックet cでござる」

と、いうことは……

「僕、デュエルアカデミアに受かったの!」

「そうでござる、ついでにランクはラー・イエロー、高校から入った人にとっては最高ランクでござる」

「良かったな優」

「うん!」

「じゃあ今夜はパーティーでも開きましょう」

「お!いいでござるな理奈殿!」

そんなかなで僕はデュエルアカデミアに受かった、  
新学期が楽しみだな

第26話 「ペペロンチ ノー!!」 bYクロノス(後書き)

今回初登場明日香さん、明日香さんがどんな風に優とかかわるのか楽しみですね！

第27話 「過去を変える能力? いいえ、ただの私の都合です」 b y 田中 (前書

すいません、かなり遅くなりました。新学期になって色々忙しくなってしまったので…………。

まず家に帰ると宿題をやらないといけないし (本当は昼寝してました)

休みの日は勉強しないといけないし (実は友達とカラオケ行ってきました)

空いた時間にやろうとしても、どうも執筆が進まない (他の作者さんの小説ずっと読んでました) ので遅くなってしまうました。

はい、つまりサボってました、いや、たしかにいそがしかったですけど僕も遊んだり休憩もしたいので…………だからこれからも投稿は遅くなります、スフィinksステッキぐらい遅くなりますがこれからもよろしくおねがいします。

第27話 「過去を変える能力？いいえ、ただの私の都合です」by田中

明日は待ちに待った新学期！楽しみだな。

「どうした優？何か嬉しそうだな？」

「？ん、そう思う？」

「ああ、凄く嬉しそうな顔をしている」

「だって明日はデュエルアカデミアの新学期だよ！楽しみだな！」

「新学期が楽しみとは優は少し変わってるな」

「そうかなあ、だって亮と同じ学校に行けるんだよ、  
楽しみで今日はもう眠れないよ！」

「あ／／／そ、そうか、優／／／」

亮は何故か顔を赤くしてる、しかも口元が少し緩んでる……  
笑ってるのかな？いや、あれはにやけてるに近いな？

「どうしたの亮！何で笑ってるの！？」

「いや、にやんでも…なんでも………によんでもない」

なんか3回も聞かされた！しかも殆どかんでるし！！

「優殿は鈍感でござるなあ」

急に料理長が後ろから声をかけてきた。

「りよ、料理長！いつの間に！..！」

「拙者ほどの料理人になると誰にも気づかれずに  
優殿の後ろに回るのなんて朝飯前のござるよ！」

「いや、それただ影が薄いだけでしょ……………  
しかももう夕飯後だし……………」

「細かいことは気にしてはいけないでござるよ、優殿」

「そうですね、優様」

「おおあ！今度は理奈さんまで！」

いつの間にか料理長と理奈さんに囲まれてしまった！..！

「私ほどのメイドになりますと誰にも気づかれずに  
優様の背後に近づくことなんて朝飯前です」

「似たような台詞を料理長から聞いたよ……………」

「料理長、理奈…何しに来た、ここは俺の部屋だぞ」

「まあまあたまには良いでござろう、  
優殿の入学記念になにかプレゼントでも思っただな」

「え？入学記念？」



僕が首を傾げていると

「優様、これは私からです」

そう言われ理奈さんが僕の腰に『何か』を付けた、よく見るとそれはオレンジ色のベルトだと気づいた、そのベルトは右と左に1個ずつデッキケースが付いていた。

「理奈さん…これは？」

「これは私が作った、優様への入学祝いです、横にデッキケースが着いているのでいつでも何処でも自分のデッキを持っていきます」

「わあ、ありがとう理奈さん、大事にするよ！  
かっこいいな」

「嬉しそうで何よりです」

わあ

「拙者はこれでご覧」

料理長が手に持っているのは黒い棒……いや、これは料理長がいつも腰につけている

日本刀……日本刀！？

「受け取ってほしいでござる、拙者の命の次の次に大切な日本刀でご覧」

なんか微妙だな……………

「いや、なんか、いいよ……………」

「何ででござるか!？」

「なんか汗臭いし……………汗臭いし、汗臭いし……………」

「そんなに臭いでござるか!？」

「しかも銃刀法違反だし」

「仕方ない……………なら優殿にはこつちを上げるでござる」

そう言われ料理長が持っていたのは小さな刀…ナイフだ。

「これならいいでござろう、護身用でござる」

まあ、いいか、僕は料理長からナイフを受け取る。

「理奈さん、料理長、ありがとう！」

大切にするよ!」

「優、俺も優に渡す物がある」

「えっ!?!亮も何かくれるの!」

亮は自分の机の中から一枚のカードを取り出し、僕に渡した。  
亮から受け取ったカードを見ると、名前は

『サイバー・ドラゴン』

「サイバー・ドラゴン!？」

亮から受け取ったカードはサイバー・ドラゴン、  
かなりのレアカードで1部のサイバー流決闘者しか持っていないらしいけど

こんなカードもらっていいのかな？

「亮……いいの？これ、かなりのレアカードじゃないの？」

「ふっ、問題ない……俺は5枚サイバー・ドラゴンを持っている、  
3枚はデッキに入れて……4枚目は優にやる」

おお!!マジですか!海馬社長とは大違いだ!!

「ありがとう亮!!」

「ふふふ……ふふふふふふ」

亮がさっきみたいに変な笑い方をしている……なんか怖い……  
しかも亮なんか足元ふらふらしてる!大丈夫!

『ガコッ』

あ、机に腰ぶつけてる……

亮は机に腰をぶつけて机の上に置いてあったデッキが落ちて床に散らばった。

「し、しまった」

「だ、大丈夫亮！？僕も拾うの手伝うよ！」

僕は亮と一緒に床に散らばったカードを拾っていく、

サイバー・ドラゴン、サイバー・フェニックス、融合、リミッタ  
ー解除、

サイバー・ドラゴン、サイバー・ジラフ、パワー・ボンド、

オーバー・ロードフュージョン……ん？このカードは始めて見る、

効果は………うわっ！思い出した！これキメラテック出す奴だ…

……

亮のデッキにも入ってたんだ　　って、効果読んでないで早く

カード

拾わないと………融合賢者、サイバー・ドラゴン、次元幽閉、奈  
落の落とし穴、

魔宮の賄賂、セイバリ、鬼畜カードばっか！！ガチかよ！

次は、サイクロン、タイムカプセル、サイバー・ドラゴン、

大嵐、融合　　ん、今4枚目のサイバー・ドラゴンが入ってた

ような………

「優、拾ってくれてありがとう」

亮に拾ったカードを軽く無理やり持っていかれる。

「あのさ、亮、今デッキに4枚目のサイバー・ド　　」

そこまで言った所、亮に口を塞がれた！

そして理奈さんや料理長には聞こえない僕にだけ聞こえる声で

「優、世の中には、知っていいことと、知ってはいけないことがある、分かってくれ」

そう言われ僕の口を塞いでいた手が離される。

知っていいことと、知ってはいけないこと……

亮のデッキに4枚目のサイバー・ドラゴンが入っていたのように見えるのは、

現実か……幻か、真実は、亮にしか分からない……

第27話 「過去を変える能力? いいえ、ただの私の都合です」 b y 田中 (後書

この前僕の本名と同じユーザーネームの人がいて少しビックリしました。

そして次回は原作2話前編だと思います。

久しぶりの投稿でしかも内容がかなりぐだぐだ、

でもこれからもがんばりますから応援してくれると嬉しいです。

他にも何かこの物語に対するアドバイスとかくれると助かります、ではまたいつか。

## 第28話 「ヘルヘルヘルうるさいなあ」 by 優（前書き）

投稿した日に自分の小説のアクセス解折を見てみると夜中なのに結構な人が読んでる、みんな夜中に何してるんだろっ？

作者なすびの小説のネタ書きやすい場所らんきんぐ〜

やってきましたこの謎のコーナー、内容は僕が小説の書きやすい場所をランキング形式で発表するあまり意味の無いコーナーです、決して前書きに書く内容が無く、とりあえずどうでもいいこと言っ  
て文字数稼ぐかとかは思ってます（僕は意外と細かい性格なので  
前書き・後書きに何もないと何か気に入らないのです……………）

では早速第3位発表！！！！

第3位通学中の自転車のこいであるとき。

何か自転車こいでるとネタがポンポン出てくるんですよ、ま、7割がた忘れてしまいますが、どっちかというと妄想に近い気がする。

第2位は次回発表！！

第28話 「ヘルヘルヘルうるさいなあ」 by 優

「優様……起きてください」

むう、眠い……でも、起きないと……今日はなにか大切な日、  
だった気がする……そう、確か……が、が

「優様、起きてください」

女の人の声が聞こえる……この声は確か……

僕は眠りから覚め、少し重いまぶたを開ける。

僕の目の前に、理奈さんがいた。

「……んう、あれ？理奈さん……？何でここに？」

ああ、眠い、昨日は緊張してあまり眠れなかった……  
あれ？なんで緊張してたんだっけ？何か大切な用事が今日あった  
ような……

「優様、今日はデュエルアカデミアの入学式の日です、  
早く起きないと遅刻してしまいます」

デュエル……アカデミア……！！  
まさか……！！！！！！



「今日はデュエルアカデミアの入学式だった!!」

僕はさっきまで眠たくて重たい体を起こし、  
ベットから飛び上がる。

「やっと起きましたか……」

「理奈さん大変だ！今日はデュエルアカデミアの入学式だ！」

「だからさっきからそう言ってるじゃないですか……」

僕は目を覚ますと急いで制服に着替えて、荷物を持ち、家から出た。

今は理奈さんの車でデュエルアカデミア行きの船が出る港まで行く、

デュエルアカデミアは小さな島の上にあり、

飛行機が下りる滑走路も無いため移動手段は船かへり

でしか行けないらしい、そういえば水戦艦という手もあったな……

……

「そう言えば理奈さん、亮は？」

運転席で運転している理奈さんに話しかける、

何か僕のイメージでは理奈さんはハンドルを持つと

性格が変わって超危ない運転するイメージだったんだけどな……

意外と安全運転だな。

「亮様は在校生なので先に行きました、

そう言えば優様はまだ朝食を取ってませんでしたね」

「あ、本当だでも、時間無かつたし……」

「じゃあこれでも食べててください」

理奈さんは助手席の物を入れるスペースから

2つの物を投げてきた。

「おっとと……！」

理奈さんから投げられた物……

カロリーメイトとウィダーインゼリーだった、

まあ無にも食べないよりマシだから食べておこう。

暫く理奈さんが運転し、僕が外の風景をボーッと見てると、  
いつの間にか港に着いていた。

「優様つきましたよ」

「うん、分かった」

車から出て港に止まっている船に向かおうとする。

「これでサヨナラですね……………優様」

少し寂しそうな顔をする理奈さん。

「大丈夫！冬休みには必ず帰ってくるから！！」

「フフツ、そうですね、では優様が帰ってくるのを  
料理長と楽しみに待っています」

「うん！じゃあね！いつてきます！！！！」

「はい、行ってらっしゃい、優様」

僕は理奈さんと別れると船に向かって走っていく。

松村先生 視点

よし、そろそろ、出発時間だ多分入学生も全員来たしもう出発してもいいだろう。

「すいませーん！！」

ん？向うからデュエルアカデミアの制服をきた少年が走ってきた、まだ入学生がいたのか？

「はあ、はあ、はあ、

すいません、これデュエルアカデミア行きの船ですよね」

「ああ、そうだが、この格好からすると君も入学生か…早く行きなさい、もう出発するぞ」

「あ、はい、ありがとうございます」

入学生は船の中に入ろうとする

「ん、君、昔どこかであったような気がする」

「えっ！？ナンパですか？」

「違っつ！たしか君とはどこかで……」

ああ！試験のときか！ほら入学試験のとき  
君と決闘した者だよデュエル」

「（てかこの先生は髪型も同じだしみんなグラスンだから誰が誰だか分からないよ………）  
ああ、魔法の筒伏せたのにつっかり口に出しちゃった  
マヌケな先生」

「ぐ……それは言わないでくれ……」

まあ私は今年度は1年生担当だ、  
学校でも会う機会があるかもしれない

その時はよろしくたのむよ」

「はい、わかりましたー」

入学生は船の中に入っていく。  
これで今度こそ入学生は全員来ただろう。

「おーい！まっしてくれー!!」

なんだ、また入学生か色は……レッドか。

「はあ、はあ、すみませんここデュエルアカデミア行きの船ですよ、  
ね、

俺も乗せてください……はあ、はあ」

「あ、ああ、構わないぞ……ん？  
君もどっかで会ったような……」

「ん、一昔前のナンパか先生？」

「だから違うといってるだろ!!1111番!」

「あれ？何で俺の受験番号を？ストーカー？」

「違うっ！試験にどうとうと遅刻して  
あのクロノス教諭を倒したんだ、名前も覚えられるわ!」

「ああ、やっぱり俺ってもう軽く有名人、いやー参ったな〜ハハハ」

「もういい、早く入りなさい1111番、もとい遊城十代君」

「はい」

再び雷堂優 視点

ふう、なんとか間に合った……………

あと1時間ちよつとでデュエルアカデミアに着くらしい。

僕はただひたすら変わらない風景、海を見続ける。

あ！Nアクア・ドルフィンネオスペースファン！じゃ無くてもイルカか……………

遊戯王やっているとイルカがアクア・ドルフィンに見えてしまって

困る……………

あ！あそこを飛んでるのはNエア・ハミングバード！じゃ無くて  
ただの鳥か……

うん、流石に今のはボケです、ごめんなさい。

はあ、やっぱり暇だな……同じイエローの人に声でもかけようか  
な？

「よう、30番、元気か？」

声をかけようかと考えていたら逆に声をかけられてしまった。

この声と喋り方は

「三沢君、久しぶり」

三沢君みさわだった。

「ああ、久しぶり30番、もとい雷堂優、その様子だと君も受かったらしいね」

「まあね、どう？イエローの制服、似合う？」

「ああ、似合うぞ」

「えへへ〜」

「(ドキッ！な、何だ今の胸がドキッとする感覚は？  
き、気のせいか………?)」

「まだ到着まで30分以上あるみたいだから  
どこかで休憩しようよ」



「そ、そうだな」

僕と三沢君は船の中にある休憩所に行くことにした。

三沢大地 視点

ここが休憩所か、ベンチや自動販売機もあるし軽くクーラーが効いている、

でも少し生徒の数が多いな、人口密度が高い。

「アイスでも買う？三沢君？」

「ん、そうだな」

俺と優は自販機からアイスを買う、

空いてるベンチを見つけたのでそこに2人で座ってアイスを食べることにする。

「ぺろぺろ……おいしいね三沢君」

「あ、ああ」

高校生になってアイスぺろぺろ舐めるなや……

ま、まあ優は容姿があれだからやっても不自然に思わないな……

な、なんか可愛いな、無邪気で心がまだ子供っぽくて、

アイス1つでこんなに嬉しそうにして……高校生とは思えない

…。

はっ！俺は何考えてるんだ！一瞬男である優に惚れそうそうだった！

大丈夫だ俺はノーマルだ、ゴメン、実はロリコンだ、

でも幼い女の子が好きであって男の娘には興味は無い！！！！

……………。

「ふああああ、やっとついたー！」

船に揺られて約1時間、船は無事デュエルアカデミアに着いた。

デュエルアカデミア、綺麗な海！豊かな自然！

楽しい決闘デュエルが出来そうな予感！そして隣に倒れている三沢君。

「ゆ、優……助けて………」

「ちよー！……三沢君、大丈夫！？」

「俺……乗り物系はだめなんだ………うえっぶ、吐きそっ」

「ここで吐かないでよー！」

「何か液漏れしない袋を………」

本来ならまずこれから入学式のためデュエルアカデミアの校舎に行く予定なのだが

三沢君がこんな状態のため少し遅れそうである。

「もう、三沢君、酔い止めの薬ぐらい持っておきなよ」

軽く背中をさすってあげる。

「うう………優、俺に構わず先に行け………」

「何ここでそんなかつこいい台詞言ってるの！」

「実際そんな大したことないよね!」

「やっぱ無理……優助けて……」

その後約10分間三沢君の背中をさすってあげたり、水買ってきてあげたりで大変だった……まあ入学式には間に合ったけどね。

入学式終了

入学式が終わった、次は自分の寮に行つて、夜には各寮ごとに歓迎会があるらしい、楽しみだな。

「それでここがイエローの寮、思ったより綺麗な所だ」

校舎からもそんなに距離無いし、すぐ近くに綺麗な湖もある、  
なんだかんだ言っつてイエロー寮が一番住みやすいと思う今日この  
頃。

「えーと、僕の部屋は……………つと、ここか」

デュエルアカデミアの合格通知表と一緒に送られてきた生徒手帳  
というか携帯端末

（PDAと言っらしい、もうこれ生徒手帳じゃないよね軽くiP  
od touch

並みの性能だね、iPod touch使ったこと無いけど）  
で入学式が行われた校舎からイエロー寮までの道のりを調べ、  
同じく合格通知表と一緒に送られてきた自分の寮の部屋番号が書  
かれた

紙を頼りにここまで来た訳です、はい。

三沢君？なんかまだ気分悪いらしいから保健室よってくらいだよ。

『ガチャ』

部屋の中は……………おっ、意外と広い、

イエローはレッドと違い1人部屋だし、ベットもある、  
勉強机も置いているしクローゼットも結構服が入りそうだ。

「いやーそれにクーラーまで付いてるなんて、  
極楽極楽、余は満足じゃ」

どっかの殿様みたいなキャラになるぐらい快適です、いや、マジ  
で。

歓迎会までこの部屋で寛いでよ。

「……………」

……………」

「……………」

……………」

「……………」

……………」

「暇だ、歓迎会まであと数時間、  
今思うと主人公である十代にもあつてない……………」

このまま原作に関わらず本編終了なんてことはないよね……………」

「まさか……………」

「ね  
やっぱり不安だ!!」

『テクテクテクテク』

僕は今デュエルアカデミア校舎の廊下を早歩きで渡っている、理由？何が何でも原作に関わってフラグ立てないと

折角遊戯王の世界まで来たのに何も無い学園生活で卒業なんてこともありえる。

342

それは何が何でも避けたい、僕の記憶が正しければ今日この時間帯は万丈目さんと十代君の接触イベントがあったはず、そこに偶然僕が入ってきて万丈目さんに顔を覚えてもらい、十代君に自己紹介して友達になれば僕もレギエーメンバーの仲間入り！はっはっは！どうだ参ったか！！

「えっと………ここかブルー専用決闘場」  
デュエル  
フィールド

中は、思ったとおりブルー生徒が2人いる、顔は忘れたけど多分万丈目さんの取り巻き1と2だろう。

「おい、貴様、ここで何をしているー！」

「ここはブルー専用決闘場だぞ、イエローの分際で」

イエローでも差別ですか……………だからブルーは、  
1年生のブルーは中等部から上がってきたエリートのみが  
入れるらしい、エリートと言っても親の金の力で  
中等部に入れてもらったお坊ちゃん、お嬢様ばかり、  
無駄にプライドが高かったり甘やかされて育ったせいかな我侂な奴  
もいる、

拳句の果てに不良まで……………プロ決闘者を育成する学校とか  
言ってるけど実際金が欲しいだけじゃないのか……………

「いや、ちょっと決闘の匂いがしたので」

「は、何言ってるんだお前？」

「ほー、貴様、この俺にケンカを売ってるのか？」

影になって見えなかったけど、取り巻き2人の横から万丈目さんが  
出てきた。

「あ、万丈目さん！」

「イエローのドロップアウトがこの俺様に何か用か？」

はあ、イエローでもドロップアウト扱いか……………  
十代君たちもいないし、もう帰ろうかな、こいつらと話していると  
イラついてきて原作とかフラグとかどうでもよくなってきた……………

「いや、何でもありません、じゃ、さよなら」



僕が決闘場から離れようとする<sup>デュエルワールド</sup>

「おっと、ただじゃ返さないぜ！」

取り巻き2人に腕をつかまた！く、動かない、この体じゃ肉弾戦はきついか。

「お前、ブルーの決闘場に勝手に入ってきて何事も無かったかの用に帰ってんじゃねーよ」<sup>デュエルワールド</sup>

あ、あれ、もしかして僕……………凄くピンチ。

「ちゃんと入場料を払ってもらわないと」

「入場料は貴様のデッキで十分だぜ！」

やり方が軽くヤザの手口だ！  
つていつてもこの状況は不味い……………かなり不味い……………。

「ふん、イエローごときが調子に乗って俺たちにケンカ売るからこつなる」

いや、売ってないよ！むしろ売られたよ！

「でもまあこの俺様と決闘で勝つたら許してやっても構わん」<sup>デュエル</sup>

「えー」

「貴様に拒否権はない」

理不尽だ!!

「それともここで大人しくデッキを渡しとくか？」

……

「わかったよ………やればいいんでしょやれば、  
ただしこつちにも条件がある、僕が勝ったらキミのデッキをもら  
おう」

「っは、この俺様が貴様のようなちびガキに負ける………  
そんなわけないだろ、いいだろうその賭け乗ってやる、  
ま、俺が負けることはまずありえないがな」

「………つち、金の力で入ったプライドにしがみ付いたお坊ち  
やん共が………」

今回はかりは僕も怒った、本気でやらせてもらっ。

「行くぞドロップアウトボーイ」

「こいよ、万丈目まんじょうめ」

「なぜ貴様が俺の名を知っている!?!  
そして万丈目まんじょうめさんと呼べ!?!」

初めは呼んであげようとしたけどこんな態度取られちゃさんず付  
ける気も失せる。

「「決闘！！」」

「先攻はエリートである俺様がもらっ！」

それは関係なくね。

「俺は地獄戦士ヘルソルジャー（ATK1200）を召喚！」

剣を持った鎧を着た戦士ソルジャー、効果は確かアマゾネスの戦士の劣化版。

「さらにカードを1枚セットし、ターンエンド！」

万丈目まんじょうめ LP4000 地獄戦士ヘルソルジャー ATK1200

手札 4枚 伏せカード×1

「僕のターン、ドロ、暗黒界の術師スノウ（ATK1700）を召喚」

杖を持った白い悪魔、おそらく女だと僕は思っ。

「スノウで地獄戦士ヘルソルジャーに攻撃！

ダークマジック！」

スノウが杖の先から黒い弾を作り地獄戦士ヘルソルジャーに放っ。

万丈目まんじょうめ LP4000 LP3500

「ぐぐぐ、ドロップアウトがこの俺様のライフに傷をつけるとは…

……」

じゃあ守備表示でだせよ！

「しかし地獄戦士ヘルソルジャーが攻撃され破壊されたとき、俺が受けるダメージを相手にも与える、どうだ参ったか！！」

地獄戦士ヘルソルジャーが爆発した後持っていた剣が飛んできて僕に当たる。

優LP4000      LP3500

何かさっきの台詞と少し矛盾してる気がするけど……………

「カードを2枚セット、ターンエンド」

優LP3500      暗黒界の術師スノウATK1700

手札 3枚      伏せカード×2

「俺様のターン！ドロー！！」

「装備魔法、早すぎた埋葬を発動！

ライフ800と引き換えに自分の墓地のモンスター1体を復活させこのカードを装備する」

万丈目まんじゆうめLP3500      LP2700

「地獄戦士ヘルソルジャー（ATK1200）を特殊召喚。

今召喚した地獄戦士ヘルソルジャーを生贖に、

地獄將軍・メフェストヘルジエネラル（ATK1800）を生贖召喚だ！」

黒い鎧を着た地獄の騎士、しかし攻撃力はレベル5の割りに攻撃力1800

ブロン様と同じ攻撃力………たいした事無い。

「行くぞ！メファイエストでスノウを攻撃だヘルアタック！」

安直すぎる攻撃名だ！

優LP3500           LP3400

「更にこのカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、  
相手の手札を1枚選び捨てさせる、右端のカードを捨てさせる」

あ、ラッキー。

「残念でした、捨てられたカードは暗黒界の武神ゴールド（ATK2  
300）

このカードは手札から捨てられた時自分フィールド上に  
特殊召喚する、さらに相手によって捨てられたなら

おまけ効果で相手フィールド上のカードを2枚破壊する、  
万丈目まんじょうめ、お前のモンスターと伏せカードを破壊」

ゴールドが持っている斧を振りかざすと  
万丈目の場のカードが全て吹き飛んだ。

「く………お、俺はターンエンドだ」

ふふふ、凄く悔しそうな顔をしてるぞ………

万丈目まんじょうめLP2700   すっからかん

手札   3枚

「僕のターン、ドロー」

僕は暗黒界の狂王ブロン（ATK1800）を召喚！」

『ギャハハハハ！！！！愚かな人間共め！！この俺様が叩き潰してやる！！』

あ、あれ？今何か声が？？

「ま、まあいいや……………」

ゴールドでダイレクトアタック！暗黒の斧！」

「ぐううー！」

万丈目LP2700                    LP400

「ブロンでトドメだ！」

「ぐうううあ！！！」

万丈目LP400                    LP0

万丈目のライフが0になり万丈目は床に膝をつける。  
手札のカードが床に散らばる。

「こ、この俺が負ける……………俺が……………エリートであるこの俺が……………  
…負けた！？」

僕は万丈目の近くまでより床に落ちたカードと  
墓地、デッキのカードを全て集め1つに纏める。

「万丈目、いや万丈目君、約束だったよね、  
この決闘の敗者はアンティ―としてデッキを奪われる」

「ぐ、ぐう……………く、くそ」

万丈目君が苦やしそうな顔をする。

「でも……………いや、  
このデッキは返す」

「な、何！この俺のデッキが要らないだと！！」

「いや違う、要らないんじゃない、

僕は万丈目君に知って欲しかったんだ、

相手が嫌がつてるのに無理やり決闘させたり、

校則で禁止になってるアンティ―を持ちかけたり、

ブルー以外の相手を見下したりさ。

そんなことしなくてもいいじゃん、万丈目君も昔は

心から決闘を楽しんでたんじゃないかな？

でもエリートになってプライドが邪魔して

努力することをかっこ悪いと思ったり、

決闘には勝たなくてはいけないと思うようになったり……………」

「……………」

万丈目君は黙ったままだ。

「だからさ、こんな決闘じゃなくて  
もっと自分も相手も楽しめる決闘をすればいいんじゃない？」

「……………」

「ゴメン、偉そうなこと言って、僕が言いたかったのはそれだけ、じゃあね」

僕は決闘場を後デュエルフィールドにする、

取り巻き達は 追っかけてこないっばい。

そろそろ歓迎会が始まる、寮に戻ろう。

まんじょうめしゅん  
万丈目準 視点

ま、負けた、この俺が、デュエルアカデミア中等部1位と言われ、高等部に来ても勝ち続けなければいけないのに……………

俺は勝たなくてはいけないんだ……………いや、違う、俺は負けちゃいけないんだ！

兄さんたちに言われた、万丈目家はどんなことでもやるからには1番に

ならなければいけないと、もし俺が入学早々同じ1年のイエローに負けたことが学校に知られたら、兄さんたちにはばれたら……………



……

更にアンティ―は要らないだと！？しかも敗因は俺の知識不足、更にはこの俺に説教だと！！ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな！！

「復讐だ……………」

勝つ、何としても……………勝つ、

どんな手段を使っても俺は奴に勝たなければいけない。

失った誇りを取り戻すため……………いや

そんなんじゃない、俺はただ純粹にアイツに勝ちたい！もう1度闘いたい！

「待っているよ……………雷堂…優」

第28話 「ヘルヘルヘルうるさいなあ」 b y 優（後書き）

はい、今回いきなり原作無視です、十代君来ませんでした、明日香さんに止められる前に万丈目君倒しちゃいました。いいじゃないですか二次小説なんだもの、かの有名なトキさんも言っていました『原作は投げ捨てるもの』って。

第29話 「さり気無く十代もキャラが変わっています」byなすび（前書き）

作者なすびの小説のネタ書きやすい場所らんきんぐ

やって来ました正直作って損したこのコーナー、でもやるからには最後までやります、では第2位!!

2位、よる寝る前布団の中で、小説の続きを考えてます、そうするとあら不思議！内容は7割以上忘れて朝になっているではありませんか!!

はい、これも半分以上妄想ですね、次回ついに第1位!!

第29話 「さり気無く十代もキャラが変わっています」「byなすび

「はあ、はあ、はあ、はあ……………疲れた」

万丈目君との決闘の後僕は急いでイエロー寮に戻り食堂に行った、着いた頃にはもう殆どの生徒が集まっており長いテーブルの上には美味しそうな料理が沢山並んでいた。

「よお、優かなりギリギリだな丁度今歓迎会が始まるところだぞ」

「うん、ちょっとあってね」

三沢君の隣の席に座る、何か僕デュエルアカデミアに来て三沢君と1番

話してる気がする。

僕が席に座って机に並べられた料理を見ていると

扉が開き30代後半〜40代前半と思われる少しやせ気味の黄色い服を着たおじさん（多分先生）が入ってきて真ん中のイスに座った。

そのおじさん（多分先生）の顔をよく見ると、

ひげが長く気の弱そうな顔をしている、はて、こんな人原作に出てたっけ？

「皆さんこんばんは、そしてデュエルアカデミアへ入学おめでとうございます、

私はイエロー寮寮長の榊山かはやまです。

担当は主に美術、あと家庭科も少し出来ます、皆さんこれからよ

ろしく願います」

おじさん（やっぱり先生だった）は軽く自己紹介して歓迎会は始まった。

もう何人かは友達が出来たみたいで会話していたり  
一人で黙々と料理を食べていたりとして比較的賑やかな歓迎会だった。

僕？僕は三沢君と話ながら料理をお腹いっぱい、美味しくいただきました、丸

歓迎会（と言っても料理を食べるだけ）も終わり僕は自分の部屋に戻った、

ふ〜お腹いっぱい……………ん？PDAにメールが来てる何々……………  
げ！万丈目君！！

『やあ、ドロップアウトボーイ、午前0時決闘場で待っている。  
お互いのベストカードを賭けたアンティールールで決闘だ  
勇気があるなら……………来るんだな。』

てか絶対来いよ！絶対勝ってやるもし逃げたら後でどうなるか  
分かってんだらうな。

……………ニゲタラノロウ』

そこでメール、動画だったからビデオメール？は終わった、うん

……………

こ、怖えええ〜えええええ！！！！

な、何これ！超怖いんですけど！！こなかったな呪う？呪うって言

ったー!!

いや、気のせいだよ、気のせいであってほしいよ！  
多分気のせいだよ……もう一度確認してみよう………

『やあ、ドロップアウトボーイ、午前0時決闘場で待っている。

お互いのベストカードを賭けたアンティールールで決闘だ

勇気があるなら………来るんだな。

てか絶対来いよ！絶対勝ってやるもし逃げたら後でどうなるか  
分かってんだろっな。

………ニゲタラノロウ』

やっぱ呪うって言うてる！行くしかないのか！

でももう門限はとくに過ぎてるしアンティールールは校則で禁止

されてるし………さっきは万丈目君が油断してたから勝ただけで

次はそう上手くいくか………やっぱあそこで僕が余計なこと言った  
から!?

あの時は本気でムカついてたからつい言っちゃったけど

やっぱウザかったよね………どうしよう…仕方ない行くか。

「あれアニキー、メールが来てるよ」

「ん、何々？午前0時決闘場でアンティールールで決闘？」

「行くんスか？アニキ？」

「いいや別に興味ね、大体俺この万丈目とか言う奴会ったことないし、

アンティールール校則で禁止されてるし、

そもそも俺が行ったらこの万丈目とか言う奴切り札無くなっちゃ  
うよ、

俺がこんな奴に負けるわけ無いし」

「す、凄い自信っス！！」

「午前0時に決闘場、今は9時30分だから後2時間30分か移動時間も考えて11時30分には行くか、ふわあああゝそれにしても眠い、少し仮眠取るか」

お休み。

午前0時30分

決闘場

「万丈目さん、雷堂の奴、来ないですね」

「一様入学試験の時調子に乗っていた111番にもメール送ったとき



ましたけど

そつちも来ませんね……………」

「雷堂優……………絶対呪う」

くおまけく

「（おかしいわね、この情報がただしければこの時間に1111番と亮の家の居候君が万丈目君と決闘するはずなんだけど……………」

こないわね、もう0時30分よ……………」

！！あれはガードマン！見回りに来たのね、

1111番達の決闘が見れないのは残念だけど今回は帰ることにするわー！）」

「コラ君達！今は外出禁止の時間だぞ！

しかも何故勝手に学校の設備を使っている！」

「ヤバ、万丈目さんガードマンです！」

「早く逃げましょう！」

「嫌だ！俺はアイツと闘うまで絶対ここを離れない！」

「仕方ない、取り巻き、一緒に万丈目さんを安全な所まで運ぶんだ  
！！」

「わ、わかった！」

「コラ、君達待ちなさい！！！」

第29話 「さり気無く十代もキャラが変わっています」「b yなすび（後書き）

この前この小説と同じ名前の主人公を見つけてしまった……………やべえ、かぶった……………。

ユーザー登録してから二次小説を読む時間が長くなりました、いろんな小説がありますね〜  
熱血系に外道系に恋愛系など、どれも楽しみに読んでいます。

大抵の小説には主人公は精霊を持っていますね、  
優は何か精霊付きますかね、精霊の場合『憑く』の方かもしてま  
せんね。

第30話 「今日で僕の物語は終わる（前半）」「by優（前書き）」

最近時間が取れて執筆が続きます！いやー、よかったよかった、ま内容は期待しないで欲しいです。

なすび  
作者の小説のネタ書きやすい場所らんきんぐ〜

正直誰も期待していない謎コーナーもコレで最後、では第1位の発表〜

1位、学校の授業中  
考えた内容が1番実際に採用されるのは授業中ですね、  
授業聞いていると思いきや頭の中は小説のネタを考えるのにフル活動  
しています。

これで僕が授業をほとんど聞いていないことが証明されました。

いや〜、今思うと僕結構プライベートのことかなり話してますね、  
このままだと僕の正体がバレそうですね、別にばれても構わないの  
ですが少し抵抗が……学校でからかわれる可能性もあるので……

じゃあ早速本編開始いい！！

第30話 「今日で僕の物語は終わる(前半)」 b y 優

うっん、いい朝だ！今日から早速授業が始まる、早く学校に行こ。

「いやー、太陽の光が眩しい、これが生きてると言う事なのか、お、こんな所に綺麗な花が、今日はいいことがありそうだ」

……………はい、現実逃避です。

万丈目君……………怒ってるかな、だって僕あのまま朝まで寝ちやうとは

思わなかったんだよ！少し仮眠とろうと思って気づくともう朝！

「何か鬱だ……………学校行きたくない……………」

学校行きたくないな、万丈目君怒ってるかな？

「そんな所に何突っ立てんだ、優？」

「ああ……………はあ」

「何かあったのか？」

「人生つて……………なんだんだらうね」

「ゆ、優が急に重い話し始めた！！」

「いや、何でも無い！こうならヤケだ！万丈目なんて知ったことが

！！」

「お、お何か知らんが解決したならいいや、じゃあ早速学校へ行こうか」

「あれ？いたの三沢君？」

「いたよ最初から！！」

そんな感じで僕の高校生活始めての朝始まった。

学校に着くと万丈目君は授業中ずっとこっちを見て呪いの言葉をずっと吐いてたときは転生前の妹との思い出が蘇ってきたよ……………

さて、次の授業は体育か、10分後体育館に学校指定のジャージで集合か。

三沢君はもう行っちゃったか……………他にまだ友達いないし、1人で行くか。

「体育か…昔は得意だったけど、今はどうかな」

昔の体を思い出す……………昔は部活と遊戯王一直線の人生送ってたからな……………

この体じゃ前みたいなきは多分出来ないと思う、これから鍛えるか？でももう15だし、

今からじゃもう遅いかな？基礎体力は小学校のときに培って置いた方がいいって

部活のコーチも言ってたし……………

そんなことを考えながらポーッと廊下を歩いていると

『ドンッ』

いって！何かに当たったぞ。

「い、痛いノーネ」

目を開けると廊下に転がっているクロノス先生、  
どうやら僕はこの人にぶつかって転んだらしい。

「あ、えーと、すみません、大丈夫ですか？クロノス先生？」

「いたたたた、ん！！！！」

だ、だだだ大丈夫なノーネ！心配御無用なノーネ！  
じゃあワターシはコレーデ、セニヨールも早く行かないと遅れて  
しまっデスーヨー！」

クロノス先生はものすごい勢いで走って行ってしまった。

何でそんなに急いでるんだろう？

しかもかなり慌ててたし……………

「ま、いつか、僕も早く体育館行かないとってあれ？  
なんだこれ？」

廊下に白い封筒が落ちていた。

「誰のだろう？」

中、開けて良いかな？駄目だよね……………  
どうしよう？

光に当てたら透けて見えるかと思って蛍光灯に近づけてみると  
少しだけ中の内容が読めた。

『天上院明日香より』

僕が読めたのはそれだけ……………でもこれでこの封筒は天上院さん  
の物だと分かった、むー。  
体育が終わったら届けようかな？

いや…もしこれがとても大事な物で他の人には見られてはいけな  
い物だったら……………

僕の7つのスキルその3心配性が発動した。

うん、天上院さんが1人のときに渡そう、  
しかも1人ならその後一緒に会話できそうだし。  
高校1年生の男子が女子と話したいがための精一杯の作戦。

「あれ？君も1年生？」

急に誰かに声をかけられた。

「え、そうだけど」

声をかけてきた方を向くと一人のレッド生徒（多分1年生）が体  
操着袋を持っていた。



背は僕とあまり変わらない……………

少し盛った、本当は僕より少し背が高い少年（少しだからね！髪の毛のポリリウムを取ったら同じくらいだからね！！）でメガネを掛けている、

髪はかなりモツサリしている、どっかで見たことあると思ったら  
コイツ

丸藤翔だ……………亮の弟、理奈さんの話によると昔亮の親が離婚して数年間会ってないらしいけど、髪の色が青だ。

きつと大好きだった亮と分かれ離れになったセイでグレ、髪の色を染めたんだろう、じゃ無きゃ髪の色が青の人間がこの世にいる訳がない。

「じゃあ一緒に体育館に行こうよ、僕いまいち何処に何があるか覚えてなくて……………」

「うん、いいよ！行こう！僕は雷堂優」

「雷堂君か、僕は丸藤翔これからよろしくね」

ウヤツホー何か知らんが原作キャラとフラグたっただぜ！

『キーンコーンカーンコーン』

「ヤバ、授業始まっちゃった！！」

「本当だ！急ごう！！」

「くく、あのイエローの生徒さえいなかったら、ワターシの作戦が成功してたノーニ、

仕方ない………休み時間にあのドロップアウトの机にこの偽ラブレターを

！な、無いノーネ！ワターシが書いた最高の出来の偽ラブレターが無いノーネ！

一体何処で？コレではワターシのサクセナーが！！」

夜

イエロー寮

「うう、結局渡せなかった……………」

今日一日天上院さんの様子を覗って、1人になるチャンスを探してたけど

天上院さん友達いすぎ……………いつも誰かというし、毎回違う女子と話してるし、

1人なるときなんてこれっぽっちもなかったよ……………

僕の手には1つの白い封筒、

分かるのはこれは天上院さんの物……………

どうしよう、もしコレがとっても大切な物で今日必要だったら？

もしかするとラブレターだったりして。

「ん、ラブレター？」

頭の隅で何か引っかかっている、何だろう、  
とても大切なことだったような……

何か思い出さないとヤバイ記憶……お、思い出せない……

（優は夜になり眠くなったので思考回路がかなり弱まっています、  
どれくらい弱まってるかというと有名な原作第3話のあのイベントを  
忘れてしまっぐらいです）byなすび

ああ！心配になってきた！もしコレが今日中に必要なもので  
明日僕が持っていることがばれたらかなりヤバイ！  
フラグが折れる、そうポツキリと折れる！

僕の7つのスキルその3心配性が発動した（本日2度目）

「こうなら最終手段！今から女子ブルー寮に乗り込むぜ！」

そう、このとき僕は、一番やってはいけない選択肢を選んでしま  
ったことに気づけなかった、

それは何故か？真相は神（と言っても田中ではない）のみぞ知る？

『キーコ、キーコ、キーコ、キーコ』

寮の近くの湖においてあったボートを勝手に使って  
現在女子寮に向かっています。

夜遅くの外出。

学校の公共物（と言ってもボート）を勝手に使っている。

男子禁制のはずの女子寮に入り込もうとしている。

以上3つもの校則を一度で破ってしまった、

やばいよー、まだ入学2日目だよ、もし学校にばれたらレッド  
に落とされるか

最悪の場合退学だろう……

くそ、僕の昔から患ってる病気、チキン症候群の発作が！！

今はこんなネガティブに考えるな！もっとポジティブに行こう！  
前向きに！！

校則が何ぼのもんじゃない！校則は破ってこそ校則なんじゃない！！

数分後  
女子寮

「ふー、やっと着いた」

何とか女子寮に着いた。

ボートを適当な場所に止めて女子寮の中に無事潜入できた僕。

それにしても女子寮の庭に入る鍵が何故か開いていた、

ちゃんと閉めない駄目だよー、怪しい人が入ってきちゃうよ、  
全く。

と言っても今回は僕が怪しい人で、鍵が開いていたせいで中に入れたんだけど。

『ガサゴソ』

「!」

今後ろで音が、誰かいるの？

「（な、何故昼間のイエロー生徒がこんなトコロニ!?  
しかも手に持っているのはウォーターシが書いた偽ラブレター!?  
一体何がどうなってるノーネ!?）」

や、やっぱり誰がいる、だ、誰？

「……………」

！もう1人！草むらの中とは別にもう1人背後に誰がいる……………

「ヤバイ、ここはいったん逃……………」

「がさないわよ！」

女の人の声が聞こえたと思ったならもの凄い力で腕を掴まれ引きずりこまれた！！

「うわー！助けてー！」

「誰が助けてよこの痴漢！」

え、痴漢？

「こ、こら暴れるな！く、ももえ！コイツ1人じゃ押さえつけられないから手伝って！」

「分かりましたわジュンコさん」

今度は別の人に足を抑えられた。

「グググ……………な、なぜこうなった！？」

「（ナ、ナンカ、メンドクサーイことになってルーノ！  
ワターシはなな何もシラナイーノミテナイーノペペロンチーノ）」

「  
『バコッ』

い、今頭から鈍い音が、ヤバイ……………苦しい、意識……………が…バタン。

目を覚ますと目の前には知らない天上が。  
そして僕をものごく睨んでるパジャマ姿の女子が3人。

「ア、アロハ……………なんちって」

「何がアロハを痴漢が」

「覗きをするなんて最悪の人間がすることですわよ！」

「もう言い逃れはできませんわよ」

「ま、まっってください、僕はただ天上院さんのだと思われる物を届



けにきただけです」

「わ、私に？」

女子3人の中に偶然いた天上院さんがいた、ラッキー。

「うん、これ！」

女子の1人が封筒を僕から取り上げ天上院さんに見せる。

「な、何これラブレター？」

「明日香様誰かに渡す予定だったんですか？」

「私、こんな汚い字書かないわ」

「ええ〜」

最初で最後の切り札、あっさり沈没……

「これで今度こそ言い逃れは出来ませんわよ覗き魔が！」

痴漢？覗き魔？待てよ

さっきの衝撃で忘れかけていた記憶が戻り始め

『痴漢』『覗き』『ラブレター』『女子寮』『知らない天上（院）』

あ、あ

……丸藤翔の覗き事件……

ま、まさか……

僕の背中にはこれ以上に無い冷や汗が流れ始める。

ま、まさか丸藤翔の覗き事件に僕がひっかるなんてー!!  
やばいよ！かなりやばいよ！どのくらいやばいかと言つと

僕の中学にいた先輩3人に囲まれてカツアゲされたときぐらいや  
ばい

実際その時は偶然先生が通りかかって助けてくれたけど今回は

「皆さんお揃いで何の騒ぎ？」

先生キタ           !!!

ここで現れた救世主、女神、今日体育の担当をしていた鮎川先生、  
いやー奇跡つてあるもんだね〜

「何かあったの？」

つてごわっ！！天上院さんと女子2人に押し潰された！

「お、重い………」

「しつれいね」「静かにしなさい」

小声で女子2人に言われる、今思うとこの2人名前忘れたけど  
天上院さんの取り巻き2人だ！！

「いえ、何でもありませんわ、お騒がせしてスイマセン」

「そう、じゃあ皆さん早くお部屋に戻ってお休みなさい」

先生はそのまま去って行ってしまった。

き、奇跡が！最後の希望がこつもあっさり砕けるとは……！！

「明日香さん、ここじゃまた邪魔が入るかもしれません」

「他の部屋に連れて行きましょう」

「そうねならアノ部屋に連れて行きましょう」

「アノ部屋ってな」

『バコッ』

あ、また変な音が頭から………い、意識が……落ちる。

知らない天井だ（本日2度目）

目を覚ますと今度は薄暗い部屋になっていた。  
それと僕は一体1日何回気絶させられるんだ。

「ここなら邪魔は入りませんわ」

「白状してもらおうじゃない」

「雷堂君がそんな事するとは思わなかったわ」

「だから誤解だつて！」

「どうせこのラブレターも自分で書いて見つかった時の保険にでもしようと思ってたんでしょ！」

「違いますよ！」

「雷堂君、本当のことを言ってちょうだい」

なんで誰も信じてくれないんだ！理不尽だ！

「仕方ない、あくまで白を切るつもりなのね、  
ならこっちにも考えがあるわ、ももえ！」

「分かりましたわジュンコさん」



「じゃあ早速服を脱がし蠟燭から垂れた蠟を」

「いやー！やめてー！これ以上言わないでー！  
聞いているだけで怖いから！」

「待つよジュンコ」

天上院さんがジュンコと言う人を止める、  
天上院さん……なんだかんだ言っ僕のことを

「私的にははずムチからだと思っわ！」

なんでやね　　ん！！！！！

「あら、なら私は爪剥ぎをやりたいですわ」

「お前ら全員Sかー！！！」

やばいよー！死ぬよー！僕の物語原作第3話で終わっちゃっよー！  
流石にコレは無い、ここで終わるわけにはいかない！！！！

「なら一斉にやるといっことで」

「賛成ー！！！」

やっぱり終わるー！！ここで終わるー！！  
うう、助けて……亮。

「どう、白状する気になっただかしら？」

「だからさつきから違つて言ってるじゃん……………」

「やばい、もう泣きそう……………」

「まだ吐かないき、仕方ないわね、ももえ  
雪乃を連れてきて」

「藤原様を連れてくるのですか？  
いや、流石にそれは……………」

「誰雪乃つて！僕の味方！それとも敵！  
いや敵だよね……………やっぱ。」

「流石に藤原様を連れてきたら……………  
折れますわよ、この人」

「折れる！？」

「何折れるつて！死ぬよりある意味怖いんですけど！！  
何処が折れるの！背骨！？それとも心！心なのか！？  
精神崩壊！！」

「うう、勘弁してくださいよお」

「今覚えれば僕……………入学してろくな目に会ってない。  
万丈目達に喧嘩売られて、呪い言葉吐かれて、  
そして今女性3人に拷問されそうです……………  
それに天上院さん、こんなキャラだっけ？」

「そう思うと何か……………やべ、涙出てきた。」

「ううっ、ううっ、だから違うって言ってるのに……  
何で信じてくれなんですか……うう、ひっく」

「え、あ……もう、何泣いてるの！」

「そんな嘘泣きじゃ私は騙されないわよ！」

「ジュンコ、もう止めなさい、流石に私達も調子に乗りすぎたわ」

「そうですねよ、よく見るとこの方、

案外可愛いですわよ、素敵な殿方も良いですけど  
この方みたいな可愛い子も良いかも知れませんわ」

「明日香さんはともかくももえは何言ってるの……！」

「ううう……もう、誰も信じられない……」

「ごめんなさい雷堂君、半分冗談だったのよ、

ついからかいやすかったから……面白くなっちゃって、  
ね、許して……謝るから」

「うう、もう、いぢわるしゅない……？」

「（な、涙目で上目使い！）

しないわ、だから泣き止んで」

「……うん、わかった……」

「（やばい……超可愛い、亮はいつもこんな子と暮らしてたの……？）

「



僕はいつの間にか出ていた涙を拭く。

「ジュンコ、ももえ、貴方達はもう帰りなさい」

「でも明日香さん(さま)」

「もう一度言っわ、もう帰りなさい」

「わ、わかりました」

「はい」

「素直でいいわ、おやすみなさい、2人とも」

「「おやすみなさい明日香さん(さま)」

「雷堂君？」

「な、なんですか？」

「さっきは本当にごめんなさいね、もう1度謝るわ、ごめんなさい。許してくれる？」

「うん、わかった、いいよ」

「(うん、わかった、いいよ。ですって！やばいわ超可愛いわ、

私の弟にしたい位どうせなら兄より弟が欲しかった、

もう帰ってこない兄さんのことより今はこの子をどっやって弟にするかが問題ね

……………誘拐……………いや、それは流石に……………ま、ゆっくり考えていくわ)

今日はもう遅いし私の部屋に泊まっていくと良いわ、付いて来て、案内するから」

「……………わかった」

僕は天上院さんに付いて行く。

第30話 「今日で僕の物語は終わる（前半）」 b y 優（後書き）

予約掲載、予約掲載、予約掲載する意味は特に無いですがなんとなく投稿する時間は決まっているほうが思っているので予約掲載機能をつかいいつも投稿するときは午前1時にします。

原作に入ると執筆が進む、やっぱりある程度台本のようなものがあったほうが書きやすいですし読者の方々も想像しやすいでしょうね、ではさようなら、おやすみなさい、次の投稿は………10月にならないと無理かな？出来れば9月中に出します。

第31話 「今日で僕の物語は終わる（後半）」 b y 優（前書き）

こ……………こんばんわ…なすびです。

凄くやつれていきます……………先週と先々週は部活の大会、

そして秋分の日は学園祭、か……………過労死する……………遊星のスピード・

ウォーリアーになるそして今日学園祭の振り替え休日、頑張って3  
1話を書き上げたわけです。

そして、今回の話はかなりやばいです、もしかすると苦情が来る  
かもしれません、理由は……………年齢制限しなかったことかな？

すこしネタバレすると天上院明日香、DSです、雷堂優、社会的  
に死にます。

これでも読んでくれる人なら先に進んでください。

では、はじまり、はじまり〜

第31話 「今日で僕の物語は終わる(後半)」 b y 優

「ま、何も無いけど上がって」

「……はい……」

あの軽く拷問だった時間から開放され今は天上院さんの部屋にいる。

部屋の中は……天上院さんが言ったとおり何も無い、妹以外に女性の部屋に入るのはこれが初めてだがあんまり違和感が無いな……まだ入学2日目だし、部屋に何も無いのは当たり前なのかな？

「あ、これお茶、飲み物コレ位しかないけど……」

「大丈夫です」

天上院さんからお茶をもらい一様女の子っぽい座布団を出してくれたので

それに座らせてもらう。

「……おいしかった」

天上院さんからもらったお茶を全部飲み、コップを床に置く。

「そう、それは良かった、

ん、雷堂君、こっち向いて」

「え、何で？」

天上院さんのほうに顔を向けると顔。特に目の辺りに何か……あ、タオルか。

僕の顔にタオルが当てられた。

「涙、まだ少し残ってるわ、拭いてあげる」

「あ、ど、どうも………あっ」

何か、少し恥ずかしい、お、お姉さんが出来た気分、まあ、実際同じ年だけど。

「これでよし」

「あ、ありがとうございます……ごさいます、天上院さん」

「いいのよ、元々私達が悪かったんだですから。

それと私のことは明日香でいいわ、なんか苗字で呼ばれるの慣れてなくて、ムズムズするのよね」

「わ、分かりました、じゃあ明日香……さん」

「……ま、いいわ、じゃあ私も優君って呼ぶわね、優君」

「はい…！」

「じゃ、もう遅いし寝ましようか、明日も学校だし」

「あー………はい、それで、僕は何処で寝ればいい？」

「何処つて、ベットで寝ればいいでしょ」

「じゃあ、明日香さんは？」

「私もベッドで寝るわよ」

「ええ！一緒に寝るんですか！？」

「嫌？」

「嫌とかじゃなくて、明日香さん女だし、僕男だし、しかもベッド狭くなっちゃうし」

「良いじゃないそれくらい、それとも優君……チキン……」

目を細めニヤリと笑う明日香さん。

「ぐっ……」

「凶星ね」

そうですよ！僕はこれ以上に無いくらいチキン野郎ですよ！  
中学の時も勇気がなくて女子に話しかけられなかったよ！  
彼女いない暦〓年齢だよ！

「じゃ、早速寝ましょ」

明日香さんがニヤニヤ笑いながら近づいてくる、

やばい、あの目はさっきの目だ！Sモードに入った明日香さんの  
目だ！



「あ、え…その……」

「優君」

近づいてくる明日香さんを前に僕は少しずつ後ろに後ずさっていき……

『ガタッ』

ヤバ、気づくと後ろはもうベッドだ……

僕はバランスを崩し背中からベッドに落ちる。

「優君」

「え……その……」

明日香さんが手をベッドに付け顔を僕の顔に近づける。

心臓がドキドキする、顔が赤くなるのが分かる、

明日香さんというと凄い楽しそうな顔でニヤニヤしてる。

「どう、楽しい？」

僕の顔と明日香さんの顔との距離は50cmない……

「ああ……えっと…そ、その」

だ、駄目だ、心臓がバクバクになって気分が……クラクラする……

しかし明日香さんは満足すると顔を僕から遠ざけた。

「あー、楽しかった！」

満面の笑みで言う明日香さん。

「な、何がですか？」

駄目だ、まだ顔が熱い……体に力が入らない。

「優君ってすっごくからかいやすいわ〜」

「うう、酷いですよ……もうしないって約束したじゃん」

「それはそれ、コレはコレ、あれはあれ」

「意味が分からないですよ！楽しいんですかそんなことして！」

「たのしいわあ〜」

凄く嬉しそうな顔で言う明日香さん。

「なんかねえ、優君をからかうと、

心のもやもやと言うかストレスみたいなのが取れて気分爽快！みたいなの？」

「人をストレス発散に使わないでくださいよあ〜」

「良いじゃない、優君も楽しかったでしょさっきの拷問と違って」

「大して変わらないです！死ぬかと思いました」

「……これだからチキンは」

あ！今この人チキン馬鹿にしたよ！

人間苦手なこと1つや2つぐらいあるじゃん！

なのに何この人！今これだからチキンはって言ったよ！

「まあまあそんなに怒らないで、

お詫びにお風呂貸してあげる、

優君まだお風呂ははいつてないでしょ」

「まあ、そうですか」

今日はボートで女子寮まで行ったから汗結構掻いたな。

「お風呂、さっき沸かしたのよね

丁度いま出来たと思うわ、入ってらっしゃい」

「はい」

く、ここは一旦風呂に入り作戦を考えよう。

僕はお風呂場で服を脱いで湯船に浸かる、

ブルーは浴場とは別に部屋1つ1つに風呂場が付いているのか、  
便利だな。

「それにしてもどうしようかな？」

このままだと僕の体が持たない、

まあ、普通に考えればこういう状況はラッキーと普通は思う、僕も昔はそんなこと思ってたけど、実際体験してみるとこれ以上になく心臓がドキドキして口から心臓が出てきそうだし、寿命が縮む。

「優君、着替え、ここに置いてくから」

風呂場の外から明日香さんの声が聞こえる。

「あ、わかりました」

とり合図返事しておく。

さあ、どうするか……………

逃げる…か。窓から逃走を図るか……………

「あ、優君、言っとくけどここ3階だから、馬鹿なこと考えてると死ぬわよ」

心が読まれてる!?!いやいやいやなんでわかったんだ!怖いわあ、いやマジで。

結局何もしないまま頭、体を洗い風呂場を出た。

えっと、確か明日香さんが着替を置いてくれたはず……………

うん、床に置いてあるよ、でもこれ……………どっからどう見ても女物だよね……………

そりゃそうだよ！だって明日香さん女性だし、

そして僕にどうしろと、床においてあるのはどっからどう見ても女物の服、

黒くてフリフリがついてるドレスみたいな服……………ゴスロリって言うんだっけ？

更にもう一つ黒いウサギの被り物……………う、ウサミミ！？

5分後

「お風呂からでした」

「キヤー！やっぱ似合うわ！クランコスで正解だったわ！」

はい、着ました……………ウサミミも着けました、だって他に着る服無かったし

学校の制服にしようとしたら、洗濯物カゴの中をあさってみたものの

見事に明日香さんに回収されていた、くそ、明日香さんの方が一枚上手だった……………

実際着てみた姿を鏡で見たところ不覚にも自分で似合うと思ってしまった、

く、は、恥ずかしい。

「すみません、1人テンション上がってるところすみませんが他の衣服は無いんでしょうか？」

「え！他のも着てくれるの！」

「いえ、そうゆつゝい意味じゃ」

僕がそう言う前に明日香さんはクローゼットの中をあさり始め、白いコートのような物や、茶色いローブ、あ、あれは全身タイツ

……………

「どれから着てもらおうかしらあ〜」

「いえ、誰も着るとは言ってますが……………」

てか明日香さんにコスプレ趣味があったとは……………でも殆どサイズが

明日香さんと合っていない物ばっか。

「じゃあコレから」

僕の発言は全無視ですか！

明日香さんの手には白いコートと羊の帽子……白魔導師ピケルのコスプレ？

あれ？じゃあ今僕が着てるのって……黒魔導師クラン！？

「いや着ませんよ、しかも何で全部女物！？」

「女物ばつかじゃないわよ。」

ほら、これは霊使いダルクのコス、男の娘用よ」

「そうゆう意味じゃな い！」

「まあまあ落ち着いて、冗談よ冗談」

「じゃあ、今僕が着てる服は」

「これは冗談じゃない」

「ないんか い！」

はあ、はあ、つ、疲れた無意味にツツコミすぎた。

「まあまあ、似合うわよ」 『パシャパシャ』

「PDAで写真撮らないでくださいよ！」

「大丈夫、これはもしもの時のきょうは 自分だけで楽しむから安心して」

「いま、一瞬不吉な言葉が……いや、  
後の台詞も十分危ないよ！今すぐ削除してよ！」

「ざんねーん、もう保存してロックしちゃったからもう消せないわ」

「鬼　　！」

「仕方ないわね、じゃあクランのコスプレをギリギリまで着崩して  
『おねがい』って可愛らしい声で言ってくれたら考えるわ」

「出来るわけ無いでしょそんなこと！」

「じゃあこのさっき撮った写真をデュエルアカデミア中の生徒に一  
斉送信し　　」

「お願いします、やりますからそれだけは勘弁してください」

「やっぱり脅迫用だった……！」

「はあ、はあ、お、お願いします」



「うーん、もうちょっとヒロイ声で、  
後『願います』じゃなくて『お願い』ね」

現在、明日香さんに脅迫され物凄い羞恥プレイさせられています、  
うう、もうお嫁に行けない……………じゃなかった、お嫁に行けない

……………

「テイク6、始め！」

「あつ、あつ、あん、お、お願い」

「うーん出来ればもう少しあえぎ声で『もっと！』とか『いやん！』  
とか言っただけいいわあ！」

鬼 ……！！！！

「じゃ、テイク7、始め！！！」

「あつ、うん、いやっ、も、も、もっと！お、おねが、いやっ！」

「キヤ ……キタコレ！！マジキタ！！！！はいOKです、  
動画でばっちり撮らせてもらったわ！」

「妹よ、兄は、兄はこんなにも汚れてしまった……………許してくれ」

俺は四つん這い状態になり『ポトツ』と頭のウサギの被り物が落ちる。

「もう満足よ！！これでうちは後10年闘える！」

何と!?

「見る? 優君の恥ずかしい写真と、  
とてつもなくエロイ動画」

「いえ、自我を保つため止めて置きます、  
てかその動画消してください、お願いします」

「え、じゃあ優君がアイスクャンディをあんあんとかえぎ声でペ  
ロペロ舐めて  
くれたら考えるわ」

「それ無限ループ、しかもどんどんハードルが上がってく!」

しかも写真削除してくれなかった  
明日香さん……もうキャラ崩壊って言うレベルじゃない……あ  
れはもう天上院明日香ではない。

「よかったじゃん、優君の青春の1ページに印象が残る物語が刻ま  
れて」

「いや、僕の青春の1ページが物凄く汚された気しないんです  
が……」

「あ、優君もし私にそんな趣味があると学校に言いふらしたら  
この写真を学校の生徒に一斉送信するから」

「きよ、脅迫だ!……!」

「学校を去るときは一緒よ」

「く、同じ条件のはずなのに僕が物凄く損してる気がする……………」

「さて、満足満足、ふわああ。

もう寝ましょ優君」

「……………」

「どうしたの？優君」

このままでは……………終わる！  
ならもう僕に残された手は

『ダッ』

逃走。

僕はドアに向かって走る、そして玄関の扉の鍵を開けると、  
僕は外に向かってダッシュ

「逃げたら写真、動画」

出来なかった。

僕はとぼとぼ歩きながら部屋に戻る。

「もうお前は逃げられない、みたいな」

や、ヤバイ、これはもう僕の学園生活が終わったといっても過言  
ではない！

「さあ、寝ましよう、優君」

ニヤリと微笑む明日香さん。

「あ、悪魔だ」

「あれ、鬼からバージョンアップしたわね、次は魔王かしら？」

あれはもう僕にとって魔王を超えた存在に見える。

ここはベッドの中、僕はさっきと同じで黒魔導師クランのコスプレ。

もしも、もしも今日僕が女子寮に行かなかったら、あの手紙を拾わなかったら、

僕の運命も少し、いや、かなり変わっていたかもしれない。

「優君」

ベットの中後ろから明日香さんの声が聞こえてくる。

「なんですか」

この声はさっきと違って真剣な……ふざけていない声だ。

「私、今日1日楽しかったわ、

でも優君はそんなに、いや、全然楽しくなかったでしょうね」

「……………」

僕は目を閉じて、眠ろうとする、

別に明日香さんの言葉を聞こうとしないわけじゃない、  
ただ少し気持ちを落ち着けたくて……………」

「でも1つ言いたいことがあるの……聞いてくれる」

「……………」

僕は何も言わない……………でもちゃんと聞いている。

「私ね、昔から少しかわっててね、

どんな風が変わってるかって言うと

それは優君が知ってるの通りね、

そう、あれが私の本性、表には見せない天上院明日香。

いままで隠してたんだけどね、ちよつと優君にあって

いままで抑えてたりミッターの様な物が落ちちゃって。

だから今日は楽しかった、いままで抑えていて溜っていたモヤモ

ヤが

一気に吹き飛んで凄くいい気分」

「……………」

うん、僕なんて言えば良いんだろう……………」

畜生……………」悔しいけど僕も少し楽しかったよ……………」明日香さんとのじゃれあい。

「だけど優君が凄く嫌な気持ちになったのは分かってる

ごめんなさい……………」私って都合のいい女ね、

人で散々遊んどいて、最後は謝って許してもらおうとする。

本当、ごめんなさい、私のこと幻滅しちゃった？」

「そんなこと……………」い」

「え？」

「そんなこと、ない。

明日香さんのことは幻滅しない、

だってコレが本当の明日香さんの姿でしょ、

だったら僕は明日香さんのこと、幻滅したりしない……………」

今日、色々あったけど、総合的に見ると凄く散々な目に会った。

でも、今日明日香さんに会えて良かったと、思う所もいくつかある、

だから……………」謝らなくて、いい」

「優……………」君」

あ、あれ？何でだろう、目から……………」涙が……………」

どうしてだろう？でもこれは明日香さんにかかわれたからとかじゃない。

理由は分からない、でも目から溢れる涙が止まらない、泣き止まないと、また明日香さんに変な気を使わせてしまう……

『ギョ』

「えっ!？」

後ろから……急に明日香さんに抱きつかれた。

「優君……」

「え？な、なな何ですか？」

「あ、ありがとう、ありがとう、優君」

「な、何がですか？」

僕は明日香さんの顔が見れないから、今のままの状態で返事をする。

「ありがとう、私、今日はじめて人に本当の私が出せた、始めは勢いで行っちゃったけど、気づいたときには止まらなかった、止められなかった、

だから、脅迫みたいなことしちゃったり、でも優君はこんな私でも……

幻滅しないで、いままで通りに接してくれて……だからありがとう」

「いえ、その程度のこと……わざわざ言わなくても」

あれ？いつの間にか泣き止んでる。

「そう……ありがとう……」

それと……私のことは、これから明日香って、呼び捨てで呼んで

「え!？」

「お願い」

明日香さんの手の力が強くなる。

「わかった……あ、明日香」

「な、何、優？」

明日香さん、じゃ無く明日香も僕のことを呼び捨てで呼ぶ、なんかお互い意識して呼ぶと恥ずかしい。

「おやすみ」

「ええ、おやすみ」

「これからも……よろしくね」

「当たり前じゃないですか……」  
「だって僕達はもう……友達じゃないですか」



「友達……………」

そして僕の意識は落ちていく。

「本当の自分を知っている、それでも友達でいてくれる人がいる……………もう、あの時とは違う……………」

明日香が最後に何か言った気がするけど、眠くて……………よく…聞こえなかった。

第31話 「今日で僕の物語は終わる（後半）」 b y 優（後書き）

ふう、やっちまったぜ！反省はしている、が！後悔はしていない！  
！次回は月1テストと見せかけて違います、この小説のオリジナル  
ストーリーです。

ではあまり苦情が来ませんように。くわばらくわばら。

第32話 「誰にも言えないひと夏の甘酸っぱい思い出?」 b y 優 (前書き)

最近 ( r y とノシの使い方を変えたなすびです。

最近スクラップデッキにはまっています。

今回亮が変態です (いつものことだろ)

今回明日香がDSです (前回と同じじゃん)

と言うマANNER気味な物語ですが最後まで読んでください。

第32話 「誰にも言えないひと夏の甘酸っぱい思い出?」 b y 優

朝。

目を覚ますと。

目の前に。

金髪美人のお姉さんが  
いた。

「ふう〜、落ち着け、落ち着くんだ、落ち着いて状況を理解するんだ」

そう僕は昨日女子寮に忍び込み、明日香さん…じゃなくて明日香にラチられ恥ずかしい格好（と言ってもただのコスプレだが）をさせられ

一緒に寝た（変な意味じゃないよ、そのまんまの意味だよ）

「よし、ここまで覚えてる、そして今」

なんだ、簡単じゃん、そういや僕明日香と寝たんだった……

あれ？一緒に寝た！そうだっけ！！いやいや寝たよ、無理やりベッドに押し込まれたんだっけ？まあいい。

そして今、大丈夫、僕は何もしていない、まあ逆パターンはいくつもあったが……

しかし！しかし！！目の前に何故明日香が！！

確か昨日はお互い別の方を向いて距離を取っていたような？  
しかしその後明日香に抱きつかれ……抱きつく……いやいちいち  
反応してたら

きりが無い、止めよう、つまり昨日は明日香と一緒に眠った、そ  
れで良いじゃないか。

でも目の前には明日香が………何か……分かりきったことだけど

………綺麗な人だな………髪は金髪だし（ハーフかな？）

白くキメが細かい肌、鼻も高いし、まつ毛も長いな………これで  
ノーメイクとは。

「人の顔ジロジロ見てそんなに楽しいのかしら？」

明日香が急に目を開けた。

「おわぁー！ー！」

ドンツッ！ガタッ！

いった！ー！く〜ベットから落ちて頭打った………

「ふふふ、どう？ビックリした？」

ベッドの下からニヤリと微笑む明日香。

「しましたよー！ビックリして心の臓が停止する所でした！」

「私もゾクゾク　　ドキドキしたわ、同年代の異性に真近で顔を見  
つめられて」

「今ゾクゾクって言おうとしましたよね！明日香さん！」

「……優、私のことは呼び捨てで呼んでって言ったでしょ」

「あ、そうだった！明日香」

「よし、じゃ、早速学校に行きましょう！」

「あれ？今なんか話がそれたような……」

「気のせいよ、早く行かないと遅刻よ！」

「マジッスカ！」

結局、遅刻でも何でもない、と言っか逆に早く来過ぎたぐらいだ。

「明日香、全然遅刻じゃないじゃん」

「あら、本当だわ、びっくり」

「全然ビックリしてないでしょあなた」

「ばれた？」

「はい」

そんやかんやで数十分後、HRもなしにいきなり始まる1時限目の授業。

「それデ〜は、皆さん、席についてクダサ〜イ、楽しい楽しい授業が始まるノ〜ネ」

扉からクロノス先生が入ってきて、教卓に教科書や名簿などを置く。

「じゃあ早速授業を始める〜ノ」

そうやっていきなり授業を始めるクロノス先生、  
せめて授業の始めに号令ぐらいしたらどうだろうか？

「それではまず、昨日の復習から。

フィールド魔法マジックと〜ハ、お互いの場に1枚だけ存在することができ

フィールド魔法マジックゾーンと言う特別な場所におきます〜ノ、

フィールド魔法マジックの効果はお互いのプレイヤーに効果がありま〜ス、  
例を言うと『ダークゾーン』このカードは場の全ての閻属性モン

スター

の攻撃力を500上げて守備力を400下げる効果〜デ

クロノス先生は昨日習ったフィールド魔法マジックについて説明していく、  
でもなんか……………話し方がウザイ……………。



あふたゝすくーる（放課後）

放課後、授業が全て終わりもう自分の寮に帰っていい時間、

教室を見渡すとすぐに帰ってしまう生徒や

友達と楽しそうに話している生徒、1人で読書している生徒、

色々いるな。

さて僕はもう帰るか、別にもう用は無いし。

寮に戻ってる途中入学したとき入学生全員に配られた生徒手帳、  
もといPDAと呼ばれる携帯端末を使う。

これにはメールや学校の地図、デュエルアカデミアの校則や校歌  
が書かれている、

ん？校歌、あるんだデュエルアカデミアにも。

「あれ？メールがきてる」

受信BOXにメールが10件も入っていることに気づく、  
10件！何でこんなにきてんの！気づかなかった……

「何々……うわ……全部亮からだ」

内容は『新学期になってから1度も優の顔を見ていなんだが……  
忙しかったらいいんだが、もしヒマでやる事が無かったら  
俺の部屋まで来てくれるか？いや、嫌ならいいんだ、でも  
もし暇なら、今日じゃなくてもいいから来てくれると嬉しい、  
別に忙しかったり行きたくないんなら

「長っ！！そしてまわりくどっ！！」

まだ続きが半分以上あるがこれ以上読むのは面倒くさいので  
PDAを制服のポケットに戻す、残りのメールも同じような内容  
だろう、

つまり

「ブルー寮に行きゃいいんでしょ行けば」

僕はイエロー寮からブルー寮に方向を変え、再び歩き出した。

10分後

「ここがブルー寮、うん、感想を一言で言つと………」

この寮の第一印象。そりゃもう。

「城や!!!!!!」

城がある、太平洋のど真ん中、島の中に城があるでえ〜

口調が関西弁だがこんなことは関係ない、

デュエルアカデミア……金の配分間違ってるよ、

なぜブルーに城があるのにレッドはおんぼろアパートなんだよ…

……

「はあ、よく分かんないなこの学校のお金の使い方」

それは置いといてまずは亮の部屋に行こう。

「おい！イエローがここに何のようだ！」

寮の門をくぐるうとしたら1人のブルー生徒に呼び止められた。

「ん？なに？」

「何じゃない！イエローの分際でブルーの寮に入ろうとするとは、貴様……どうなるか分かってるのか？」

はあくう、うぜええええ！！！！！

は、何コイツ、イエローはブルー寮に入っちゃいけないの？  
そんなの生徒手帳に書いてあったか？

これだからエリート風情が………  
ブルー生徒がみたいにいい人ばつかならいいんだけど。

「……じゃあ、どうすれば通っていいんですか？」

「それはもちろん決　　」「ちよつと待ちなさい！」「こ、この声は！」

急に僕達の会話に誰か……一人の女性が割り込んできた。

「イエローの生徒がブルー寮に入ってはいけない校則なんて無いはずよ」

「あ、明日香」「明日香たん！」

その声の正体は明日香だった。

ん、でもなんか今隣のブルー生徒も明日香の名前も呼んでいたよ  
うな？

しかも…明日香たんって…たんってなんだよ。

「優君久しぶり、いや、さっきぶりね」

「そうだね、それで明日香もブルー寮に何か用事があるの？」

「ちがうわね、どちらかと言つと優、  
貴方に用があるわね」

「え、僕？」

僕は首を傾げる。

「授業が終わつた瞬間すぐに帰つちやうんだもん、  
一緒に帰りたかつたのにい」

「ああ、い、ごめん、明日香」

「いいわよ別に、その代わり今度一緒に帰りましょ」

「うん」

「ああ、かわいいわあ」

「明日香……なんで頭なでるの？」

「いいじゃない別に」

「あ、あう」

「（ああ～いやされるわ～）」

「うう……」

「さっきから黙ってたら何なんだ、君たちは！」

イチャイチャして！てかさつきから僕が話してただけど！

と言うより何なんだ、そのイエロー！

僕の明日香たんよといちゃいちゃして！！」

「うるせえ」。

明日香、この人と知り合いなの？

さつきから『僕の明日香たん』って言ってるけど」

「知らないわ、こんな人」

「明日香さんは僕のこと知らないかもしれないが僕はキミのことを知っている！

突然で悪いが僕と付き合ってく」

「嫌だわ」

あっさあり！&即答！！

「ぐばああ」

ブルー生徒 LP4000 LP0

ああ、あの人の心がワンターンキルされた。

「さ、行きましょ」

「あ、うん」

そして僕と明日香はブルー寮の中に入っていった。

「明日香も亮に何か用があるの？」

「いや、無いわね」

「ないんだ……じゃあなぜここに？」

「優が行く所に私も付いていくわ」

「す、ストーカー……」

「保護者としてよ」

「さいですか……」

明日香と歩いて約2分

「ここよ、亮の部屋は」

目の前の扉には『Ryou Maruhuzi』と書いたプレートが吊るされていた。

ここが亮の部屋であることは間違いないことは分かった。

『コンコン』

僕は扉を軽く2回ノックする。

何故か明日香は僕の後ろで黙って立っている。

暫くし、扉が開き、中から亮が出てきた。

「優！よく来たな！！」

何か凄く嬉しそうな顔をする亮

「……………何故明日香がいる……………」

しかし2秒で不機嫌顔になった。

「あら亮、私がいたらいけないのかしら」

「ぐぐぐ……………」

「と、言うわけでおじゃまします」

亮の部屋に入っていく明日香。

「え、じゃあ、お邪魔します」



亮の部屋の中は基本的あまり物が無い&広い、  
これを1人で使ってるのか………いいな。

「それで、何か用事があって僕を呼んだの？亮」

「……………」

あ、あれ？無視なの亮！

「りよ、亮？」

「……………」

やっぱり無視された………亮の顔を見ると亮は何故かずっと  
明日香の方を見ている。

また明日香も亮の方を見ている………

つまり見つめあっているのかな？でも何か

『見つめあう』より『睨みあう』の方が合っているかもしれない

……………

「（明日香、何故お前まで来た………俺は優を呼んだがお前は呼んで  
ないぞ）」

「あら、別にいいじゃない、私は優の保護者として来たのよ」

「（保護者だと、優の保護者は俺だぞ、優は俺の家に住んでいるし入学の手続きも全部俺が済ませた、つまり俺の方が優の保護者に相応しいと言える）」

「（そうとは限らないわよ、決闘オタクの亮デュエルといると優まで決闘オタクになってしまっわ）」

「（いいだろ別に！優は俺が立派な決闘者デュエリストにすると決めただん！）」

「（優の将来を勝手に決めるのはたとえ亮でも許されないわよ）」

「（なんだと、デュエルアカデミアはプロ決闘者デュエリストを育成する学校、つまりこの学校の生徒は全員プロ決闘者を目指していると言っても過言ではない！だから優をプロにして何が悪い）」

「（そうかしら、私がデュエルアカデミアの中等部に入ったのは兄さんと同じ学校に入りたかったからだし高等部に入ったのは行方不明の兄さんの手がかりを少しでも欲しかったから入ったのよ、つまりこの生徒全員がプロ決闘者デュエリストになりたくて入っているわけじゃないわ）」

「（……………このブラコンめ）」

「（ぐ……………そうね確かに私はブラコンだったかもしれないわ、でも今は違う、今は優と少しでも一緒にいたいがためにここにいるのよ、もう兄さんなんてどうでもいいわ）」

「（どうでもいいだと！？じゃあ俺がこの1年吹雪の情報を集めた

意味が無いじゃないか！俺がお前のためにどんなに頑張って吹雪の情報を集めたことか……………」

「（そのことは感謝しているわ…………でもね…………もういいのよ…………兄さんはきつともうこの世にはいない…………死んだ人のことをとやかく言うのはもうやめたの）」

「（なんだと！お前この前まだ死んだわけじゃないのに死んだって決め付けないでよ！って俺のことビンタしたこと覚えてるのか！！）」

「（覚えてないわ）」

「（本当都合のいい女だな！）」

「（待つよ亮、話がそれてるわ）」

「（明日香自分が不利になってきたからって話しを戻すきか）」

「（では私と亮が決闘<sup>デュエル</sup>して勝ったほうが優の保護者になる権利を持つ、この条件で決闘<sup>デュエル</sup>しようじゃない）」

「（おい！俺が今言ったこと聞いてたか！）」

「（聞いてないわ、そんなことより決闘<sup>デュエル</sup>するの？しないの？）」

「（ぐ、まあいい、しかしデュエルアカデミアの帝王、カイザーの異名を持つ俺に賭決闘<sup>デュエル</sup>を挑むとは…………いい度胸だ）」

「（私もだてにデュエルアカデミアの女王とは言われて無いわよ）」

「(いいだろう、その決闘<sup>デュエル</sup>、受けてやる)」

「(ふ、その言葉、二言はないわね……貴方の機械サイバーと私のサイバーガール、サイバー同士の決闘<sup>デュエル</sup>がいま始まるうとしているわ)」

「(俺のサイバー流デッキとお前の市販のパックで売ってるサイバーガールを一緒にするな!!)」

明日香と亮アイコンタクト会話、実質15秒。

「行くぞ明日香!」

「いいわよ亮」

「決闘<sup>デュエル</sup>!!」

何故だろう? 亮と明日香が数秒間見つめあってたら急に決闘<sup>デュエル</sup>開始ためぞ。

「先行は貴方に譲るわ、亮」

「いや、明日香に譲ろう」

「いらないわ、先行どうぞ亮」

「遠慮するな明日香」

「遠慮するわ亮」

「いや遠慮しろ」

「遠慮しないわ」

「遠慮しろ」

「遠慮しないわ」

「遠慮し」

「待つのよ亮、このままでは無限ループよ、  
ここは普通にジャンケンで勝った方が先行を取ることになりましたよ  
う」

「ふ、いいだろう」

「「最初は」

「グー」 亮 「チヨキ」 明日香

「私の負けよ、よって亮貴方の先行よ」

「っ！汚いぞ明日香！！」

「汚くないわ、これも作戦の内よ」

「ぐ、仕方ない、俺の先行ドロ―！」

亮と明日香の先行の譲り合いの末亮が先行になった。  
いやー先行の取り合いはあるかもしれないけど、  
後攻の取り合いは初めてみた。

亮の初期手札6枚

サイバー・ドラゴン

サイバー・ドラゴン

サイバー・バリア・ドラゴン

アタック・リフレクター・ユニット

死者蘇生

ボーン・フロム・ドラゴニス

「（なんだこれは！て、手札事故！俺が後攻ならよかったが……  
しかもサイバー・バリア手札って……）」

亮は少し悩んだ顔をし、暫くして手を動かした。

「く、俺はカードを1枚セット、ターンエンド」

亮LP4000

手札5枚 伏せカード×1

「私のターン、ドロ―！」

エトワール・サイバー（ATK1200）を召喚！」

明日香の場に茶髪の髪の長い女性が現れる、  
確か明日香のデッキは融合と儀式と一緒にしたよく分からないデ  
ッキ使ってたような？

「そのままバトルフェイズに突入するわ！  
エトワール・サイバーで亮にダイレクトアタック！  
エトワール・サイバーは直接攻撃する場合攻撃力を600上げる  
！」

エトワール・サイバー ATK1200          ATK1800

「く……………くそ！」

亮 LP4000          LP2200

「私はカードを1枚セット、ターン終了よ」

明日香 LP4000    エトワール・サイバー ATK1200  
手札4枚          伏せカード×1

「俺のターンだ、ドロ！」

この決闘<sup>デュエル</sup>まずは明日香が先にダメージを与えた、  
しかも亮の場にモンスターは0、でも亮は確実にこのターン  
サイバー・ドラゴンを召喚するだろう。

「相手の場にのみモンスターがいる場合サイバー・ドラゴン(AT  
K2100)は  
特殊召喚可能！」

やっぱり出てきたサイバー・ドラゴン！たまに積み込んでんじやないかと疑いたくなるが

きつと亮のドローク力が強すぎるんだよきつと！！

「サイバー・ドラゴンでエトワールサイバーを攻撃！エヴォリユーションバースト！」

「そうはさせないわよ！<sup>「フラッシュ」</sup>罠カード発動、ドゥーブルパッセ。サイバー・ドラゴンの攻撃は私に当たる」

サイバー・ドラゴンが出した光線が明日香に直接当たる。

「くう！」

明日香LP4000                    LP1900

「そしてエトワール・サイバーは亮にダイレクトアタックする」

エトワール・サイバーATK1200                    ATK1800

亮LP2200                    LP4000

「もう亮のライフが400に！」

「お、俺はカードを1枚セットし、ターンエンドだ」

亮LP400    サイバー・ドラゴンATK2100

手札4枚    伏せカード×2



「私のターンね、ドロー。」

ブレード・スケーター（ATK1400）を召喚して融合を発動、  
エトワール・サイバーとブレード・スケーターを融合！

融合デッキよりサイバー・ブレイダー（ATK2100）を融合  
召喚！」

融合……2体以上の特定のモンスター同士を合体させ

新しいモンスターを融合召喚する、デュエルモンスターズ  
に昔からある召喚方法。

うん、青く長い髪とバイザーが似合ってたかっこいいな。

確か相手の場に合わせて効果が変わるモンスターだったような。

「行くわ！バトルフェイズ！サイバー・ブレイダーでサイバー・ド  
ラゴンを攻撃よ！」

回転しながらサイバー・ドラゴンに蹴りをかますサイバー・ブレ  
イダー。

「サイバー・ブレイダーは相手の場にモンスターが1体のみの場合  
戦闘では破壊されないのよ！」

よって同じ攻撃力でもサイバー・ブレイダーは生き残る。

「ふ、俺の切り札がサイバー・ドラゴンだけだと思ふなよ、  
<sup>トラップ</sup>罠カード発動！アタック・リフレクター・ユニット！

場のサイバー・ドラゴン1体を生贄に手札の

サイバー・バリア・ドラゴン（ATK800）を特殊召喚！」

サイバー・ドラゴンは何も装備していないスタンダード状態から

首周りに厚い装甲をつけた防御型のタイプになった。

「サイバー・バリア・ドラゴンは攻撃表示のとき相手の攻撃を1度無効にすることができる」

「く、そう簡単にサイバー・ドラゴンを破壊させてくれないわねならカードを2枚伏せターン終了よ」

明日香LP1900 サイバー・ブレイダーATK2100  
手札1枚 伏せカード×2

「俺のターン、ドロー」

「あのサイバー・ドラゴンは厄介ね、伏せカード発動、サンダー・ブレイク、手札1枚をコストに亮の場のサイバー・バリア・ドラゴンを破壊するわ」

破壊されるサイバー・バリア・ドラゴン

これで亮の場は再びがら空きに、流石明日香さん亮にとって不利な先行をあえて選ばせ一気に自分のペースにしてしまっている

だてにデュエルアカデミアの女王とは言われてないね。

「なら俺は死者蘇生を発動、墓地のサイバー・ドラゴンを蘇生、さらに融合を発動！場と手札のサイバー・ドラゴンを融合！でろ！サイバー・エンド・ドラゴン（ATK4000）」

出た！亮の切り札サイバー・エンド！

「サイバー・エンドでサイバー・ブレイダーを攻撃！  
エターナル・エヴォリユーション・バースト！！！」

サイバー・エンドの口からそれぞれ光線が吐き出される

明日香のライフは残り1900、サイバー・ブレイダーは  
戦闘じゃ破壊されないが超過ダメージは受ける、

つまり4000 - サイバー・ブレイダーの攻撃力2100 = 19

00

このまま何もしなければ亮の勝ちだ！

そう、何もしなければ……ね。

「甘いわ亮！最後の伏せカード発動！ギブ&テイク！」

「「ぎ、ギブ&テイク!?」」

確か効果は

「ギブ&テイク、このカードの発動に成功したため

私の墓地のモンスター、ブレード・スケーター（DEF1500）  
を亮の場に守備表示で特殊召喚するわ！

その後サイバー・ブレイダーのレベルをブレード・スケーターの  
レベル4つ分上げる」

そう、シンクロがないこの世界ではデメリット効果しかない

分けの分からない罠<sup>トラップ</sup>カード、しかし明日香の狙いは  
レベルを上げることじゃない。

「この瞬間亮の場のモンスターが2体になった、

よってサイバー・ブレイダー第2の効果が発動する、



亮LP200 何故かいるブレード・スケーターDEF1500  
手札0枚 伏せカード×1

「私のターン、ドロー、

あら、モンスターじゃない……

仕方ないサイバー・ブレイダーでブレード・スケーターを攻撃！」

これで再び亮の場はがら空きに……

亮の防戦一方な決闘だ<sup>デュエル</sup>…… 亮……1度ペースが乱れると

一気に落ちるな……いや、それより明日香のプレイングセンスが  
いいんだなきつと。

「カードを1枚伏せ、ターン終了よ」

明日香LP1900 サイバー・ブレイダーATK2100  
手札0枚 伏せカード×1

「お、俺の……ター……ン」

亮の手が少し震えてる……だ、大丈夫亮!?

「どっしたの亮?早くドローしなさい」

「……く」

やべ……何かいいところだけどトイレ行きたくってきた、  
実はさっきから我慢してたんだよね……

「亮……」

「な、なんだ……優

（もしかして俺のことを応援してくれるのか優！）

「ちよつとトイレ貸して」

「ぐばあー！」

メンタルポイント

亮MP300

メンタルポイント

MP0

「（亮の残り少ない精神力が今ので全部削りきられた！）」

僕はトイレに向かう、何か亮のLPじゃないなにかが

0になった気がするが僕は多分関係ない関係ないつたら関係ない  
きつと。

まるふじりょう  
丸藤亮 視点

ゆ、優がトイレに行ってしまった……

そんなことより危ない……このままでは……負ける！

確かこの決闘デュエル、勝った方が優の保護者になる権利を賭けていたよ  
うな……

つまりこの決闘デュエルに俺が負ければ……優は明日香の物になる！？  
明日香はああ見えて手段を選ばない人間だからな……  
しかもさっき明日香は優と少しでも一緒にいたいからこの学校に  
いると言っていたな、  
つまり……明日香って……シヨタコン！？ならば優を明日香に  
渡すわけにはいかない

( お前が言うな )

そう、優は渡さないぞ……ここで明日香を殺れば優は俺の物  
フハハハハ！フハハハハ！フハハハハハ！！フハハハハハハハ  
！！！！

「はーはっはっはっはー！！！！」

「ど、どうしたの亮？ついに頭がいちゃったの？」

「ふふふ、ふふふふふ……明日香あ、  
貴様に優は渡さないぞお……」

「ちょ、亮、マジで顔が怖いんだけど……」

「いくぞお！！俺のターン、ドロオオ！！！！  
キタ、キタゾオオ！！！！魔法カード！  
オーバー・ロード・フュージョン！！  
墓地の融合素材を除外し、融合モンスターを融合召喚するうう！！  
墓地の3体のサイバー・ドラゴン、サイバー・バリア、サイバー・

エンド

の5体を融合う！！出る！  
キメラテック・オーバー・ドラゴン（ATK？）」

これはサイバー流のリスクト決闘デュエルに反するカード、  
だが優を取られるぐらいならここで使った方がマシだ！  
何かこの前もこんなことしたような気がするが多分気のせいだ！

「キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃力は融合素材にしたモ  
ンスター

数×800となる、融合素材にしたモンスターは5体！

よって攻撃力は

キメラテック・オーバー・ドラゴンATK？                   ATK4000

「よ、4000!?!?」

「キメラテック・オーバー・ドラゴンでサイバー・ブレードに攻  
撃！

エヴォリューション・リザルト・バースト!!!」

「く………バースト畏発動、ドレインシールド、  
攻撃モンスターの攻撃を無効にし無効にしたモンスターの  
攻撃力分ライフを回復する!」

明日香LP1900                   LP5900

「これでこのターンはしのいだわ」

「はっ、それはどうかな？キメラテック・オーバー・ドラゴンは  
融合素材の数だけモンスターを攻撃できる！  
よってあと4回攻撃が残っている!」

「なんですって!?!?」



「行けええ！エヴォリユーション・リザルト・バースト！！  
ヨンレンダアアアア！！！！！！」

「きゃああああああ！！」

明日香LP5900      LPO

「く、私の……………負け……………たった1枚のカードで逆転されるなんて……………」

「ふはははは！ふはははははは！」

「りよ、亮……………か、顔が軽くいつちゃってるんだけど大丈夫？  
亮のファンが見たら泣くわよ……………」

「ふはははは！ふはははははは！待っている優……………」

「（あれ、これって……………優がピンチ系？）」

「ふゝ、すつきり、あれ？もう決闘終わっちゃたの？」

雷堂優らいどうゆう 視点

「ふゝ、すつきり、あれ？もう決闘終わっちゃたの？」

部屋に戻ると昔見覚えがあるような光景が目に入った。

「（タイミング悪っ！！優！！）」

「優う、探したぞお！！」

あ、あれ？何だろう………第17話あたりのラストと似た光景が

………

「ゆ、優う」

「何か分かんないけどここは逃げるわよ、優」

「え、うん、わかった！」

僕は明日香と一緒に亮の部屋をでてひたすら走る。

「ちょっと明日香！どうなってんの！！」

「分からないわ、亮と決闘<sup>デュエル</sup>してあと少しの所で  
負けてしまったわ………そしたら亮がおかしくなって………」

「まてえ〜優うう！！」

「おわあ！！亮が追いかけてくる！！！」

「今はとにかく逃げるのよ！」

数分後

ブルー寮裏

「はあ、はあ、もう無理……走れない……」

「判事急須かしら……」

「ははははは！もう逃げられんぞ！」

「（小さな男の子とか弱い女性が、目が狂った男に追いかけられてる……普通にホラーよこれ）」

「（いや……昨日の明日香も同じ位ホラーでしたよ……しかもか弱いってwww）」

「（優……色々ツツコミたい所が満載だけど今はどうやって亮から逃げるか考えないと）」

「（そ、そうだね……なんかピンチになったせいか明日香と目を合  
わせただけで言葉が通じてるよ）」

「（これがアイコンタクトと言っやつよ優）」

「（そうですか……）」

「（ところで、亮と1ヶ月一緒にいた優ならこの状態……そうねこ  
の状態の亮を『亮のヘル化（仮）』としましょう、それで亮のヘル  
化（仮）から元の亮に直す方法、知ってる？」

「（まあ、知ってると言えば知っていますね……亮の頭に気絶する  
ぐらい強い衝撃を与えれば数時間記憶が飛ぶけど元の亮に戻るはず  
……多分）」

「（頭に強い衝撃ねえ……決闘盤でぶん殴るとか……）」

「（まあ、そんな感じ）」

「（強い衝撃で簡単に言うけど……そう簡単にはいかないわよね）」

「（そうですね……前は3人がかりで何とか成功したぐらいだし……  
さらに代償として1人死んだし）」

「（死んだの!?)」

明日香と優アイコンタクト会話、実質10秒。

ブルー寮3階

ブルー生徒「さーて、花瓶に水をあげるか  
おっと！ヤベ…手  
が滑った！」

『ガツシヤン』

ブルー生徒「あゝ落ちちゃった……知くらね」

「（小さな男の子とか弱い女性が、目が狂った男に追いかけられてる……普通にホラーよこれ）」

「（いや……昨日の明日香も同じ位ホラーでしたよ……しかも弱いってwww）」

「（優……色ツツコミたい所が満載だけど今はどうやって亮から逃げるか考えないと）」

「（そ、そうだね……なんかピンチになったせいか明日香と目を合わせただけで言葉が通じてるよ）」

「（これがアイコンタクトと言うやつよ優）」

「（そうですか……）」

「（ところで、亮と1ヶ月一緒にいた優ならこの状態……そうねこの状態の亮を『亮のヘル化（仮）』としましょう、それで亮のヘル化（仮）から元の亮に直す方法、知ってる？」

「（まあ、知ってると言えば知っていますね……亮の頭に気絶するぐらい強い衝撃を与えれば数時間記憶が飛ぶけど元の亮に戻るはず………多分）」

「（頭に強い衝撃ねえ……デュエルディスク決闘盤でぶん殴るとか……）」

「（まあ、そんな感じ）」

「（強い衝撃で簡単に言うけど……そう簡単にはいかないわよね）」

「（そうですね……前は3人がかりで何とか成功したぐらいだし……さらに代償として1人死んだし）」

「（死んだの!?!）」

明日香と優アイコンタクト会話、実質10秒。

「ふはははは、ふははは」

僕達がもう駄目だと諦めたら、偶然か奇跡か神の悪戯か田中の気紛れか

天から花瓶が降ってきた亮の頭に見事Hitした。

『バタン』

地面に倒れこみ動かなくなる亮。

「……………」

「……………」

「とりあえず」

「助かったみたいだね……………はは」

その後亮はただ気絶しているだけだったので（切り傷も無かった）2人で亮の部屋まで運びベッドに寝かせといた。

そして今日あったことはなかったことにして  
あの変な亮（亮のヘル化（仮））は幻覚で2人とも疲れていたんだ  
と言っことにしておいた。

めでたしめでたし。



数時間後  
亮の部屋

「ぐっ！こ、ここは？……俺は一体何を……あ、頭いた……」

「な、何も思い出せない………と言っより俺は誰だ？ここは何処だ！？」

「誰か教えてくれ！！」

「めでたし……めでたし………かな？」

第32話 「誰にも言えないひと夏の甘酸っぱい思い出?」 b y 優（後書き）

久しぶりに更新つと、疲れた……………

ここだけの話今回のデュエルは優VS明日香VS亮というバトルロイヤル形式で行こうとしたんですがいつの間にか明日香VS亮で途中亮がヘル化するというさらに記憶を失うと言うカオスな感じになつてしまいました。

まあ、僕的にはこうゆう感じでいっかと、後悔はしていません。次回は原作どおりだとテストの話ですねでもこの小説の次回はまた小説オリジナルストーリーです。

それとこの世界はシンクロ、エクシーズは存在しませんが5D・S ZEXALのカードは存在します、ガード・ブロックとか。理由?そりゃ僕の知識量じゃDMとGXだけのカードで決闘を考えるのは難しいので……………

第33話 「俺は毎日1時間かけて髪の毛をセットしているぜ」b y 神楽坂(前)

ついに開放されたぞ！自由だ！今に見ている人間どもめ……今すぐ復讐　　はしませんけどなにか？

どうも！やつと更新できました33話です。

ついでに何から開放されたかと言うと、中間テストです、いやあれはマジ地獄でしたテスト前1週間はパソコン使えなくてストレス溜リングリングでしたよ。

「続きかけない」「小説読めない」「感想書けない」「ストレスは溜る」

の4重苦……しかしそれからついに開放された！

結果？聞かないください……英語が……英語さえなければ……

と、言うわけで今回はテスト勉強の話です。

& 友情的な？溜ったストレスを発散させて書いた33話です。

第33話 「俺は毎日1時間かけて髪の毛をセットしているぜ」b y 神楽坂

僕がデュエルアカデミアに入学してそろそろ1ヶ月。

いやはや、時が経つのは早いですなあ〜

でもこの1ヶ月、何も起こらないまま終わったわけではないのだよ。

僕がどれだけ苦労したことやら……

僕が亮の部屋に行った次の日、ブルー生徒は普通通らないはずの通学路に

何故か明日香と遭遇して一緒に学校に行くことになった。

そこまでは良かった、しかしあと少しで学校に着く、とまで行った所に登校中だと思われる亮がいた「折角だから声かけてみましょう」

と言い出した明日香と一緒に亮の近くまで行くと  
亮がいつもと違うことに気づく……そう、亮は何故か、記憶喪失になっていたのだ!!

なんでだよ!と思う気持ちが沢山あったが今はこの状態の亮を1人にはしておけない

とのことで学校休んで亮の部屋に行った。

亮はやはり記憶喪失で「俺は誰だ、ここは何処だ」と喚いている。正直こんな状態の亮を人前に見せるわけには行かないので  
明日香、と僕による『亮の記憶、復活作戦』を発動させたのであった……

とりあえず何故亮が記憶を無くしたのか検討してみたものの  
全然心当たりが無い……それに他の生徒や先生に言うわけにもい  
かないので

途方に暮れていた所なぜかデラーズ様      ではなく校長先生が  
何故かやってきて「ガトー！      じゃなくて亮！どうしたんだ  
！私のことを忘れたのか！私だ！！」と分けの分からないことを言  
い出しかなりカオスな  
騒動になってしまった……

その後亮と決闘デュエルしたり、決闘デュエルしたり、決闘デュエルしたりして負けまくって  
2体1で決闘デュエルしても記憶は失ってもデュエルモンスターのル  
ルは  
覚えている亮に負けて体力が0に近くなっているところ

明日香が「優がクランのコスプレをすれば亮の記憶が戻るかも…  
…」と全く  
意味不明なことを言い出すしまつ……結果僕、明日香、校長に  
よる

『亮の記憶、復活作戦』は3日に渡り繰り広げられ  
明日香が誤って落としたマグカップが亮の頭にクリンヒットし  
何故か記憶が戻った。

うん、ざっと説明するとこんな感じ………凄く疲れた………  
高校生活1発目から弾けすぎた生活を送ってしまった。

それとさっきも言ったけど今日は9月30日、そして明日は10月1日

そしてこの学校には何と月に1回テストがあるのだ！  
なんで1ヶ月に1回テストがあんだよ！

年に12回じゃねーか！！と言いたい気持が山ほどあるが  
どうやらそのテスト高得点を取ると寮、つまり所属するクラスが  
1つ上がるのだ！

よって明日のテスト、僕が高得点をとればオベリスク・ブルーに  
昇格し晴れて亮や明日香と同じになるのだ！やったね！！

しかしそう簡単には行かない、そう………そりゃ勉強しないと  
いい点は取れないので

「……………はあ、疲れたあ〜」

僕は睨めっこをしていた教科書から目を離し上に手を上げてのびをする。

現在、猛烈勉強中です。

「はあああああ〜疲れたぜ〜」

今大きな溜息とあくびを同時に出したのは僕じゃなく僕と一緒に同じくテストに向け勉強中の神楽坂かぐらさか、神楽坂は僕と同じラー・イエローの生徒で学食でたまたま出会い、いつの間にか自分の部屋に呼べるほどの仲になった、つまり親友だ。

んで「1人より2人の方が勉強がはかどるぜ！」の法則があるらしく今日は神楽坂と一緒に勉強することとなったのだ、

僕的には「1人より2人の方が勉強がはかどるぜ！」の法則より「2人だといつの間にか遊んじやっつていつの間にか時間が経つちやっつたぜ！」

の法則の方が正しいと思っていたが、案外神楽坂は勉強熱心で途中誘惑に負けることなく勉強を続けることが出来た、自分で言うものなんだがテスト範囲は殆ど覚えたから明日のテストはばっちりだと思っ。

「はあ〜、よしもうばっちりだし休憩しようぜ、雷堂らいどう！」

整髪料をふんだんに使い、髪の毛をヒトデ見たいに立てた神楽坂は立ち上がりあくびをしながら大きく伸びをする。

なんでも伝説の決闘者武藤遊戯テュウエストむていゆうぎの大ファンらしく髪型を真似ているらしい、しかも黄色い制服の中に着ているインナーには千年アイテムの1つの千年パズルがプリントされていた、服や髪型は軽くレギエラーキャラの粋だけどころなキャラいたっけ？本編には出ていないモブキャラか



な？

それともTF？僕タッグフォースTFしたことないからなあ〜

僕のかけなしのお小遣いじゃTFなんて高価なもの買えなかったからな〜

(違うでしょ、兄さんが無駄遣いばっかするからでしょ！) by妹

「じゃあ最後に本当に覚えているか最終チェックだ！雷堂らいどう、何か問題出して」

問題か……とりあえず教科書を開いて……

「じゃ、問題！」

「よし、何でも解いてやるぜ！」

勉強した後なのに何故かテンションが高い神楽坂。

「儀式魔法、儀式モンスターカードについて簡単に説明せよ」

「ふっ、簡単だぜっ！儀式魔法とは基本的に

儀式モンスターが手札にあるとき発動ができ

召喚したい儀式モンスターと同じ、またはそれ以上

のレベルになるように場と手札のモンスターを墓地に送った場合に手札の儀式モンスターを儀式召喚扱いで特殊召喚ができるんだ

「！」

「ん、まあ、正解」

神楽坂の答えは大体合ってるけど儀式カードの中にはレベルを

丁度にしなきゃいけない『エンド・オブザ・ワールド』や  
相手モンスターを儀式素材にできる『リチュアに伝わりし禁断の  
秘術』

などがあるけど簡単に説明せよって書いてあるし  
十分な丸がもらえるだろう。

「やったぜ！じゃもう1個問題出してくれや！！！」

相変わらずテンションが高いなあ、ま、  
神楽坂のなんにでも熱心な所は僕嫌いじゃないよ。

「じゃあだい2問！！ジャジャン！！」

フィールド魔法を破壊から守り、お互いに新たにフィールド魔法が  
発動できなくなる永続魔法がある、その永続魔法の名前は？」

「えーっと……ちょっとまって……思い出す、

なーに、もうそこまで出ている……あせらなくてもいい、

ゆっくり思い出していいければいいんだ……そう、あれだ！

いや、違う、それじゃない、となると

黙って思い出した方が早いんじゃないかと思うが

神楽坂いわく喋ったり体を動かしながらの方が

計算も早く解けるし、早く思い出せるらしい。

そして約40秒後。

「わかった！フィールドバリアだ！」

「じゃあ書いてみて」

僕は神楽坂に1枚白紙の紙とシャーペンを渡す。  
テストは筆記だから言えても書けなきゃ意味が無いし。

「へ、簡単だそんなこと……えーっと……  
あれ？『フィールドバリア』だっけ？それとも『フィールド・バ  
リア』だったか？

それともあえて『ふいーるとぼりあ』か……あー、えー、  
お、思いだせん……………っ！  
分かった！『フィールドバリア』だ！！」

「神楽坂は紙にお世辞でも上手いとは言えない字で  
『フィールドバリア』と書く。」

「うん、正解だよ」

「やったぜ！」

ガッツポーズするぐらい嬉しいのか……………

「ふー、それじゃ、最後に実技テストの練習でもしようぜ！」

ああ、言い忘れてた。

月1テストには筆記テストと、実技テストがあるんだ、  
筆記テストは普通に1ヶ月習った所が出る筆記問題。

そして実技テストは同じ寮の生徒同士が決闘<sup>デュエル</sup>して  
勝ち負けにより筆記テストの点数に上乘せするのだ、  
ちなみにさつき高得点をとれば昇格すると言っただけ

逆に赤点なら補習があるし何度も赤点取ったり、酷い点数だと  
レッドに落とされる可能性もある……………それ以上落ちるところがない  
レッドはおそらく退学であるっ……………

「つまり、勉強で疲れた体を決闘デュエルで気分転換しよう」と

「おお！雷堂ライドウは話が早くていいぜ！！

じゃ早速外行こうぜ！」

「え？ここでやればいいじゃん」

「何言ってるんだ、お前この部屋でグラフィアでも出してみろ、

上の階の人が「床から悪魔が出てきた！」って驚くだろ！

ソリットビジョンでも怖いわ、いきなり床からモンスターがでてきたら」

「う……うん、そうだね……」

意外と周りのことも考えている神楽坂である。

## イエロー寮、前

うー、風が少し冷たい……いくら南の島でも10月になりや寒い

か、  
でも、疲れた体には丁度いいな……気持ちいい、  
夜の湖も綺麗だ……

「おーい！ぽけつとしてないで決闘盤デュエルディスク構えろ！」

「あ、ごめんごめん」

「じゃ、いくぜえー！」

「お、オツケー」

僕と神楽坂はお互いに決闘盤デュエルディスクを構えて、同時に

「決闘デュエル！！」

「俺の先行、ドロー！！」

俺はモンスターをセット！！」

夜と言っても、月の光やライトが島を照らしているので  
相手のモンスターが見えないと言うことはない。

「さらに、カードを3枚セットし、ターン終了だ！！」

神楽坂 LP4000 伏せモンスター×1

手札 2枚 伏せカード×3

うん、テンション高いのに完璧守りに徹してるな。

裏守備で召喚と言うことは今

神楽坂かくらさかが使っているデッキはコピーデッキじゃない。

神楽坂かくらさかはプレイングセンスやドローク、あとパック運は意外とあるんだがデッキ構築が全然だめだ、そのため他人のデッキをコピーしそれをコピーした人間以上に使いこなすから他人のコピーデッキが多い。

でも普通にデッキをコピーしそれを本人以上に上手く使うなんて簡単なことじゃない、神楽坂かくらさかの優れた才能、それを立ちの悪い生徒は「他人のデッキパクって楽しいか」「自分で考えたデッキじゃないのに粋がりやがって」など酷いことを言う、

僕はそうとは思わないけどなあ、普通に凄いじゃん。

それだけ幅広いカードの知識を持っているってことだよ、

いや、違うな……どんなカードでも即座に使いこなしてしまうの方が正しいか、

だから「またデッキについて悪口言われても気にしなくていいよ」って僕は言ったけど、神楽坂本人はかなりそれが傷つくらしい。

んで、僕は神楽坂と協力して神楽坂だけのデッキを

作ったわけだ、それからかな僕と神楽坂が親友と呼び始めたのはでも神楽坂かくらさかの人のデッキを真似するのは一種の趣味のようなもので

未だにデュエルフィールドデュエルフィールドに足を運んでは他人のデッキを研究しているらしい。

おっと、少し話すぎた、いけない、今は決闘中デュエルだった。

「じゃあ次は僕のターン、ドロー!!」

さつきも言ったがあれは神楽坂の本当のデッキ（ついでに僕の暗黒界はこの前にコピーされた）

ならあの伏せモンスターは100%ヤツだ、

そしてあの3枚の伏せカードは確実に伏せモンスターを守る

罨カード………なら。

「魔法カード、暗黒界の雷を発動、

相手の伏せカードを1枚破壊する、僕は神楽坂の伏せモンスターを破壊!」

空から降ってきた雷が伏せモンスターに直撃する

「カウンター罨発動、マジックジャマー、

手札1枚をコストに暗黒界の雷の発動を無効に」

直前に雷は煙となり消滅してしまった。

「まだだ、もう1枚魔法カード、暗黒界の取引、

お互いのプレイヤーはカードを1枚引きその後1枚捨てる、

僕は手札から暗黒界の刺客カーキを捨てる、

カーキは捨てられたとき場のモンスター1体を破壊する効果をもつ、

よって神楽坂のモンスターを今度こそ破壊!」

「へっ、させねーぜ、もう1枚カウンター罨、天罰、

手札1枚をコストに効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する」

「く、そこまでして守るカードか、じゃあかなり大切と見た」

「それはどうかな？」

ニヤリと笑う神楽坂……どやっ

「なら、もう1枚魔法発動、抹殺の使徒！

相手の伏せモンスターをゲームから除外する」

「なっ！これは俺のデッキに対する最高のアンチカード!？」

「今度こそ破壊だあ！」

「でも破壊はさせねえ！最後の伏せカード、神の宣告を発動！」

ここで神の宣告!？

神の宣告とはモンスターの召喚、魔法、罫の発動、

どれでもライフを半分支払えば発動と効果を無効にできる

超レアカード、なぜかこの世界の人はライフ半分とじゃ

釣り合わないといって使えないカード扱いする。

普通に強いのに神宣、まあ神楽坂はその神宣のよさに気づいてい  
るから

デッキに入れたんだろうけど。

LP4000            LP2000

「はあ、守りきったぜ……………」

しかしこれで神楽坂の魔法・罫は0、



つか攻撃反射型のカードじゃなかったの!?

しかしこれでモンスターを心置きなく破壊できる。

「最後にもう1枚魔法カード発動、愚かな埋葬、

デッキのカードを1枚墓地に送る、僕は暗黒界の龍神グラフアを墓地に送る。

暗黒界の策士グリーンを召喚、そしてグリーンを手札に戻し墓地の暗黒界の龍神グラフア（ATK2700）を蘇生!」

「なんだ、効果破壊の次は戦闘破壊か、

そんなにこのモンスターが怖いのか?」

凄く厄介なんだよあのカードは、特にリバーズされると、

しかし攻撃力1500以上のモンスターで攻撃すれば確実に破壊できる。

ここまで言えば皆も神楽坂が何デッキか分かったよね?

じゃあ答え合わせ!!

「グラフアで伏せモンスターを攻撃、ダークネス・バースト!」

「俺の伏せモンスターは……………闇霊使いダルク（DEF150

0）」

伏せカードから茶色いローブを着た小さな少年が出てくる。

やはり…………闇霊使いダルク、

リバーズした時、相手の闇属性モンスター1体のコントロールを得る

つまり神楽坂のデッキは霊使いシリーズによるコントロール奪取デッキ。

霊使いの特徴は炎、水、風、地、闇、光の6種類  
がいてそれぞれリバーシしたとき扱っている霊と

同じ属性のモンスターのコントロールを奪えるという、

そして霊使いのステータスはみなATK500/DEF1500。

相手のモンスターを奪うというトリッキーな戦い方をする、  
だがもちろん弱点もある、

まず守備力が1500と低い、それではすぐに破壊されてしまう、  
しかしそれを神楽坂は和睦の使者や攻撃の無力化などで  
相手の攻撃を防いでいる（この決闘<sup>デュエル</sup>ではまだ使っていないが）

そして2つ目、霊使いは霊使い自身がモンスターを操っているので  
霊使い本人が破壊されれば洗脳は解けコントロールは元  
戻ってしまう。

そう考えると案外突破口はいくらでもあるデッキだな。

「そのまま攻撃だグラフア！」

グラフアの攻撃がダルクに当たる……しかし！

「ダメージステップ時に手札の牙城のガーディアンを捨て効果発動  
だぜー！」

手札から！？しまった、盲点だった……

「牙城のガーディアンは手札から捨てることで1ターンだけ

モンスター1体の守備力を1500上げるんだ!」

よって神楽坂のリバースしたモンスター闇霊使いダルクの守備力は

闇霊使いダルクDEF1500 DEF3000

攻撃力2700のグラファを超えた。

優LP4000 LP3700

300の反射ダメージを受ける、だが300ぐらいどってことない、

しかしダルクの効果が発動してしまう。

「闇霊使いダルクがリバースしたため雷堂らいどうのグラファのコントロールを奪う!」

「くそ!」

これで僕の場合にモンスターは0、不味いな。

「僕はカードを1枚伏せターン終了」

優 LP3700

手札 1枚 伏せカード×1

「へっ!なら次は俺のターンだ!ドロー!!  
カードを1枚伏せ、グラファでダイレクトアタックだ!」



俺は暗黒界の龍神グラフアを生贄に、でろや！  
偉大魔獣ガーゼット（ATK0）！」

体に少しだがグラフアの面影を残した魔人が出現する、  
ヤバイなあ〜

「偉大魔獣ガーゼットの攻撃力は生贄にしたモンスター  
1体の攻撃力を倍にした数値になる、よって攻撃力は  
5400だああ！！そしてガーゼットで  
優の伏せモンスターを攻撃！偉大拳！！！」  
グレイケラッシュ

僕の裏側のカードが表になる、紫色の丸いばい菌。

伏せモンスター ジャイアントウイルスDEF100

「ジャイアント・ウイルスは破壊されたとき相手に500のダメー  
ジを与える」

神楽坂 LP2000 LP1500

「うわぁ！汚ね！何か付いた！」

大丈夫、ソリットビジョンだから。

「そしてジャイアントウイルスは破壊されたとき  
デッキから同名モンスターを2体特殊召喚する」

僕の場にさつき破壊されたウイルスが2体現れる。

「モンスターを場に残しちまったか、俺はモンスターをセットし  
ターン終了だ」

神楽坂 LP1500 偉大魔獣ガーゼット ATK5400  
手札 0枚 闇霊使いダルク DEF1500

伏せモンスター×1、伏せカード×1

「僕のターンドロー」

んー、ナイスな引きだここでこのカードとは、  
僕のドロークも上がってきたのかな？それとも偶然か。

「僕は墓地の悪魔族3体、カーキ、グラフア、ウイルスの3体を除  
外して、

ダーク・ネクロフィアを特殊召喚」

僕の周りに黒い霧が漂う。

「な、なんだこの霧!？」

そして黒い霧の中から『カタカタ』と不気味な音を立てる  
人形を抱えた人型悪魔が現れる。

「ダーク・ネクロフィア、出現！（ATK2200）」

「な、なんだ、脅かしあがって何かと思えばたった攻撃力2200の  
モンスターじゃねーか、こんなんじゃ俺のガーゼットには敵わな  
いぜー!」

「そつかい、確かにね、じゃあ僕は神楽坂の伏せモンスターを攻撃、  
念眼殺!」

「伏せモンスターは闇霊使いダルク、だが破壊されたため効果は発動できないぜ！」

「ジャイアントウィルスを守備表示にしてカードを1枚伏せターンエンド」

優 LP1000 ダーク・ネクロファイア ATK2200  
手札 1枚 ジャイアントウィルスDEF1000×2  
伏せカード×1

「へっ、このターンで俺の勝ちだな、これで優との戦歴は12勝4敗！」

数えてたの！？そして僕結構負け越してるなあ！  
確かにあんま勝った覚えないけど！

「行くぜえ！偉大魔獣ガーゼットでダーク・ネクロファイアを攻撃、  
グレートクラッシュ  
偉大拳！」

「畏発動！ガード・ブロック、このカードの効果で戦闘ダメージを0に、  
その後カードを1枚、ドロー！」

「だが変な気持悪いモンスターは破壊だ」

はい、ここでファラオの命台詞！！

「それはどうかな？」

「な、どうゆうことだ!」

「周りを見てみれば?」

「ま、周り……ん?おかしいぞ。

あの変なモンスターを倒したのに黒い霧が消えない!」

「ダーク・ネクロフィアは死んでも持っていた  
人形に取り付いた靈魂が神楽坂のモンスターに取り憑く」

ダーク・ネクロフィアが現れたときに出現した  
黒い霧が神楽坂の偉大魔人ガーゼットの周りに集まり  
ガーゼットの中に入る。

「……そして取り憑いたモンスターは自分のご主人様に牙を向ける  
!」

ガーゼットのコントロールが僕に移った。  
よし、計画通り!

「なっ、奪うどころか逆に奪われただど!?!」

さあ、どうする神楽坂?

「く、カードを1枚伏せターン終了」

神楽坂 LP1500 闇霊使いダルクDEF1500  
手札 0枚 伏せカード×1

「僕のターンドロー、手札抹殺を発動、



手札を全て捨て捨てた枚数ドロウする、1枚ドロウ」

「俺の手札は0枚よって何もしない」

「そして手札抹殺で捨てた暗黒界の策士グリンの効果、神楽坂の伏せカードを破壊する」

「ええーい！まだだ！まだ終わらんよ、畏発動、和睦の使者、このカードの発動に成功したためこのターン俺はダメージを受けず俺のモンスターは戦闘で破壊されない」

「ちっ、ターンエンド」

優 LP1000 偉大魔人ガーゼット ATK5400

手札 1枚 ジャイアントウィルスDEF1000×2

伏せカード×0

「く、やべえな、ドロウ！！」

へっ、来たぜ！魔法カード強欲な壺を発動！！

デッキから2枚ドロウ！」

ここで強欲な壺かよ！

「俺はモンスターをセット、そして……………」

魔法カード、太陽の書を発動」

太陽の書おお！！！！

「太陽の書、このカードの効果により

裏守備のモンスター1体を表側攻撃表示にする、

対象は俺の裏モンスター、そして俺の守備モンスターは  
闇霊使いダルク ATK500」

ちよ、今回3枚目のダルクですか!?

「これでガーゼットを奪い返すぜ!」

奪ったモンスターで召喚されたモンスターが  
奪われた後奪いかいしたのか……… ややこし!

「ガーゼットでジャイアントウィルスを攻撃!本日3度目の偉大拳  
!」  
グレートクラッシュ

ガーゼットの巨大な腕に吹き飛ばされるジャイアントウィルス。

「でもジャイアントウィルスが破壊されたから神楽坂に500のダ  
メージを与える」

神楽坂 LP1500 LP1000

「俺はターンエンドだ、ライフは並んだがモンスターでは俺の方が  
有利だぜ!」

神楽坂 LP1000 偉大魔獣ガーゼット ATK5400  
手札 0枚 闇霊使いダルク ATK500

「僕のターン、ドロ―……………」

「さあ、どうする雷堂?」

「……………」

「どうした雷堂、諦めたのか？」

え〜っと……………こんな勝ち方していいのかな〜

「じゃあ暗黒界の尖兵ベージ（ATK1600）召喚……………  
攻撃表示のダルクに攻撃」

「なな！攻撃表示のダルク！？あっ！本当だ！って汚いぞ雷堂！！」

「汚くない、これで僕の勝ちだ神楽坂！」

神楽坂      LP1000                  LP0

「かー！負けちゃったぜ！」

決闘デュエルの後、僕と神楽坂は寮の前の芝生の上で風に当たりながら  
夜空を見ている、理由は何となく、らしい。

「あーあ、あと少しで勝てたのに……ぶー」

芝生の上で横になって文句を言う神楽坂。

「そう、僕が本気を出せばもっと早く勝てたけどね」

「な、なんだと!」

「ははははは!」

「はははじゃねーよったく……」

雷堂さ、何か俺と話するときだけ、何か冷たくないか?」

「そんなことないよ」

「そんなことあるぞ、絶対!」

「そう……だとしたら、神楽坂と話すときは  
変な気遣いとかいらず、そのまんまの自分を出せてるってことじ  
やないかな？」

「な、なんだよそれ／＼／」

「つまり僕はそれだけ神楽坂の事を信頼している  
ってことだよ、本当に仲のいい友達とかは変な気遣いなしに  
言いたい事をそのまんま言える……からかなあ」

「そ、そうか……そうだよな、俺たち親友だしな」

「うん、そうだね、だからこれからもよろしく」

「ああ、もちろんだとも」

「ふわあああ〜〜ねむ、えーっと、

もう11時か、夜更かししちやっとな〜」

「11時はまだ夜更かししている時間じゃねーよ、  
テスト前日ならなおさらだ」

「そんなことは言ってたって眠いもんはなむ　　ふわあ〜  
おやせみ」

「おやすみじゃねー、ここで寝るなよ、  
風引くぞ、ほら、肩貸してやるから立て」

「むにゃむにゃ……おんぶ」

「おんぶじゃねー、いい年こいて甘えてんじゃねー！」

「じゃ……じゃあ……おひめさま……だっ！」

「なんでだよ！男をお姫様抱っこしてら普通に気持悪いだろ、俺はそっち系の趣味はない……！」

「……」

「……ZZZ」

「って、マジで寝やがった……」

「はー、しゃーね。」

「よっこいしよつと、お、意外と……かなり軽いな  
ちゃんと飯食ってんのか、お母さん心配だわ」

「……ちもちわる」

「おまー起きてんのかよー！」

「……ゼットゼットゼット……」

「おい、わざわざゼットゼットゼットゼットゼットって  
言う馬鹿がど……」

「いいかやは……」

「ったく偉そうに、今回だけだぞ」

「……おんにぎゅう……」

『ガチャ』

「あー、もう消灯時間過ぎちゃってるわ、  
暗い、よく前が見えん、先生に見つかる前に  
部屋に戻らないと……………」

「……………」

「うーし、おい、らいどう雷堂、お前の部屋に着いたぞ。一回おきる」

「……………」

「だめだ、完全に落ちてる、じゃ  
よっこいしよと、これだよ」  
じゃあな、らいどう雷堂、明日のテスト、頑張って絶対ブルーに上がって  
やるー！」

「おみゃーじゃむちやる」

「ってやっぱ起きてたのかよ！って寝言か？まあいい  
さて俺も寝るか、その前にシャワー浴びてワックス落とさないと

.....

絶対ブルーに上がってやる」



第33話 「俺は毎日1時間かけて髪の毛をセットしているぜ」by神楽坂(後

スクラップデツキ強し！今日テストが終わってその後テスト勉強ストレスを発散させるために友達とカラオケ行ってきた、んで歌ったりデュエルした。

結果「Sin」に勝って「ライトロード」に勝って「インフェルニティ」に勝った。

ま、同じ位負けたけど、くそ！100%完成すればきつと圧勝できるのに！

今回初登場神楽坂君、なんかこんなキャラでいいのかな？2話しか出てないキャラを書くのは意外と難しい、なんか妙に熱血系になっ  
てしまっている。

そして僕は案外1話や2話しか出てこないゲストキャラが意外と好きらしい、

神楽坂とかダーザンとかもけおとか。

そついや神楽坂に下の名前ってあるのかな？

第34話 「霊使いデツキだが2次元キャラに興味は無い」by神楽坂（前書き

今回は神楽坂がメインの話です。

そして今回は月1テスト、定期的には10月1日ですね、うん最初は現実と同じ時間軸で物語を進めようとしたが夏休みまでが限界でした……………

どうやら僕は普通の物語が書けないらしく何故かすこし捻じ曲がったストーリーになってしまいます、つまり今回も……………

第34話 「霊使いデツキだが2次元キャラに興味は無い」by神楽坂

雷堂優らいどうゆう 視点

『ピピピピ、ピピピピ、ピピピピ』

僕は『ピピピ』という機械音が聞こえたため脇の下から  
先つちよに水銀がついた棒 体温計を取り出す。

「なーんだ、たったの37.6 かさーて学校行 ハックシユン  
!?!」

「お前学校休め」

ベットの横に立っている神楽坂に押し倒され布団をかけられる。

「うっ、やだやだ！僕は学校に行くんだ」

テスト勉強しっかりしたのに当日風邪でこれませんでした  
なんて残念すぎるよ、現実残酷だよ残酷な天使のテーゼだよ！

「うるさい、37 は立派な風邪だ今日は大人しく学校休め、  
俺が先生に言っとくから」

「うっ、だってテストの日に学校休んだら再テスト受けさせてくれないし」

途中退席も0点扱いらしい……意外と厳しいDA。デュエルアカデミア

「諦める、まだ次があるじゃ俺学校言ってくるわ」

「まってよ〜!!」

「うおい！抱きつくな！風邪が移る」

「こつならお前に移して風邪を治す!!」

「風邪は移しても治んねーよバカ！」

「バカじゃない、なぜならバカは風邪を引かないから、  
そしてバカは死んでも治らない、良かったね神楽坂一生成康だね」

「ほー、貴様俺がバカだと言いたいのか……………」

「ウギヤ……………」

しばらくお待ちください。

「おわあ！なんだこの鎖、動かない！」

神楽坂を怒らせてしまったらしく、ベットごと鎖でぐるぐる巻きにされてしまった、う、動けん。

「大丈夫だ、この鎖は1時間たてば自動的にロックが外れる仕組みだ。」

雷堂俺が学校行った後こっそり登校するだろ」

「何その無駄なハイテク機能！？何処で買ったの！？」

「いや、上の階の三沢ってやつからもらった」

「三沢君何作ってんだよ！」

「何でもあいつデュエル界のエジソンになるらしいぜ、

「発明王に俺はなる！」って叫んでたぞこの前」

「いや、そんな某海賊王を目指すゴム人間みたいなこと言われても」

「名前は呪いの鎖クローズ チェーン」

「中二臭い！」

くそう、でも僕は何が何でもテストを受けないと！  
ブルーに受からないと明日香さんが……お、思い出したただけであ  
の時のトラウマが。

『優、次のテストでブルーに上がらないと貴方の友達の神楽坂君って  
言う子にこの写真を見せるわ、もしこの写真を神楽坂って言う子が  
見たらどう思うでしょうね、優……ふふふふ』

「何だろう、凄い寒気までしてきた……」

「ほらやっぱ風邪だ、じゃあな雷堂ってやば！もうこんな時間だし  
！」

神楽坂は走って部屋から出て行ってしまった、薄情者！！

神楽坂かぐらざか 視点

「やっべー！遅刻だ遅刻だ！！」

俺の名前は神楽阪、現在高校1年生だ、好きなことは決闘デュエル、だかもっと好きなことは人のデッキを研究することだ。

そしていつか最強のデッキを作り俺をバカにしたブルーの奴らに復讐してやる！！

「って！何1人で自己紹介してんだ、俺！」

俺は全速力で校舎の中に入る。

「はあ、はあ、はあ、ま、間に合った」

つ、疲れた……よかったまだテストまで5分ある、最後の確認でもするか。

ついでに俺が今座っている席の隣が雷堂で斜め前がイエロー主席の三沢ってやつ、んで後ろの席はブルー組が固まっている。

えーと、ロックデツキとは何か？……と。

てしよういんあすが  
天上院明日香 視点

ふふふ、やっとこの日が来たわね、月1テストの日が。正直女子は全員ブルーだからあまり関係ないのだけれど一様女子の中では中等部主席で卒業したんだから高校でも頑張らないとね。



そしてこのテストでもし優がブルーに上がれなかった場合  
優のお友達にあの写真を見せると言ったら優とても張り切って  
勉強してたわ。

これで優もブルーの仲間入り、これから楽しくなりそうね、フフ  
ッ。

でもあと3分でテスト開始なのに優がこないわね。

優の席は私の丁度前の席、

だから暇なときは優に好きなだけイタズラ出来るのよ、  
まったく優何してるのかしらもうテスト始まっちゃうわよ。

確か斜め前の席にいる『普通の学校なら校則違反じゃね』と言える  
ぐらい髪の毛を逆立てた少年……あれは神楽坂君、  
いつも優と一緒にいるから優について何か知ってるかもしれない  
わ。

「ねえ、少しいかしら？キミ、神楽坂君よね？」

神楽坂 視点

「ねえ、少しいかしら？キミ、神楽坂君よね？」

「えっ！あ、はい、そうです」

後ろから、声をかけられた、

声の主は、天上院さん！？あのクラスのマドンナ的存在で  
頭脳明晰スポーツ万能完璧人間とまで言われる

天上院さんが俺に何のようだ!?

「あのさあ、神楽坂君優と仲が良いわよね、今日優がまだ来てないらしいけど、何か知ってる?」

「あ、ああ雷堂ですか、アイツなら今日熱出して休みですけど……」

「そう………休みのなの」

少し残念そうな顔をした天上院さんは、  
少しするとなにか考えごとをしているような顔をする。

「（休み? 休みなら仕方ないわ、次のテストの頑張ってもらおうじゃない）」

「あ、あの、天上院さん?」

「ん、ああ、ありがとね神楽坂君、もういいわよ」

「そ、そうですか」

「はいはい、皆さん、これからテストを始めるのニヤー」

あつ、先生が来た、あの人は確かレッド寮寮長の  
大徳寺先生の担当教科は錬金術とかいう訳の分からない科目、  
絶対普通の学校に錬金術なんてないだろ。

そして口癖は語尾に『ニヤー』をつける事、  
男がやっても気持悪いだけだ、あれか新ジャンル『オッサン萌』でも作る気か?

そして暫くして生徒全員がいつでもテストを受けられる状態になる。

「そういえば今日は十代がいないのニヤー。  
翔君は何か知ってるのにかや〜?」

「えっとアニキは寝坊です」

寝坊かよあいつ、俺は遊城ゆうぎとは喋ったことないが  
あいつ学校で案外有名だぞ。

購買のドローパンを買いと黄金のドローパンが出る確率が100%  
%だったり

レッドなのに1年のなかで1番強いという噂があったり  
たちの悪いブルーをばっさばっさと倒して行ったりと色んな意味  
で有名だ。

「雷堂君もいないのニヤー、確か雷堂君と神楽坂君は  
仲が良かったはずニヤ、何かしってるのかニヤー?」

「さっきからにやーにやーうるせえーよ!」って言いたいが……

「えっと雷堂は今日は熱出して休みです」

「そうですか……雷堂君は休み、と。  
それではこれからテストを始めるのにか。

カンニングした場合その場で強制退室してもらいもちろん点数は  
0点なのにか、

そしてカンニング補助と見られる生徒も同様に罰を与えるのニヤ、  
それではテスト開始      にや〜」

おい！最後の最後であくびすんな！  
そして今のはテスト開始の合図とみていいのか！？  
でもみんなシャーペンを使う音がするからいいのか、じゃ開始と。

まずは名前をかいて……………1年、イエロー所属と、出席番号は

十分数分後

やべー、ここの問題難しいな。飛ばすか？

「すいませーん、遅刻しましたー」

ん、この声は遊城<sup>ゆうぎ</sup>、遅れたのか？

「どうして遅れたのニヤー？」

「ああ、登校中困っているおばさんを助けたあと  
学校に侵入したオッサンを退治して  
この学校に直撃するはずのミサイルを打ち落としてたら  
遅れました」

「で、何処までが本当なのかにゃ」

「登校中」

「99%捏造なのにかにゃ!?!」

「99%、良い歌ですよ、俺好きですよ」

「歌の話はしてないですよにゃー!?!」

「まあ、とりあえずテストください」

「わ、わかったのにゃー」

なんだこの会話、やべ、早く続きやらないと時間が。

数十分後

「はあく終わった」

筆記テスト終了、結果はまあまあだな。

思ったとおりの結果、細かく言つと半分ぐらい？

悪かったな半分ぐらいで！元々頭は良い方じゃないんだよ。

次の実技テストは約2時間後、それまでデッキ調整や  
昼食を済ましておくのか。

そついや今日はレアカードが大量に入荷されたんだっけ？

でもこのデッキは雷堂と協力して作ったデッキだからこのテスト  
中はデッキを変える気はさらさら無い。

そついや雷堂、大丈夫か？

鎖のロックちゃんと解除されてるのか？

イエロー寮  
雷堂優らいどうゆう 視点

『ピピー』『ガッシャン』

「ぶはあ！！よし、ロック解除された！

マジで1時間ほどけねえぞこれ！」

鎖に巻かれている僕をもし他の生徒に見られていたらどうなっていたか。

「まったく神楽坂のやつ、酷いよ。

いやそもそもこんなの作った三沢君が酷い！」

さて、自由になったことだし本でも読んで時間潰すか、結構熱も下がってきたみたいだし。

かぐらまか  
神楽坂 視点

『これより実技テストを開始します』

ここはテスト用の大きな決闘場<sup>デュエルフィールド</sup>、今スピーカーから  
放送が流れた。

デュエルアカデミアの月1テストの実技テストは  
同じ学年、寮同士の人間がデュエルする。  
そして見事勝利すれば筆記テストの点数に加算される仕組みらし  
い。

『ラー・イエロー神楽坂君、同じくラー・イエロー中村君3番決闘<sup>デュエルファイ</sup>  
場<sup>フィールド</sup>まで来てください』



お、呼ばれたか、相手は中村？同じイエローだが知らないやつだな。

デュエルフィールド  
決闘場

「これより神楽坂対中村の決闘を開始する」

審判の先生の合図と一緒に。

「決闘」

先行は中村のターン。

「俺のターン、ドロー。」

俺は白魔導師ピケル（ATK1200）を召喚」

毛糸の帽子を被り白いコートを着た小学生ぐらいの女の子が  
デュエルフィールド  
決闘場に現れる。

「そしてカードを2枚伏せターンエンド」

中村 LP4000 白魔導師ピケル ATK1200  
手札 3枚 伏せカード×2

「次は俺のターン、俺はモンスターをセット、

更にカードを2枚伏せターン終了」

「ならお前のエンドフェイズに速攻魔法スケープ・ゴート  
俺の場に攻守0の羊トークンを4体特殊召喚する」

神楽坂 LP4000 伏せモンスター

手札 3枚 伏せカード×2

「行くぞ、俺のターンドロー。」

スタンバイフェイズに入ったため白魔導師ピケルの効果発動！

自分のモンスターの数×400ライフを回復する。

俺の場にはピケルさんと4体の羊がいるよって2000ポイント  
回復」

2000も！？回復しすぎだろ。

「ピケルたん、僕の心を癒してくれえ」

きも！？なんだコイツ、これが2次元萌オタクってやつか！

中村LP4000 LP6000

「さらにピケルたんで伏せモンスターを攻撃、

ピケルたんのもえもえマジック！」

やめるその攻撃！気持悪い！

「だが伏せモンスターは地霊使いアウス(DEF1500)  
300の反射ダメージを食らえ」

中村LP6000                    LP5700

「そしてアウスの効果発動、リバースしたため  
お前の羊トークンを1つもらうぜ！」

「く、羊ぐらいどうでもいい！」

メイン2にはいり黒魔導師克蘭たん（ATK1200）を召喚タ  
ーン終了だ！」

中村 LP5700                    白魔導師ピケルATK1200                    黒魔導師ク

ランATK1200

手札 3枚                    羊トークン×3                    伏せカード×1

「俺のターンだ、ドロー。俺はアウスの効果を発動！」

アウス自身と場の地属性モンスターを墓地に送りデッキから  
憑依装着    アウス（ATK1850）を特殊召喚！！」

アウスは奪った羊と合体し体の回りに茶色いオーラを纏った、  
アウスの隣には羊が浮いている。

「行くぜ！憑依装着    アウスで羊トークンを攻撃、地霊術    地割れ」

アウスの周りに魔方陣が出現し何かの呪文を  
唱えると羊の下の床が割れて、割れた床から飛び出た岩に突き刺  
さった。

「更に進化したアウスには貫通効果がある」

中村LP5700                    LP3850

「く、一気にライフが！」

「そしてモンスターを1枚セットしターンエンド」

神楽坂 LP4000 憑依装着 アウスATK1850 伏せモ  
ンスター×1

手札 3枚 伏せカード×2

「俺のターンだなドロ、再びスタンバイフェイズになった  
よってピケルさんの効果で1600ライフを回復」

中村LP3850 LP5450

あれ？前のターン俺が羊ではなくピケルを攻撃していれば  
中村のライフは5050………やべえ、プレイミスだ………

「そしてクランさんの効果も発動、  
相手のモンスターの数×300のダメージを与える！」

「回復の次はダメージかよ！」

神楽坂LP4000 LP3400

「いくぜ！魔法カードマジシャンズクロス。  
場に魔法使い族モンスターが2体以上存在するとき発動可能で  
きる、

場の魔法使い族モンスター1体の攻撃力を3000にする！  
ピケルさんとクランさん！2つの力を1つに！  
ホワイト・サンダー！！」

黒と白の2つの雷がアウスに迫ってきた。

「ぐおおお!!!」

神楽坂LP3400                    LP2250

「どうだ！うちのピケルたんとかランたんは可愛いだけじゃなく強いんだぞ!!!」

だからきもいぞオタク！

コイツのデッキだけはコピーしたくない、  
なにか大切ななにかを失いそうな気がするから。

「俺はターン終了」

中村    LP5450    白魔導師ピケルATK1200    黒魔導師ク  
ラン    ATK1200  
手札    3枚            羊トークン×2    伏せカード×1

「くっそう、こんなオタクに負けてたまるか、

俺のターンだ………ドロー!!!よしっ!

魔法カード強欲な壺を発動、デッキからカードを2枚ドロ。

そしてモンスターをセット」

「これで終わりか？」

「いいやまだだ、魔法カードデュアルサモン二重召喚を発動

この効果で俺はこのターンもう1度通常召喚を行う、  
もう1体モンスターをセット。

そして発動罫カード発動、砂漠の光、

自分フィールド上のモンスターを全て表側守備表示にする。  
そして今リバーズしたのは光霊使いライナと闇霊使いダルク！  
2体の効果で光属性と闇属性モンスターを1体ずつ奪う、  
ピケルとクランのコントロール権は俺がもらった」

「そ、そんなピケルたん、クランたん」

床に膝を付いてがつくりとうな垂れる中村ってやつ  
そんなにシヨックか！悪かったな、そうゆうデッキなんだよ！

「そして装備魔法ワンダー・ワンドをピケルに装備、  
ワンダー・ワンドは魔法使い族に装備可能な魔法で  
装備モンスターの攻撃力を500上げる」

白魔導師ピケル ATK1200      ATK1700

「そしてワンダー・ワンドの効果、このカードと装備モンスター  
を墓地に送りデッキからカードを2枚ドロー！」

「そんな……ピケルたんが墓地に……」

オタクが何か言ってるが無視無視。

「最後の伏せカード重力解除を発動、場の全てのモンスターの  
表示形式を変更する。

まだまだ行くぜ！

俺もマジシャンズ・クロスを発動光霊使いライナの攻撃力を30  
00に！」

光霊使いライナ ATK500      ATK3000

「もう1枚魔法発動受け継がれる力、クランを生贄に  
クランの攻撃力1200分ライナの攻撃力を1200上げる」

光霊使いライナ ATK3000

ATK4200

「そんな、クランたんまで……………」

「そしてトドメの魔法カード、ダブルアタック、  
手札の憑依装着 ヒータを捨てこのターンライナは2回攻撃がで  
きる！」

「ピケルたんがワンダー・ワンドのコストに……………  
クランたんが受け継がれる力のコストに……………」

「行くぞ！今度はこっちのコンビ攻撃！」

ライナ&ダルクのスプリットダブルマジック！！」

ライナが白い波動をダルクが黒い波動を放ち  
中村のモンスターを一掃する。

重力解除で攻撃表示になった羊の攻撃力は0  
対するライナ&ダルクの攻撃力は4200、  
それが2回攻撃となると 8400のダメージだ。

「……………ピケルたん、クランたん」

かなり激しい攻撃なのに自分のアイドルカードが奪われコストに  
された

ショックでほぼノーリアクションだ……………

中村LP5450

LP0

「よっしゃー！！勝ったぜ！！」

「勝者、ラー・イエロー、神楽坂！」

いやー、勝った勝った、

結果は後日発表か楽しみだな筆記はあれでも

実技は結構自身がある、これならブルーへの道もそう遠くないな。

テスト終わった人はもう帰っていらしいし帰るかもう、雷堂が心配だ。



## 数時間前

万丈目準 ばんちやくじゆん 視点

ふざけるなふざけるなふざけるな!!!

俺が折角このテストで雷堂に復讐をするために

新たにデツキを完成させたのに熱で欠席だと!

あー! イライラする、わすれもしない1ヶ月前の決闘場での決闘 デュエルフィールド デュエル

そこで俺のプライドは大きく傷がついた……

入学初日からイエローの雑魚に敗北とは……

俺がわざわざテスト1週間前に

先生に頭下げて雷堂とテストの日に決闘 デュエルできるように

頼んだのに!!! 殺す、次会ったときは決闘 デュエルでズタズタのギタギ

タに

してくれるわ!!!

今のイライラの原因は雷堂だけじゃない、

あのオカッパせんこうだ!

このデツキで遊城十代を倒せたと……自分勝手にもほどがある!

まあいい、あいつは入学したときから調子に乗っていると

思っていたところだ、十代を倒し少しでもこのイライラを発散さ

せる…！

そして原作どおり。

「フェーザーマンでダイレクトアタック！フェザー・ウインド…！」

「うわぁぁ…！」

万丈目LP1000

LP0

第34話 「霊使いデツキだが2次元キャラに興味は無い」by神楽坂（後書き）

今回神楽坂の相手になった中村君かれはオリキャラではなく列記としたTF出身のキャラです。

TFと言えば先月ぐらいにTF6が発売されましたね、他の作者さんの言葉などを聞くといきなり真六武衆が作れて案外簡単にストーリーを進められるみたいです。

はい、僕はまだTF6持つてません、TF5のカードを全部9枚所持するまで買いません！と言うわけではなくただ単にお金がありません……………

ほしいよお、TF欲しいよお、Z・ONEさんをパートナーにしたよお……………

まあ最近の僕はこんな感じですねあとインヴェルズ・ローチも欲しいです

ゴキブリ難民です、開闢も欲しいです、開闢難民です。

あー！最近韓国版カードを集めて満足している自分がある、お金がほしい次のお正月までまつか。

第35話 「大嵐からのパワー・ボンドを発動！」 by 亮（前書き）

うーん、最近頭がいたい、眠い……風邪かな？

今回はテスト後のお話、亮が中心の回です。

### 第35話 「大嵐からのパワー・ボンドを発動！」 b y 亮

まんじょうめしゅん  
万丈目準 視点

数時間前

「まったく、いったいどのどいつがカードを買占めたんだ？」

「ホント、マジありえねえー！」

「ね、万丈目さん」

「あゝあゝ！そんなこと今はどうでもいいんだよ！！」

「ひい！す、すみません万丈目さん！」

「……………」

「おい、取り巻き、今日の万丈目さんはいつもより荒れてんな……………」

「ああ、あれだよ、俺たちがここに来た初日、

偶然とはいえ万丈目さん、名前もしらないイエローの  
生徒に負けただろ。

偶然と言っても万丈目さんはプライドが高いお方だ、  
今日のテストでアイツにリベンジしようとしてたらしいぜ」

「なのにそいつが今日学校を休んだ…と」

「そつゆうことだ、だから今日はあまり万丈目さんに話しかけない方がいいぞ」

「ああ、そつする……」

雷堂優……アイツ……マジぶち殺す、このあいつは俺のプライドをことごとく打ち破った、許さない……

「ひよ、ひよー、ひよっひよっひよ……!!」

ん？階段の上から声が、何だこの聞いているだけで人に不快感を与える笑い声をする野郎は？

「待っていたのねセニョール万丈目」

「な、何だお前！」

「いや、まてよ、この変な喋りかた、もしや！クロノス教諭か」

「そのとーりナ、ノーネ!!」

その変な男は階段から飛び降りて着地する。

「セニョール万丈目、ユーに頼みたいことがあるノーネ！」

「頼み？」

「この俺に何のようだ？」

「そんなノーネ、このレアカードを使い

あの憎きドロップアウトボーイ遊城十代を倒して欲しいノーネ」

「断る、俺はそんなことに興味が無いしメリットも無い、

それに……今はそんなことする気が起きない」

「ほー、つまり断る」と

「そう聞こえなかったか、クロノス教諭」

「ふっふっふ、残念ながらセニョール万丈目には拒否権は無いノーネ」

「なんだと、どうゆう意味だ!？」

「ワターシはしってるーニョ、

セニョール万丈目はデュエルアカデミア高等部の入学初日に自分から仕掛けた決闘デュエルに負けた」

「ぐ、な、何故それを」

「しかもその日の夜、夜中勝手に決闘場デュエルフィールドを使用し

学校には報告されてないがガードマンに発見された」

「なな、何故知っている!！」

「そんなことどうでも良いノーネ、ワターシの用件を受けるか、受けないか、

もしそれでも受けられないのならあのことを学校に報告するノーネ」

「ぐ、教師が脅迫か……………」

「脅迫？極北？何のことなノーネ？強制はしてませんよ」

「ぐぐぐ、分かった、やればいいんだろやれば！

さあ、早くそのカードを渡せ、俺がそのドロップアウトを制裁してやる！！」

「それでこそエリートなノーネ、ギョヒョヒョヒョヒョ！！！！

（ふん、万丈自家のお坊ちやまも大したことないノーネ

さあ、今日がドロップアウトボーイの命日なノーネ）」（別に死にません）

そして原作通り。

「うわあああ！……！」



丸藤亮<sup>まるとう りょう</sup> 視点

なんか知らないが、俺は暫く記憶を失っていたらしい……  
鮫島師範……いや、校長から聞いた、  
どうやら優と明日香が俺の記憶を取り戻してくれたらしい  
優には今度礼を言いに行こう。

それはそうと今日はデュエルアカデミア恒例の月1テストの日だ。  
現在実技試験の真っ最中、学校の生徒達が日頃の成果を発揮して  
決闘<sup>デュエル</sup>している、俺もその中の1人だがな。

だが今日の俺には1つの目標と言うか野望のようなものがある。

それは、優の決闘姿<sup>デュエル</sup>をこの新しく買ったビデオカメラに収めるこ

とだ！！！！！！！

イエーイ、実に俺らしくない声を上げるが仕方ない。

いとしの優の初テスト姿をこのビデオカメラに収める、  
次のテストも収めるそして優の思い出ビデオを完成させるのが俺  
の夢だ！！

いやいや、このビデオカメラ高かったんだぞ、  
値段が高すぎて『サイバー・ドラゴン』を1つ売ってしまったが  
まあいいだろ、まだ3枚あるし。

うん、なんか記憶が戻ってから自分の頭が少しおかしく  
なってる気がするが多分気のせいだろう多分前からこんなんだっ  
たはずだ。

そうと決まれば早速1年生のテスト会場にレッツゴーだ、全速全  
身DA！！

あれ？

「しまった……俺、まだテスト終わってなかった……」

ヤバイ、俺がテスト終わる前に優のデュエルが終わっていたらど  
うしよう……

ええーい！もっとポジティブに考えよう、

なに速攻で相手を倒せば間に合うだろう、うん。

『次、オベリスク・ブルー丸藤、同じくオベリスク・ブルー綾小路  
デュエルフィールド  
4番決闘場まで』

ん、呼ばれたか、相手の綾小路って誰だ？

まあいいか速攻で片付けて優の決闘デュエルを見に行こう、  
この際リスペクトなど関係ない、いまは優を最優先だ。

「それではこれよりオベリスク・ブルー丸藤亮とオベリスク・ブル  
ー綾  
」

「いいから早く始めてください先生……………」

「えっ！あ、はい、すみません、分かりました、では決闘開始！  
デュエル

「ふふふ、久しぶりだね丸藤君、僕はあの時からキミのことを  
1度も忘れたことが無いよ、覚えているかい、  
僕達がお互いをライバルと認めたあの日  
」

「知らん、覚えてない、てかお前誰だ？」

「誰だって、僕だよ僕！！」

綾小路ミツル！君の永遠ライバルだよ！」

綾小路ミツル？誰だそれは同じ3年でオベリスク・ブルーのはず  
だが

名前は愚か顔も知らない……………でも向うは俺のこと知ってるらし

いが？

ま、いいかそんなこと。

「初めましてだな綾小路君、じゃあ早速決闘デュエルを始めよう（てかさっさとしろや！）」

「いや、だから僕だって！！」

「だから知らないと言ってるだろ！早く決闘盤デュエルディスクを構えろ！」

「うっ！そうかい、悪魔で惚ける気なんだねじゃあいいよこの決闘デュエルで僕が勝って嫌でも思い出させてあ」

「決闘デュエル！」

「だからまだ僕が話してる途中なんだけど！！」

「ふっ、先行は譲ろう」

「ねえ！聞いている！さっきから僕の話は全て無視！？もついいよ！僕のターンドロー！先手必勝魔法カードサービスエースを発動！」

「モンスターカードだ」

「いや、まだ効果の説明もしてないんだけど、僕が選んだカードを相手はそのカードの種類を当てるモンスターか、魔法か、罠かだ」

「モンスターだ」

「いやまだ全て言い切ってないんだけど……」

「モンスターカードだ」

「ほ、本当にいいのかい？」「モンスターカードだ」もし間違えたら「モンスター」

1500ものダメージを「モンスターだと言ってるんだろ！」  
受け「いい加減にしろ、モンスターカードだ」ってせめて最後まで説明させて

くれよ……!!」

「で、正解は？」

「く………モンスターカードだ、正解したため  
僕は選択したカードを捨てる。カードを1枚伏せる、  
更にメガ・サンダーボールを守備表示で出してターン終了」

綾小路 LP4000 メガ・サンダーボールDEF600

手札 2枚 伏せカード×1

「俺のターンドロウ、融合魔法パワー・ボンドを発動、  
手札のサイバー・ドラゴン3体を融合！

サイバー・エンド・ドラゴンを融合召喚!!」

サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000

「ちよ、1ターン目から飛ばしすぎだつて……!!」

「更にパワー・ボンドの効果でサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃

力を倍にする！」

サイバー・エンド・ドラゴン      ATK4000      ATK8000

「いや、まだ1ターン目だよ亮！少しは相手をリスペクトすると

」

「初対面のヤツに呼び捨てで呼ばれる筋合いも無ければ  
貴様にするリスペクトデュエル決闘など、ない！！」

「ええー！だから昔約束したじゃないか！僕と君は永遠のライバ

」

「エターナル・エヴォリユーション・バーストオオ！！！」

「って最初から最後まで僕の話聞いてないよねえ！！

ってうぎゃ      ！！！！」

綾小路LP4000      LP0

「しよ、勝者、オベリスク・ブルー、丸藤亮」

「じゃあ俺はもう帰ります」

「えっ？あ、はい、分かりました、気をつけて帰ってください……あ、  
もう行っちゃった」

俺はダッシュで1年生のテスト会場に行く、  
急げ、急げ、何としても優の勇姿をこのカメラに収める！！

月1テスト1年生会場

てんしよついでんあすか  
天上院明日香 視点

さて、そろそろ、私の出番かしら。

ブルーの女子であと残ってるのは私を含め委員長とももえ、あと  
山本さんの4人。

特殊勝利1人とバーン2人って……あまり相手にしたくないわ  
ね。

ん？あれは……亮？

こんな所に何の用かしら？しかも何か誰か探してるっぽい。  
まさか優の決闘デュエルを見に来たとか？

いや、いくらシヨタコン疑惑がある亮でもここまできて  
会いに来るわけ……ないと思うけど、

あ、こっち来た、出来れば話しかけられたくない……

「明日香、少しいいか？」

案の定亮はこっちに来て私に話しかけてきた……

「な、何？」

「いや、少し人を探しているのだが……」

「もしかして、優のこと」

「そうだ！それだ、優は何処だ、まだ決闘<sup>デュエル</sup>してないか！？」

グラン、グラン。

亮に両肩を掴まれ前後にグラングラン揺らされる。  
の、脳がシャッフルされる。

「ちょ、とりあえず手はなして、  
脳が、ゆ、ゆれるから」

「っ！す、すまん、少しあせっていた」

そう言つて亮は私から手を離す、はあ、良かった……  
それとさつきから手に持っているビデオカメラは何かしら？

「優はね、今日熱があつて休みよ」

「や、休み！病気が！インフルエンザか！HIVか！  
エボラ出熱か！？天然痘か！！T-ウイルスか！！！」

グラングラン

再び脳が揺れる！

「お、落ち着いて、亮！！」



そんな大したことないわ！多分ただの熱よ！」

「ただの熱……………そうか、分かった、  
悪かったな明日香」

もう用済みだと言った態度で亮は決闘場からデュエルフィールドテクテクと出て行く。

「え、ええ。

それと亮、何処行くの？」

「……………」

テクテクテク、亮は私の言葉を無視して歩き続ける。

「ねえ、亮！何処行くの！？」

「……………」

テクテクテク

「もしかして、イエロー寮？」

「……………」

亮の足が止まる。

「凶星ね……………」

「な、ななな、何のことだ？」

「亮……私は亮がどんな変わった性癖を持っていても構わないけど、一様学園のカイザーと呼ばれているんだから威厳は保ったほうがいいわよ………」  
「それと……犯罪には触れないでね」

「な！？？どういうことだ！」

俺はただたあんにゆ、帰るようとしゅてるだけやよ……！」

「ごめん、何言ってるか全然わかんない」

「さらばだ明日香……！」

あ、逃げた………」

亮………あなたはもう、私が知ってる丸藤亮じゃないのね………」

「学園のカイザーも、地に落ちたものだな」

廊下  
丸藤亮 まるふじやう  
視点

俺は風のように早く廊下を突っ走る、廊下を走ってはいけないらしいが

そんなの守るのは小学生までだ！

今は優のことが心配だ、

うむ、可笑しいぐらい今日の俺は何か変だ……

まあ今はひたすら走り続ける。

『ピュ

』

「あれ、今物凄い勢いで走ってた人って、丸藤先輩？まあいつか、早く帰ろう優、熱下がってるといいな」

雷堂優らいどうゆう  
視点

『チツク、タツク、チツク、タツク』

時計の秒針が聞こえる、時計の針以外に音が無い、  
長い間の沈黙……はあ、暇だな……

「はあ、今頃テスト終わってるかなあ〜」

正直熱も下がったしくしゃみや咳きも止まった、

今からでもテスト受けさせてくれないだろうか。

折角神楽坂と勉強して、デッキ調整したのに。

「はぁ……………」

机の中からデッキを取り出す。

いつも同じ暗黒界も飽きるから亮の家から  
持って来たカードと神楽坂から貰ったカードで  
改造したデッキ、まだ1回しか使っていないなあ。

「はぁ……………」

さつきから何度も出てくる溜息。

なんか気分が優れない、熱のせいじゃない、気持の問題。

「はぁ……………」

『ガチャ』

あれ、部屋の扉が開いて誰かが入ってきた、  
神楽坂が帰ってきたのかな？

「神楽坂、お帰り……………あれ、亮？」

初め神楽坂だと思ったが、  
実際に入ってきた人物は亮だった。

「何で亮がここに？」

「優が今日学校を休んだと明日香から聞いたんだが」

「あ、うん、ただの熱だから、もう大丈夫だよ」

「そ、そうか、良かった」

「そんな大したことじゃないよ」

亮は僕に向かって歩いてくる、そして

「えっ、な、何！？亮！？」

亮がいきなり僕に抱きついてきた。

「良かった、本当に良かった……………」

「りよ、亮？」

「心配したんだぞ優……………もう、会えないかと思った……………」

「いや、だからただの熱だし……………」

「心配した……………優が無事で安心した」

亮は僕に抱きついたまま、離れようとしない。

でも、暖かい、久しぶりだな、この気持。

「亮、もう大丈夫だから、放して」

「あ、すまない、優」

亮は僕から離れる。

「あの、僕を心配して来てくれたの？」

「当たり前だろ家族なんだから」

「……………家族」

家族……………なんだろう、この胸がポカポカする。

「ただいま、ってあれ、もしかして丸藤先輩!!」

あ、神楽坂帰ってきた。

「お帰り、神楽坂」

「あ、ああ、えっと……………その人は？」

「え、この人は丸藤亮、3年生の先輩」

「それは知ってるよ！有名だから！

俺は何でここにいろかと聞いてんの！」

神楽坂が五月蠅いから事情を説明することにする。

数分後

「はあ　　！！！！丸藤先輩と同じ家に住んでんの！！！！」

「うん、普通にそう言ったけど」

「いやいやいや、普通に凄いだろお前！  
学園のカイザーと一緒に住んでるって！」

「ん、そう」

「そつだよ！特ダネだよ！！俺が新聞部なら  
明日にネタにするよ！！」

「いや、この学校新聞部ないし」

「やべーな、うん新発見だよ新発見！」

「うん、僕には何故こんなに神楽坂のテンションが高いのかよく分  
からないよ」

「早速ですが丸藤先輩、俺と決闘デュエルしてください！！！！」



何でいきなり!?

「ああ、構わない」

構わないの!?

「ここだと、狭いから外に出るか」

「はい」

と、言うわけで……

話がもうメチャクチャだからとりあえず決闘<sup>デュエル</sup>して上手くまとめよう、

と言う作者の勝手な都合で亮がこれから神楽坂と決闘<sup>デュエル</sup>するらしいです。

「行きますよ!」

「いいぞ」

「「決闘<sup>デュエル</sup>!!」」

「先行は頂きます、ドロー!!!」

俺はモンスターをセット、更にカードを2枚伏せターン終了です。

俺が1年だからって手加減しないでくださいよ!」

神楽坂 LP4000 伏せモンスター×1

手札 3枚 伏せカード×2

「ああ、もちろんだ。

俺のターン、ドロー。

相手フィールド上のみモンスターが存在するとき

このカードは特殊召喚できる、サイバー・ドラゴン（ATK2100）を特殊召喚」

亮が後攻をとると9割がた2ターン目で出るカード。本当亮のドローカにはいつも驚かされる。

「行くぞ、サイバー・ドラゴンで伏せカードを攻撃する、エヴォリューション・バースト!!!」

「今だ!この瞬間罫カードオープン!攻撃の無力化。あらゆるモンスターの攻撃を無効化する!」

サイバー・ドラゴンが出した白い光線は

突如神楽坂の場に現れた不思議な渦に飲み込まれた。

「そう簡単に攻撃は通しませんよ」

「……おもしろい、カードを3枚伏せターンエンド」

亮 LP4000 サイバー・ドラゴン ATK2100

手札 2枚 伏せカード3枚

3枚セットか、ヤバイなあ。

「行きますよお！俺のターン、  
装備魔法、幻惑の巻物をサイバー・ドラゴンに装備、  
装備モンスターは宣言した属性になる、俺は炎属を選択」

炎、ということのはあのモンスターは

「そしてモンスターを反転召喚、火霊使いヒータ（ATK500）」

赤く、長い髪をした女の子が出現した、

今思ったけどヒータってなんか他の霊使いより胸が

『ギロツ』

！

今ヒータに睨まれた気が……やっぱり気にしてたんだ……

「そしてヒータのリバーズ効果により炎属性となったサイバー・ドラゴンを奪う！」

「だから幻惑の巻物を」

「どうです、凄いでしょ！」

「考えは悪くない、だが。」

永続罨発動！サイバネティック・ヒドウン・テクノロジー！

サイバネティック・ヒドウン・テクノロジーの効果は、

サイバー・ドラゴンを1体生贄にささげ相手モンスターを1体破壊する、

俺は早速サイバネティック・ヒドウン・テクノロジーの効果を発動  
サイバー・ドラゴンを生贄に火霊使いヒータを破壊」

サイバネティック・ヒドウン・テクノロジー、  
何かいいづらい、途中かみそうだな……どうでもいいけど。

「く、しかしこれで丸藤先輩の場はがら空き！

今がチャンス、ガガギゴ（ATK1850）を召喚」

攻撃力不足の神楽坂のデッキに入れた効果なしのアタッカー、  
なんかエリアの相棒らしいから入れたらしい。

「ガガギゴで攻撃だあ！」

2足歩行の大きなトカゲみたいな姿をしたガガギゴが亮に襲い掛  
かる。

「まだだ」

「何っ！」

「もう1枚罫発動、リビングデッドの呼び声、

墓地のサイバー・ドラゴンを蘇生」

亮を守らんと言わんばかりに復活したサイバー・ドラゴンがガガ  
ギゴの前に立ちはだかる。

「場のモンスターの数が変わったため、攻撃を中断する、  
くそう、俺はターンエンドです」

神楽坂 LP4000 ガガギゴ ATK1850  
手札 2枚 伏せカード×1

「まだまだ甘いぞ1年生、俺のターンドロ。」

魔法カード、強欲な壺を発動、デッキからカードを2枚ドロ、手札から速攻魔法サイクロンを発動、最後の伏せカードを破壊」

「それにチェインし和睦の使者発動、このターン俺のモンスターは破壊されず  
ダメージも受けない！」

「（空ぶったか）仕方ない、ターン終了だ」

亮 LP4000 サイバー・ドラゴン ATK2100  
手札 3枚 サイバネティック・ヒドウン・テクノロジ、  
ピングゲッドの呼び声、伏せカード×1

「俺のターン、ドロ、よし！！」

俺は魔法カード、壺の中の魔術所、お互いはカードを3枚ドロ  
する」

3枚もドロ、そんなの亮にやらせたら大変なこと！

亮の手札

大嵐

サイバー・レーザードラゴン

サイバー・バリアドラゴン

アタック・リフレクト・ユニット

サイバー・ジラフ

サイクロン  
事故ってる

「……………（ヤバイ）」

「そして俺もサイクロンを発動し丸藤先輩の  
サイバネティック・ヒドウン・テクノロジーを破壊」

「よしよし、なかなか、さらに魔法再生で壺の中の魔術書を回収し  
もう1度壺の中の魔術書を発動、お互いは3枚ドロ」

亮の手札が9枚に！神楽坂死ぬぞ！

亮の手札

大嵐

サイバー・レーザードラゴン

サイバー・バリアドラゴン

アタック・リフレクト・ユニット

サイバー・ジラフ

サイクロン

フォトン・ジェネレーター・ユニット

ロスト・ネクスト

暗黒界の狩人ブラウ

変わってない

「……………（俺、何か悪いことしたかな、泣いていいか、そして俺は  
一体何があつてロスト・ネクストと暗黒界の狩人ブラウをデッキに  
入れたんだ？）」

「もう1枚サイクロンを発動しリビングゲットの呼び声を破壊」

「く」

「そしてリビングゲッドと繋がってるサイバー・ドラゴンも破壊」

「そして3枚目のサイクロンを発動し伏せカードも破壊！」

「な……………」

「これで先輩の場はから空き！」

憑依装着 エリアを召喚（ATK1850）

ワンダー・ワンドをエリアに装備しエリアの攻撃力を500上げる

「る」

憑依装着 エリア ATK1850      ATK2350

「これでトドメです！ガガギゴとエリアで先輩にダイレクトアタック！」

亮の場にカードはない、まさか神楽坂に亮が負けるのか！

確かに亮記憶が戻ってからなんか様子が変だけど……

「……………」

亮 LP4000 LP725

「な、なに！何故ライフが！？しかもなんでこんなに中途半端！？」

「さっきサイクロンで伏せカードが破壊されそうになったとき  
俺は収縮を発動しがガギゴの攻撃力を半分の925に下げている」

「さ、流石先輩です俺はターン終了です」

神楽坂 LP4000 ガガギゴ ATK1850 憑依装着 エリ

ア ATK2350

手札 3枚 ワンダー・ワンド

「ふ、君は良く頑張った、でも爪が甘かったな」

「な！」

流石亮！勝利宣言ですね！！

「（と、言っでは見たものの俺、大丈夫か、

このドローに………全てをかける！）俺のターン、ドロー……！！  
（きた！）

魔法カード、手札抹殺を発動！お互いのプレイヤーは



手札を全て捨てる、そのご俺は9枚ドロー、  
更に暗黒界の狩人ブラウが捨てられたためもう1枚ドロー」

一気に10枚ドローだと!?

「俺は3枚ドローです」

「行くぞ後輩！死者蘇生を発動しサイバー・ドラゴンを蘇生しパワー・ボンド

を発動場と手札のサイバー・ドラゴンを融合、

サイバー・エンド・ドラゴン（ATK8000）！！

速攻魔法リミッター解除を発動機械族の攻撃力を倍に！」

サイバー・エンド・ドラゴン ATK8000      ATK1600  
00

「サイバー・エンド・ドラゴンでガガギゴに攻撃！

エターナル・エヴォリユーション・バースト！」

「ぐはああ！！！」

神楽坂      LP4000      LP0

「流石先輩です、1度は勝ったと思ったんですけどなあ〜  
やっぱあれも手加減してたんですか？」

「いや、あれは君の実力だ、リスペクト決闘デュエルとは  
手加減して闘うわけではない、相手の力を知り、  
その全てを引きださせ、自分も持てる力全てを使いぶつかり合う、  
それが出来れば勝ち負けは関係ない、それが俺の……リスペクト  
決闘デュエルだ」

「さ、流石先輩!!」

……

「……………」

「ん、どうした雷堂、変な顔して」

「いや、2人の決闘デュエル見てたらさ、もうテストとかどうでも良くなっ  
てきた、

やっぱ決闘デュエルは楽しむのが大切だと思うんだ!

なーに、次があるさ!1回休んだだけでよくよしてたまるか!」

「流石雷堂!!」

「そうだな、優頑張れ！」

数日後

「で、どうだった神楽坂？」

「ああ、ブルーに上がったんだけどな、何か優がテスト休んで受けられなかったのに  
俺だけブルー！って分けにも行かないだろ、だからもう少しここに残ろうと思う」

「で、本当は？」

「すみません、赤点でした、ついでに課題手伝ってください雷堂様」

「まったく」

第35話 「大嵐からのパワー・ボンドを発動！」 by 亮（後書き）

この話はあまり満足して書いてないです、また編集する可能性大です。

今回明日香視点のとき出てきた山本と言うのはTFのキャラです、ウィジャ盤を使う特殊勝利デッキです、亮のテストの相手の綾小路というのは

原作キャラです、テニス部部长らしいです。

万丈目は優のことを恨んでるといふかりベンジしたいと思っていますね、最近ストレス溜ってるっばいです。

第36話 「神楽坂昔話、童話、猿蟹合戦編」 b y 神楽坂（前書き）

今回は半番外編、みたいな感じです。

前書きに書くこと無いから9月からの僕の小説を書く手順でもここに書きます。

月曜に投稿された場合。

月曜・学校から帰ってきたらまずパソコンを開き感想が来てないか確認します。

後は他の作者さんの小説を読みます。

火曜・小説の大まかな流れを考えます。

水曜・水曜は毎週忙しくパソコンが使えないです。

木曜・最新話の小説の前半を書きます（大体デュエルの少し前ぐらい）

金曜・デュエルの内容を考えてデュエルの前半を書きます、台詞はそのときの勢いで書きます。

土日・デュエルの後半と物語の後半（デュエル後とオチ）を考えます。

日曜・この日小説を書くモチベーションが最高に上がるので一気に全部書きます。その後見直しをして月曜に投稿されるよう予約掲載をします。

そんな1週間、忙しい週は2週間ぐらいかかるけど。

第36話 「神楽坂昔話、童話、猿蟹合戦編」by 神楽坂

か「むかし、むかし、あるところにとても明るくて可愛らしい少年がいました、

欠点を上げるとしたら身長が高校生とは思えないくらい小さく心も小さいところです。ここでは仮に蟹の雷堂優君としましよ  
う

ゆ「僕だった！？そして何で蟹！？」

か「その優君は新しく発売したパックを1BOX手に入れたのでした」

ゆ「ねえ、これ何の話、番外編？」

か「『わーい、かけ無しのお小遣いを少しづつ貯めてやっと買えたぞー！』」

優君は凄く上機嫌です」

ゆ「だから何の話！さっきから読んでいる本は何！！」

か「しかし優君の前に現れた悪者、いかにも悪そうな顔で鶏頭

俺様エリートだぜえ！オーラをブンブンだした男

「ここでは猿の万丈目準君とします」

ゆ「万丈目君に何か恨みでもあるの神楽坂！」

か「準君はとても悪い奴で優君の姿を見たとたん準君は

『へへ、良い鴨が現れたぜ！グへへへ』と言い優君に近づきました、そして。

『おいそこの蟹、良いもん持ってんじゃねーか、それ俺が貰ってやるよ』

全く何て悪い奴なんだ準君」

ゆ「もしかしてこれって……………」

か「それに対して優君は『ええ〜駄目だよ、これは僕が頑張って貯めて買った

カードパックなのに……………』

しかし準君はお構いなし『うるせえ！これを渡せって言うてんだろー！』」

ゆ「小物オーラブブン出してんな万丈目君」

か「『返してよ！』と優君は言いましたが準君は

『うるせえーな！分かった分かった、じゃあこれをやる』

そう言って準君は何かの種を1つ優君に渡しました」

ゆ「これ猿蟹合戦だよね神楽坂!!」

か「『この種はカードがなる種だ、この箱30パックを渡し将来カードを何百何千も手に入るんだ、良い取引じゃないか?』」

ゆ「何でもかんでもデュエルモンスターズ  
に持っていけると思ったら大間違いだよ!何だよカードが成る  
木って!」

か「さつきから隣でリアル優君が五月蠅いですが無視、  
頭が弱い優君はまんまと騙され折角買ったパックを取られてし  
まいました」

ゆ「何やってんの蟹の僕!」

か「優君は早速手に入れた種を家の庭に植えました、  
そして月日は流れ、種はやがて芽が出て葉が生い茂り  
立派な木になりました、そして沢山の実、もといカードも実り  
ました」

ゆ「何でもありだなお前の世界……」



か「そしてこれからカードを収穫しようとしたそのときです  
優君はあることに気づきました」

ゆ「もう突っ込まないぞ……………」

か「優君は身長がとても小さく、カードに手が届きませんでした」

ゆ「今日のお前本当に失礼だな!!」

か「……………」

ゆ「……………」

か「困っている優君の目の前に現れたのは先日種を交換した準君でした」

ゆ「今の間、何だったの!」

か「『ぐへへ、お困りのようだね、俺がカードを取ってあげよう』  
そう言って準君は軽いステップで木を上り、カードを取っては  
自分のデッキケースにしまっけてしまいました」

ゆ「やっぱ猿蟹合戦だー!!」

か「『猿君、僕にもカードちょうだいよ』と優君は言いますが  
意地悪な準君は優君に『ワイト』や『マグマン』などの  
雑魚カードばかり優君に投げて、レアカードは全部準君が取っ  
てしまいます」

ゆ「ワイト舐めんなよ!強いぞワイト!」

か「そして優君に投げられたカードは優君の体に突き刺さり  
大ダメージ、優君は全身から血を噴出して倒れてしまいました」

ゆ「ドンだけ鋭いんだよ、流石天然物」

か「優君は全身から血を出し死に掛けましたが何とか  
一命を取りとめ生きながらえました。  
そして憎き万丈目準に復讐するため  
優君は仲間を集め準君を倒す作戦を考えました」

ゆ「ねえもう帰っていい?」か「駄目だここからがいい所なんだか  
ら」ゆ「そうですか」

か「優君の友人関係的に集められた仲間は全部で3人だけでした」

ゆ「妙にリアルな設定作らないでよ……」

か「その仲間の1人目は、ぼさぼさ頭で小さなメガネをチヨコンと付け

優のおかげで覗き魔フラグを避けた少年、栗の丸藤翔君です」

ゆ「他の生徒も巻き込んだ！お構いなしだな！！」

か「2人目は頭脳明晰、容姿端麗、パーフェクトな美女  
女王蜂の天上院明日香さん」

ゆ「明日香だけなんか扱いがいい！！」か「なんかあの人には逆らわないほうがいい気がするから……」ゆ「うん、そうだね」

か「そして最後に糞ふんの丸藤亮先輩」

ゆ「亮が1番適当それに酷い！糞って……先輩でもお構い無しで弄るなコイツ……」

か「3人で作戦会議を立て喧々諤々（けんけんがくがく）な会議が  
繰り広げられました」

ゆ「そっぴや白じやくがないな」か「白はそれにあう人材じゆうざいがなかった  
からやめた」

ゆ「じゃあ亮を白にしてあげてよ、流石に糞は酷いよ」

か「その喧々諤々な会議が数時間流れ喧々諤々（けんけんがくがく）

」

ゆ「神楽坂喧々諤々好きだな、新しい言葉覚えたから使いたかった  
だけじゃないのか!？」

か「そして数日後、作戦決行の日、優君一味は準君の家に待ち伏せ  
しました」

ゆ「あれ、スルーされた……」

か「『あー、寒い寒い、早く家に入って暖房がかかった部屋で

みかん食べながら映画見よつと』そっぴいなながら準君は家に入  
ろうとしました」

ゆ「意外と現代風だ」

か「しかし家の前には優君が待ち伏せていました

『お前はこの前の生きていたのか!』準君はビックリ、  
てつきりカードが刺さって死んでいたと思っていました。

そしていきなり準君の背後から糞が襲いかかり準君をロープで  
縛りつけます

その間準君は『うわっ!臭い、何だこの匂いは!

そしていつ間にか体が動かない!』と喚いていました」

ゆ「原作とかなり違う展開だな……………」

か「そして動けなくなった準君はもうどうすることも出来ません。

優君達の復讐タイムです。

まず明日香さんはムチで準君の体をペチペチ叩きます」

ゆ「酷い!!!」

か「優君は準君の鶏頭をバリカンで剃ってしまいました」

ゆ「惨い!!!」

か「そして翔君は準君の脛すねにガムテープを貼って、一気に剥がしま  
す」

ゆ「地味に痛い！！！！」

か「亮君はと言うと臭いといわれ木の下で体育座りになっています」

ゆ「メンタル弱い！！！！！」

か「拷問は1時間続き準君にもう悪いことはしないと警告したあと  
ロープで巻いた状態のまま川に投げ捨ててしまいました」

ゆ「死ぬぞ！」

か「めでたしめでたし」

ゆ「めでたくない！」

「と言う本を作ってみたんだがどう思う雷堂？」

「ごめん、こうゆうときなんて言えばいいかわからないや」

「『最高だね！凄いよ神楽坂！』って言いながら笑えばいいと思う」

「最悪だ！ふざけるなよ神楽坂！」

「で、この本を100冊ぐらい刷って学校で売ろうと思うんだけどどう思う？」

「止めとけ、まず売れない、最悪の場合殺されるぞ神楽坂」

「……………」

「……………」

「じゃ、次回作に乞<sup>こ</sup>つご期待……！」

「話そらした！そして今回の僕のツッコミ9割がたスルー！？」



第36話 「神楽坂昔話、童話、猿蟹合戦編」 by 神楽坂（後書き）

今回の話はなんか勢いで書ききりました、ただ単にボケとツッコミが繰り返されてるだけ、そんなお話、僕的には好きです（書くのが楽だったからかもしれないが……）

月1テストの次と言えば似非闇のデュエリストタイタンさんの出番ですね、

それと感想くれると嬉しいです、良かったら書いてください。

第37話 「腐ったみかんは周りも腐らす」by優（前書き）

祖父から大量のみかんが送られてきてこのサブタイトルにしました。

この前暗黒界デツキで友達のカラクリと闘ったら6勝2敗と圧勝でした、わっはっは！！

最近風邪がはやってますね、皆さんは大丈夫ですか？

みかんを毎日食べていれば風邪なんか引きませんよ！本当です！

僕の家には現在大量のみかんがありビタミン何チャラを毎日摂取しています。

やっぱり冬と言えばみかんですね、みかんは美味しいし食べやすいし最高ですね！

さーて、みかんでも食べようかな……あ！このみかん腐ってる！あ、こっちも！

なんてこった！！！！

第37話 「腐ったみかんは周りも腐らす」by優

「神楽坂のかゝは『加藤』のかゝ  
神楽坂のぐゝは『愚民』のぐゝ  
神楽坂のらゝは『裸体』のらゝ  
神楽坂のざゝは『残念』のざゝ  
神楽坂のかゝは『加藤』のかゝ」

「人の名前で変な歌歌ってんじゃねー!!」

「ぺぷし」

雷堂優らいどうゆう 視点

「いたたたた……いきなり背後から飛び蹴りかます奴がどこにいる」

休み時間1人で廊下を歩いているとき、暇だったので

神楽坂で歌歌っていたらいきなり蹴り飛ばされた……

「普通本人に許可なしに変な歌歌ってたら切れるわ！」

「まあまあ」

「まあまあじゃねーよ！」

何でぐが愚民で、ざが残念なんだよ！

それと誰だよ加藤って！？2回出てきたぞ！」

「ごめす、ごめす」

「まったくもって謝る気無いだろお前」

「分かった、分かった、今回は僕が悪かった、ごめんね神楽坂」

「まったく……」

『ドン』

「っ」

「ん、どうしたの神楽坂」

横の神楽坂を見てみると廊下を歩いている生徒と肩がぶつかったらしい。

「あ、すいません」

とりあえず謝ってる神楽坂。

「ごめんじゃねーよ、肩脱臼したぞゴラァ！」

しかし相手は思っていたのと90度ほど違う答えが返ってきた。  
神楽坂とぶつかった生徒は青い制服を着ている、

ああ、どうせ中等部から入ってきた、お坊ちゃまだろ。

「いや、その、マジで肩脱臼したの？」

「マジだマジ！大マジだよ！とりあえず慰謝料」

「あ……いや、その」

おどおどしている神楽坂。

ちっ、反吐が出る。

「神楽坂、コイツに謝らなくても良い、どうせ自分からぶつかったんだろ」

「あ、あ、！てめえには関係ねえ、だろ！」

「関係大有りだ、その程度で脱臼するお前が悪い、カルシウムとれカルシウム」

「うち、なめあがって、そもそもイエローが廊下の真ん中歩いてるからだろうが！！」

「うっせーな、イエローとかレッドとかそんなの関係ない、神楽坂は1度謝ったんだ、お前も謝れ、そして去れ」

「ぐ、て、てめえ、もうマジでゆるさねえぞ……」

「お、おい雷堂、ここは謝っとけて」

「なんで、何でこんな奴に、悪いのはこいつ、僕も神楽坂も悪くない」

「もう謝っても許さねえぞガキ！！」

そのブルー生徒は僕の両腕を掴み壁に叩きつける、痛って。

「何かあったらすぐ暴力、そんなんじゃ先の人生生きていけないよ、

それに肩、脱臼したんじゃないの？」

「てめえ、自分の立場が未だに分かっていないようだな、その顔デコボコにしてやるるか」

「（あわわわわ、どうしよう……誰かに助けを……」

でも皆俺たちに気づいてるのに見てみぬふりだし……」

「ここは俺が、もともと悪いのは俺なんだし」

「……………」

「おい、何とか言えよ」

「もういい、雷堂！」

「すいません、俺が悪かったです、どうか許してください」

神楽坂……………」

「へ、さっき言ったよな、謝っても許さねえって」

「……………でも……………」

不良の視線が神楽坂に行ってる、

いま、腕は動かないが不良はスキだらけだ今がチャンス。

僕はスキだらけの不良の股間に思いつき蹴りをかます。

「ぐおおおー！」

僕から手を離し、凄く痛そうな顔で苦しむ不良、1名。

「こ、殺す、マジで殺す、リアルに殺す」

不良は腕を思いっきり上げて拳を僕の顔に向けて

「止めるんだ君たち！」

殴る前にいきなり僕達の空間に干渉してきた第三者に止められる。

「りよ、亮？」

不良の拳を止めたのは亮だった……

「もし、ここで優に手を出したらブルーとはいえ最低停学にはなるぞ。

それに……俺が貴様を許さない!!」

「な、お前は3年の丸藤……」

「俺のことを知っているのか、ならここは俺に免じて見逃してくれないか？」

「はあ、お前が誰でも関係ねーよ、

俺はコイツを1発ぶん殴らないと気がすまねえ!!」

「まあ待つんだ、ここで君が問題を起こし退学になったら元もこもないだろう、

そこでだ、ここはデュエルアカデミアだ、

2人が決闘し負けたほうが謝る、それでこの話は終わり、それで



いいじゃないか」

「ああ！何言ってるんだ、決闘のし過ぎで頭が可笑しくなったのか？」

いや、遊戯王の世界だからここはこの条件で飲めよ。

「じゃあ、君が勝ったら俺のデッキをやるっ」

「！」

今の亮の言葉を聞いた不良はいきなり目の色を変え。

「しゃーねーな、その条件でいいだろう、だが俺が勝ったら約束通り学園のカイザーのデッキは頂くぜ！」

「りよ、亮！なんで！」

「何がだ？」

「僕達の問題なのに亮が……僕が負けたら亮のデッキが」

「問題ない、俺はお前が勝つと信じている」

「……………分かった、絶対勝ってくるよ」

決闘場

「（あわわわわ！大変だ！俺のせいで話がどんどん大きくなってしまった！

優、大丈夫か……）」

「へへ、カイザーも散々だな、  
貴様なんかを庇ったせいでデツキを持っていかれるとはな」

「大丈夫、僕はお前に負ける気はこれっぽっちも無い」

「けつ、減らず口を、俺はお前みたいな力も無いくせに  
粹がつてる屑が大嫌いなんだ！」

「そう、僕もお前のこと大嫌いだから」

「けっ、まあいいさっさと始めるぞ！」

「決闘！！」

神楽坂 視点

どうしたんだ雷堂のやつ、雷堂があんな感情を表に出すなんて……  
いつもの雷堂らしくない……

「先行は僕だドロー。」

クリッター（DEF600）を守備表示で召喚、  
カードを1枚伏せてターン終了」

雷堂 LP4000 クリッターDEF600

手札 4枚 伏せカード×1

「次は俺のターンだ！ドロー！」

シャインエンジェル（ATK1400）を召喚！」

筋肉が意外とある天使が舞い降りる、

効果は破壊されるとデッキから天使をリクルートするモンスター！

「そしてシャインエンジェルでクリッターを攻撃」

シャインエンジェルはただ単にクリッターを殴る、

しかしシャインエンジェルのパンチはクリッターの大きな目に入る、

うわっ！いたそー……

「だがクリッターが破壊されたためデッキから攻撃力1500以下のモンスター」

暗黒界の狩人ブラウを手札に加える」

「そうかよ、俺はカードは2枚伏せターンエンド」

不良 LP4000 シャインエンジェル ATK1400  
手札 3枚 伏せカード×2

「はっ、所詮その程度か」

「なんだと!!」

さつきからやたらと挑発する雷堂、いつものアイツらしくない、もしかして、本気で怒ってるのか、あいつが怒ってるところ初めて見た……

「僕のターン、ドロー。」

伏せカード発動、暗黒の謀略。

相手は手札を1枚捨てこのカードの発動を無効にできる。効果はお互いのプレイヤーは手札を2枚捨て2枚引く」

「手札交換か、いいぜ」

「2枚捨て2枚ドロー」

「俺も2枚捨て2枚ドローだ!」

「そして今捨てられた暗黒界の龍神グラフィアと暗黒界の術師スノウ

の効果を発動

「グラフィアの効果でシャインエンジェルを破壊」

「ちっ」

「スノウの効果でデッキから暗黒界と名のつくカード、暗黒界の雷を手札に加える。

今手札加えた暗黒界の雷を発動、伏せカードを破壊」

雷堂破壊したカードは残骸爆破？あんな使いづらいカードをデッキに……………

「その後手札を1枚捨てる、暗黒界の狩人ブラウを捨てる  
そしてブラウが捨てられたので1枚ドロー。」

さあ、行くぞ！

暗黒界の狂王ブロンを召喚、そしてブロンを手札に戻し  
墓地の暗黒界の龍神グラフィアを特殊召喚！」

暗黒界の龍神グラフィア ATK2700

雷堂の場の床から漆黒の龍が湧き出てくる、

龍のような翼に獣のような牙……………何時見てもおっかないモンスター  
だな、

雷堂に似合わないな、あいつは始めてみたときいつもニコニコして  
天使族モンスターでも使うと思ってたんだが……………

「そして墓地の暗黒界の狩人ブラウ、術師スノウ、クリッターを除  
外し

墓場に眠る悪魔の怨念が集まりしとき悪魔の傀儡くわいが動き出す、  
乗り移る悪魔の魂！ダーク・ネクロフィア、特殊召喚！！」

ダーク・ネクロフィア ATK 2200

な、なんだ！？雷堂の負の感情が乗り移ったのかはしらんが  
前見たときより禍々しく黒い霧がフィールドに撒かれる。

そして霧から現れる不気味な人形を持った……女性？悪魔？

うええ〜なんかグロテスク……… やっぱりあれは雷堂には似合わない。  
い。

「へっ！そんな見掛け倒しのモンスターを何体集めても無駄だぜ！」

「（……あいつの場には伏せカードが1枚、なのにあの余裕………セ  
イバリあたりか？）

そんなの関係ない、バトルフェイズ！暗黒界の龍神グラフィアでダ  
イレクトアタック！！」

あの黒い龍は口から太くて黒い光線を吐き出す。

「ぐっつう！！」

不良LP4000                      LP1300

「（伏せカードを発動しない………ただのブラフか）」

「やりあがったな！！」

「これで終わりだ、ダーク・ネクロフィアでトド 何!？」

雷堂が不良に攻撃宣言しようとした瞬間、  
不良のフィールドに黒い渦が出来る。

「な、なんなんだあれ?」「あのカードは恐らく、冥府に続く階段」

「あのギャラリーの言うとおり俺はダイレクトアタックを  
受けたとき罨カード、冥府に続く階段を発動していた、  
このカードの効果でデッキより

冥府の使者ゴーズ（ATK2700）と冥府の使者カイエン（A  
TK2500）を  
特殊召喚する!！」

ゴーズにカイエンって!2枚ともとんでもなく高いレアカードじ  
やねーか!  
なんであいつが……

「（どうせ金力だろ……  
それはそうとOCGと効果が少し違うな……まあいいど）」

黒い渦から飛び出てきたのは2人の……人間  
片方は男でもう1人は女、どちらも黒い鎧を着て  
男は大剣、女は長剣を装備している、

あの2人も雷堂達のモンスターに負けず劣らず嫌なオーラを出している。

「……………」

「どうした、驚いて声もでないか？ あぁん？」

「……………その程度か、

魔法カード手札抹殺を発動。

手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ数だけドロー！

今捨てた暗黒界の龍神グラフィア、刺客カーキの効果で

ゴーズとカイエンを破壊」

「なにいい！」

これで不良の場にカードは無い。

「1つ言っておく、僕はお前なんかには負けないし

お前にやるライフは1ポイントもねえ！」



第37話 「腐ったみかんは周りも腐らす」by優（後書き）

今回優は軽くキャラ崩壊してます、優は調子にのってるブルーが大嫌いです。

それに見かけによらず意地っ張りなので相手が誰でも自分が思ったことは途中でまげません、意外といい根性してるな！

第38話 「腐ったブルーは肅清させる」by 優（前書き）

この前カラクリデッキの友人に3戦3勝と圧勝でした！  
しかし今日、その友人の新デッキとデュエルし5勝5敗という  
半々の結果でした、ふ、やっと互角か！みたいな。

今思い出した黒歴史……

……  
中学のとき、ハルヒダンスをオタク友達と覚え皆で踊った過去が……  
……  
今思い出すとやっちゃった……って感じになります……

### 第38話 「腐ったブルーは肅清させる」by優

神楽坂 視点

あわわあわわ、ちょっとしたことから丸藤先輩のデッキを賭けた  
アンティデュエル賭け決闘に……………

もし雷堂が不良に負けたら丸藤先輩のデッキが……………

今は雷堂の方が優勢だから大丈夫だけど、何時逆転されるかわからない、

頼む雷堂そのまま勝ってくれ!!

ついでに今の場の説明……………

雷堂 LP4000 暗黒界の龍神グラフア ATK2700  
手札 5枚 ダーク・ネクロフィア ATK2200

不良 LP1300 手札3枚 場にカード無し

そして現在雷堂のメインフェイズ2。

「カードを2枚伏せてターン終了」

優 LP4000 暗黒界の龍神グラフア ATK2700  
手札 3枚 ダーク・ネクロフィア ATK2200

伏せカード×2

「ちっ！調子に乗るなよ！俺のターンドロ―！  
ふ、これだ」

「(？)」

「俺は巨大ネズミ（ATK1450）を召喚」

天使の次は大きなネズミ？

巨大ネズミは破壊されるとデッキから攻撃力1500以下の地属性モンスターを

特殊召喚するリクルートモンスター……ん？

天使と地属性は合わないはず……なぜデッキに？

もしかしてあいつ……バカ？しかも攻撃表示だし……。

「俺はカードを2枚伏せてターン終了」

不良 LP1300 巨大ネズミ ATK1450

手札 2枚 伏せカード×2

「僕のターン、ドロ―。」

暗黒界の取引を発動、お互いのプレイヤーは手札を1枚引き

その後手札を1枚捨てる、ドロ―。

そしてバトルフェイズ！

暗黒界の龍神グラファで巨大ネズミに攻撃！

グラファイトクリスタル！！」

グラファは黒いビームを出す、

でもそのビームの中に黒い塊がいくつか入ってるのが見えるなんだ

あれ？

まいいや、グラファの攻撃を受けた巨大ネズミは消滅した。

「グラファの攻撃時に永続罨スピリットバリアを発動！

これで俺の場にモンスターがいる限り戦闘ダメージを受けない。

巨大ネズミが破壊されたためデッキから攻撃力1500以下の地

属性

モンスター、巨大ネズミを特殊召喚するぜ！！」

LP1300

LP1300

「（ちつ、スピリットバリアのせいでダメージが0に、

しかしスピリットバリアがあるだけでモンスターを

攻撃表示で出すか？挑発？デッキ圧縮？墓地肥やし？）」

「（くくく、あの顔はまだ俺の目的がまだ分かってない顔だな

その内分かるから楽しみに待つときな小僧）」

「（何か怪しい……）そのままターンエンド」

優 LP2200 暗黒界の龍神グラファ ATK2700

手札 3枚 ダーク・ネクロフィア ATK2200

伏せカード×2

「俺のターンだ、ドロー。」

さあこれが俺のデッキの使いかただ！

コーリング・ノヴァを召喚しグラファに攻撃！」

攻撃力の低いモンスターで攻撃！？

何を考えてる！

コーリング・ノヴァはグラフィアに攻撃しそのまま  
爆発、しかしグラフィアは無傷でコーリング・ノヴァは跡形もなく  
消滅した

自爆特攻？

「コーリング・ノヴァが破壊されたためデッキからコーリング・ノ  
ヴァを特殊召喚、

そして特殊召喚されたコーリング・ノヴァでグラフィアに攻撃！」

特殊召喚されたコーリング・ノヴァはまたグラフィアに

意味の無い攻撃をする、駄目だ、俺はあいつのやってることが理  
解できん。

「コーリング・ノヴァが破壊されたためデッキからコーリング・ノ  
ヴァを召喚、

そのまま攻撃だコーリング・ノヴァ！」

「（まさか……あいつの狙いは、もし予想が当たっていたらかなり  
不味い……）」

ならば畏発動炸裂装甲！攻撃モンスターを効果で破壊する」

「ばーか、甘いんだよお！」

巨大ネズミを生贄にし2枚目の永続畏暴君の威圧発動。

これで俺のモンスターは畏の効果は一切受けなくなる」

「なに！」

「これでコーリング・ノヴァは戦闘で破壊されたデッキから

2枚目のシャインエンジェルを特殊召喚。

2枚目のシャインエンジェルでグラファに攻撃！  
シャインエンジェルの効果でデッキから光属モンスター  
ユーフロイドを特殊召喚」

筋肉質の天使の次は目がついたユーフォーが現れる。

「ユーフロイドでグラファに攻撃、  
ユーフロイドが破壊されたためデッキより  
2枚目のユーフロイドを特殊召喚、  
2枚目のユーフロイドでグラファに攻撃！  
ユーフロイドが破壊されたことによりデッキより  
3枚目のユーフロイドを特殊召喚、  
3枚目のユーフロイドでグラファに攻撃！  
ユーフロイドが破壊されたことにより  
デッキから機械族モンスターユーフォートルを特殊召喚」

「……………やばい」

ユーフォーの次は緑の亀が現れたさつきからなにを企んでるんだ？

「UFOタートルでグラファに攻撃、  
UFOタートルが破壊されたためデッキより  
2枚目のUFOタートルを特殊召喚、  
2枚目のUFOタートルでグラファに攻撃！  
UFOタートルが破壊されたことによりデッキより  
3枚目のUFOタートルを特殊召喚。

この程度でいいか、カードを1枚伏せてターンエンドだぜ！！へ  
へっ」

不良 LP1300 UFOタートル ATK1400

手札 2枚 暴君の威圧、スピリットバリア、伏せカード×1

「僕のターン、ドロー。」

よし、サイクロンを発動、スピリットバリアを破壊」

「なにい！！」

「これで終わりだ、グラファでUFOタートルに攻撃！黒炎波動弾」

「今回は黒い炎を吐いた、今回はグラファ、技のレパトリーが多いな。」

「なーんてね、永続罠グラヴィティ・バインド 超重力の網！

これでお前はレベル4以上のモンスターは攻撃が出来ないのだから！  
だが俺は暴君の威圧があるためグラヴィティ・バインドの効果を受けない！

はっはっは！！」

「ぐ、だが、カードを1枚伏せターンエンド」

優 LP4000 暗黒界の龍神グラファ ATK2700

手札 3枚 ダーク・ネクロフィア ATK2200

伏せカード×2

「ぎゃはははは！！これで俺の勝ちだ！勝利宣言させてもらっぜ！  
ドロー！」

来い！俺の切り札！カオス・ネクロマンサー（ATK？）！」

攻撃力？つかなんだあのモンスター、



ボロ布を纏った悪魔が現れる。

「や、やはり！」

「ほお、これが出るのは予想がついてたみたいだな、  
だが分かったところで意味は無い！」

カオス・ネクロマンサーの攻撃力は墓地のモンスターの数  
×300となる俺の墓地のモンスターは22体！よって22×3  
00で6600だぁ！！！」

「ろ、6600うだとお！！」 「見掛けだけではないようだな、  
あの少年」

「ぎゃはははは！これでトドメだ！  
カオス・ネクロマンサーでダーク・ネクロフィアを攻撃！  
死霊魔術 混沌の呪い！」

「雷堂！」 「優！」

「ぎゃははははは！！！」

「畏発動」

「むただあ！！暴君の威圧がある限り俺のモンスターは畏の効果を受けない！！」

優 LP4000 LP1800

「ちっ、ダメージを受けちゃった……」

「な、何だと！！何故ライフが!?!」

「？」

あああ、僕がカオス・ネクロマンサーの攻撃時発動した畏はダメージ・ダイエツト、これを発動したためこのターン受けるダメージは

半分になるんだ、

これは相手モンスターではなくプレイヤーにかけた畏のため暴君の威圧は

関係ない……いやあ残念だったね、王宮のお触れなら勝ってたのに」

よ、良かった〜ひやひやしたぞ。

「君は僕のライフを一気に削るためにトーク・ネクロフィアを攻撃したんだと思うけど、それは間違いだったね……」  
墓地のトーク・ネクロフィアの効果発動おお!!!」

さつきから決闘場デュエルフィールドに充滿していた黒い霧がカオス・ネクロマンサーの体に入っていく、まさか

「このカードが破壊されたとき相手のモンスター一体に憑依し  
コントロールを奪う」

「なな!！」

「さあ、どうする?」

「(で、でも俺の手札には炸裂装甲がある)

UFOTートルを守備表示にしカードを1枚伏せる、ターン終了」

不良 LP1300 UFOTートルDEF1200

手札 2枚 暴君の威圧、グラヴィティ・バインド 超重力の  
網、伏せカード×1

「さあ、これがラストターン、

カオス・ネクロマンサーの攻撃力は墓地のモンスターの数×30  
0、

僕の墓地にモンスターは4枚攻撃力は1200だ、

でも魔法カード暗黒界の取引を発動、お互いのプレイヤーは

手札を1枚捨て1枚ドロウする、そして今捨てた暗黒界の策士グ  
リンの

効果でグラヴィティ・バインド 超重力の網を破壊。

これで終わらす!

グラフアでUFOTートルを攻撃!

これでトドメだ!攻撃力1500となったカオス・ネクロマンサ  
ーで攻撃!」

「は、お、終わる……いや、待て、畏発動!炸裂装甲!

攻撃モンスターを破壊する！」

「ばーか、暴君の威圧の効果が及ぶのは元々の持ち主がお前のモンスターだ、カオス・ネクロマンサーは元々お前のモンスターよって罠カードは効かない」

「ば、ばかなあ!!！」

「グラフィアるときに使っておけばまだ耐えたのに………」

「うわああ!!！」

不良 LP1300 LP0

「……勝った………」

「ば、馬鹿な、俺が負けた、エリートである俺が高等部から来た雑魚に………」

デュエル  
決闘に負けた不良は膝を床に付け、床に崩れ落ちる。

「……勝った……」

雷堂も気力を使い床に膝を付ける。

「良くやった雷堂！」

俺は観戦席から決闘場デュエルフィールドに行き雷堂のそばによる。

「はは……勝ったよ神楽坂」

疲れたんだな、さっきのようなトゲトゲしい雷堂じゃなく  
いつもの柔らかい感じの雷堂だ、やっぱり雷堂はこうじゃないとな。

「ほら、手、貸してやるよ」

「あ、ありがとう……」

「……ない」

「ん？」

今雷堂と決闘デュエルに負けた不良が何か言った気が？

「……めない……認めない……認めない、認めない！認めない！！！！  
俺は認めねえぞ！イエローがブルーに勝てるわけがないだろお！  
！」

「「!!」」

なっ！不良は今度は拳を握ってこっちに向かってきた、  
ヤバイ！雷堂が危ない！

俺は雷堂を庇おうとした。

しかし俺は反射的に自分の腕を交差し、  
自分の体を守る。

「死ねえ!!!」

……

……

……？

沈黙……1秒、2秒経っても……静かだ。

俺はおそろるおそろる目を開けて見る。

目を開けて見るとさっきと同じように丸藤先輩が不良の拳を片手で受け止めていた。

「もう勝負は終わった……  
諦めるんだ、約束だろ」

「あゝあゝんなことしたこと　いでででで！」

丸藤先輩は手馴れた手つきで不良の腕を捻り不良の背中に付ける、決まった。

「……ふん」

少ししたら先輩はすぐ不良から手を離す。

「さっき言ったよな、もし優に手を出したら……  
俺が許さないって……」

丸藤先輩は不良の胸倉を掴み、小さい声で何かぶつぶつぶつばやいている、ここから先輩の顔は見えないけど、不良は鬼を見たような顔をして振るえている、え！なに！そんなに！怖いの今の先輩の顔！



「ちっ、きよ、今日のところはこのくらいにしてやる……！」  
ベタな捨て台詞をはいて、どっかに行った不良、  
あ、まだ謝ってもらってない！……ま、いつか。

雷堂優 視点

「りよ、亮、ありがとう………」

不良との決闘デュエルの終わり亮にお礼を言う、  
何かなれない喋り方したから腰に力が入らない……腰抜けた？

「ありがとうじゃない！」

もしあの時俺が通りかからなかったらどうなっていたか、  
ああいう連中はその場で解決しないで俺は先生に言うんだ！  
挑発させてどうする！！」

「……あ……う、う、ごめ、ん」

あ、あれ？何で今怒られた……駄目だ力が入らないし  
今亮が何て言ったのかも聞こえないかった  
ただ亮の顔が怒っていたように見えた、あれ？力が……抜けて



気づくとそこは、知らない天上が目に入った、  
うん、知らない天上とはいったもののこの薬品の匂い……保健室  
かな？

「お、雷動、気がついた」

「あ、あれ？神楽坂……僕は、何でここに？」

首を横に動かすとベットの横にあるイスに神楽坂が座っていた。

「いや、お前決闘デュエル終わって暫くすると気絶しちまってさ、  
まったくこのへタレが」

「そう、ごめん」

？あれ、確か僕、気絶する前亮に怒られて……

「僕、亮に嫌われちゃったのかなあ？」

「は？」

「いや、だって僕、最後亮に怒られて」

「バーカ」

ペチ。

痛い、何故かデコピンされた。

「あれは心配してくれてんだよ、  
同年代の人にあんな風に言って叱ってくれる人普通いないぜ。  
それだけ丸藤先輩はお前のことを思ってくれてんだよ」

「そ、そうか……じゃあこんどちゃんと謝らないと……  
心配させてごめん、って」

「そうだな、もう立てるか？」

「ん、試してみる」

寝ている状態から起きてみる、  
よし、ちゃんと動くぞ。

「大丈夫、直った」

「へへ、じゃあ帰ろうぜ！お前が寝てる間に午後の授業は全て終わったぜ！」

「お、ラッキー」

「俺も付き添いで授業サボらせてもらったけどな」

「せいー！」

「そう言つな、早速帰ろうぜ！」

「うん」

僕はベットから降りて上履きを履く、  
そして神楽坂と一緒にデュエルアカデミアを後にする。

明日、ちゃんと亮にお礼言わないと……  
こっちの世界にきても……ちゃんと僕のことを思ってくれてる  
人がいるんだ、  
本当、亮に感謝しないと。

第38話 「腐ったブルーは肅清させる」b y 優（後書き）

今回はグラフィアの技を少し増やしてみた、あまりないネーミングセンスで

頑張つて考えました。

ついでに今回凄い悪者だった不良さん、彼はオリキャラではなくTF出身です、名前はあえて言いません。またいつか出るでしょうか？

そろそろタイタンさん編、あれ面倒くさいんだよなあ〜



第39話 「俺の登場が遅くないか？なあ、なすびさんよお」 b y 十代（前書き

今回ついに十代が普通に登場します、

今までみたいに少しだけではなくちゃんと十代視点もあります、

なんか十代は1番キャラが変わってる気がする、

つかコイツオリキャラじゃね！ってぐらい変わってますがそれでも

許してくれる方はこれからもこの小説をよろしくお願いします。

第39話 「俺の登場が遅くないか？なあ、なすびさんよあ」 b y 十代

雷堂優 視点

今日いつものように明日香に呼ばれて今明日香の部屋にいます。  
え？いつものようになって？

はい、いつものようにです、最近よく明日香に呼ばれるんです、  
内容は大体コスプレの着せ替え人形にされるのがほとんど……

ピケルやエリア、特にブレード・スケーターのときは前が見えず  
に大変だった……

最近慣れてる自分が怖い……… どんどん僕の脅迫資料（恥ずかし  
い写真）  
が溜っていく……断らない僕も悪いけどさあ……

「で、今日は何のようですか明日香さま？」

あえて明日香が同級生に呼ばれてる呼び名で言ってみる、  
つか同級生に様付けされると明日香って、おい。

「今日はいつものコスプレではないわ下僕」

様付けすたら下僕扱いされた。

あれですか様付けされると女子は友人、男子は奴隷って感じですかい？

「いつものじゃないって……まさか1週回ってF・G・D？」  
フ マン フ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ  
テ テ テ テ テ テ  
ン

「なぜ1週回るとファイブゴッドになるか知らないけど  
今回は違うわ、コスプレじゃない」

「はあ、となると何をすればいいのでしょうかお嬢様？」

次はお嬢様扱いしてみる、特に意味はない。

「ちょっと、一緒に行きたいところがあるの」

「ああ〜この年になって1人でトイレに行けないとは、何歳ですか  
明日香嬢」

「トイレじゃないわよ！と言うか何、さっきからのこのヒンジキヤ  
ラ？」

「いや、特に意味は無いです」

「何か最近反抗的よね、優」

「まあ、かれこれ1ヶ月過ぎるしね、僕達のこの関係流石になれた」

この関係とは、僕が油断して取られてしまった恥ずかしい  
写真を脅迫材料とされて、色々大変なのだ。

「トイレじゃないとすると何処ですか？」

「トイレ以外に思いつかないとは……」

僕夜9時を過ぎると思考回路が70%落ちるので……ふわぁ、ね  
むい。

「実はね、特待生寮に行くの」

「特待生寮……？」

はて、この学校に特待生制度なんてあったかな？

「正確には元特待生寮、今は廃寮になってるわ」

「ああー、あのボロイ建物のことか」

「そうよ」

「しかし何でいきなり？」

「前言ったと思うけど私には兄さんがいてね」

ああ、吹雪さんね、覚えてますよちゃんと、  
元いた世界のときからね。

「その兄さん今は行方不明なの、  
それで兄さん昔特待生だったからその廃寮に何か  
兄さんの手がかりがあるかなーっと思っ」

「なるほど、ブラコンなのか明日香はって痛い痛い痛い！！  
見事なヘッドロックが僕の頭蓋骨をメキメキと締め付けている！

！」

3分後

「はあ、はあ、はあ、死ぬかとおもった」

「優が余計なこと言うからよ、どうも最近反抗気味なのよね、仕付け直さない」と

「ごめんなさい、調子乗りましたもう反省しましたからどうかあれだけは」

音の速さで土下座する。

「うん、よろしい」

あれだけはもうごりごりだ……あれってなにか……思い出させないでほしい、

なんか最近すっかり明日香にはむかえない……主と下僕の関係が成り立ってている

気がする……このままだと女性恐怖症にでもなりそうだ……

「それは違うわ優、優は下僕ではなくペットよ」

「だから当たり前のように心を読まないでよ！」

「女性恐怖症のせいで女性に触られただけで発作が起こる体になっ  
たら……………」

それは大変ね、少し貴方に対する態度を変えてみるわ」

「なんか納得された、まあ前より優しくなるならいいや。

それと触られただけで発作って……………どこぞのラノベの主人公です  
か」

「なんかマヨネーズチキンが食べたくなくなってきたわ」

「何故今それを言った！！しかも何か妙にカロリーが高そう」

「9巻発売おめでとつございます」

「誰に言ってるの！？」

「それは秘密」

「さいですか」

「それで、何時行くのその廃寮？」

僕はさっき締め付けられた頭をなでながら質問する。

「今日よ」

「今日！」

「思い立ったらすぐ行動！

行くわよ優」

「へいへい、でもどうやって？

もう消灯時間は過ぎてるから、見つかったら面倒だよ」

「大丈夫」

そう言って明日香が手に持ったものは1本のロープ、  
その先には鉄の欠爪かきじめが付いている、忍者道具？

そしてそのロープを窓に引っ掛け外に垂らした、まさか！

そのまさかで明日香はシュルシュルと手馴れた手つきで  
窓から外に出る。

「ちょ、明日香！ここ3階！！」

「優も来なさい」

マジで！

まあ頑張っただりましてよ僕も。

廃寮

「ここが廃寮？」

「そうです」



目の前にあるボロイ建物……これ潰れて何年目？  
数年でこんなに汚くなるものなの？

薄気味悪いし嫌な感じがする。

「帰ろっか」

「まだ来たばかりじゃない!!」

「だって怖いよお、これ絶対なにか出るよ!

僕こつゆうの駄目系、行くなら1人で行って!」

「そんな涙目で言われると心が痛むから止めて……」

「じゃあ1人でいって……」

「駄目よ、優も来るの」

「もしかして、明日香も怖いのか?」

「ま、まさか……怖いわけ、無いでしょ」

「でも足が震えてるよ?」

「ち、違うわ!これは寒いだよ!

ほら、この学校の制服スカート短いし、袖ないでしょ」

「うん、確かに寒そうだ」

と言うより恥ずかしくないのかなこの服……

「もういい！早く行くわよ！」

「ええー！」

明日香に引つ張られ建物に入って行く……

うう、ホコリっぽいし、暗いし、蜘蛛の巣がいっぱい……  
怖いよお……

「明日香、手絶対に離さないでね」

「もう、何でこんなに女々しいの貴方！  
男ならシャキっとしなさい！！」

「だって……」

『バサバサッ』

「ひゃー！」「きゃー！」

僕は反射的に明日香に抱きつく、

明日香も僕に抱きついてきた。

「何、今の音」

「こ、コウモリかな…?」

何でコウモリが……

「とうとうより明日香も怖いんじゃない」

「悪かったわね、私だって普通の女の子なのよ、普通怖いわよ……」

「じゃあさ、昼行けばよかったんじゃない?」

「……」

「……」

「……さあ、早く先に行くわよ」

「無視!？」

懐中電灯をつけ10分ぐらい中を進んでいると

「あら、電池が切れた」

まさかの懐中電灯の電池が無くなった。

「ええー！どうするの！」

「まあ、目も慣れてきたし、無くても探索の続行は可能よ」

「ええー、帰ろうよお、もう無理、怖い怖い怖い！！！」

うう……昔からお化け屋敷とかは無理で

中学生にもなってマジ泣きして妹に慰められたと言つ黒歴史がある。

「ねえ、優、この部屋に何かある気がするわ、入ってみましょ」

「怖い怖い怖い怖い怖い」

「もう、じゃあここで待っててね、ちょっと中調べてくるから」

「怖い怖い怖い怖い怖い」

おお、帰りたいよお、妹よ助けてくれえ……………

その頃一方廢寮前

遊城十代ゆうきじゅたいたい 視点

ここが廢寮か、思った以上にボロイな。

「つかさあ翔、俺一樣原作の主人公なんだよね、  
初登場が39話って遅すぎない？」

「いや、そんなこと僕に言われても……」

29話？それは入った内にはいらねーよ！

「お前はいいよな、少しだけど30話に出てたし」

「だから何のことアニキ!？」

「それもこれもあのオリ主のせいだよ、

万丈目フラグも明日香フラグも全部もって行きあがって、調子乗ってんじゃねーぞ、雷堂優!」

「雷堂君のことだった!！」

「なあ、2人とも早く入るんだなあ」

「「あれ、いたの隼人(君)」「」

「初めからいたんだなあ」

「さりげ隼人も初登場だな」

「だから何のことなのアニキ!」

「このままだとタイタン編までもっていかれる！  
急ぐぞ翔、隼人!」

「まってよアニキ!」「待つんだなあ、2人ともお!」

視点は戻って廃寮

「……………あれ？ここは、いや……………  
明日香は？まさか迷子！」

我に返るといつの間にか1人になっていた、  
明日香に置いてかれた……………くっそう、暗いし怖い。

「怖い……………どうか何も出ませんように……………」

あれから10分ぐらい廃寮をさまよっていると1枚のカードを拾った。

『サイバー・ブレイダー』だ  
まさか明日香のカード！

「キヤアアアア！！！」

「！！！」

いま向こうから明日香の声が！！  
つか今思い出したけどこれタイタン編か！  
だとすれば明日香が危ない！

僕は廃寮の奥に向かって走り続ける。



廃寮を走り続けると、広い部屋に着いた。

ここは他の部屋と違い少し明るいな……まあ薄気味悪いのは同じだけ。

「ようこそ、遊城十代」

部屋の奥から声が聞こえてきて、

部屋の暗闇の中から仮面を着けた大男が出てくる、

しかも首に吊るされてるあれ、千年パズル（レプリカ）

うん、声がわかも　　タイタンさんだ。

でも初めにタイタンさんに言う台詞は

「すみません。

僕、遊城十代じゃないです」

「なにいい！！」

驚く大男、もといタイタンさん、あれなんか原作壊しちゃった、まあ今頃原作がずれただ所で気にすることもないでしょ。

「あー、えっと、まあいい。

我が名はタイタン、闇の決闘者<sup>デュエリスト</sup>」

無理やり押し切った！このさい誰でもいいってか！？

「さあ、闇の決闘<sup>デュエル</sup>だあ！！」

聞ねえ、つっても原作しってるし、うん、今日は頭が冴えるな  
原作を思い出しやすい。

「うん、いいよ」

「ふ、いつまで余裕でいられるかな。  
闇の決闘デュエルを舐めるなよお」

僕は大部屋の奥に行って、広場のようなところにタイタンさんと  
立った、床に変な紋章が彫られてるけど何かな……確か……  
うむ、それだけは思いだせない、まあいいか。

「さあ、行くぞお！」

「「決　　」」

「ちょっと待った　　！！」

「ん？」「この声は」

これから決闘デュエルをする直前に若い男性の声でそれは一時中断された。  
その声の主は、赤い制服を着た青年、あれは遊城十代！  
今思うと初めて見たかも！！

「おいおい、面白そうなことやってんじゃねーか、  
俺も混ぜてくれよ！」

「お前は遊城十代、ふ、ターゲット自らお出ましとは、  
いいだろう、決闘デュエルだ遊城十代！」

「え、じゃあ僕は？」

「お前はもういい、帰っていいぞ」

「そんなあつさり！」

そんな、僕はもう用済みですか……ショック。

「へ、何勘違いしてんだその少年。

いや、雷堂優！」

ん、何故僕の名前を？

「どごゆごごと」

「こいつと闘うのは俺とお前、2VS1だ!!」

「なにいい！」

ハモって驚く僕とタイタンさん。

2VS1って、主人公が言う提案じゃないよ。

「おまえ、見る限り学園の人間じゃないだろ、

もし学校に見つかったらただじゃすまないぜ！」

意外と現実的な十代、てかことごとく十代のキャラかわってんな

「ぐぐぐ、確かに……」

「しかも闇のゲーム、そんな危ないもの普通にやるにはリスクが高すぎる、

だったら2VS1の方がいい、屁理屈？  
へ、勝手に言ってる、さあ、始めるぜ！」

強引に僕&十代VSタイタンさんの  
2VS1を認めさせた、くうく田中め、  
この世界なんか遊戯王じゃない……

「ま、二次小説なら仕方ないな」

「そうゆうメタ発言するのは止めて！」

「それは無理だ、さあ、始めるぜ優！」

「何で僕の名前を？」

「お前のおとは翔からたまに聞いているからな」

「翔君から」

「まってよくアニキー！」「やっと追いついたんだな」

「お、噂をすればやってきたな翔」

この大部屋に新たに2人、翔君ともう1人、  
こ、コアラ？たしか原作の初めのほうにいた人だったような？

「隼人、俺の決闘盤デュエルディスクをくれ！」

「え、あ、分かったんだな！」

「コアラ君が十代の決闘盤デュエルディスクを投げキャッチした十代がそれを腕につける。

「さあ、始めるぜ！よろしくな優」

「あ、うん、よろしく十代」

「ぐぐぐ、まあいい2VS1でも構わん、かかってくるがいいい！」

「」「決」「」

「待つのは、皆！」

さっきと同じ用に今度は女性の声で止められた、  
と言っよりこの声は明日香さんだよな！

思ったとおり明日香さんはタイタンさんの後ろから現れる。  
もう、勝手に置いていかないでよ！  
すっかり迷子になっちゃったじゃん！

「やあ、優、さっきぶりね」

「ホントだよ、全く勝手にどっか行っちゃうんだから！」

「ごめんなさい優。」

色々あったのよ、そのお詫びに  
私もこの決闘デュエルに加わらせてもらっつ

「へん、どうだ不審者、これで3VS1だ！」

タイタンさんには悪いがこりゃ勝ったな。

「私は……」

このオッサン側につくわ」

「「な、なにいい！！」」

何故に！いつもの面白そうだからじゃ許されないよー！

「ふふふふふ！この女の魂は深き闇に沈んでいる。

元に戻したければ私に決闘デュエルで倒してみろ！！

しかもこれで2VS2、平等だ！」

「く、まあいい、やるぞ優！」

「わ、分かったよ十代」

「「「「決闘デュエル！！！！」」」」

今、僕&十代VS明日香&タイタンの全くもって予想しなかった  
タッグデュエルが始まった。

この2VS2のタッグデュエル。

ルールは1人4000づつで場のカードは共通ではなく

1人モンスター5体魔法罫5枚使える、

どちらかと言うとバトルロイヤルに近いかもしれない。  
そして順番はタイタンさん 僕 明日香 十代で行く。

「先行は私だドロー!!」

シャドウナイトデーモン（ATK2000）を召喚!!」

チエスデーモン？たしかサイコロで効果を無効にできるとかできないとか

みたいな効果だったような？

「そしてカードを1枚伏せてターン終了だぁ!!」

タイタン LP4000 シャドウナイトデーモンATK2000  
手札 4枚 伏せカード×1

「次は僕のターン、ドロー!!」

お、これはなかなか。

「暗黒界の取引を発動。

お互いのプレイヤー……」

多分僕とタイタンさんがカードを1枚引き  
その後手札を1枚捨てる」

「よかるお!!ドロー!!」

「僕もドロー、そして暗黒界の龍神グラファを捨てる」

出た！雷堂さんの暗黒界コンボだ！

すみません、なんか言ってみたかったです、  
だつて言ってくれる人いないもん！どちらかと言うと僕  
誰かに仕えるほうが向いてるかもしれない……  
明日香と一緒にいると……

「まあいいや、グラフィアが捨てられたためタイタンさんのナイトを  
破壊！」

タイタンさんのモンスターの下から無数の手が湧き出て来て  
引きずりこもうとしている。

「甘あい！シャドウナイトデーモンは効果の対象になつたとき  
サイコロを1つ振る、3が出た場合その効果を無効にする！」

確立は1/6か……

「行くぞお、運命のルーレット！」

サイコロと言つてたのにデーモンの後ろには1から6までの数字  
が書かれた

ルーレットが出てくる、そしてルーレットが動き出す。

「結果はあ……」

「……」

ルーレットの目は



「3だあ！」

「く、運がない……」

だが墓地にグラフィアが落ちた、しかもこれで終わりではない！

「もう1枚魔法カード、暗黒界の雷！」

相手の伏せカードを1枚破壊するタイタンさんの伏せカードを破壊！

破壊したカードは、デーモンの雄叫びか、効果はたしかデーモン限定のリビデだったような。

「雷の第2の効果で僕は手札を1枚捨てる、

僕が捨てるのは暗黒界の刺客カーキ、カーキを捨てたとき発動する効果でナイトを破壊！」

「ならばもう1度ルーレットスタート！！」

再び回りだすルーレット……結果は（ゴクリ）

「3だああ！！」

「な、何だつてー！！」

まさか2回連続で成功とは……

ここまでできたら意地でも破壊してやる！

「フィールド魔法暗黒界の門を発動！」

僕の後ろに大きな門が出現する、  
人体練成　　なんでもない。

「門の効果、墓地の悪魔族モンスター暗黒界の刺客カーキを除外し  
手札の暗黒界の龍神グラファを捨てる、そしてカードをドロ！。  
さらにグラファが破壊されたため効果発動！  
今度こそナイトを破壊！！」

「何度やても無駄だあ！！  
ルーレット開始い！！」

外れる外れる！！

「3が出たあ！よって無効！！」

「何でだよ！！」

3回連続3が出る確率は…… 1 / 216！！

「こつなら最後まで付き合ってやる！  
もう1枚魔法カード！暗黒界路を発動！  
デッキから暗黒界と名の付いたカードを手札に加える  
グラファを手札に加えその後、手札を1枚捨てる、  
3枚目のグラファを捨てナイトを破壊！」

「ルーレット開始い！3だあ！」

「今回ルーレット止まるの速！」

しかもこれで4回連続3が出る確率は1 / 1296！！！！

「イカサマだろこれ!!」

「変な言いがかりはよしてもらいたいなあ!」

ぐぐ、確かに証拠はないし本当に運が良かったのかもしれない…

……

「畜生!暗黒界の術師スノウを召喚、

スノウを手札に戻し墓地の暗黒界の龍神グラファ(A T K 2 7 0  
0)を蘇生!」

門が開き、中からいつもお世話になってるグラファさんが出てくる

と思っただがなかなか出てこない……何かトラブルでも起きたのかな?

「おい、何も出てこないぞ」

ツツコム十代。

「ごめん、ちょっと中見てくる」

門の中を覗いてみると

中で3体のグラファが誰が出てくるかで喧嘩していた、

喧嘩すんなよお前ら!確かに1度に3枚も墓地に送った僕も

悪いかもしれないけどさあ!!

そしてやっと決まったのか最後に墓地に送ったグラファが勝ち誇った

表情で門から出てきた。

「やっと、召喚できた……………」

「（あのグラフィア…………俺のハネクリボーに似た何かを感じるぞ？）」

「そして門の効果で悪魔族の攻撃力守備力を300ポイント上げる」

暗黒界の龍神グラフィア ATK2700      ATK3000

「だがそれは私のモンスターにも影響する！」

シャドウナイトデーモンの攻撃力も300ポイントアップ」

シャドウナイトデーモン ATK2000      ATK2300

「僕はターンエンド」

優 LP4000 暗黒界の龍神グラフィア ATK3000

手札 1枚 伏せカード無し

フィールド、暗黒界の門

くっそ！ムキになって手札を殆ど使ってしまった…………

折角いい手札だったのに…………もっと大切に言えば良かった、

あ、ついでにこの決闘<sup>デュエル</sup>では皆始めのターンは攻撃できない、

ここら辺もバトルロイヤルに近いな。

「次は私のターンよ、ドロー！」

次は洗脳された明日香のターン。

「私はシャドウナイトデーモンを生贄に、サイバー・プリマ（ATK2300）を生贄召喚！」

「私のモンスターが!!  
貴様！何故!!」

「いや、タッグデュエルだし、  
しかも貴方のモンスター、なんかキモイし」

「いやだからって勝手に生贄素材に」

「あゝあ！何か文句ある」

「い、いえ……なんでもないです」

弱っ！タイタンさん弱っ！

洗脳されても明日香は明日香だった……

「更にサイバー・プリマの効果、このカードの生贄召喚に成功した  
とき、場の表側表示のカードを全て破壊する、  
よって門を破壊！」

「く、流石明日香」

「カードを2枚伏せターンエンドよ」

明日香 LP4000 サイバー・プリマATK2300  
手札 3枚 伏せカード×2

「やっと俺のターンか、いくぜ！」

手札から融合を発動！手札のフェザーマンとバーストレディを融合！

来い！マイフェイバリットカード！E・HEROフレイム・ウィングマン！」

片手に籠の頭が付いてる全身タイトのHEROが出現する、

1ターン目から融合とは流石十代。

「カードを2枚セットしターン終了だ」

十代 LP4000 E・HEROフレイム・ウィングマン ATK  
2100

手札 1枚 伏せカード×2

こうして1ターン目から上級モンスターがどんどん飛び出す（タイタンさん以外）

タッグデュエルは始まった。

なんか僕とタイタンさんは凄く損した気がする……僕は主に手札が……

そしてグダグダになり始めたからここで一旦区切るよ！

続きは次回、お楽しみに！え、楽しみじゃない？そんなこと言わないでよ……

第39話 「俺の登場が遅くないか？なあ、なすびさんよお」「b Y十代（後書き

ついに登場タイタンさん、初期設定は優が寝てる間に明日香が廃寮  
に行っ

自力でタイタンを倒す、と言う設定だったんですがそこから  
優VSタイタンになってしまい、いつの間にか2VS2のタッグデ  
ュエルになってました。

サイコロのくだりはこの前のZEXAL見てたらやりたくなった、  
タイタンはイカサマですが。

今回暗黒界専用のアニメオリカが出ました、

その名も暗黒界路！デッキから暗黒界と名の付くカードを手札に  
加え、その後手札を1枚捨てる、普通に強いカードだ。

OCG化したら制限……いや準制ぐらいにはなりますよきっと！

第40話 「おまたせしました最新話、ついに奴らが動き出す」byなすび（前

ふ、凄く遅くなってしまいました、いや、いろいろわけがありまして……

まあテスト期間だったのもありますが、それが終わっても色々あって、なんと言うか、心に余裕が無かったと言うかいまそれぞれではないみたい……

まあ言い訳です、すいません、では記念すべき40話少し不吉な数字ですがお読みください。



第40話 「おまたせしました最新話、ついに奴らが動き出す」byなすび

タイタン LP4000 手札4枚 場にカード無し

優 LP4000 暗黒界の龍神グラフア ATK2700

手札 1枚 伏せカード無し

明日香 LP4000 サイバー・プリマ ATK2300

手札 3枚 伏せカード×2

十代 LP4000 E・HEROフレイム・ウィングマン ATK

2100

手札 1枚 伏せカード×2

これが現在の場、そして次はタイタンさんのターン。

雷堂優<sup>らいどうゆう</sup> 視点

「行くぞお、私のターン、ドロー！」

手札のジェネラルデーモンを捨てることでデッキから  
万魔殿 悪魔の巣窟 を手札に加える。

そして今加えた万魔殿 悪魔の巣窟 を発動！」

ただでさえ気味悪い部屋が更に怖い部屋になった……

「なんだこれ!？」

少し驚く十代。

「ふふふ、さしずめ地獄の1丁目とでも」

「速攻魔法発動！サイクロン」

明日香が伏せカードサイクロンを発動し、  
今出たばかりのフィールド魔法を破壊する。

「　　　　　つておい！何故破壊した」

「いや、なんとなく」

「なんとなくでパートナーの発動したカードを破壊するなあ！」

「え、なに？文句あるの？貴方自分の立場分かってる？  
それともなに？もう一度あれをやってほしいの？」

「あ、いや……その……  
すいませんでしたああ！！！！」

土下座！？タイタンさん土下座！？何故に！！  
洗脳したんじゃないの？なんかタイタンさん立場下な感じ！？  
大男が女子高生に土下座してる……シニールだ……  
なんかごめんねタイタンさん。

「で、地獄の1丁目はどうなったんだ？」

「……………地獄1丁目は潰れたあ！！」

チクシヨー！二重召喚を使いヘルポーンデーモンを召喚し  
生贄、迅雷の魔王 スカル・デーモン（ATK2500）を生贄  
召喚だあああ！！！！」

なにかやけになってる気がするタイタンさん、大丈夫？

「さらに装備魔法、墮落を発動！！

装備モンスター1体のコントロールを得る、  
小僧のグラフィアをよこせえ！！」

うわ！もってかれたー！！

「どうだ！まずは1人、

グラフィアで小僧に攻撃だああ！」

くそ、グラフィア僕を裏切るのか！

「ぐわあああああ！！！！」

LP4000

LP1300

痛みは……無い、はは、所詮偽闇の決闘<sup>デュエル</sup>。

「闇の決闘<sup>デュエル</sup>の恐ろしさをお前らに教えてやる！」

タイタンさんは首に吊るしている千年パズルを  
持ち上げ光を放った。

「な、なんじゃこりゃ〜」

僕の体の約半分が消えている、  
でも痛みはないし………やっぱ偽？

「闇の決闘はダメージを受けるたび闇に  
肉体を食われる、そしてLPが0になったものは  
肉体の全てを闇に食われ消滅するう！！」

「それってとっても危ないんじゃない？」

「そうだ！だがこの決闘は途中で止めることは出来ない！  
まあそれは我らも例外ではないがな」

「それってつまり明日香のLPが0になったら」

「もちろんこの女は死ぬ」

「ひ、卑怯だぞ！！」

「知るかそんなもの！！」

さあ、スカル・デーモン（ATK2500）で小僧にトドメエ！！  
どはってんしょうげき  
怒髪天昇撃！！」

デーモンの召喚に似たモンスターは僕に向け電撃を  
放ってくる、く、残念ながら僕に伏せカードはない、  
負け……か、十代2VS1でも大丈夫かな………

死にはしないけど気は失うのかな？

「諦めるなよ」

「え？」

電撃が僕に当たる直前十代の場のフレーム・ウィングマンが僕を庇ってくれた。

「なにー！」

十代LP4000      LP3600

「タッグデュエルではパートナーを庇うことが出来る、詳しくはDMアニメ第71話〜73話参照」

「ありがとう十代」

「気にするな」

「でもそうゆうメタ発言は止めて」

「だから無理だ、それが俺の役目だ」

「なんの役目!？」

「ちっ、だが十代、貴様はダメージを受けた、よって肉体の1部を闇に食われる」

「あーアニキの腕が!」「え、左足なんだなあ!」「どっちでもい

い」「そこ重要だよ十代」

「俺はターン終了だあ！」

タイタン LP4000 迅雷の魔王 スカル・デーモンATK2500

手札 1枚 暗黒界の龍神グラフィアATK2700（墮落装備）

「僕のターン、ドロー」

「ここで墮落の効果が発動する、相手のスタンバイフェイズ毎に私は800のダメージを受けてしまっ」

「やはりデメリットはあるのか」

タイタン LP4000 LP3200

そしてダメージを受けたのでタイタンさんの体が消える。

「タイタンさんの顔面が！」「オッサンの股間が！」

「何故2人ともそこが消えるように見えるの！！」

いや、だって、マジでタイタンさんの顔面

綺麗に無くなってます、これじゃあラーの効果が使えない！」

「おっと、そういえば僕のターンだった。

暗黒界の術師スノウを召喚、スノウを手札に戻しグラフィアを蘇生

「！」

「お、今度は喧嘩せず出てきた。」

「グラフアでスカル・デーモンを攻撃！鉛筆の芯グラフアイトカッター！！」

グラフアは口からミサイル針のように口から尖った鉛筆の芯を吐き出す。

「何故鉛筆の芯を！」

「気にするな丸藤弟！」

「ぐおお」

タイタンLP3200                      LP3000

「はは、そして墮落は場にデーモンがない時破壊される」

「おお、そうなのか、詳しいな十代。」

「ぐ、おのれえ……」

そしてまたタイタンさんの体が無くなる。

「タイタンさんの右乳首が！」

「オッサンの顔半分が！！」

「だからなんで貴方達は変なところばっか消えるように見えるの！」

「？」

いや、だって実際に消えてるし。

「そしてコントロールが戻ったグラフアでタイタンさんにダイレクトアタック！」

グラフアイトカッター

鉛筆の芯！第2打！」

「ええーい、ならサイバー・プリマを盾に」

「だめ」「いや、何故だ！」

「なんとなく」「いやなんとなくじゃなくて」

「1万円」「金取るきか！」

「そうよ」「ぐぐう、分かった！」

明日香とタイタンさんの謎のやり取り約0.1が終わり、サイバー・プリマがタイタンの身代わりになった。

「仲間のモンスターを無理やり盾にするなんて卑怯だぞタイタン！」

「いや、そんなこと言われても……」

「人として失格だ！」

「何か理不尽……」

明日香LP4000      LP3600

そして明日香がダメージを受けたことで明日香の右腕が半分消える。



「うつ、く……い、痛い」

「罪の無い女性にまで闇の決闘デュエルをさせるなんてひどいんだなあ!!」

「そつだー！自害しろ自害!!」

「だから何故私だけ責められなあかんだあ!!」

そりゃ悪者だから、そして。

「僕はこれでターンエンド」

優 LP1300 暗黒界の龍神グラフィア ×2 ATK2700

手札 2枚 伏せカード×無し

「次は私のターンね、ドロー。」

増援を発動しデッキからレベル4以下の戦士族モンスター

エトワール・サイバーを手札に、そして融合を発動」

む、明日香の切り札か

「手札のエトワール・サイバーとブレード・スケーターを融合！

サイバー・ブレードを融合召喚!!」

ヒイギュアスケートの選手のような女性が明日香の場に召喚される、

僕達の場にモンスターは2体つまり

「サイバー・ブレードは相手の場のモンスターの数が2体のとき



場のスパークマンと墓地のフレーム・ウィングマンを融合するぜ  
！！！」

十代のスパークマンと墓地が光りだす。

「行くぜ！俺の最強HERO！E・HEROシャイニングフレアウ  
イングマン！！」

全身が光輝くHEROがこの薄暗い部屋を照らしだす。

「わあ、綺麗ッス！」 「格好良いんだな」

「所でオッサン、アンタが持つてるこの千年パズル、  
一体何個あるか知ってるか？

もちろん知ってるよな？ なんとって本物の闇の決闘者デュエリストだもんな！」

「も、もちろんだあ〜」

そっぴいつつ、顔から冷や汗を出すタイタンさん。

「え、えっと……………」

「へ、確かに千年アイテムは七個あるが、  
千年パズルが7個あるとは限らないぜ！！」

「早い！早いよ十代！

まだタイタンさん答えてないよ！！」

「そしてオッサンには俺が除外した2枚のカードを見せてやるよ！」

それは流石に無理やりすぎるよ！！

しかも何でこんなにまっすぐカード投げれんの！？

しかも千年パズルに見事刺さってるし！！千年パズル脆っ！！

「あれ、アニキ達の体が元に戻った」「変な霧も消えたんだなあ」

「やっぱ、イカサマか」「ちっ、バレタわね」

「コイツは多分、マジシャンか何かで俺達に幻覚を

見せていたんだ、息苦しいのも全部コイツの催眠術かなにかだ！」

ほお、意外と鋭いな十代。

「ちっ、ばれてしまったか、

ネタがばれてしまったらもう貴様と闘う義理は無い、

さらばだあ！！」

「逃がすかあ！俺はおれ自身効果を発動！

墓地のカードを全て除外し全て相手プレイヤーに投げる！」

十代が墓地のカードを取り出し、全てまっすぐタイタンさんに投げる、

タイタンさんが「いたっ、いたいたい！あつままだ来るのか！？」

……………なんか可哀想になってきた。

「更に最終奥義！

『何となく闇の世界へ』を発動！」

なんだそれは！？

十代が最終奥義を発動した瞬間、  
床に謎の模様が浮き出てきて一気に爆発した！

「はっはっは！！貴様に本物の闇のゲームを見せてやるぜえ！！」

「な、これはマジでやばそうよ」

「何でこんなに悪役っぽいんだよ十代！！」

そして僕ら4人は爆発に巻き込まれ変な空間に飲み込まれてしま  
った。

う……ここは？

気が付くと周りは真っ暗になっており、

十代や明日香がいない、いるのは現在黒い塊に襲われてる

タイタンさん、かなりヤバイ状況だ………しかも

タイタンさんあの黒いの食ってるし、やばいよ

絶対あれ美味しくないよ！

と人事のように言ってる場合でもない、

僕の足元もタイタンがさんが現在食している黒い

塊が集まってきた………やばいやばい！！

「あっち行けまっくろくろすけ！」

そしてタイタンさんがお腹いっぱいになるまで食べたのか、  
立ち上がり決闘盤デュエルディスクを構えた。

「さあ、決闘デュエルの続きをしよう」

「な、この状況でまだやるか」

でもタイタンさん目が赤いし、さっきと感じが違う………

周りは真っ暗な空間、十代も明日香もないし

帰れるかどうか？というより今何時

僕明日学校なんだけど。

「私のターンドロワー、  
ふん、折角本当の闇の決闘デュエルをやっているんだ  
お互いに手札を整える必要がある、  
魔法カード天よりの宝札、お互いに手札が6枚になるようドロ  
ーする」

「じゃあ遠慮なく、4枚ドロワー」

「私は6枚ドロワー、  
そして、手札を1枚捨ててライトニングボルテックスを発動、  
お前のモンスター全てを破壊する！！」

僕のモンスターが全て破壊される。

「そして死者蘇生を発動し墓地の迅雷の魔王 スカル・デーモン（  
ATK2500）  
を蘇生するう！！」

ライトニングボルテックスを発動したときに現れた  
黒い雲から先ほど破壊されたデーモンが舞い降りる。

「迅雷の魔王 スカル・デーモン、再降臨！！」

僕の場にカードは無い、や、ヤバイ……………

「さあ！スカル・デーモンで小僧にトドメ！！怒髪どはつてみしよつげき天昇撃！！」

く、ヤバイ、ま、負ける！？

『おい、ここで終わるのか？』

ん！？だ、誰？今声が……

『後、1ターン持ちこたえろ、一瞬でけりをつけてやるよ』

だから誰！？

『ふふふ、時期に分かるさ、さあ、今は自分が生き残る方法を考えるんだ』

く、幻聴？でも、誰だろうと、ここで負けるわけにはいかないんだよお！！

考える、場にカードはなし、ライフは残り1300、墓地に使えるカードはないしどうすれば……



いや、まだ手札がある！さっきドロローしたカード。

「がははは！！」

「死ねえい！！」

LP 1300

LP 1300

「はは、耐えたぜ」

「な、なにに！！」

「直接攻撃宣言時、手札のバトルフェーダーは特殊召喚でき相手の攻撃を無効にしバトルフェイズを終了させるんだ！」

「なんだとお!?!」

あ、あぶねえ!

あの変な声が聞こえなかったらうつかり見落としていて負けていた。

「ぐう、私は2枚カードをセットしターン終了」

タイタン LP3000 迅雷の魔王 スカル・デーモン(ATK  
2500)  
手札 1枚 伏せカード×2

「た、たえたぜ」

『良くやった小僧う!!さあ、俺を引き当てる、こんな決闘デュエルさつさと終わらせるぞ』

だからあんたは誰!俺を引き当てる?どのカードを引けばいいの?

『いいから、全神経を集中させるとかわけのわからんことは言わねえ、ただ引けばいい、そうすればこんな決闘デュエルすぐに終わる』

ただ、引くだけ?わかったよ、引くよ……

「僕のターン……  
ドロオオ!……!」

引いたカードは……暗黒界の狂王ブロン！？

『ヒヤッハー！……やっと復活！！はああ！空気を吸うのも久しぶりだぜえ！！』

「か、カードからなんか出てきた！？」

『よお、お前がご主人か？俺は暗黒界の長、ブロン様だあ！なんかこの居心地の良い闇の空間のおかげで久しぶりに目が覚めたぜ！！』

「もしかして……精霊？」

『精霊い？まあそんなもんだ、まあいい、今は……勝つぞ、この決闘』

「え？」

『この決闘、勝たなきゃいけないんだろ、俺にかかれはこの状況で勝つ何ざアリを潰すより簡単だ』

マジで

『さあ！暗黒界の』

スウウウ



『魔神レインだ！封印されし第1の魔人を手札に加える』

封印されし？

「まあいいや、デッキから暗黒界と名の付いたモンスター  
暗黒界の魔神レインを手札に加える」

『さあ、暗黒界のワルツの始まりだあ！！  
今捨てた暗黒界の導師セルリを捨てる、  
セルリの効果、セルリを相手のフィールドに特殊召喚し  
その後手札を1枚捨てる、俺が捨てるのは』

『「暗黒界の魔神レインだ！！」』

ブロンが何処かから分厚い本を出し、謎の呪文を唱える。

『アンコクカイニソナワリシアンコクカイノシヨモツニフウインサ  
セシサントイノマジンノフウインノヒトツライマトキハナツヤミヲ  
モツキサスシツコクノヤリハセカイノスベテヲヤミニホオムルヒト  
フリデセカイヲホロボシフタフリデジゲンヲコワスナナシヨクノイ  
ロヲソナエシサイキョウノマジン。Reign - Beaux, O  
verlord of Dark World  
暗黒界の魔神レイン！！降臨！！！！』

暗黒のフィールドに亀裂が入りゴロゴロと雷がなる、  
亀裂から現れる大きな角を生やした悪魔、太い腕には大きな槍を

握り締め

禍々しいオーラを放っている、

昔召喚したときより存在感と言つか威圧感と言つか、  
本物のようだ。

『あたぼうよ、これは俺が長き眠りから封印を解いた暗黒の魔人の  
1体』

マジで……じゃあこれも精霊ってこと!?

『レインの効果!! 全てを焼きはなつ黒い雷!! 暗黒超電磁砲!!  
』!』

タイタンさんのデーモンが黒い雷により真っ黒に燃え尽きる、  
骨1本のこっていない。

レインの効果、相手により捨てられたとき墓地から特殊召喚し  
相手の場を全て破壊するか魔法、罫を全て破壊するとんでもない  
効果。

「ぐ、なんだとお!?

(だが私の伏せカードは魔法の筒、これが破壊されなければ負け  
ない)」

『まだまだあ!! 貪欲な壺!! この俺様の目覚めでデッキに眠る暗黒  
界を引き当てる!!』

ええーと、訳すと

「貪欲な壺を発動し墓地のモンスター、  
暗黒界の龍神グラファ3体と暗黒界の術師スノウ、  
そして暗黒界の導師スノウをデッキに戻す、  
そしてその後2枚ドロウする」

いくよ、ブロン。

『ああ、お前はただカードを引くだけでいい、デッキが俺と共鳴し  
必ず俺が望むカードが出る』

なにそのチート？

「貪欲な壺の効果でデッキからカードを2枚ドロウ！！」

引いたカード、それは！

暗黒界の龍神グラファと暗黒界の導師セリル。

『ほらな、さあ、もう1度頼むぜ、セリル、暗黒界に新たな可能性  
を引き出すキーマンだお前は！！』

「はい、お任せくださいブロンさま、イヒヒヒヒ」

お前も精霊か！？

「おや、貴方が今回の主人ですか、私もブロン様の復活を同時に長  
い眠りから目を覚ましました」

まじかよ、こいつら精霊のカードだったのかよ……………

「さあ、早く私の力を使うのです!!」

あ、うん、分かったよ。

「えーと、あった、僕は暗黒界の雷を発動、場の伏せカードを1枚破壊するタイタンさんの伏せカードを1枚破壊」

レインが槍を上に掲げるとタイタンさんの伏せカードが片方破壊された。

「（ぐ、だが破壊されたのはダーク・ジェノサイド・カッターハズレだ小僧）」

「そしてその後僕は手札を1枚捨てる、捨てるのは暗黒界の導師セリル」

「イヒヒ、さあやっと私の出番ですね」

本日2度目だけどね。

「セリルが捨てられたとき、セリルを相手の場に特殊召喚する、そしてセリルが墓地から特殊召喚されたとき相手は手札を1枚捨てる、

今セリルはタイタンさんの場にあるから手札を捨てるのは僕、よって僕は暗黒界の龍神グラファを捨てる」

『さあ、暗黒界のワルツはもうすぐ中盤を迎える』

「グラファは手札から捨てられたとき場のカード1枚を破壊する、



「タイタンさんの残った伏せカードを破壊!!」

「な、なみゆう!?! (魔法の筒が、それと今なみゆうって言った! 恥ずかしい)」

「タイタンさんの顔から余裕の笑みが消える、

どうやら当たりカードを破壊したようだ、

でもタイタンさんの手札は今1枚あれが手札で発動するカードだったら。」

『そのときのためのグラフィアの第2の能力だ!』

グラフィア第2の能力?

『そう!』

タイタンさんの後ろから白い霧が出始め

『アンコクカイニソナワリシアンコクカイノシヨモツニフウインサ  
セシサントイノマジノフウインノフタツメヲイマトキハナツアン  
コクカイノモンカラレンセイサレシフジミノニクタイヲモツチカラ  
ノリュウシンヲイマカセラレタカセヲハズスコノカラダクチルマデ  
タタカイツツケルフシノリュウGrapha, DragonLord  
dofDarkWorld  
暗黒界の龍神グラフィア!! 行け!! テイクダハンド・オブダークサ  
イド!!』

ブロンが再び呪文を唱えるとタイタンさんの後ろから

白い霧が現れ、そこからいつも見覚えのある顔、

グラフィアの顔がひょっこりと出てくる、

しかも下を舐めまわしながらタイタンさんの手札を見てる、怖い！怖いよグラフィアさん！！タイタンさん気づいて！！

『さあ、手札見せてもらおう』

グラフィアの隠された第2の能力、相手によって捨てられたとき相手の手札を1枚確認しそれがモンスターの場合この自分の場に召喚する。

「グラフィアが見た1枚の手札は……トランス・デーモンレベル4の通常召喚可能なモンスターだ！よって僕の場に特殊召喚する」

というかタイタンさん本当にデーモン好きだなあ、どこかの地獄使いみたい。

「ハクション!!! うう、今夜は冷えるな……暖房つけるか」

「グラフィアが見た1枚の手札は……トランス・デーモンレベル4の通常召喚可能なモンスターだ！よって僕の場合に特殊召喚する」

「というかタイタンさん本当にデーモン好きだなあ、  
どこかの地獄使いみたい。」

「そんな効果が！って後ろからグラフィアの顔が！？」

「やっと気づいてくれたという顔をしているグラフィア、  
というよりどんな顔だよ！」

「えーっと、トランス・デーモンの効果は……  
おい、マジかよ」

「この効果は暗黒界と相性抜群でしょ。」

「では早速トランス・デーモンの効果発動、  
手札を1枚捨て、このカードの攻撃力を500ポイント上げる！」

『さらにこれはコストではなく効果による捨てるだ』

「うん、なんかさっきからブロンが某宇宙から来た記憶喪失のジエ

ル状宇宙人と喋り方がというより雰囲気似てる。

「僕は暗黒界の尖兵ベージを捨てる、そしてベージが捨てられたとき特殊召喚される。」

そして場の暗黒界、暗黒界の尖兵ベージを手札に戻し墓地のグラフィアは墓地から蘇る！！」

ブロンが地面から湧き出た大きな腕に掴まれ引きずりこまれた！！怖っ！！そしてそこから湧き出るグラフィア、いつもよりこわいっすね。

「そりゃこいつにも魂を吹き込んだし」

コイツも精霊か！！

「さあ最終章だ！！」

グラフィアでセリルを攻撃！切り裂け！デビルズクロー！！！」

グラフィアがセリルを切り裂こうとした瞬間

「分かってますよ、ブロン様」と言つて黒い霧になった。

「続けて暗黒界の魔神レインでダイレクトアタック！！」

焼き払え！！ダークネスバーニング！！」

レインが蒼黒い炎を作りタイタンさんに投げる。

「ぐ、ぐおおお！！や、焼ける！熱い！！う、うわあああ！！！！」

うわあゝ凄い痛そう……やっぱりこれは本物の闇の決闘デュエル？

タイタンLP3000      LP500

『ギャハハハ！！さあ！ファイナーレだ！俺自身で攻撃！！デビルズ・ハンド！！』

「う、ぐおおお……………あ、ああ……………」

タイタンLP1000      LPO

よし、勝った。

『へん、手ごたえもない』

「あ、うわああ！く、くっ、く、くるな！！止めろ、来るなああ！  
「！」

黒い塊がタイタンさんを囲み飲み込もうとしている。

「ま、まさか闇の決闘<sup>デュエル</sup>が本当にあると言っのかああー！！！」

「ちよ、これやばいよー！！」

『わかっている、俺達もずらがるぞ主人』

「でもどっちやって？」

『ほら、あそこから光が漏れているぞ！』

ブロンが指を指した方向には確かに亀裂が入り光が漏れている、  
そこから外に出られるかもしれない。

『早く出るぞ！』『りよ、了解！』

僕はダッシュで外に走り亀裂に飛び込む

ん、ここは？

周りを見渡す限り真っ暗な空間、オッサンと優、十代は？

「いてて、お、マジかよ……………」  
ガチで闇の世界に来ちまったみたいだ……………」

あ、十代はいたわ、と言うことは別の場所に優とオッサンがいるのかしら？

「よお、どうやら2人きりのようだな」

「そうね。」

それでどうするの？決闘<sup>デュエル</sup>続ける？」

「その必要はないだろ、お前もどうせ本当にあのオッサンに操られていたわけじゃないだろ」

「あー、気づいてたの」

ばれない自身があったのに。



「モチロン、どうせあのオッサンと契約して手を組んでいただけだ  
ろ」

「そうよ、こんな感じにね」

回想中

「貴様にはエサになってもらおう」

「む、気配！でりゃあ！」

「ういっお」

「なにこのオッサン、とりあえず学校に連絡を」

「ちょ、待ってくれ！こっちには深いわけがあり、聞いてくれ！」

「ふん、じゃあ話してもらおうかしら？」

「まあかくかくしかじかだな」

（説明中）

「なるほど、つまりある人に依頼され遊城十代を倒せということね」

「あ、ああ、そうだ」

「そして私をエサにして十代を呼び出そうと」

「あ、ああ」

「仕方ないわね、手伝ってあげるわ」

「ほ、本当か!？」

「そのかわり依頼人の給料2ヶ月分先払いで」

回想終了

「みたいな感じで」

「おまえ、意外と腹黒いな……」

「貴方に言われたくないわ」

「それもそうだ!!」

だがこうやってなごんでる場合ではないぜ、  
下見る下」

え、下……って何これ!?

黒い変な生き物がうようよと!?

「早いと……ここを離れるぞ、明日香!」

「わ、分かったわ!」

雷堂優 らいどうゆう 視点

「リック……ディア      ツスウウ!!」

ドゴッ……

痛い……どこかぶつけた。

でも、出てこれた……危なかった。

さっき決闘デュエルしていた場所を見てみるとそこには黒い球体に  
穴が空き僕達を吸い込もうとしている。

「あ、危ない!!」

僕はダッシュで逃げる。

「はあ、はあ、なんとか廃寮の前まで出てこれた……まさかリアルに闇の決闘デュエルをする日がこようとは思わなかったぜ！」

「まあGXの世界にいりゃそんなこともあるでしょ、わっはっは!!」

「これ、助からなかったらマジ笑い事じゃすまないけど……」

「よお、優、生きてたか」「お帰り」

「あ、十代に明日香、無事だったんだ」

「良かった、これで全員無事廃寮から脱出できた………タイタンさん以外。」

「そっぴやオッサンは？」

「十代が僕に尋ねる。」

「ん、何か逃げられた、でも決闘デュエルには勝ったよ!!」

「そうか、そりゃ良かったな」

「じゃあそろそろ帰りましょ、優」

「うん、そっだね」

「じゃあ俺達も帰るぞ、翔、隼人」

「分かったす！」「了解なんだなあ」

そして僕達と十代はお互いの寮に帰っていった、

あ、僕はなんか知らんが明日香の部屋に泊まることになったみたい。

「ふああ〜」

あくびが……

「ごめんなさいね、こんな夜中に連れ出してしまって」

「ん〜」

僕は目をこすりながら

「いいよ別に、どうせいつものことじゃん」

「ふふっ、そうねこんな私の我俣になんども付き合ってくれてありがとう、

そしてこれからもよろしくね、優」

むむむ、明日香がらしくないこと言ってる……まさか！

「まだタイタンさんに洗脳されたままとか……！」

「違うわよ！！もう、人が折角お礼言っただから素直に受け取りなさいよ！」

ありゃ、怒らせちゃった？

「まあまあ、これ上げるから許して」

僕はさっき見つけたあるものを明日香に渡す。

「これは……兄さんの写真!？」

やっぱり、良かった〜喜んでくれる。

僕が明日香に渡したのは明日香の兄さんの写真、  
なんかサインで10 JOINと書いてあるけど……10上院？

「兄さんは洒落で天を10（テン）と書くのよ」

へ〜、そういえばブロンを含む突如現れた暗黒界集団は？

もしかして幻覚だった才チ？

『なわけねーだろ』

「おわあ！やっぱり夢じゃなかった！！」

『まあ、これからよろしく頼むぜ主人』

「私もご厄介になります」

セリルもいた！！

『ああ、後あと後ろ見てみる』

ん、後ろ？

後ろを振り向くとそこには大きな悪魔が2体、  
魔神セリルと龍神グラフィア……

「おまえらも精霊か      デカイし多いんだよ……！」



『まだまだこれから増やす予定だが』

「騒がしくなるから止めて　　！！！！」

「ゆ、優どうかしたの！？眠さのあまり発狂した！？」

はあ、どうやら僕の高校生活、とんでもないくらい騒がしくなり  
そうです……………

面白そうだがただでは済まなそうなハチャメチャした高校生活、

まあ、何事も前向きに考えてみますか

『アンコクカイノチュウジツナルニタイノブショウチカラノゴルド  
ワザトチエヲソナエシメイシヨウシルバワレノフツカツトモニナ  
ガキニワタルフウインカラメザメヨ

Goldd , Wu - Lord of Dark World , S  
iliva , Warlord of Dark World

暗黒界の武神ゴルド、暗黒界の軍神シルバ』

『グワアア！！！！久しぶりに目が覚めた、ああ！！とにかく暴れまわりたいぜえ！！』

『お久しぶりですブロン様、これからも私はブロン様の忠実な僕です、何なりとご命令を』

「なんかまた増えたあああ

！！！！」

「だからどうしたの優！？薬が切れたの！？？というか使ってたの！？」

しかし何でもポジティブに考えればいいと言っただけではない。

第40話 「おまたせしました最新話、ついに奴らが動き出す」byなすび（後

今回ついに優の精霊登場！！

いやー長かった、ついに登場できました、この小説実はカイザーはシヨタコンだった！？はこれから始まったと言っても過言ありませんね、マジで！！うんうん。

というより夏休みのくんだり半分ぐらいカットしても良かったと思う気が…………

そして今回から新コーナー

＼ZEXALのなんとなく　　な話＼

いえーい、僕はどうでもいいコーナーを作っては数回で飽きる症候群があり今回も謎のコーナーを作ったわけです、けして後書きの文字数稼ぎではありません、後書きが長いほうがかっこいいなんて思っていますよ。

このコーナーはアニメZEXALを見て疑問に思ったこと、ツッコミたいことをここに書くという自己満足以外の何者でもないコーナー

ーです。

では第1回目はVSサッカー少年編で行きましょう。

ZEXALのWDC編の遊馬の1回目のあいて、  
一昔前のサッカー漫画を思い出します。

まずボールのこと「俺の友達」と呼んでる地点でパクリですね、  
しかもカード貼り付けてるし……

でもボールに貼ってあったカードたちはGXやDM編のカードが殆どだった、

ZEXALの住民は昔のカードを殆ど使わず無理やりオリカ使ってますが

ちゃんと昔のカードもあるんじゃないかと思った。

でも昔のカードをボールに貼り付けている所をみるとそんなに大切にしているようには見えない、つか裏の模様が違うから使えないだけじゃ……

ただそれだけ、オチもないし……

第41話 「住めば都と言つがやっぱり初めは辛いです」by優(前書き)

最近凄い発見をしてしまったなすびです。

どんな凄い発見かと言うと、僕はZEXALを初め見たとき

「これ5D・sから何年後の世界だ?」「シンクロ召喚は存在する  
のか?」

と思っていました、なんか忍者の話を見る限りDMとGXは関係し  
てみたいだが

5D・sと繋がってるかは今だ不明……

もしかすると5D・sの平行ワールドで、

GXから5D・sとZEXALに分かれたとも思っていました  
でもある日何となく適当なパックを1つ買ってみたところ

『破天荒な風』というカードを当てました、

そこに描かれているモンスターはカラクリ將軍無零、

カラクリ將軍無零はシンクロモンスター、

そして破天荒な風はZEXAL時代のカードつまり僕の予想が正し  
ければ

GXの次に5D・sそしてその後の未来にZEXALが!!という  
ことになります。

やったあ!!

でもそれはつかの間の喜び……

もしやと思ってVJ10月号を読み返してみると遊馬は魔法カード  
破天荒な風を

発動していた、しかし漫画のZEXALに描かれていた破天荒な風は  
カラクリ將軍無零ではなくなんかよく分からない変なモンスター……

つまり5D・sの次がZEXALとは限らない……  
ZEXALの時間軸を発見する道はまだ遠い……

仕方なく後書きにGXから5D・sまでの時間について僕なりの予想を立ててみます。

第41話 「住めば都と言つがやっぱり初めは辛いです」by優

てむしょういんあすか

天上院明日香 視点

灯台

優に先に帰ってもらい私は灯台に行く、

そこにはいつものようにカイザー、丸藤亮が無表情で海を眺めていた。

「亮……」

私は亮の近くによる。

「夜明けはまだ遠そうだな」

デュエルアカデミアの灯台が暗い港をチカチカ照らす。

「ええ」

「所で、あれから何か手がかりを手に入れたのか？」

「廃寮に行ってみただけ、大した手がかりは無かったわ」

「でも……少し嬉しそうだな」

「ん、そう見える？」

「ああ、いつもより生き生きしている……」

「そつゆつ亮は元気ないわね」

「ああ……あ、ああ」

「なにかあったの？亮？」

「明日香………」

……

「………」

……

「どづかしたの？」

「………最近優が冷たいんだ………  
毎日メール10件だして2時間に1本電話かけていたら  
いつの間にか着信拒否されていて………」

「それは亮のせいよ！………」

シリアスだった空気が今ので一気に崩れた。

「俺はこれからどづやって生きていけば………あ、明日香………」

「いや、そんなこと言われても………」

「だからいつも夜ここで誰もいないことを確認して泣いていたんだ」



「ええ！！私と会ったためじゃなかったの!？」

「どうしよう……………今度優の部屋に夜這  
優の部屋を訪ねてみるか」

亮、もうこれ結構重症よ…………

「あ！私優が待ってるからもう帰るわ」

「な、優が待ってる!?!どうゆうことだ」

「優は今日私の部屋に泊まっっていて、  
1人にしておくと何かと大変そうだから」

「優が明日香の部屋に!?!俺なんて35回誘って1回して来なかつたのに」

泊まるって明日香!どうゆうことだ」

「亮、明けない夜は無いのよ」

「意味が分からんぞ!」

「と言うわけでさよなら、また何か情報があったら詳細ヨロ」

ダッシュで亮から逃げる　　って亮追いかけて来た!?

怖っ！超怖っ!?!あ、でもコケタ、海に落ちた、  
溺れてる溺れてるwww

あ、でも浅いことにやっと気づいた、今のうちに逃げましょ。

## 次の日

雷堂優らいどうゆう  
視点

「てなことがあってさ、俺は制裁タッグデュエルで翔とタッグを組み

勝たなきゃ退学になっちまうわけよ、なあ翔」

「うん、うん」

なにやら厄介なことになったっぽい。

昨日廃寮に勝手に入り中を荒らしたということがバレ  
査問委員会に睨まれたらしい、

凄い情報網だなデュエルアカデミア、

そして僕や明日香は何故呼ばれなかったんだ？レッドじゃないか  
らっ？

「まあ、ちやちやっと勝つちまうから応援よろしく！」

「分かったよ」

「でもアニキ、僕なんかパートナーで本当にいいの？」

だが乗り気じゃない翔君。

「いいのもなにも翔以外にパートナーはいない、  
つか出来ないだろ」

「やっぱ無理！僕なんかじゃアニキのパートナーは務まらないよ！  
」！

翔君は教室から出てどっかに行ってしまう。

「お、おい翔！どこ行くんだ！？」

十代も翔君を追って教室をでる。

「僕ちよっと校長室に行ってくる」

「あら奇遇ね私も校長にみじがあるところよ」

### 校長室

「俺もあの廃寮にいたんだなあ、だからあ翔の変わりに俺が十代のパートナーをやらせてください」

「いや、しかし……………」

「私のあの場所にいました」「僕も同じく」

「天上院さんと雷堂君……………」

「十代だけ罰を与えるのは可笑しいです校長」

「ですから私と優もタッグを組んで制裁タッグ決闘デュエルを受けさせてください」

「しかしそれはもう決まったことですし……………」

「別に十代の罪を軽くしろ、と言ってるわけではありません、私達も同じ罰を受けるといっているんです、それぐらいいいでしょう」

「う、うーん、ですが……………」  
「わかりました、査問委員会に伝えておきます」

「ありがとうございます」

「みたいなことがあって僕達も参加することになったんだ」

放課後、本日11度目の亮からのメールが来て一人で亮の部屋まで来い、

見たいな感じな内容だった、まあ行く途中明日香に捕まり明日香も一緒に行くことになった。

そんで今明日香と亮と僕の3人で今日あったことを説明してたわけです、まる

「なるほど、それは大変だったな」

「うん、まあね」

「……………あれ？無視？」

「りよ、亮聞ってる?」

「(ところで明日香、灯台での話の続きをしようじゃないか)」

「(なんのことがしら?)」

「(惚けるな！優が明日香の部屋に泊まったという件だ)」

「(まあまあ落ち着いて、まあ優はよく私の部屋に来るわよ、週3の割合で)」

「(しゅ、週3!?!お前……優に何かしてないだろうな)」

「(何か?さあ、何かって何かしら?)」

「(ぐ、あ、明日香!?!ならば決闘だ!?!)」

「(望むところよ)」

亮と明日香とアイコンタクト、実質12秒

「「決闘!?!」」

なんか前亮の部屋に来たときと同じ勢いで明日香と亮が決闘を始めてしまった。

「ドロー！荒野の女戦士を守備表示で召喚しカードを1枚セット、ターンエンドよ」

僕は立ち上がり、ドアを開けて

「次は俺のターンドロロー！サイバー・ドラゴンを特殊召喚！」

そつとドアを……閉めた。

『おい、主人、途中で抜け出してよかったのか？』

デッキから暗黒界の狂王ブロン、昨日ちょっとした事件にあって



なぜか精霊もちになっちゃった。

「うん、あの2人が決闘する<sup>デュエル</sup>とろくなことが起きないから」

「ろくなことが起きない……と言いますとどんなことですか？」主人？」

今喋ったのは暗黒界の導師セリル、こいつもブロンと一緒にこの前精霊になった。

「ん〜、なんと言つか……とにかく危ないんだよ僕のこと追いかけてくるし」

「ふむ、その人間は狂っているのでしょうかね？」

「どうだろう」

【グリアアアア！！！】

今度はグラフィアか……何故1人出てくるととどんでくる………それとグラフィアは大きすぎるからセリルの魔法でデフォ化してもらった、

大きさは少し大きめのクッション位で顔も可愛くなってる。

夜ムギユ〜と抱きつきたいぐらい可愛い、何言ってるか分からないけど。

「龍神は腹減った、と言っているのです」

「精霊も腹減るんだ〜」

セルルはグラフィアの解説係もやっている。

『我也長き眠りから覚め体がエネルギー欲している』

レインさんまで……………ついでにレインさんは喋れるらしい。

『ぎやははは！…！なら暗黒海あんこくかいからジェノサイドキンググサーモンでも調達してくるか』

『うむ、今夜は我らの復活祭だ、ペア〜つと飲もう！』

ゴルドにシルバまで、これで全員だよな。

『では今日は早く帰るとするか、主人早く帰るぞ今夜は祭りじゃー！…！』

「わかったよ、もう帰ろう」

僕はイエロー寮に戻ることにする。

「それとご主人」

「ん？なにセルリ？」

「大変申しわけないのですが、普通の人間には私達の姿は見えていないのです。

ですから……………周りを見ていただいて」

「周り？」

……

「……………」

周りを見ると周りの人たちは僕がずっと一人ことを言ってるおかしな人

見たいな視線で見られている……………」

「／／／（ボツ）」

穴があつたら入りたかった。

そして夜

『行くぜえ！！暗黒界の書物を発動！！』

暗黒界の尖兵ベージ、暗黒界の騎士ズール、暗黒界の術師スノウ、  
暗黒界の狩人ブラウ、暗黒界の策士グリーン、暗黒界の刺客カーキ、  
暗黒界の斥候スカー、暗黒界の番兵レンジ！！！！』

『ゼハハ！！』

『ズール、ただいま見参！』

『ふう〜やっとでられた』

『お久しぶりですブロン様』

『おやおや』

『グへへへへ』

『スカカカカ』

『……………』

「いい加減にしろお前ら！  
部屋が狭くなる！！」

何なんだこいつら！

暗黒界全員集合かよ！！！

『おい、サーモン狩って来たぞー』

『城から酒も持ってきました』

「人の家で宴会開くなー！

せめて少し静かにしてくれ！もう1時だ！」

『カーキさんお久しぶりです、お元気そうですね』

『グへへ、グリーンも調子良さそうだな』

『よおベージ！まだ生きていたか！』

『ズール隊長勝手に殺さないでください』

『酒だ酒だあくじゃんじゃん持ってこーい！！』

『流星に飲みすぎだゴルド』

『ヒヤッハー！！満足満足！！でもなんかもう一味欲しいな』

『おう、俺もそう思っていた所です、いっそのことカラレス呼びま  
しょうー！』

『それは止めるゴールド！次元が壊れるから』

『カーキ、未だに3頭身か！ダサいなあ！！』

『なんだとお！そうゆうスカーも3頭身たるバーカ！』

『どつちもどつちですよ2人とも……』

なんだこのカオス……

「ご主人は騒がないのですか？」

「あ、セリル……うん、初めは良かったんだけどもう1時だよ、いい加減寝かせてよ……何時の間にか数が倍以上になってるし」

「でも……これから賑やかでいいじゃないですか」

「良くないよぉ〜毎日こんなにドンちゃん騒ぎするまじかよ」

【……ZZZZ】

グラフィアは良くこの騒ぎで寝られるな……

そして暗黒界の復活祭は朝まで続いた、  
結論だけ言うと僕、雷堂優は今夜お休みなさいができなかったと  
だけ言っておこう。

制裁タッグ決闘<sup>デュエル</sup>まであと、7日……ぐらいじゃないかな？

第41話 「住めば都と言つがやっぱり初めは辛いです」b y 優（後書き）

前書きに書いたとおりG Xから5 D・sに進むまで何年たったか勝手に予想を立ててみた。

まずDMからGXは5年から10年の説が一番大きい、でもあるサイトの情報で

DMからGXまで10年と書いてあったのでそれで行ってみよう。

武藤遊戯は初登場時高校2年で17歳そこから10年経てば遊戯は27歳。十代は高校1年で16歳。

それはいいでもGXから5 D・sまで何年か、それが今求めたい、それで1番重要になる人物は5 D・sの遊星の序盤のライバル牛尾鉄さん、

彼はDM時代高校3年の18歳で登場していたのだ！

それさえ分かれば大体の数字が出てくる、

牛尾さんはDM時代18歳、GX時代は+10歳で28歳、

そして5 D・s時代の牛尾さんを見ると大体40から50代ぐらに見える、

でもTF5で彼は独身、そして上司の深影に片思い中で

さらにシェリーさんのことを見てデレデレしている所を見るとまだ結婚することを諦めていないらしい、

だとすると50代は言い過ぎか……

なら30後半から40前半でどうだ！！

ならばGXの28歳から7年から17年しか経っていない

10年でそんなに化学は進歩するのか！？



うん謎だ、まあ僕の予想ではGXから5D・Sまで間を取って約15年ぐらいだと予想します。

何か可笑しいところがあったり、詳しいことを知ってる人がいたら教えてくれると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3171v/>

---

実はカイザーはショタコンだった！？

2011年12月17日02時01分発行